

一五 五ヶ条ノ御誓文

誓文

- 一 広く會議を興し万機公論に決すべし、
- 一 上下心を一にして盛に經綸を行ふべし、
- 一 官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す、
- 一 旧來の陋習を破り天地の公道に基くべし、
- 一 智識を世界に求め大に
- 一 皇基を振起すべし、

我(わが)國(くに)未(いま)曾(ぞう)有(あ)るの變(へん)革(かく)を為(な)んとし、
 朕(わが)躬(みづか)を以(もつ)て衆(しゆ)に先(ま)んじ、天(てん)地(ち)神(しん)明(めい)に誓(か)ひ大(おほ)に斯(こゝろ)國(くに)是(ぜ)を
 定(さだ)め、万(ばん)民(みん)保(ほ)全(ぜん)の道(みち)を立(た)んとす、衆(しゆ)も亦(また)此(こゝろ)旨(し)趣(そ)に基(もと)き
 協(けい)心(しん)努(こ)力(りき)せよ、

年(ねん)号(ごう)月(げつ)日(にち) 御(ご)諱(ごん)

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第五卷第一九三ノ
 三号文書ト同文ナリ)

勅(ちやく)意(い)宏(こう)遠(えん)誠(じやう)に以(もつ)て感(かん)銘(めい)に不堪(たへず)、今(こんにち)日(にち)の急(きゆう)務(む)永(えい)世(せい)の基(もと)礎(そ)
 此(こゝろ)他(た)に出(い)づべからず、臣(しん)等(とう)謹(ごん)で
 朕(わが)旨(し)を奉(ほう)戴(たい)し、死(し)を誓(か)ひ胆(たん)勉(めん)従(じゆう)事(じ)、翼(つばさ)くハ以(もつ)て
 宸(しん)襟(ぎん)を安(やす)じ奉(ほう)らん、

慶(けい)応(おう)四(し)年(ねん)戊(ご)辰(しん)三(さん)月(げつ)

総(そう)裁(さい)名(な)印(いん)

公(こう)卿(けい) 各(かく)名(な)印(いん)

諸(しよ)侯(こう)

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第五卷第一九三ノ
 四号文書ト同文ナリ)

文(ぶん)書(しよ)原(げん)寸(すん) 縦(たて)六(む)〇(じゆ)七(しち)横(よこ)一(いち)〇(じゆ)八(はち)三(さん)種(しゆ)

一五九 淨(じやう)光(こう)明(めい)寺(じ)寮(りやう)舎(しゃ)静(じやう)子(こ)ノ日(にち)本(ほん)全(ぜん)國(こく)探(たん)偵(てい)行(ぎやう)脚(きゃく)ニ付(つ)

上(じやう)書(しよ)

(包(ほう)紙(し)ウツ書(しよ))
 「奉(ほう)書(しよ)」

乍(しば)恐(おそ)謹(ごん)奉(ほう)一(いつ)書(しよ)候(こう)、扱(あつか)僧(そう)ハ遁(とん)世(せい)之(之)身(み)成(な)り、先(ま)天(てん)下(か)和(わ)順(じゆん)度(ど)國(こく)家(か)

之靈万事偏奉祈平安候義は自職ニ而、是何足言上、日本刺太平之御代不顧出魁賊横り、皇国動上欺下誑、就中外ニ義ヲ飾内ニ抱惡逆之奸多、其之中ニ一有英名、其人之大義之赫々懼忽去何処、即今不容易御世態、殊ニは御上様御急難中因茲、乍恐縦令雖隔雲外日本僅六十余州聊之事ト奉存、今抱玉体之志仮令碎身粉骨成候共、為御国恩只携一鉢日本遊曆仕候而、天下之奸評悉遂探索恐多奉 上書度候、以上、

辰三月

浄光明寺
寮舎静子

文書原寸 縦一九・五種

包紙原寸 縦二六・七種

横七三・二種

横 二〇種

一七〇 静寛院ヨリ橋本少将へ

徳川家存続ニ就テ

一二月十日御認御文同月廿五日着、御細々の御文の様承りまゐらせ候、中略、扱は此度の始末委しく御申越一々承り、只々恐入まいらせ候、私にも最初より不慮と

申事にてハ有間しくとは存候得共、慶喜より承り候処にてハ無抛次第なから、慶喜事ハ全体よろしからぬ物ニ候て、真実の事とは承らず候得共、ケ程迄の事とも存不申居候得共、御申越候而驚入、猶々恐入まいらせ候、私より御頼申入候趣役人衆江御申入下され候由忝りまいらせ候、私身の上の事も御深切ニ御申越忝て、上京の事ハ此程大納言殿よりも御申越下され候ニ付、私所存外ニ御相談の事当月一日九日二十日右三度の名こそおしく存、先達よりも色々と勘考いたし、大納言殿へも御相談申入候事ニ候、右別紙ニ認御めニかけ候まゝ、ケ程まで当家江義を立候赤心頭候様よろしく御頼申入まいらせ候、当家はもちろん天璋院初い
(徳川家定夫人)
か様ニ成候とも私一身のかれ度とハ少しも存不申候、私留主中の処深く案し候ハもし、諸藩の中に乱暴いたし候物御座候やと、其辺深く心配いたしまいらせ候、万一左様の事にて天璋院に不慮の事候てハ、誠に私心配いたし候まゝ、跡之処右様之事無様私願候間、

朝威にて仰付られ候様願度存まいらせ候、くるしから
す候ハ、一筆御返事早々承り度存まいらせ候、実ニ
朝廷へ恐入候事、当家先代ニ対し不孝之事と残念く
ニ存まいらせ候、申度事山々乍筆とゞきかねあらく
申入まいらせ候、何分家名相立候様幾重にも願まいら
せ候、下略、

(実應)
橋本少将殿

(徳川家茂夫人、和色)
静寛院

一 弥官軍御差向ニ候とも慶喜一人御追討ニ有らせられ候
や、当家も是限り断絶ニ候や、其節私は如何遊し戴候
や、なからへもしく上京の様仰戴候共私上京いたし
当家再興之事歎願いたし叶候事、討手之将御請合下さ
れ候ハ、天璋院初へも其よし申聞せ、不慮之事無様
説得いたし、御沙汰ニ従ひ上京もいたし候半ながら、
再興も出来申さぬ事ニ候ハ、私とても家の滅亡を見
つゝ存命候てハ、兼々京都へ申合候様ニ当家之人々存
候て、末代迄不義之名を取候てハやはり

(仁孝天皇)
御父帝様江不孝と存候まゝ、右様之事ニ候ハ、潔死よ
り外無と決心いたし居候事、

一 弥官軍向はれ候得とも、

当今様もしく私へ之義理合の辺にて其以前ニ何と無
上京御させ遊はし、其跡へうつ手向られ当家滅亡、天
璋院初不慮の事候てハ、私一人存命候てハ兼而申合セ
其場合逃候様にて、憶病不義の名請候てハ存命候ても
詮無事、京都ニ居候ても万一さ様之場合ニ至り候ハ、
覚悟いたし候心得ニ候、同し身命を捨候而も京都にて
は私義心も立かたく、もしくさ様之事にも候ハ、
上京は御断申上、私一身の存亡当家存亡ニまかせ候心
得ニ候、天璋院事ハ昭徳院殿在世中格別孝養を尽され
候まゝ、先夫の母故昭徳院殿在世中より只今にも孝道
をたすけ居候心得ニ候、天璋院にも気性の人ゆへ当家
成行に依ては不慮之事いたし申間しくとも存しられ不
申、私一人ながら居候てハ、昭徳院殿へ対し私相濟
不申と存まいらせ候、信義之為にハ私一命惜不申候得

共つく／＼考候へハ、全体私下向之事

先帝様御すゝめにてよき無下向致し候事故、

当今様御代にて義之為とハ申ながら、私不慮之事候ハ

、もし／＼

当今様の御不義と相成候てハ

先帝様へ私不悌之事、此度の一挙昭徳院殿には私相果

候とも当り前之事なから、慶喜故に

朝敵と共に身命を捨候事、

御父帝様玉体を御汚し申上候様ニそんし恐入候、孝を

立んと致せは不義ニ当り、義を存候得ハ不弟ニ成、誠

に一身如何いたしよろしく候やと当惑のミいたし、決

断いたしかね候まゝ、後世迄清き名を残し候方御さし

つ御頼申入まいらせ候、以上、

右は当月一日尾州より出し大納言殿へ申入候文写、

右は慶喜いまた当城に居候間之事ニ候、私心底ケ様

ニ候、以上、

(裏表紙ニアリ、朱)
「和宮様御文 戊辰二月」

冊子原寸 縦一八〇横 横四〇〇横 五枚

○二五二 五箇条ノ御誓文

総裁等ノ奉答

○二五三 御親征ノ勅語

○二五三 億兆撫安ノ御宸翰

総裁等ノ副書

○二五三 忠義公ヨリ藩士ヘノ諭達

一五三 蓑田伝兵衛ヨリ小松帯刀ヘ

久光公ノ病状其他ノ報告

三邦丸便より尊書被成下難有拜見仕候、於両御地

御両殿様益御機嫌克被遊御座奉恐悦候、

中將様御病氣も日に増被遊 御順快、当分 磯江 御逗

留桜島黒神温泉御取寄、毎々御入湯之御事ニ而、別而御
宜鋪御按排、難有事共御同慶奉存候、御庭内御歩行も天
氣好時は毎日程之御事ニ而、御運動も追日御丈夫、実以
難有次第奉存候、次ニ尊公様御勇健被為成御奉職、愈御
繁務之段伝承仕、嘸々御太儀難尽筆頭奉存候、過日伊
藤・谷村之両士安着いたし、則尊公様御安否共奉伺候処、
毎々諸藩、外洋之御用談尺寸之御隙も無之、為天下御尽
力之段拝聴仕、欣躍之至奉存候、其御地委細之事情大久
保方よりも相達、則達

京 尊聰置候儀ニ御座候、関東も慶喜愈伏罪西郷ニ茂暫時登

勅諭を奉し、則東下仕候由、追々御左右相通候半と奉存
候、会桑之所何様之向御座候哉、及異儀候ハ、定而是以
屠滅仕候半と奉存候、何分此末之所諸藩御順熟御一和之
儀渴望仕候、宜御尽力奉希候、就中薩長小生間隔様之御
所置偏ニ尊公様御尽力仰望仕候、第一当今之時節
此御方様御高名上下一統押而奉 尊仰候儀、無此上難有

事共申迄も無御座候得共、此時に御当被遊候而は只管御
謙讓之 御賢徳と奉願候事共御座候、迂老之愚見宜鋪御
洞察被遊可被下候、爰許御静謐追々海陸軍兵士も増長仕
士氣振興ニ御座候、一昨十六日
暉姫様 典姫様 寧姫様御機嫌克指宿二月田江 御湯治
として被遊

御光越候、幸三邦丸滞船中之事御座候間 御乗船

御越ニ御座候、先々尊書之御請御礼且為可奉伺御機嫌如
此御座候、乱毫平ニ御寛裕被遊可被下候、猶奉期後鴻候、
誠惶謹言、

四月十八日

蓑田伝兵衛

帯刀様

尊閣下拝呈

侍史

文書原寸 縦二六・一 横 三二・四

一七 阿州ヨリ小松後藤大久保副島へ

軍服ハ西洋服ヲ採用スヘキ事

(封紙ヲフ書)
一愚考小松

後藤 諸子江 阿州

大久保 副島

フ

┌

一昨日太官顧問局ニ而副島(補臣)之論ニ、衣服之制度、朝服・常服・軍服之三等ニ分チ、軍服は筒袖胡服ヲ禁スルと承候、小子乍不及愚考致候所、銃砲戰艦は彼ノ利器なるヲ以取用ひ、胡服ハ不取用と申は如何可有之哉、実ニ胡服は戦ニ利ニして自今之軍服は是ニ止マルと存候ニ付、胡服ヲ唯夷風ヲ好ムノ訳ニ而は無之、全利服ヲ用ル之訳ニ候得は、禁スルは不可然と存候、且ツ今胡服ヲ禁したりとも決而不朽之制度とは難申、却而密々着用スル者出来可致、其時ニ至リ不可制之勢ヲ以無余義胡服ヲ許すと申様ニ相成候而は、却而御命令も相立さる訳ニ而、此度断然御制度被定置候事故、仮令聊人心ニ障動致たりとも無二念御取行いニ相成候得は、自然ニ利服ニ習慣して人心

之不帰服は万々有之間敷と存候、

一統如何賢考候哉、尚明日は太官之出仕之上万々議論可承候得とも、至急之儀ニ付愚存書取一覽ニ備へ申候、以上、

閏四月十六日

二伸、議論之趣ニ寄候得は早速総裁へも申上度差含

居候、何卒熟考頼入申候、以上、

文書原寸 縦一七・六種 横七七種

三宅 高倉三位保実ヨリ小松帯刀へ

甲斐国農兵出願ノ件

前略、誠御用繁御中丹波江今朝拝謁被成下、何共千万以奉厚謝度、段々御懇命被成下、厚々得力候、早々甲府隊長召出シ、種々と及説諭候所、誠ニ勤 王可相願時来レリト立上リ、歛悦罷在、同志共衆議ヲ経候上、早々以歎書太政官代江及出願候旨ニ候、猶伏而御差含御尽力願入候、尤愚息実村乍脱走鎮撫ヲ相逐候ニハ相違も無之儀

ニ付、則甲斐国廿四万式千石余、此郡教漸四郡ニ有之所、

三郡は実村ニ氣伏誓約ヲ取結有之、武田家信玄之神靈ニ

モ相叶、國中伏シ居由、今一郡鶴郡と申方計ハ方角遠陵

ニ付、深山ヲ越し居候而、其比は不行届由、追々及氣伏

候儀と被察候、上京以来、願書茂長々右歎出ノ手間計空

敷相掛リ居、余程氣屈シ三郡之内有志之輩ヲ呼集メ共々

帰国致し居ものも有之由、尤不遠皆々再登候由ニ付、即

今ハ居合セ候輩丈ケ願書ヲ振立罷出候由ニ候、尤何レモ

高千石以上ヲ相領シ居候長百性(姓)ノ身分ノ由ニ候、必死之

勤 王、近世ニは凡珍敷聖情ニ相見ヘ候、深御勘考申願

度、行詰ル所江岩倉(具視)右兵衛督ヲ御解付不被下而は、是非

ニ故障可相称欵、猶御良策ヲ仰之外無他事候、書外ハ近

程不願御面働内密及推参、万々期拜謁申敷願候也、

後四月十七日

保実 九折

帯刀大兄

閣下

尚々、此麓莫到来合セ候、風味如何不相弁候ヘ共、

御茶請ニ被下度、丹波ニ相渡し置候也、

文書原寸 縦一五・三種 横一〇九種

一六 伊達宗城等ヨリ山階宮岩倉具視ヘ

大阪開港ノ件等

拜啓、弥御勝常奉大賀候、然ハ当所開港一条、過日如御

談決、東久(東久世通稱)ヘ書通、尚大隈(重徳)ヘも申含置候処、俊介(伊藤博文)より如

別紙懸念之趣意申立候処、素より此度開港ヲ断りのはし

居候ハ、不拔之条理無御座、人心不折合苟且之弁解にて

候得は、頗東久モ困り可申、又当局にても出入輸稅共不

取立候而ハ、実ハ運上所モ有名無実、難立行訳にて、甚

不会計、唯願慮スル処ハ、今日大阪開港と判然布告被成

候ハ、輿議可相起欵ニ御座候、素人にてハ開市開港之

分別弁知致兼候故、東久応接ニ而左之通相成而ハ如何、

一 出入輸稅可取立

一 碇泊場可相定

開港云々ハ不及前言、右の通相連ひ候ハ、談判無子細

相済可申候、併曖昧之御処置不宜と申事ニ候ハ、尚俊介申立之処御考味の上断然被仰示度、大隈モ返々延引甚不都合故廿七日には是非乗艦仕候、夫迄ニ御決所希候、委曲ハ小松迄当局判事より為申述候、亦昨日ミットホルト對話左之ケ条及密話候故、予め陳奏申候、

○蚕紙

右仏孛両国民百二十人計六百万トル程買取度、箱館へ参候処、中々夫程無之、新潟へ参候由候処、同所にても調間敷、就而ハ近日神戸当港杯ニ可参候故、内々相話候由、六百万トル之引替如何とも当惑ニ御座候、

○只今ミットホルトより如写申越候故、返事被遣置候、

夫々別紙の通御座候条御否被仰示度候、恐々頓首、

壬四月念三

俊章(坊城)

宗城(伊達)

山階宮

岩倉金吾(具世閣下)

文書原寸 縦一八・八種 横一一八・五種

一五九 伊達宗城ヨリ岩倉具視へ

外交問題其他

昨廿五日付御封書、同曉三字ニ照手、過日来返々及御懸合候当所開港之件、断然開港之筋御決定候故、右之赴(通懸)東久世外国公使へ談判相成候様可申遣旨、夫々其都合可取計と存候、尤開港期限ハ左之通可申通心得候、

六月朔日より

○和蘭公使より「スーエーテン」「ノールエヂヤ」両国

条約取替全權被

命候人体早々致承知度々申越、既ニ伺置候処、今以御否無之候条、尚又御決着何度候、

○仏国へ土藩より養育金五万トル来月ニ入候ハ、必ス受

取度(趣)赴可申立と存候処、未タ差廻し不相成候故、御処

置被 仰付度、

○当局多端緊要事件モ候故、小松(藩刀)ハ草々被 差帰度候、

○山階宮モ被免候旨風評承候処、当局ニ御沙汰無御座、

疑惑候故、判然被仰聞度候、

貴酬旁如此御座候、恐々、以上、

壬四月念六 (伊達宗城)
宇和島少將

岩倉金吾閣下 (具徳)

追而、関東事情不通ニ付申立候処、弁事局より飛脚

差立候由敬承候也、

文書原寸 縦一九種 横九四種

一七〇 保実ヨリ小松帯刀へノ依頼状

大阪奸商処分及甲信総督拜命ノ件

二通

一七七〇ノ一

(封紙ウツ書)

「薩藩国老

小松帯刀殿

保実

極内翰

□ (朱「被」)

┌

大暑難凌候、弥御壯健珍重候、次過日は以密翰御内話申入候、定而夫々御諾察被下候儀と忝存、其文面之内他事は暫跡廻シニして、差急候分ハ、堂島表悪徒共兵庫港開

所ヲ着ニして正米石立米等ヲ買メ致し、直段ヲ釣上ケ候輩、実以片時も難被見送模様ニ相成決候条、今一応急談申入試候、何卒々々火急ニ浪花表江御工風被下度候、殊以強悪徒伊川・佐池万等之兩人之由ニ候、首ヲ取ナラ取テミヨと迄悪口ヲ申立居候上は、聊以難捨置模様ニ決し候、依而万人之苦ミヲ助ケ候筋ニ付、其段不悪御諾察被下、早速之御工風被下度候、御屋敷内江何ソ外事ニ事ヲ寄セ、右兩人御引張込ニ相成、兩三日も御取留置、其間ニ右買メ釣上ケケ条御内吟味も被下候へハ十分ニ相分り可申候、所詮は兩三人頭取候もの御引込ニ不相成候而は即功は顕不申候、寛宥之御工風ハ間ニ合不申候由ニ候、尤大坂町奉行天満筋は皆々賄賂ニ眼曇居制度ハ不仕由ニ候、

貴藩出格之御取計ニ而米価即刻引下ケ候場ニ到候時は、

実以天下之難涉人共数万之助命、実以難有訳ニ付再敷候、御見送不被下即功御頭シ希上度、付テは大津表扇ケ岡ニ罷在候大津屋宇兵衛儀も買メ釣上ケ徒党之由ニ付、可然

御所置ヲ被加候様ニ御工風被下度候、当時勢ニ付其職筋

ハ埒明不申候、仍不得止願立候、此内使者清水兵庫差向
候故、委細ハ同人より御談合願上度候、此兵庫決而他言
等ハ不仕手堅申付有之、御安堵御心置ハ入不申候也、

六月廿一日

文書原寸 縦一六・一櫃 横八〇・三櫃

一七七〇ノ二

副書

何卒保実儀は是非乍不敏参与職ニ御召加へ申願度候、実
村儀ハ乍脱走信州五十四万石・甲州廿四万式千石等都合
七十八万式千石余ヲ奉為

天朝相平ヶ候微功ニ被 免、乍不敏信甲兩國之総督ニ
被 仰付給候様

貴藩ヨリ御建言相願度候、尤彼是御案し候之方ニ而も若
哉可有之哉ニ付、参謀役は急度

貴藩ニ而も又太政官ヨリ而も慥成器ヲ為目付被差副、実

々國中農民安堵氣伏可仕様ニ願申度候、御周旋被成下度
乍脱走鎮靜仕候ニハ相違茂無之候也、

一乍極内密々甲州表高廿四万式千石ト中古以来書上ヶ有
之、内実之所式百万石計も可有之哉、信州迎も表高五
十四万石ニ候へ共、余程ノ隠算ニモ相成居候由、旁保
実乍不及此場ニテ如何ニモ兩國之総督ヲ被命候ハ、
兩國ヲ洗上ヶ屹度百万石之御奉功は掌中ニ希候、亦即
今ニ発向被仰付候ハ、拾万両以上之御用は為相勤候
覚悟候、慥成参謀役ヲ被差添候而之儀ニ付、実ニ彼是
御案シ無之様候、実ニ上下共和伏御議論之憂ヲモ掃度、
実ニ 貴兄賢考奉願候也、

後月廿七日

保実

帶刀殿

内副書

文書原寸 縦一五・七櫃 横九五・三櫃

一三一 神祇官職制其他事務章程草案

(表紙)

「神祇官並教導諸陵寮

職制事務章程草案

一七七一ノ一

神祇官職制

〔朱〕
等一 伯 一員

神祇・陵墓・教導・寺院一切ノ事務ヲ総判シ、
官中各寮ノ諸官員ヲ統率スルヲ掌ル、
事務章程ニ照シテ制可ヲ乞フノ条ヲ上達シ、專
任ヲ得ルノ件ヲ処分スルノ權ヲ有ス、
掌管ノ事務ニ於テハ正院ニ就テ其当否ヲ弁明ス
ルヲ得ル、

各寮頭ヨリ具状スル事務ノ当否ヲ審案シテ判決
スルノ權ヲ有ス、

官中ニ屬スル奏任以上ノ進退ハ正院ニ於テ命ス
ト雖モ、之ヲ進退黜陟スルニ於テ、其時々要旨
ヲ具状シテ正院ノ命ヲ乞フベシ、

判任以下ノ官員其能否ヲ監別シ、大少祐・寮頭

ノ具状ヲ以テ其撰任免黜ヲ專行ス、

付屬書記

常ニ伯ノ側ニ侍シ其指令ニ從ヒ一切ノ文書ヲ
草シ、記録及書牘往復ノコトヲ掌ル、

各寮ヨリ伯ノ判決ヲ乞、回冊ヲ簿記シテ之ヲ

受付ス、

〔朱〕
等二 大副 一員

職掌伯ニ亞ク、伯不在ノ時ハ其事務ヲ代理スル
ヲ得ル、

付屬書記

職掌伯ノ書記ニ同シ、

〔朱〕
等三 少副 一員

職掌大副ニ同シ

付屬書記

職掌大副ノ書記ニ同シ

以上之ヲ勅任官トス、

但付屬書記ハ史ヨリ之ヲ命ス、

〔^{一四}朱〕
大祐

長官ノ令ヲ奉シ祭祀神饌ノコトヲ掌ル、官中ノ
事務ヲ審理シ、各寮ノ事ヲ通知シ、其名ヲ以テ
各官省ヘ書牘往復スルコトヲ得ル、

官中各課ノ事務ハ長官ニ対シ之ヲ調整スルノ責
ニ任ス、

成規例格ニ照シテ各寮所務ノ順序ヲ調査ス、

〔^{一五}朱〕
少祐

職掌大祐ニ同シ、

〔^{一六}朱〕
大史 定員ナシ

官中各課ノ長トナリ其事務ヲ担当スルコトヲ掌
ル、

以上之ヲ奏任官トス

權大史

中史

權中史

少史

權少史

各分課シテ官中ノ事務ニ処ス、所務ノ順序ハ都
テ祐ノ指令ニ従フ、

大神部

中神部

少神部

幣帛・神饌・裝飾・鋪設等ノコトヲ掌リ、神殿
更番宿直ヲ務ム、

以上之ヲ判任官トス、

仕丁

給仕

一七七ノ二

神祇官事務章程

神祇官ハ神宮・諸社・祭祀・陵墓・教導ニ関係スル一

切ノ事務ヲ統理スル所ナリ、其事務ノ條款左ノ如シ、

第一条

祭祀ノ事、

第二条

神社ノ事、

第三条

陵墓ノ事、

第四条

教則並教律ノ事、

第五条

寺院ノ事、

第六条

神官並教導職及僧尼進退ノ事、

凡此各款皆神祇伯主任掌管ノ事務トス、然ト雖モ之ヲ

処分スルニ当リ上奏制可ヲ經ベキ条アリ、專任施行ス

ベキ件アリ、其条目ヲ分ツ左ノ如シ、

上款

上奏制可ヲ經テ処分スヘキ条、

第一条

天皇親祭並祭使ヲ弐シ官祭ヲ執行スル事、

第二条

官国幣社ノ社格祭式ヲ改制スル事、

第三条

陵墓ノ祀典及修理ノ事、

第四条

教則ヲ立テ教律ヲ設ケ教派ヲ改ムル事、

第五条

寺院処務ノ事、

第六条

官中ノ事務新法ヲ創立シ旧規ヲ改正スル事、

第七条

官中奏任以上ノ官員並神官及教導職六級以上進退及派遣

ノ事、

以上各款皆神祇伯之ヲ判案シテ其要旨ヲ略記シ、又ハ処

分ノ法案ヲ作り上奏判可ヲ乞フテ後之ヲ施行スベシ、
下款

上奏制可ヲ經スシテ專任処置スルヲ得ヘキノ条

第一条

諸陵事務檢察ノ事、

第二条

府県社以下社格ヲ改定スル事、

第三条

教義上ノ訴訟ヲ判決シ教律ニ照シテ処置スル事、

但司法ニ関スルハ此限ニアラス、

第四条

教義ニ関スル著書発兌並教社ヲ結フ者ニ免許ノ事、

第五条

教徒ヲ集会シ教義ヲ講究スル事、

第六条

僧尼ヲ進退スル事、

第七条

官中判任以下ノ官員並神官及教導職七級以下進退及派遣
ノ事、

以上各款神祇伯之ヲ專任処置スルヲ得ヘシ、之ヲ行フ後
能ク其細大緩急ヲ分別シ其旨趣ヲ上達スヘシ、

第一章

凡ソ一般ノ布告ヲ要スル件ハ都テ太政官ヨリ発令スルヲ
則トス、故ニ款内若シ全国又ハ各部ヘ頒布告示スヘキコ
トアラハ其事由ヲ具状シテ之ヲ乞フヘシ、

但尋常推問・照会・指令・督促等ノ文書ハ、縦令各地
方ヘ通シテ相達スルコトト雖モ、便宜往復受付スルヲ
得ヘシ、

第二章

凡ソ官中委任ノ事務ニ係ル件ハ諸官省各局トモ神祇伯ニ
照会シテ後執行スヘシ、諸官省各局ニ係ル件ハ神祇伯亦
之ニ照会シテ後執行スヘシ、

第三章

凡ソ章程上ニ係ル事務ハ正院ヨリ出ル事ト雖モ、實際上

不可ナルニ於テハ神祇伯之ヲ覆按スルヲ得ヘシ、

第四章

凡ソ官中ニ於テ処分スル事務一切細大トナク毎月・每三月・毎一年ト之ヲ分別シ、其考課状ヲ詳記シテ正院へ上達スヘシ、

第五章

上下款内更ニ掲載スヘキ事及之ヲ更正スヘキコトアラハ宜シク公議ヲ尽シテ、其条件ヲ増減改革スヘシ、

右職制並事務章程

上裁欽定スル所ナリ、能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル勿レ、

年月日

參議

大臣

神祇伯——殿

神祇副——殿

一七七一ノ三

一等教導寮職制

〔^{一三}朱〕頭

一員

寮中諸官員ノ首長ニシテ教導並寺院一切ノ事務ヲ管理スルコトヲ掌ル、

寮中諸官員ノ処分ヲ指令シ各課ノ事ヲ統督ス、

寮中諸般ノ事務章程成規ニ照シテ之ヲ踐行整理

ス、伯ニ對シテ其担保ノ責ニ任ス、

掌管ノ事務ニ於テハ伯ニ對シ其当否ヲ弁明スル

ヲ得ル、

各課ヲ廃立シ及寮中ノ諸規則ヲ更正スル等ノコ

トアレハ、伯ノ判決ヲ乞テ之ヲ処置スヘシ、

寮中諸官員ノ能否勤惰ヲ監視シ之ヲ進退黜陟

其員ヲ増減スル等ハ、審案具狀シテ伯ノ判決ヲ

乞フヘシ、

右勅任官トス、

〔^{一四}朱〕等

權頭 一員

職掌頭ニ同シ、

〔^{一五}朱〕等

助

寮中各課ノ事務ヲ担当スルコトヲ掌ル、

各掌管ノ事務ハ頭・権頭ニ対シ之ヲ整理スルノ

責ニ任ス、

〔^(米)一六等〕
権助

職掌助ニ同シ、

以上奏任官トス

大属

権大属

中属

権中属

少属

権少属

以上判任官トス

各課ヲ分テ寮中諸般ノ事務ヲ処ス、

一七七一ノ四

教導寮事務章程

教導寮ハ教義ニ関係スル一切ノ事務ヲ管理スル所ナリ

今其事務ノ綱領ヲ掲ル左ノ如シ、

教導職ヲ登薦免黜スルハ伯裁決ノ後頭・権頭ノ名ヲ以テ

之ヲ施行セシム、

教徒ヲ集会シ教義ヲ講究シ、教導職ヲ策試シテ布教上各

其道ヲ尺サシムヘシ、

祭礼・喪儀並一切教典ヲ編輯シ之ヲ播行スルニ方テハ伯

ノ裁ヲ乞フヘシ、

教書上梓並結社願同アルトキハ、文意規則ヲ検閲シ可否

案ヲ作り、伯ノ判決ヲ受テ処分スヘシ、

教義上ノ訴訟アルトキハ教則・教律ニ照準シテ審判具状

ノ後施行スルコトヲ得ル、

教派ヲ改メ宗名ヲ変更スルコトアラハ、事実ヲ討覈シテ

詳細具状セシム、

寺院ヲ廢立シ僧尼ヲ進退スルニハ其事実ヲ具状シテ伯ノ

裁決ヲ乞フヘシ、

凡ソ寮中掌管ノ事務他方へ指令布達スルハ都テ伯ノ名ヲ

以テス、照会・推問・督促等ハ頭・権頭ノ名ヲ以テ往復
スルヲ得ヘシ、

寮中諸書類・諸簿冊ハ順次ニ之ヲ編纂シテ後考ニ便スル
ヲ要ス、

寮中官員ノ月給及寮中ニ属スル公費・旅費其他諸雜費ハ、
毎月之ヲ集録シ計表ヲ添テ伯ニ呈ス、

但月給・旅費其他諸経費ノ請取方ハ、其正算帳ヲ整ヘ
官中出納掛ヘ申出ヘシ、

寮中諸費用ニ関ル一切ノ経費ハ出納簿冊ヲ製シテ詳細注
記シ、毎件頭・権頭ノ検印ヲ以テ之ヲ証トス、

本寮一切ノ事務毎件其要領ヲ収録シテ部類ヲ分ケ、毎
月・毎三月・毎一年ト之ヲ区分シ、其考課状及計表ヲ作
リ之ヲ伯ニ呈ス、

此章程中増減スヘキ事アラハ伯ノ指揮ヲ受テ更正スルヲ
得ヘシ、

右職制並事務章程

上裁ヲ經テ決定スル所ナリ、能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル

勿レ、

年月日

教導頭——殿

神祇副——
神祇伯——

一七七一ノ五

一等諸陵寮職制

〔^(朱)三〕頭 一員

寮中諸官員ノ首長ニシテ諸陵一切ノ事務及皇
后・皇子・皇女・皇妃ノ陵墓ヲ管理シ、長守戸
ノ名籍ヲ統知スルコトヲ掌ル、

寮中諸官員ノ処務ヲ指令シ各分課ノコトヲ幹理
ス、

寮中諸般ノ事務成規ト章程トニ照シテ之ヲ精審
修整スルニ於テハ、伯ニ対シテ担保ノ責ニ任ス、
管掌ノ事務ニ於テハ伯ニ対シテ其当否ヲ論弁ス
ルヲ得ル、

各分課ヲ廃立更正シ、又ハ官員ヲ左右交替スヘ

キ等ノコトアラハ、伯ノ判決ニ從テ之ヲ処置ス、

寮中諸官員ノ能否勤惰ヲ監視シテ之ヲ進退黜陟

シ、又ハ之ヲ増減スル等ハ審案具狀シテ伯ノ判

決ヲ乞フ、

右勅任官トス、

〔^(朱)四等〕 權頭 一員

職掌頭ニ同シ、

〔^(朱)五等〕 助

寮中各課ノ事務ヲ担当スルヲ掌ル、

各管掌ノ事務ハ頭・權頭ニ対シ之ヲ整理スルノ

責ニ任ス、

〔^(朱)一六等〕 權助

職掌助ニ同シ、

以上奏任官トス、

大屬

權大屬

中屬

權中屬

少屬

權少屬

頭・權頭ノ指令ニ從テ寮中ノ事務ヲ分掌ス、

一七七二ノ六

諸陵寮事務章程

諸陵寮ハ神代ヲ始

列聖ノ山陵及皇后・皇子・皇女・皇妃ノ陵墓ニ関スル

一切ノ事件ヲ管理スル所ナリ、今其事務ノ綱領ヲ掲ル

左ノ如シ、

諸陵墓ノ所在ヲ詳カニシ營繕造営ヲ管スヘシ、

各陵ノ境域ヲ正シ長守戸ヲ置キ及ヒ之ヲ檢察スヘシ、

陵墓ノ祭祀ハ其時々上申執行スルコトヲ得ル、

凡ソ寮中掌管ノ事務他方ヘ指令布達スルハ都テ伯ノ名

ヲ以テシ、照會・推問・督促等ハ頭・權頭ノ名ヲ以テ

往復スルヲ得ヘシ、寮中ノ諸書類・諸簿冊ハ順次ニ之

ヲ編纂シテ後考ニ便スルヲ要ス、

寮中官員ノ月給及ヒ寮中ニ属スル公費・旅費其他ノ諸
雜費ハ、毎月之ヲ集録シ計表ヲ添テ伯ニ呈ス、

但月給・旅費其他諸経費ノ請取方ハ其正算帳ヲ整ヘ

官中出納掛ヘ申出ヘシ、

寮中ノ諸費用ニ関ル一切ノ経費ハ出納簿冊ヲ製シテ詳

細注記シ、毎件頭・権頭ノ検印ヲ以テ之ヲ証トス、

本寮一切ノ事務毎件其要領ヲ収録シテ部類ヲ分ケ、毎

月・毎三月・毎一年ト之ヲ区分シ、其考課状及ヒ計表

ヲ作り之ヲ伯ニ呈ス、

此章程中増減スヘキ事アラハ伯ノ指揮ヲ受テ更正スル

ヲ得ヘシ、

右職制並事務章程

上裁ヲ経テ決定スル所ナリ、能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆

ル勿レ、

年月日

神祇副——

神祇伯——

諸陵頭——殿

冊子原寸 縦二四・八種 横一七・三種 二三枚

一七三 西郷隆盛ヨリ大久保吉井ヘ

白川城攻撃戦況報告

上原藤十郎差遣候後、頻リニ応援之為白川口江出張いた
し度京都より可参人数を当地江は召置候而可宜旨、再度
申立候得共、大村藩士聞入無之、宇都宮辺之官軍都而繰
上、皆白川之方江張出シ、今市と申所は土州勢押ヘ居、

日光江は彦根勢相堅メ、外々は遠く白川之方江相離候付、
若後を絶れ候而は白川出張之官軍難決可致事候間、肥前
侯宇都宮辺之鎮庄を被命、野州は少しも動揺不致様御押
ヘ相成り、東山道之手は賊兵を討伐而已ニ相決、当地江
何坎不穩勢も可有之候付、人数操出し候儀見合居候様と
の事ニ而直様出張出来兼候^ホ処、去ル朔日長州・大垣・忍
藩少々ニテ四藩致会合、三手三道ニ相分れ白川城攻撃い
たし候処、朝六時より戦相始昼二字ニ乗落し十分勝利相

成り、大慶此事ニ御座候、賊兵ニは仙台・棚倉・二本松・三春・会津五藩之勢ニ而式千余之大兵御座候得共、三方より引包^ツ打立候故、台場等も嚴重相備候ものも無様打破り、敵兵六百位は打取之趣御座候得共、未委細取調候紙面不參、見事之勝戦ニ御座候、余程落胆いたし候半、此度之歩兵類之者は一切不相見得、只新撰組之二番手と申もの而已ニ而御座候、東海道之手よりは二番隊出張いたし居、是のミ応援之都合相成り申候、本街道より相掛り候大砲隊など台場の正面より相掛り候故、余程致難戦手負多御座候、二番隊江相付差出候一砲車之人数は纔三人無疵之者有之、小銃隊ニは五番隊難場ニ押掛り苦戦ニ及び、手負多ク御座候得共、此度は戦死之者相少ク大幸之仕合御座候、追々手負人は横浜病院御取建被下候付、皆々相廻事ニ而、是丈は煩念相省候事ニ而候得共、御雇入方之都合いたし候位ニテ込入候時機御座候、当分横浜江參居候者四十六人有之、白川口之手負相廻候得は一小隊計人数ニ及候而、纔兩三人之医師ニ而手も廻り兼

候故、大ニ難渋之次第御座候、此邸内ニは七八人は殘合突ニ込入候儀ニ御座候間、兩三人は随分療治方も出来候医師御遣可被下候、越後口は三国峠之戦大勝利を得候趣、愉快之事ニ御座候、就而は白川口并越後口を堅メ付而奥羽之叛賊を打、会津を孤立させ候策相決、官軍式千人早々御差下相成候様御申越候段承知仕候、右ニ付而は撰兵千位ハ早々蒸気船を以御廻し被下候、跡千人之処は陸路より御遣し相成候か又は船都合を以御遣相成候歟、何れも宜敷御座候間、千五百人計之人数ヲ以富士艦并鉄鋼鐵船荷方之蒸船を付、奥羽ニ相廻り、海岸より手之卸し安き処を打碎キ、次第ノノニ叩上ケ手配ニ御座候間、何卒千人位之処は急速ニ御遣し可被下候、何分軍用金乏敷日々官軍は是ニ氣を挫かれ候模様ニ被伺申候、何卒策は有御座間敷哉、人数計參而も金乏敷候而は奥羽江出軍甚難渋可仕と、是計苦心之至御座候、此旨大略奉得御意候、大村より委細可申越候間私よりも申遣具候様承候間、此如御座候、頓首、

辰五月十一日

西郷吉之助

大久保一蔵様

吉井幸輔様

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第五卷第四五九号
文書ト同文ナリ、但シ月日ハ五月十日トス)

横帳原寸 縦一四・二種 横二〇・六種 一枚

一七三 後藤象二郎ヨリ小松帯刀へ

車駕東行ノ件等

一七七三ノ一

(端裏書)
「後藤」

華墨被投謹誦仕候処、追日御快方之御旨欣賀之至ニ奉存候、扱ハ明朝は何坎御示談之筋有之、葎ヘ土家より参時可致御高論之段奉拝承候、尤板垣義ハ一昨頃より風氣ニ罷在引入居候故、唯今も鳥渡承見候処、今夕は初而熱氣相発明朝は何分勉強難相整、此段可然申上具候様申越候、左様御承預奉願候、先は外要件拝謁迄、書余拝鳳之上と申残、勿々頓首拝、

五月十一日

後藤象二郎

文書原寸 縦一八・二種 横一〇四・二種

一七七三ノ二

(端裏朱書)
「丙廿七」

暫御疎遠ニ御座候処、御健安御下阪之趣、税所君へ迄御伝致被下奉欣然候、陳追々船便次第御東行之御都合ニ御座候趣、段々御談も申上度筋有之旁是非御面会奉願候、御旅宿へ罷出候義は差支も無之御事哉、御都合も可有之候間、御間暇之折ハ御答之御示趣被下度、此旨可得御意、余は拝肩ニ讓、勿々頓首拝、

六月七日

後藤象二郎

文書原寸 縦一九種 横八六・五種

一七七三ノ三

昨夜来は御多祥御無恙御上着可被成奉欣賀候、当地之義

も何等差変候義は無御座候、時々は流言も有之、右は全く蛭子島外国人より早既ニ横浜新報ニて種々取沙汰致候より之事ニ御座候、右ニ就今日は此度

御東行ニ就猶亦海岸等兵備云々等ニて、市中一般へも布告致、決而動乱等致間敷、精々夫々へ申達置候、其余何等申上候義も無御座候、然処今日飛脚屋へ参居候報告書別紙之通探索致、且風聞書之通何分紀地(記地)疑敷廉自然市中ニても我説も有之候、右故夫々探索之ものも差立御座候得共、猶於

政府も御密謀可然と奉存候、自然軍艦脱走等も和歌山へ行合も不可有とも難申、此段至雲奉得御意候、余事は後音ニ申残、勿々頓首拜、

八月廿九日
三字

後藤生拜

小松盟台(希刃)
侍史

文書原寸 縦一八・三櫃 横一六八・五櫃

一七四 大総督官御沙汰

上野東叡山攻撃及輪王寺宮立退ノ件

一七七四ノ一

徳川(家達)亀之助

過日以来旗下末々心得違之者

朝廷寛仁之御趣意を不奉拜戴、主人慶喜恭順之意ニ背き

謹慎申付候処脱走ニ及、上野山内其外所々屯集

官兵を暗殺し、民賤掠奪益兇暴を過シ、以て 官軍ニ抗

倒す、実ニ不可赦之國賊也、故ニ不被為止明十五日誅伐

被仰出候、此段為心得可相達旨大総督官御沙汰之事、

五月

一七七四ノ二

上野輪王寺江御送相成候御書付之写

今度徳川慶喜恭順之実効相立家名相統之儀被 仰出候付、

旗下之党弥以謹慎可罷居之処、心得違徒恣ニ脱走所々ニ

屯集し、主人の意ニ戻り候のミならず、屢官軍を暗殺し

民賤を掠奪シ、王化を妨候所業実ニ不相濟次第ニ付、

速ニ討伐ニ可及ハ勿論之儀ニ候得共、今日迄遷延ニ相成候は畢竟 宮御方ニは御懿親之儀存、於 朝廷厚キ 思食も被為 在、於惣督宮も 御深慮被遊、御使ヲ以御登城之儀被仰入、其後參謀をも被差出候処、御面会も無之、猶又再往寛王・親王両隊をも被為 召候得共、更ニ出頭不致、此上ハ御赦被成進候道も絶果、一方ならず御懇慮被遊候、乍去何分国家之乱賊其俣被為差置候而は、万民塗炭之苦ミニ陥リ、 朝慮も更ニ不相立次第ニ付、誠ニ不被為止次第ニ付、俄ニ討伐被仰付候也、 宮御方急速御立退ニ相成候様可申上旨、大総督宮御沙汰之間、此段申上候間宜執成可有之者也、

五月十四日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第五卷第四七七号 文書ト同文ナリ)

一七七四ノ三

合戦風説記

長州より長崎江知れ来り、長崎より御国江報告之説ニは

越後新潟ニ会津分陣して千余人ニ而要害の地ニ營して本邑会津之弁用を懇ふ、然るに官軍諸藩押寄り、会軍は越後川を後にして陣を敷居たりけり、全背水之陣ニして必死之戦をせんとの陣法也、合戦初りや双方江砲発烈敷、尾州・加州は敗北して散々に打なされ、戦死夥敷手負猶しかり、去ほとに薩州・長州も真田軍懸引終練妙ニして、会敵やム返したり、然るを薩之英兵面も振らすゑひく声ニ而大小砲を放ち、か程長州も引続キ攻たりけれハ、会津必死とはいへとも此勢ひに敵しかたく、満々たる激水の越後川江なたれ込惣敗軍と成て新潟の堅めは解たり、右之戦争ゆへ諸藩手負戦死ハ夥敷、古今稀成る大合戦と聞へ、会兵打洩されたるハ若松越を差而逃込しと也、羽州庄内鶴ヶ岡落城分散し、風説白川城も乗取し、英兵薩長分陣して棚倉を攻落したるとの説也、諸所之官軍追而大勝利と成りしかハ、米沢の反賊も尻子舞上りふらくとしたる体の風説也、

(裏ニアリ)

「為」

文書原寸 縦二五・八種 横四四・五種

一七五 久留島伊予守ヨリ島津中将公へ

暑中見舞

(包紙ウツ書)

一島中将様 久留島伊予守

玉机下

(朱一緘)

□

┌

一筆啓上仕候、時下酷暑御座候得共

尊公様益御機嫌能被遊御座恐悅至極奉存候、右暑中御左

右奉伺度以墮墨如此御座候、恐惶不宣、

五月廿日

久留島伊予守(通傳)

島中将様

二白、時候折承御自重万々奉存候、随而私義碌々消

光罷在候間、乍憚御降慮思召可被下候、拜手、

文書原寸 縦一八・三種

包紙原寸

縦二八・三種

横 五四種

横四〇・三種

一七六 岩倉具視卿ヨリ島津中将へ

出兵配慮ヲ謝ス

(包紙ウツ書) 一島津中将殿 具視

緘

(封紙ウツ書)

一島津中将殿 具視

緘

┌

拝啓、向暑之節弥御復常可被成御起居と致杳賀候、陳は
關東殘賊陰ニ禍心を挟ミ、其底意不可図、殊ニ奥羽辺会
賊煽動梗

王化之族不少趣ニ相聞、此侷等閑ニ被捨置候而は、万民
之怨咨不可謂勢ニ付、迅速巢穴掃攘全可及平定旨被 仰
出候、今般修理大夫殿御東下更ニ沿道鎮定、奥羽草偃之
儀被 仰付、就而は昨冬来非常之御勤勞且東北之出兵彼
是感有余次第、又候前断之御奉 詔殊更重遠之御任小生
ニ於ても不堪体察候得共、全格別御依頼之

特旨より被 仰出候御儀故、一層御奮勵冀望之至候、就
而は御国評よりも又々大兵御徵発可有之、旁老台之御配
慮不一形儀奉察候、畢竟

皇国挽回之秋時勢爰ニ至テ一日も猶予難相成、速ニ

皇威顯然相立御凱旋可被奏成功様所願ニ御座候、右缺掌
中一二略呈、時下御保重專祈之至候、

恐々頓首、

五月廿三日

文書原寸

縦 一七・五種

包紙原寸

縦二六・五種

横 一六三・七種

横 三九・五種

二七七 沢宜嘉卿ヨリ島津大隅守殿へ

別紙風聞書

(包紙ウツ書)

「島津大隅守殿

沢右衛門権佐

内啓

(付箋)

『享濟』

緘

一七七七ノ一

向暑之節益御安寧令恐賀候、併頃日御脚疾之由伝承如何
可有御座哉、折角御保護專要存候、誠多年於貴君茂為
国家御心痛不一方御尽力有之候処、春來形勢一變
皇政復古ニ立至、誠以御互ニ恐喜之至ニ存候、然処兎角

奥羽・北陸辺賊徒猖獗、加之於

朝廷もいまた御基本も被為立兼候御模様ニ而、実以深心
痛仕、過日も伊地知氏江面会内密申談候通之事ニ候、然
処当節別紙之通風説伝承、尤隈藩京留守居役之者態々国
許江持参之由故、多分は虚説ニ而無之と存候、定而最早
御聞及之事と存候得共入御覽候、右ニ付内密御相談申入
賢策之処相伺度存候、何分右様之御所置ニ相成候而は、
忽ち

皇国中土崩瓦解之勢ニ立至り、且首として従来

朝家之御為尽力之輩は実以失望而已ならず、如何様可仰
出哉難計、且嚮背不定之輩は弥以傍觀或割拠と申様成行、
遂ニハ為

朝家尽力致し候者ハ擯斥致され候而、建武延元之覆轍ニ
可立至欵、左候得は実以外夷輻輳之節柄

皇国之危急存亡之秋と存候間、誠以不堪苦慮候、左候而
宣嘉如き一个之微臣諫疏千章を奉り候迎、中々挽回之義
ハ有之間敷と存候間、何卒乍此上賢慮之程をも承知仕、

何処迄も力を戮セ是非是非

神州回復不致而は、第一奉対

先帝候而も深恐入候義ニ付、極密々存意申上候、何卒為

国家御高按御示命伏而希入存候、書外は使人之口吻と令

閣筆候、仍早々如此候也、

五月廿四日

沢右衛門権佑
宣嘉

島津大隅守殿

文書原寸 縦二種 横一四九種

一七七七ノ二

(端裏書)
一別紙風聞書]

徳川慶喜水戸表江被退候後は、弥以謹慎恭順之道を尽候

儀全至誠より相出、先非悔悟いたし候上は非常之寛典を

以江戸城江被相返、追而上京可被

仰出候

叡慮之旨、大惣督衆御沙汰有之候ニ付、諸道江進軍之官

軍早々大惣督衆江帰陣有之候様、大惣督宮御沙汰候事、

東海道
大惣督参謀

東山北陸奥羽
官軍隊長中

(鍋島直正)
閑叟
(松平慶永)

從三位中納言

春岳
(松平慶永)
阿波
(松平重茂)

(帯刀)
小松

(利通)
大久保

從二位内大臣

後藤
(象二郎)
三岡
(八郎、由利公正)

(副島備臣)
添島
(平四郎)

横井

(奥美)
三条様御帰京之上岩倉様御同様、木戸準一郎も小松列

同様被

仰付候事、

右元本之通急写入御覽候、定而誤字等も可有之、御推覽

希入候、
宣嘉(次)

文書原寸 縦 二二種 包紙原寸 縦三三・五種

横一〇八・七種 横四二・五種

二月 長州藩主父子両公ヨリ戊辰役ニ付藩士へノ

諭告

祖宗以来我等父子に至る迄御

王之大義終始不相渝事勿論ニ候、然処国家紛擾我等之主
意を体し難に殉し節に死する者不少、遂ニ上下之誠意稍

徹し、辱くも

王政御一新之

御場合ニ至り候付而は、

上

祖宗之靈を慰め、下殉難死節之者地下ニ瞑目せしめ候覚

悟ニ而、弥

天下平定

朝威相輝候迄は、身家を顧るに違あらず、王事ニ執掌し

無二之忠誠相尽し度、依之左之通大綱相定候事、

一天下平定ニ及び候迄は父子間一人

闕下ニ相詰候事、

但先日

御沙汰之旨も有之、本文之通相決候、其内時機に因
り進退相願候義も可有之、

一陸軍大略五千人緩急順序を以出張可申付候事、

但五千人ハ二州之力を計り相定め候、其余之兵員は

二州不虞之備に充、

一海軍

但戦艦未備候得共陸軍ニ準可致駆引候事、

一逆賊為征討東辺北陸江出張申付候諸軍一致之心得勿論

候、就中薩長同心戮力之義は天下徧く所知にて、益熟

味いたし不申而は不相濟事ニ候条、此旨厚相心得可尽

忠義之段、連々出先之者へ示諭いたし置候事ニ付、於

家来中茂心得違無之様可致候事、

戊辰

五月

文書原寸 縦一九・四種 横一四〇種

○二七〇 藩政改革ニ付忠義公ノ論達

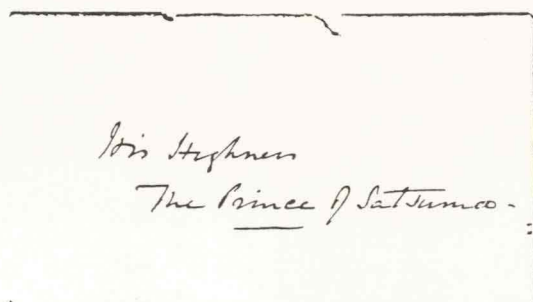
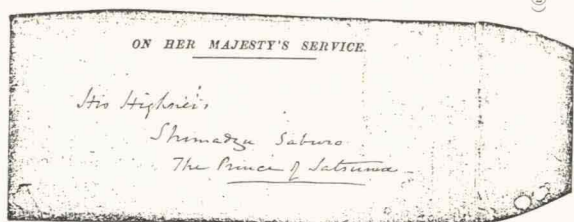
一七〇 英国砲艦長山川港ヨリ久光公へ

佐多岬ノ緯度誤謬改正ノ件 写真添訳文付

一七八〇ノ一

(封筒①)

(封筒②)



文書原寸 縦一七・八種 横二二・六種 一枚
 写真原寸 縦一〇・八種 横六・三種
 封筒原寸 ①縦六・八種 横二・二種
 ②縦九・七種 横二・三種



Charles J. Bullock, Esquire
Governor of the British
Majesty's Gun Boat Service,
to His Highness, Shimadzu
Saburo, Prince of Satsuma.

I have the honor to
inform you that I have
arrived at your Port without
any official or political object,
but merely of my own accord.
I always remember with pleasure



your hospitable reception of
Admiral King, whom I
accompanied on his visit to
Kagoshima, two years ago, and
hope your Highness will accept
my Photograph as one of the
officers entertained by you on
that occasion.

I have to thank your Highness
for the complimentary message
sent this morning through the
Cano.
Next the matters of my visit
should be understood, I

give them. First: - The distance
of Satsuminski is about 7 miles
in error on the Japanese chart.
For the purpose of correcting it
, I landed yesterday at Yamaguchi
for observations. It will now be
corrected with Nagasaki as in
October last, it was with Yokohama.
Having my quarters, allowance
of ammunition to expend and
knowing the interest you people
take in Gunery and your former
kindness in placing the large
range at my disposal, I came
up to Kagoshima
I hope your Highness and
family are in great health.

I congratulate you on the
success of your camp, and hope
that the late petty venues
sustained by your troops before
Yedo will not hinder the
consolidation of the Empire of
Japan under the sovereignty
of His Majesty the Mikado.

I hope to leave Kagoshima
tomorrow for England and
I request to be supplied with
a small quantity of coal. I
intend to visit the Lickin
islands on my way to Hongkong
being desirous to see them.

Chuzo Rutherford
Com. Nav.
Kagoshima, 7th June, 1858.

英国王之大砲艦セルベント号之酋長チャルレスゼブルオックなる者より、

薩摩公島津三郎殿下ニ呈す、

某謹而報告仕候ハ、御港内へ来着仕候事公務ニ由て罷出候義ニハ無之、只私用のためニ御座候、二年前アドミラルキング罷出候節、私義も同伴仕御懇之御取扱難有、片時も忘却不仕候、随而殿下其節御饗応ニ預り候士官之一人なる私写真呈上仕度奉存候、

今朝は御使者ニ預り難有奉存候、此節来着之趣意御怪ミ無之様此書を差出候、

第一佐多岬緯度凡七里計日本地図ニ誤有之、之を改候た

め昨日山川ニ上陸仕候、右昨年第十月横浜ト関係いたし候如く長崎ト関係いたし候、

一私火薬有余有之稽古打仕度、且御国人大砲術御心懸之

事故、**又** 大的御立被下度事ニ付鹿兒島へ罷出申候、

一殿下及御家族御安泰を希候、

一御軍勢立功奉祝之、且江戸辺ニ而御軍勢先日聊不運之

事、

皇帝之王政復古ニ妨なからんことを希ふ、

一明日は鹿兒島を出帆英国へ向度奉存候、随而石炭少許御渡被下度奉願候、琉球一覽仕度奉存候間、香港へ参り懸ケ琉球へ罷越度奉存候、

在鹿兒島

チャルレスブルオック

千八百六十八年第六月七日

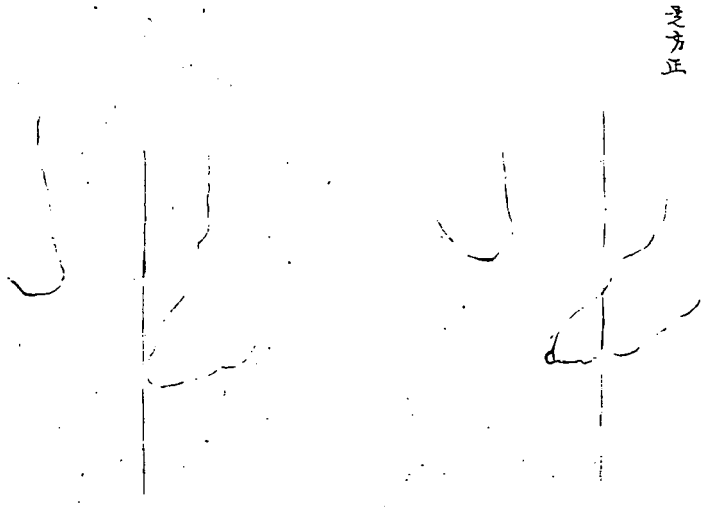
文書原寸 縦一八・五種 横四〇・七種 二二枚

一七八〇ノ二

本文右昨年第十月横浜ト云々ハ、日本地図佐多の岬経度之線英七里余違有之、此船昨年第十月横浜より佐多岬へ航し、今又長崎より佐多岬へ航し、愈之を明証せしト申意也、

訳文誤而経度を緯度ト書ス、

之方正



二天 忠義公へ東征ノ勅命

三通

錦旗御剣金品下賜

忠義公帰国大挙ノ御沙汰書

一通

合四通

一七八一ノ一

写

関東之儀懸念ニ付、既ニ先日万民を救はん為、速ニ親征之外無之決心之処、一同評儀申出候趣も有之、先暫猶予致候内、其藩初奮闘勗戦の力ニ依て、白川・長岡之賊壘陥落且江戸上野兇徒も追伐ニ相成、追々鎮定之勢ひニハ相運ひ候得共、尚此末之勢何とも不心 安、且ハ奥羽之地上古来浴

王化、此後之所も何れ関東へ出征致さずしてハ泂も永久帰順ニ至らざる歎、就而は必ず出馬可致存候而、先先鋒之心得にて汝速ニ発向、朕親征迄之処専ら平定尽力可致候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第五卷第四八八ノ二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二四・八釐 横三四・六釐 二枚

一七八一ノ二

今度東下之儀不容易重任速ニ奉命段 御満足思召候、依之出格之儀内々

御直垂 一領

御擣袖 一領

賜之候事、

六月五日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第五卷第四八八ノ三号文書ト同文ナリ)

一七八一ノ三

累年為国家尽力之上追々所々出兵国力如何可有之哉被

思召候処、猶亦無余儀次第ニ而、今度出馬被

仰出候付内々

金三万両

賜之候事、

六月五日

右外ニ御同日錦御旗一流・御劍一振・白木

御拝領被為在候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第五卷第四八八ノ四号文書ト同文ナリ)

一七八一ノ四

御官名

過日東海道発向被 仰付、已ニ上程ニ臨ミ 大総督官より急報之趣有之、先見合本国兵隊上着之上追而 御沙汰可有之被 仰出候処、何分奥羽討伐之儀は至急之事ニ有之候間、一応帰国大兵を率ひ、速ニ海路東行 大総督官三条右大臣等申合、早々奥羽鎮定可有之被 仰出候事、

六月五日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第五卷第四八八ノ六号文書ト同文ナリ)

一七八一ノ五

写

折田 平内

折田 正介

肝付直左衛門

右越後口出張之本菅江相詰、他藩引合且斥候役被 仰付

候条、当所御乗船後可致出立候事、

別紙

平田 伊藏

有馬七左衛門

曾山喜之助

右白川口出張之本菅へ相詰以下同文、

文書原寸(折紙) 縦一三・四横 横三九・三横 四枚

一六二 関東へノ出兵ニ関スル久光公ノ諭達

今般関東辺不穩之形勢ニ依リ以

朝命京師より出馬有之候ニ付、出兵申来人數取調相成候

処、昨今出張相願候者茂有之由、忠誠之至情ニ於てハ尤

之至、実以深悦入候、併評決相成候故今更更改難相成、

殊ニ於当国も守備專要之折柄、且出兵之儀も当節ニ限り

候事ニも有之間敷候ニ付、右之趣意致貫徹、此末愈以為

天下国家同心合力抽忠節候様頼存候条、懇篤可申聞候事、

六月

文書原寸 縦一八・八横 横一一〇横

一六三 橋口彦次ヨリ伊地知壮之丞へ

靖献靈社建立ノ件

(封紙ウツ書)

「伊地知壮之丞様 橋口彦次

要用上意

ノ

┌

愈御安寧被成御座奉大慶候、今日は蘭人御応接ニ御出張

之由、此貴天御難儀如何計之御事御座候半と奉想像候、

扱昨日御談合申上候靖献靈社之一条、猶又得と勘考仕候

処、此節之招魂冢一基ニ而相濟事御座候得は、則前面ニ

靖献靈社之文字彫付、先ツ異議無之方ニ候処、いづれ追

々戦亡人数之儀も姓名相記候石塔可被召立、左候得は此

以後之標題も又靖獻靈社と可被相記哉、其通候而は幾ッも靖獻靈社不被召立候而不叶時宜ニ相成可申欵と、又候疑惑を生し、今朝桂家江罷出昨日吟味之成行且前文疑惑之次第も申上候処、桂家ニも此節之一基ニ不限事候得は以後之御取扱出来兼候半欵、いつれ招魂家并靈社被召立重復之事ニ候共御手厚方之事候付、たとへ後世被相替候而も厚キニ過候誤は少も不苦筈、依而当分之手当通ニ而可然被為思召ニ候段承知仕候、就而は今日猶又御相談申上度含ニ御座候処、大兄ニは御別勤御用部屋も求馬殿老人ニ而何之吟味も相調不申、其假召置申候、しかし求馬殿江桂家思召之成行且昨日粗申上候招魂家之文字削り下ケ、戊辰春戦亡名員と申様哉、文字相慎候て重復之患も無之、勿論偉功相立候もの、^(姓)性名普く世ニ示し給ふ之御旌表ニも罷成筋ニ而は有之間敷哉、猶又御吟味可給旨申入置候、然処退出途中得能子江行逢、今日御用部屋之吟味如何候哉之旨相尋候処、招魂家ニ而も靈社ニ而も一方ニ相成候へは外ニ何も異議無之候付、姓名相記候石ニ相

成候得は異論無之由ニ御座候、明朝猶又桂家江罷出委細申上候様可仕候付、大兄ニも得と御熟案被下置、己ニ来ル八日方より御湯治御出候由御座候付、最早日合も無之一日も早く、いつれニも相決不申而は御間ニ逢兼可申、甚た心配之仕合ニ御座候、尤明日は休日ニ而谷山開墾方見分手当有之、御家老方ハ御差支ニ付、相良氏・私差越候賦、いつれ明後三日ニ決着、来ル六日ニは是非御祭式相調候様無御座候而は御不都合之事候半と奉存候間、其内深く御勘考被下、何卒明後三日之御一会ニ相決候様御賢断伏而御願申上候、此旨甚た不都合なから今日は多分終日之御勤と奉存、乱筆を以御相談旁奉得御意候、以上、

七月朔日

文書原寸 縦一八・七極 横一三一・五極

二六四 黒田吉井ヨリ小松大久保へ

軍服一千着ノ注文

軍服千枚

但大中小冬服

右之通早々御調御送可被下候、代金貳千兩位ニ而出来候由、雨中台場ニ立通し、悉皆不破へなし、月給も一度も不渡、誠ニ兵隊も困窮也、服ニ而も相渡度候、金子御地ニ而も御差支之筈候得共、京・大坂より御取寄可被下候、此段分而御願申上候、以上、

七月四日

小松 帶刀様

島津 伊勢様

大久保 一蔵様

黒田嘉右衛門様

文書原寸 縦一七糎 横六九糎

吉井幸輔 (友吏)
黒田了介 (清應)

二六五 大品格之助ヨリ岩下佐次右衛門へ

奥羽ノ形勢報告

以飛札奉啓上候、当春以来絶而消息も不伺候処、先以共御地ニ而愈御安寧日々御美政も被為施候御筈と遙ニ奉恐悦候、扱は奥羽之形勢追々注進として夫々差登申候ニ付、巨細御聞取被下候筈と奉存候、既ニ一昨七月朔日南部盛岡より九条殿并ニ醍醐殿当久保田城江御着陣、尤肥前小倉之兵隊随従、沢殿ニハ当領内野代港と申処ヨリ同日御一所へ御着陣ニ而、六ヶ月目始而御対顔且諸兵既ニ黙然として拭涙之外他事無之候、然ル処当秋田よりモ列藩会盟等種々相拒ミ候ニ付、翌二日秋田侯御呼出シニ而御議論ニ相成候処、主人は弥無他念決心ニ相成、弥出兵御請致候得共、尚諸役人共種々申立之趣有之、不得止ニ付五藩申合庄内征討先鋒願出候ニ付則チ被命、國中一昨三日より正義党凡三百人計り会集、君公へ相迫り、是非先鋒他ニ不讓旨ヲ以追々人数相増、昼夜相詰候ニ付、昨四日朝秋田侯參謀是非当藩態願相立無他候而は、是より早々

激党打入之旨ヲ以テ申立候ニ付、尚当藩へも被 仰付、
 国中大ニ振り立、然ル処仙台重役兩人相馬・新庄之役人
 引而当地へ出張、御三卿之儀ハ早々当地ヨリ御出船ニ而
 御帰京、且薩長之人数ハ兼而御約定之通早々追払ヒ候様
 相促シ之使者ニ候処、昨四日断然之決策ニ相成悉ク誅戮
 ヲ加へ、幸ヒ宜シト則軍門ニ梟首ニ而弥正議一徹ニ相成、
 既ニ秋田国境へ相迫リ居候、米沢・仙台且庄内明日より
 征討、昨日御治定ニ而、実ニ 官軍如水魚ナル奥羽モ平
 定ニ近かるへく候、合衆国之処モ南部・津軽・新庄・六
 郷等内応致シ、只今ハ賊ニ加リ候得共、事ヲ挙候ハ、内
 ヲリ打而出る盟約ニ相成、不日奇妙之一左右申上度、実
 ニ是迄遷延ニ及ビ候、乍不得止次第幾重ニモ多罪此事ニ
 御座候、尚巨細奉申上度候得共、昼夜之大紛雜故任幸便
 不取敢急々為可奉得尊慮如斯ニ御座候、恐惶謹言、

七月五日

大山格(綱良)之助

岩下(分平)佐治右衛門様
侍史

尚同勤世良事(條威)ハ斬首せられ、肥前藩前山精一郎(長冠)参謀
 之命ヲ蒙リ、只今ニテハ兩人ニ而仕合之至ニ御座候、
 以上、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第五卷第五三七号
 参照ノ其二文書ト同文ナリ〕
 文書原寸 縦一七・五種 横一二五・九種

二天 越後長岡ノ苦戦報告

死傷者人名書

七月廿四日夜より同廿五日迄

戦死

鑑軍

牧野正之進

伊勢 斎七

有川正之助

隈崎宗之丞

橋口権五郎

病院ニ而死 平田 助八

加世田 川村 邑二

伊作

西剛右衛門

木場龍右衛門

泊正之助

日渡十次郎

上原周左衛門

山元城左衛門

下人老人

夫卒助次郎

深手

中原猶助

若松平次郎

羽田宗太郎

塚田十右衛門

井上清右衛門十二

和田市五郎

畠山孫大夫

池田喜兵衛

加世田

川俣愛之進

伊作

松崎麟平

川越正左衛門

黒川戸右衛門

重信良左衛門

川村源七

実吉祐造三十

松元彦左衛門

宮内喜藏

外山藤右衛門

木場良輔

手負

石神彦七

春成青力与五左衛門

伊作

宇都武八

田中宗太郎

田尻伊兵衛

山之内平蔵四十

東条武治

緒方織兵衛

夫卒 利助

太郎

中島健彦下人 清助

町夫 正兵衛

けさ市

外ニ伊作衆中病院中ニ而行衛不相知

上下四拾七人

右七月廿四日夜五時より翌廿五日之夜五ツ時分迄

越後表より問合

当地去ル廿五日山手之方は長州請持、平場之方は薩州請

持ニ而、朝四字を期限ニ進撃之処、賊兵長岡城下江不意

ニ突入跡をたゞれ、皆隊必死ニ坊戦成丈踏こたへ候得共、

乍残念関原と申所迄退軍、就而は彈藥等も過半被相奪、

最早九万発計之手当ニ而乏敷候、切迫此事ニ御座候、右

ニ付彈藥御差送り給度態々谷川八百助・肝付直左衛門・

伊東新八御国許江差下候間、何分も急速御差続給度、此

段及御問合候、以上、

七月廿六日

文書原寸 縦一三・二種 横八九・三種

一七七 小松帶刀ヨリ大久保利通へ

三条卿江戸へ出府ノ件

(端裏書)

一通ノ内

八月十九日出同廿五日十字着

本文岩卿江御覽ニ入候処、御上京之出来候哉、亦是

江戸之形勢ニ而御上京不宜哉、否着目之処、極々早

急ニ報知之処尚書入候様御沙汰ニ御座候、

(三条重実) 条公御上京相成筋ニ而、輔相卿も頻ニ御待相成居申候、

夫故大木(喬任)・木戸之内出江之義も御見合相成候間、自然御

地之形勢ニ依り御上京不被叶時宜ニ候ハ、早々御申越

相成候様有之度、御地報知之処ニ而旁御決着相成義も候

間、条公御上京之否早急御報有之候様、貴所江申越候様
輔相卿被命、此段御掛合申上候、以上、

八月十九日

(藩刃)
小松

文書原寸 縦一七・六種 横四五・九種

一六八 筆者不明ノ書翰

長崎ニ於ケル兵器買入其他軍用金等ノ件

翰教拜読、海陸無御滞御出崎、愈御安泰御勤職之段、大
慶至極奉存候、乍毎御重任ニ而御配慮は申迄茂無御座候
得共、御国家全力之御大孝ニ被為及、積年勤

王之御洪業不日御成功之機ニ臨ミ、大兄平素御蓄養之秘
瀝可被尽は、乍憚此御時節ニ可有御座事新等敷候得共、

何卒 御賢慮を以治乱共投機之全策御確定被成下度、伏
而奉祈願候、

一此節大兵御繰出跡兵器御手薄候付、施条銃其外軍局之

要品御地ニおひて御買入之儀、詰御役々江御掛合申進

置候処、奥羽之賊徒格外高直ニ買入俄ニ直段引上候趣

先便より相達、是非不相備候而不叶要器右次第ニ而は
御金繰調兼、別而心痛仕候、今般

朝政御一新ニ付改而通交御免許之上、

天拝迄も被仰付候儀は、実ニ未曾有之御優遇と可奉申
込、然るニ右通接戦之要器利分之一ト筋を以賊徒江売

渡候始末、全く

朝廷尊崇之信義不相立而已ならず、常々口実之万国公
法ニおひても不忍所行ニ御座候半、利ニ走るハ豺狼之
常情とハ乍申、貪欲之甚敷如此候得は、大兄奉始御存
之御注文品御買入之手数一ト方ならざる御心配之筈と

奉存候処、案外ニ諸品全数無相違相届、急場之御用分
別而御都合罷成、我々迄茂安心仕候、殊ニ直段以前ニ

不相替前文通夷情反覆之砌、何様之御賢策を以最易ク
御手ニ被入候半、偏ニ大兄御談判之宜敷ニ随ヒホト

エム等誠実斡旋不致候而は、右式之御都合相調申間敷、
返々茂御鼎力之程奉驚入候、スナイトルハトロノ之儀

は売品無之由、無致方次第御座候間成行^程右衛門殿江申

上置候、左様御承知可被下候、

一夷人御雇入御届向之儀は、先達而右衛門殿より出軍方御用金五六万両は不被備置候而不相叶、且御拜借之金札返上之趣法篤と致勘考、銘々存慮申上候様御達有之、其段は御承知被下候通ニ而、晚夫ニも分量丈之愚案は尽候得共、当分通内外莫大之御入費充分無御不足御備り可相成程之便計絶而考付不申候付、財力豊暢之策を措て一ト先不急之御払口被相省、一凶ニ大兵振旅之軍資ニ被振向度、就而は第一夷人御雇入之儀今般朝廷より被仰渡候趣も有之、

太守様御職掌ニおひていつれ乍一往も御差返御当然之儀ニ可有御座、勿論天下通融之金札已ニ御振出之上は、追々現金無多事可相成は為差知事御座候付、当分之振合ニ而御雇続被召置候而は、給金御払渡追日御難渋ニ可被及、旁以無余儀機會ニ付、此涯

朝命之一ト筋を以御差返御座候様仕度、左候得は遮而之現金御払口相応ニ相省き、夫丈は御軍費之補ひニ可

罷成、將又兩軍局其外御益筋之御趣法立を以御取起相成居候局々、都而盛大ニ振ひ置候様心思を尽候儀は、

掛御役々当然之事御座候得共、今形ニ而か也ニ相済程之儀は先ツ夫形為相濟、少々之不如意は掛御役々見計を以精々御用弁いたし置候様被仰渡、是非御払口相減現在片時も難被差欠出軍方要用之統棄其外之御用分一ト向ニ被相弁度、左候而奥羽靖定之後諸局十分之御処置御座候様との趣、一己之見当は申上置候、然処大兄此節之御教諭ニ茂御出立前御打合申上置候通、此機ニ乘し御雇夷人御差返相成候様建議可然段被仰越、御同意至極奉存候間、參謀中より建白之筋今日田畑氏江示談仕置候、来ル十日參謀出会之日柄ニ付、猶又得と申談後便成行委細申上候様可仕、此一条は只今之機発放過いたし候而は、再ひ難得大事件と奉存候間、晚夫之寸忠ニ精々賛成涯々運立候様仕度、乍憚御安心可被下候、

一霧島神社別当寺被召放、跡地面等治定向ニ付晚夫ニも

先月廿四日より霧島江被差越、去ル四日帰郷仕候処、市来君ニも湯治御越ニ而いまた御帰り無之、伊藤彦州ニも

大守様御湯治御供ニ而、当分参謀方別而少人数ニ付、家格一件且高調御役場御賦之吟味茂出来兼、其上西郷氏ニも晚夫旅行前方より湯治江被差越、晚夫罷帰候翌日は御兵具方三小隊引卒越後口江出軍有之、件々引合も相調不申候間、いつれ市来君近々帰府之上遮而御評議申上候様可仕候、家格一件之吟味は御文書方よりいまた何分承り不申候、猶又引合何れ共早目運立候様吟味可仕候、

一参謀之名義御高論之趣逐一左袒仕候、いつれ市来君江得と御談合之上、田畑氏其外江も打合、称呼被相改候様仕度、右ニ付兼而御賢慮承知仕候通、参謀一篇之人數三四人は是非段々不被召居候而は、本職之繁忙又は旅行旁ニ而欠席勝ニ罷成、適被召立候要局今形ニ而は連続いたし候儀甚た無心元奉存候、何卒参謀專任之人

材御勤考被下、御見込之分は被仰越被下度、(繁)奈良原氏ニも下着御座候得共、病氣之由ニ而いまた出勤無之由、乍然追々順快之由御座候間、忝人は此仁たるへく奉存候、

一都城注文之小銃無相違相届、代金は現金ニ而上納相成、白石請取便宜次第、御地詰役方江差送相成賦御座候、

一阿久根之調練場一件は篠崎氏出府之上得と尋問所差支無御座候ハ、御家老衆江申上速ニ相運候様取計可申

(虫通)

〔晚夫霧島旅行中ニ此節出軍之御兵具方隊彼是申分いたし候一件より入組之儀有之、御兵具方三小隊は御先手二大隊之外ニ而、前文通西郷氏引卒、右跡代り忝

小隊は川辺江俄ニ被仰付、今二小隊はいまた相分り不申、右ニ付而は御家老方ニも旁御配慮筋為有之哉ニ御座候得共、晚夫ニは在旅中之事ニ而委曲承得不申候付、態と不申上候、尤島津良馬殿只今御用ニ而若年寄陸軍掛被仰付、其跡江は島津登殿(久包)大隊長被仰付候由、右次第二付阿久根之調練場願も良馬殿江申上、都合能取計

可申候間、左様御承知可被下候、

一此節御承知之御用筋ニ付、ホートエン江御引合御座候

処、同人御当地江参上之折御待遇之御手厚ニ感伏、何

篇汲受も宜敷段無此上御都合と奉存候、何卒大坂表之

御引結等万全之良策御治定之処、精々御尽力被成下度

伏而御願申上候、桂家江は成行申上候様可仕候、

一御出立前日は適罷出候様承知仕、諸事御教諭承上置度

(欠損)

候処、あやにく(後欠)

文書原寸 縦一六・三種 横三七四・三種

一六九 小倉四郎兵衛ヨリ寺師等へ

会津若松城攻撃ノ現状報告

(端裏書)

「小倉四郎兵衛書状」

絶而不奉得尊意候得共、

御両君御揃御堅勝奉遠賀候、然ハ小子事キハ奥州出軍被

仰付、当分会若松方宿城中ニ而御座候、御聞及も可有之、

先月廿日より戦争被成候処、敵方ハおもひの外弱り最早

落城様子ニ御座候、彼地之内ボフナリ峠并誠至道より進

撃之処、砲花ことく破り申候、只今之処ハ会之城下

焼払官軍宿陣之事ニ御座候、御推察可被下候、急事まか

せ荒増奉得寸志候、恐々敬白、

辰九月七日

小倉四郎兵衛

松木大君

寺師大君

二白申上候、寺師之御策通兵隊之儀ハ何れも農兵第

一ニ御座候、此上ハ御遠略之処奉伏掌候、

文書原寸 縦一五・九種 横六一・一種

一七〇 海江田彦之丞ヨリ大久保一蔵へ

東北ノ戦況

若(欠損)

戦(欠損)日夜戦争少々ツ、ハ有之候由、越後口

之官軍も既ニ二三隊(欠損)仕候由、尤若松在軍之官軍

より津川辺之賊皆ヲ裏攻致し、色々と勝利有之候由、彼

表之御軍議之処ハ味方少々死傷候得は拔城之事ハ目前ニ

候得共、越後口之官軍も数月難戦、所志は唯此一城而已

之事候間、迎もの事一同会軍(欠標)一挙ニ攻城ニ可及と申

事之由、昨日伊地知十郎会津より帰府ニ而申居候由、肝

付郷右衛門殿より承申候、乍併此十三日方ニは多分攻城

ニ相掛候半と仕事ニ候由、

一九日之夜若松市中ニ失火有之、大垣之營後より発火仕

候由、乍然幸ひ城中よりも打出不申、折柄西風余程烈

敷候得共鎮火致し候由、我藩ニは火薬庫等怪我無之由

御同慶奉存候、

一東京其後為替事も無之、東久世様議定同様之心得を以

日勤被仰出候、

一庄内之方ハ今日迄も報知無之、街説ニは既ニ落城と申

事ニ候、

右は今日迄之情態荒々如此、折角御帰東旦夕奉待上候、

頓首、

九月十四日

海江田彦之丞

大久保一藏様

侍史

文書原寸 縦一六・一種 横一三九・三種

三五 白尾幸宏ヨリ久光公へノ呈詩

揖宿多良浦月夜眺望

(包紙ウツ書)

「一上」

(包紙ニアリ)

「二字闕」

簾幕覆東風

愛事閑情眺夢空

暖靄籠花々不見

鶯聲只在牆香中」

多良浦月夜眺望在指宿郷

于時慶応四年戊辰九月從

駕在指宿二月田邸、抑為多良浦之景峻岸兀立、

松堤沙洲(案)窳廻其下、蘇子所謂山高月小、水落石

出、真景依然赤壁之勝、可遙想蘇子赤壁遊十月

望也、今歲有閏氣候猶十月、因及此云、

多良浦上月色憐 清輝万里破雲煙 雲収煙銷無纖翳

江山浦松翠接天 涿々潮水浸皎月 灩々金波浮漁船

砧杵幽響何村落 鳴鶴時聞二月田 對月傾杯虛百慮

復聽鳴鶴心飄然 江月野鶴実可愛 使我宛為羽化仙

此時戊辰九月望 幾吟蘇子赤壁篇 赤壁之勝遙堪憶

江月高懸絕崖辺 更有夜深飛鳴鶴 向月廻崖転翻々

山水勝景雖異所 皎月同照幾万年

白尾幸宏拜具

文書原寸 縦二九・一櫃 包紙原寸 縦二七・九櫃

横四五・七櫃 横四〇・四櫃

三七三 大久保一藏ヨリ蓑田伝兵衛へ

東北ノ戦況及車駕御東行ノ件

(包紙ウツ書)

一(御国元)

蓑田伝兵衛様 大久保一藏

要(書) □

封

九月廿三日

従大坂

「

拜啓仕候、先以

御向殿様益御機嫌能被為遊御座御同慶奉存候、於京師も

去ル(次掛) □日御都合能

御東行

御発轡被為 在、御互ニ恐悅無此上奉存候、北越東奥之

戦争官軍日々勢盛大、既ニ別紙之通若松表も且夕ニ相迫

り、最早疾ニ賊滅無別条、米沢も愈降伏之由候得は、仙

台必同様と被察申候、庄内も降伏之説有之、未確証を得

不申候得共、終ニ一定之成功疑無之候、東京之事も実ニ

紛々之次第ニ候得共、追々静謐之左右も有之、殊ニ

行幸被為

在候得は、屹と鎮撫行届かせられ可申候、今般東京実地

を踏候処思しよりも多少之内情有之、中々以六か鋪

御親臨より外ニ平治之方算有御座間敷候、御軍費許多之

上

御東行之義先々御余計と之議論も有之由候得共、中々以

左ニ無御座候、東京之根軸若瓦解ニ及候日にハ、天下終

ニ一定之期無之、誠ニ御大事之際ニ御座候、数千年
皇化之及サル上徳川氏覇府を開

朝廷在ルを不令知殆三百年、況乎風土人質固陋頑愚ナル
をヤ、実ニ今日ニ当テハ深以力ヲ此ニ用ヒ給ハすんハあ
るべからざる急務と奉存候、開陽丸始脱走艦別紙日誌に
も有之通、難風ニ逢処々漂流等いたし、天網ニ相懸候間
迎も格別之害ハ得成シ不申候、烏合ヲ以弱兵而已乗組、
食糧費用迎も続キ候丈ニ無之、約り自滅を招候外無御座
候、

一徳川御処置之義も元旗下之結局不相付、暫時混動も有

之候得共、駿遠参ヲ以七拾万ヲ被封、清水領十万石一

応御預と相成、凡而徳川家ヨリ扶助イタシ候筋ニ勝(徳也)・

山岡等御受相成候間、先々方向丈ハ相立候訳ニ御座候、
(餘州)

此上鎮定届兼動揺イタシ候得は、益徳川家之曲と相成

候、爾后之処

朝廷之御処置愛贈(禮)ニ涉らす至当公平ニ出、御失体さえ

無之様御心ヲ用させられ候得は、何も不足憂と奉存候、

一東京之義も市中取締向等追々御手相付、追々と人心も
安堵ニ向、表面ハよほと賑ひ立候姿ニ御座候間、御東
行相成候ハ、格別平定之道相立可申候、

一先便日誌御用之事御問合致承知候処、出府中にて京師
迄申遣候間、岩下氏等(方平)より差下相成候事と奉存候、鎮
将府日誌合本之小冊幸便ヲ以先生迄差下呉候様岸良七
之丞江相頼置候付、届次第御差上可被下候、跡は追々
と下シ可申候、外ニ絵図新本北越奥羽日
本沿海図二三冊一緒にた
のミ置申候、

右大略形行可申上如此御座候、早々頓首、

九月廿三日認

大久保一藏

大坂ヨリ

養田伝兵衛様

二白

追日微寒相向候得共、先以御安祥被成御連勤恐悅奉

存候、随而僕事御用有之急速上京亦々帰東被仰付、

今日当所出帆仕候、近来は東京迄隔絶イタシ候処、

時々御書通も行届不申、失敬奉存候、何れ不日吉左

右可申上候付御待可被下候、

文書原寸 縦一九・二種 包紙原寸 縦三〇・八種

横二〇五種 横三九・五種

二五 薩藩医臣柳田友広ノ漢洋医術ニ付「方宜鎖

言」及「行囊燼余」 二冊

一七九三ノ一

慶応四年戊辰秋九月四日付於方宜瑣言依参与某氏所

上書

西洋医方ノ未タ 我風土ニ適ハサルハ粗別冊ニ論スル所ノ如ク、実ニ悲歎ニ堪ヘス、且近來物価踊騰ニ付貧窶ノ者ハ病ニ臥スト雖、医ニ依リ薬ヲ服スルコトヲ得ス、非命ニ斃ル、者モ間有之哉ニ承及ヒ、慨歎至極奉存、乍不
及日夜苦思仕候所、何レ西洋諸邦ノ制ニ倣ヒ三都会ヘ病院
院

御取立ニ相成リ、別冊第十九章ノ趣意 御採用被為有候ハ、 深仁至慈ノ

聖恩普ク億兆ニ貫徹シ、医道モ亦精確ニ成立チ可申奉存

候、 御親兵病院ノ義モ頃日漢方医流ハ悉ク退キ、洋医

者流ノミニ相成候哉ニ承候、是時勢ノ所令然ニシテ、終

ニハ典藥寮ヲ首トシテ諸ノ 官医皆純洋ニ相変スルノ濫

觴ニシテ、終ニハ草沢ノ医ニ至ルマテ尽ク之ニ化スルニ

至ルヘキノ漸カト奉存候、医道ノ義

聖体ハ勿論天下万民ノ生命ヲ託セラル、ノ職務ニシテ、

其任不輕、且 御政事ノ義ハ世運ニ因テ時々 御変遷無

之テハ不相濟訳ニ候ヘトモ、疾病ハ唯氣運ニ付テ小異同

アルノミニシテ、古今格別ノ變遷アル者ニハ無之候ニ付、

往昔ヨリ行ナハレ来リ候医流一朝ニ転移スルハ不容易義

ニ候ヘハ、兎角漢方医ノ才能アル者ヲ普ク海内ニ 御撰

擢被為有、洋医ト 御僱用有之、其得失判然相分リ候上

ニテ 御取舍有之候ハ、公正ノ 御処置ト奉存候、医

業ノ道ハ專業ノ者ニ非ンハ乍恐 御案内無之キハ当然ノ

義ニ候ヘハ、卑賤ノ微衷愚陋ヲ顧ミス奉建言候間、速

ニ 御採用被為有度奉願候、誠恐誠懼上言、

戊辰九月 島津少将臣医 柳田友広

本文 御採用ニ於テハ金銀ノ用途ニモ相関リ候ニ付、御召寄セノ洋医ハ先ツ三都会ノ内一箇所ニテ宜ク奉存候、京坂ハ四海ノ中央ニテ風土ノ則ヲ取ルニモ宜ク、殊ニ大阪ハ辺海輻輳ノ地ニシテ藥品飲食院中凡百ノ具及ヒ四方ノ病客来往等ノ便利極メテ宜ク候故、此所ニ被召建候テ可然、尤御採用ノ後院中費用金ノ義ハ可成丈 官府ヲ仰キ奉ラサル様可仕目度モ有之候ニ付、追テ上言可仕候、

方宜瑣言序

今世之所謂医者、不佞言諛辭、走趨於權門、而求什升之祿、則輕衣長裾、銜燿於世俗、欲求其技之售也、不然、互立門戶、曰相攻擊、私党排擠、是之為務、至其留神精術之事、漠如不與己相關者、方技之衰、於是可謂窮矣、余去年夏、自江戸帰藩、与柳田清卿始相見、飲酒徵逐、一月数次、視以為酒中之人而已、未知其精術好文如此也、偶品画評書、自宋元至明清人、歷指數十人、言墨法筆意

造精詣妙、猶視以為好古之人而已、又未知其精術好文如此也、今年夏、清卿役于京師、余亦尋至、飲酒徵逐、權如前日、品画評書、又如前日、而鴨水之浜、東山之麓、閑杖履相追隨者、亦時而有矣、視如前日、猶又未知其精術好文如此也、一日抱方宜瑣言一書、來請序、取而閱之、論說古今之疑似、弁折漢洋之異同、累數十條、文簡而言詳、余雖不解医、至其言之是非当否、未必辯所見也、翻閱数次、曰、誰之著也、曰、近日之自著矣、余歎曰、人果不可知也、前日之視以為酒中好古之人者、大繆矣、真精術好文之士而已、留神精術之人、可聞而不得見者、得相追逐於朝夕、亦可謂幸矣、清卿、言語質訥、衣履不飾、而未嘗短長几、使今世之走趨佞諛而相攻排者聞之、蓋有愧色焉、況有此着乎、方技雖衰、未可謂無其人也、抑人不知而已、方今國家急於求才、巖穴幽潛之士、將搜羅無所遺、則雖式方技之人、未易自棄也、清卿增精其術、蓋修其文、以待、將有知君者矣、傷寒論本義稿成、則又示焉、余又援筆而序之、

慶応四年戊辰九月

水本成美撰



方宜瑣言

小引

古人曰、医ハ小技也ト、余謂ヘラク、技ハ乃小也ト雖、其關係スル所ノ如キハ、甚タ重ク且大ナル者也ト、夫レ上ミ

至尊ヨリ下モ庶民ニ至ルマテ、病アルニ当テハ、医ノ外更ニ依頼スヘキ所ナシ、且天下ヲ維持スルノ賢良、万夫ニ当ルノ勇士ト雖、病ニ嬰リテ良医ヲ得ス、徒ニ庸工ノ手ニ斃ル、トキハ、豈其功業ヲ成スコトヲ得ンヤ、是ニ由テ之ヲ觀レハ、天下ノ興亡モ亦一匙頭ニ在リト謂テ可也、其重大是ノ如シ、豈小技ヲ以テ棄テ、研究セサルヘケンヤ、其之ヲ研究センコトヲ欲セハ、其法、古人ノ書ニ由テ、其方法ノ意ヲ斲索シ、広ク天下ノ衆

方ヲ采リ、風土ノ宜ニ随テ之ヲ取舍シ、親ク之ヲ疾病ニ試用シテ、其概要ヲ得ルニ在ルノミ、是今余カ此著アル所以也、海内ノ医ヲシテ、其要ヲ得シムルノ手段亦下ニ併載ス、

第一章

医タル者、活法アルコトヲ知ラス、徒ニ死法ヲ執テ、以テ治療ヲ施ス者ハ、其人命ヲ賊フコト、固ヨリ論ヲ待タスルヲ云フ、死法トハ正ニ此ニ反シ古人ノ成規ニ拘泥シテ、其活潑運用ノ妙処ヲ得、間或ハ自活法ヲ得タリト心得居ルモ、或ハ仲景ノ方法ヲ墨守即死法スル者アリ、世ニ古方家ト称スル所ノ医輩、傷寒金匱ノ藥方ノ外ハ全ク棄テ、用ヒス、且其傷寒金匱ノ方ノ如キモ、一味ヲ増減スルコトヲ為サス、古人ノ成方妄リニ加減スヘカラスト云テ、反テ其論中ニ、加減ノ法ヲ示シタルヲ知ラサルカ如キ是也、或ハ唐宋以降ノ規律ナキ方書ニ因テ藥ヲ劑シ、漫投妄施スル者アリ、雜方家一ニ後世家ト称ストト称スル所ノ者、千金外台局方聖濟東垣十書万病回春等ノ書ヲ死見シ、又其藥方下ニ挙ル所ノ主

治ヲ見テ医ヲ為ス者是也、或ハ以上ノ雜書ヲモ未タ曾テ
耳目ニ触レス、凡庸無學ノ師ニ就テ、其治療ヲ傍觀スル
コト二三年ニシテ、郷ニ歸リ、其師家ノ方筌、若クハ一
卷ノ古今方彙ヲ以テ、治ヲ施シ、其病ヒ革ナルニ至テハ、
措ク所ヲ失シ、仮名本ノ療治茶談、医療手引草等ニ依テ、
其脈証ヲ彷彿ニ摸索シ、治ヲ施ス者アリ、或ハ西洋医方
ニ心酔シ、法度ナキノ術ヲ以テ、冥々ニ人ヲ殺シテ自知
ラサル者蓋少ナカラス、此等ノ医ハ、之ヲ含靈ノ賊ト謂
ヘキノミ、

第二章

前章論スル所ノ医ノ如キハ、皆齒牙ニ掛ルニ足ラスト雖、
亦或ハ拔群ノ才ヲ懷キ、學識アリテ仲景ヲ墨守セス、唐
宋以降ノ医流ニ陷溺セス、西洋医方ニ心酔セス、別ニ機
軸ヲ出シテ自医ノ道此ニ在リト謂ヘル者、世其人ニ乏シ
カラス、而其病ヲ治スルニ方テハ、蓋意ノ如クナラサル
者ハ、佗ナシ、只其風土ノ宜キヲ得サルカ故ノミ、歎ニ
堪フヘケンヤ、此弊、西洋医方ヲ奉スル者ニ於テ、最甚

シトス、來寓ノ洋医殊ニ然リ、

第三章

西洋ノ學ハ、究理ヲ以テ主トス、大凡天地、日月、星辰
ノ大ヨリ、草木、昆虫ノ細、氣類ノ目視ルコト能ハス、
耳聴クコト能ハサル者ニ至ルマテ、推究メサル所ナシ、
其医術ノ如キモ亦然リ、此レ亦學ハスンハアルヘカラス、
余素ヨリ蟹行文字ヲ解セス、唯翻訳諸書、及ヒ其學ヲ奉
スル者ニ就テ、三才ノ理、医方ノ説ノ概略ヲ窺ヒ、且少
年笈ヲ負テ師友ヲ求メシ時、浪速ニ於テ屢刑屍ヲ解剖ス
ルヲ觀、益々其精到ニ服セリ、當時齒ヒ未タ壯ナラス、
學フ所モ亦疎也ト雖、此ニ由テ反テ疑ヒヲ生シヌ、曰彼
レノ術 我カ風土ノ宜ニ適センコト難カラント、夫學者
ノ經典ニ於ルスラ、尚疑ヲ懷テ読ムニ非ンハ、聖人ノ旨
ヲ得ルコト能ハスト、古人云ヘリ、今疑ニ依テ得タル所
ノ風土差異ノ説ト、其微ノ一二トヲ下ニ列挙シ、以テ其
医方ノ取舍、斟酌ノ当否ヲ大方ニ問ハントス、

第四章

今ヲ去ルコト数年前、病院ヲ崎巖ニ建タリ、其初メ洋医「ボンペ」来テ治療及ヒ教授ノ事ヲ督ス、病人ノ来テ院ニ就ク者極メテ夥ク、吾魔城ノ士民ノ如キモ亦皆趨テ此ニ就ケリ、其帰ルニ及テヤ、褒貶相半ハス、越テ兩三年帰来テ褒スル者寡ク、貶スル者多シ、昨年ヨリ今年ニ至テハ、之ニ就ク者亦甚稀也、今年夏初、余将ニ京ニ入ントシテ、偶崎巖ニ泊シ、奄留スルコト七日、病院ヲ窺フニ、院内寂寥タリ、乃異ンテ近傍ノ土人ニ問テ曰、病院ノ景況如何ント、答テ曰、此地ノ人、絶テ病院ニ就カサルノミナラス、病アルニ方テ洋医者流ニ頼ル者ナシ、近来ニ至テハ、佗邦ノ病客モ亦来テ院ニ入ル者ヲ見スト、余曰、何故ソ、曰、皮膚瘡瘍ノ如キハ、或ハ愈ユ、其佗ノ衆疾ニ至テハ、之ヲ洋医ニ委ネテ、一モ愈エタルヲ聞カスト、余謂ラク、是レ故アリテ洋医ヲ忌ム者ナラント、因テ之ヲ数人ニ問フニ、其答ル所皆一口ニ出ルカ如シ、此ニ於テ、始テ從來疑ヒシ所ノ非ナラサルヲ知レリ、由テ窃ニ謂ベラク、今ノ漢医方ヲ棄テ徹蹠ノ如クシ、偏ニ

西洋医流ヲ尊信スル者ハ、皆西洋各土ノ奇機姪巧ニ心酔シテ、他ヲ顧ミサル者カ、或ハ喜テ新奇ヲ競逐ヒ、時勢ニ眩惑スル者カ、或ハ漢方医ノ真ナル者ヲ得ス、庸工ノ拙技ニ懲リテ冷齏ヲ噴ク者カ、或ハ洋医ノ未タ方宜ヲ得スシテ往々治療ヲ誤ルヲ見サル者カ、或ハ声ニ吠ル者等ノ外ニ出ズ、其心醉セル者病アリテ洋医ニ託シ、若シ些ノ利アルニ遭フトキハ、切ニ其徳ヲ賛シ、大害ヲ受ルトキハ時ノ不幸トシテ敢テ怨ミサルハ、猶仏教ニ溺レタル愚民ノ患苦死亡ニ於ルカコトシ、嗚呼此生民ヲ喚覚シ、其ヲシテ醉生夢死ノ害ナカラシメンコトヲ欲セハ、其効魯叟ノ教ヲ柱礎トスルノ速ナルニ如クハアラサランカ、

第五章

文久ノ初ヨリ慶応ノ今ニ至ルマテ、病アリテ治ヲ余ニ請フ者ヲシテ行テ崎巖ノ病院ニ就カシメタル者少カラス、中ニ就テ「ボンペ」「ボードイン」ノ二人ニ託セシ者、今尚記スル所十余人、或ハ眼疾ヲ以テシ、或ハ黴瘡結毒、痲癰痔疾ヲ以テシ、或ハ痛痺鶴膝、痿癱痰飲等ノ病ヲ以

テセリ、而其治シテ帰リシ者僅々兩三人ニ過ズ、其他ハ皆寸効ナキヲ以テ辞シテ其地ノ漢医ニ就テ愈ルコトヲ得、或ハ遂ニ治ヲ得スシテ帰り来リ、再ヒ余ニ就テ治ヲ請ヒ、且怨言ヲ出ス者アリ、由テ尔後余モ復タ勸メテ崎畧ニ往カシムルコトヲ為サス、此ニ一奇談アリ、龐城ノ一精舎不断光院ノ僧某者、稟性、倔彊梗果、癩毒ヲ病テ、痛心憂鬱、措シ所ヲ知ラス、梅毒ノ身ニ染ムヤ、其由テ来ル所、多クハ倡妓ニ在リ、故ニ是ノ病深戒僧侶ノ尤所也、遂ニ行テ崎畧ノ病院ニ託ス、洋医診シテ曰、治セント、僧曰、先生能ク其全治ヲ保センヤ否、曰、容易ノミ、曰、其全愈ノ期ハ何レノ日ゾ、曰、五周七日ヲ一周トス、蓋七曜ノ一周回ノミヲ待タスト、僧悦フコト甚ク、藥ヲ受ケ法ヲ守ルコト極テ敵、已ニ五周ヲ踰テ毒勢日ニ進ム、因テ怒テ辞シ去ントス、医叩頭謝罪已マズ、百方慰諭シテ、三周ノ日數ヲ加ルコトヲ得、畢生ノ心力ヲ竭スト雖、其病益々進テ遂ニ復タ延期三周ノ日ヲ虚クセリ、此ニ至テ僧满面燔炭ノ如ク、双眼紅血ヲ灌キ、驚瞋虎怒、罵詈儼僂、至ラサル所ナシ、医僻易慳伏シ、若干金ヲ出シテ謝シテ曰、些少

ノ物、聊從來ノ尊費ヲ償ハント、僧恚怒前ニ倍シ直ニ起テ脚其金ヲ蹴リ、去テ郷ニ歸リ、崩鼻聾耳ノ支離ニ終ルト云、

第六章

文久二年壬戌秋、我藩士西田某者痔漏ヲ患テ治ヲ余ニ乞ヘリ、余行キシトキ前医座ニ在リ、是レ當時府下西洋医流ノ巨擘ニシテ、嘗テ崎畧ニ在テ「ボンベ」「ポードイン」ニ師事スルコト數年、秀才ヲ以テ二師ニ称譽セラレタル所ノ□□某者ニシテ、余カ切磋ノ友タリ、相共ニ測瘡子ヲ以テ漏ロヲ測ル、漏ロハ肛門ノ左傍寸余ノ処ニ在テ、深キコト二寸弱也、余曰、切断スルニ非ンハ愈ユヘカラスト、某曰、肺臟ニ鬱毒ヲ蓄ル人、自然良能蘭人之チユールノ妙機ニテ、肛傍ニ此ノ漏ロヲ穿チ、其毒ヲシテ常ニ此ノ口ヨリ漏洩シテ以テ大害ヲ為スニ至ラサラシム、若シ切断シテ此口ヲ愈塞セシムルトキハ、其毒漏ル、コト能ハスシテ終ニ肺病ヲ為シ、歎嗽喘急、胸痛吐痰、羸瘠骨立等ノ証候ヲ見ハシテ、其死センコト期シテ待ツ

ヘシ、故ニ治ヲ施サス、唯良能ニ任シテ可也、洋医ノ如キモ古来ハ皆切斷セリト雖、医道日ニ明カニ月ニ精シク、近世ニ至テ始テ其非ヲ悟リ、敢テ切斷ヲ施ス者アルコトナシト、余曰、吾嘗テ京坂ニ遊ヒシ時、医ヲ華岡氏ニ学ヒシハ、子カ親ク見ル所ナリ、其痔漏切斷ノ如キハ、吾目撃セシ所及ヒ自療セシ所、蓋シ百人ニ下ラスト雖、未曾テ一人ノ肺病ニ陥リシ者アルヲ見ス、反テ其切斷ヲ加ヘスシテ因循歲月ヲ延ク者ハ、漏口數処若クハ數十処ニ及ヒ、臀腿咸ク黯紫黎黒ニ変シ、敗膿常ニ淋漓トシテ止マス、終ニ肺病ニ陥リ、子カ謂フ所ノ証候ヲ見ハシ、身体已ニ疲勞シテ、切斷ニ堪エサルニ至リ、薬餌及ハス鬼籙ニ上リシ者、吾見ル所亦十數人ニ及ヘリ、是豈風土飲食等ノ差ヒアルニ因テ、彼我正ニ相反スル者カ、子肯ンゼスト雖、請フ嘗試ニ切斷ヲ加ヘ、以テ子カ疑團ヲ釈シ、愈テ後、若シ果シテ子カ言ノ如クナラハ、必シモ良能ヲ待タス、其未タ羸徳セサルニ及テ、一尖鍼ヲ旧創痕ニ貫キ、漏口ヲ穿チ作シ、旧ニ仍テ鬱毒ヲ導キ洩サンコ

ト難キニ非スト、遂ニ緘月刀ヲ執テ之ヲ斷ツ、五旬ニシテ愈全シ、尔後微欬微喘モ復タ発スルコトナク、肥健前ニ倍シ、明年夏出テ英艦ノ侵入ヲ防キ、又六年ヲ経テ今年季夏、北越ノ役ニ戦死セリ、前医嘗テ余ニ言テ曰、前日子カ説ヲ聞キ、今日其後害ナキヲ見テ始テ風土ノ強フヘカラサルヲ知レリ、是レ我ニ於テ大賚ト謂フヘシ、今ヨリノ後、眷々服習シテ、以テ疾病ニ臨マハ必風土ノ宜ヲ得ルニ至ラン、万謝々々ト、

按ニ彼ノ論スル所ト、我ノ実験ニ得タル所ト、正ニ相反スル者ハ、標本顛倒スル者也、彼ノ良能ニテ毒ヲ肛傍ニ引テ之ヲ泄ラスハ、是レ標其本ヲ救フ也、実ニ西洋ノ論スル所ノ如シ、然リト雖、皇国人ノ如キハ彼ノ饕餮常ニ肉ヲ以テ穀ニ易ヘ食フノ俗ノ如ク、其毒内臓ヲシテ腐蝕セシムルノ酷キニ至ルコト蓋シ少ナシ、故ニ其初メ良能ノ妙用ニ因テ、漏孔ヲ穿ツト雖、反テ膿ヲ洩ラスコト節ニ過キ、身体ヲ營養スヘキ良液ヲ連ネテ之ヲ洩シ、肺臓之カ為ニ枯渋シ、陥リテ肺痿状トナ

リ、終ニ死ニ至ル者也、是レ其標反テ其本ヲ枯ラス也、
風土ヲ弁セス、死法ヲ墨守シ以テ活人ノ病ヲ治セント
欲セハ、必此過失アリト知ルヘシ、

第七章

仏蘭西國ノ工人某者、來テ我魔城ノ客舎ニ在リ、今年季
春、癩毒ニ染ミ、尿道潰爛、黃膿淋瀝、陰莖焮腫、寒熱
交発、嘔吐胸痞、飲食不進、形軀怠倦シテ、治ヲ余ニ需
ム、余之ヲ療スルコト月余、諸証日ヲ追テ愈タリ、其病
間余ニ叩テ曰、我仏國此郷ヲ距ルコト殆ト万里、土地已
ニ同シカラサレハ治療モ亦異ナル所アラシカト、余曰、
大ニ異ナル所アリ、請其徵ヲ説カン、此地ノ南ニ琉球島
アリ、相距ルコト三百里ニ滿タス、其土ノ人病アルニ方
テハ、敵ニ下劑ヲ禁ス、若シ之ヲ犯ストキハ舊害立ロニ
到ル、往歲島主病ニ卧シ、侍医数人百方之ヲ治シテ効ナ
ク、已ニ死ニ瀕セリ、一医、嘗テ來テ治法ヲ我藩ニ学ヒ
シ者アリ、前シテ衆医ニ謂テ曰、君公ノ病已ニ此ニ至レ
リ、死生ノ機諸公以テ如何ト為スルト、皆曰、豈言フニ

忍シヤト、曰、事已ニ是ノ如シ、而我ニ一方ノ在ルアリ、
諸公其方ヲ問ハスシテ、君公ヲ我ニ委センヤ否ヤト、皆
諾ス、因テ窃ニ硝黄ノ劑ヲ作り、煮テ而進ム、下利兩三
行、昏夢頓ニ覺メ、十数日ニシテ平常ニ復シヌ、衆医異
シテ其方ヲ問フ、其人実ヲ以テ答フ、廷議犯法進毒藥ニ
決シテ、遂ニ遠竄ニ座セリト云、以テ其禁ノ敵ナルヲ見
ルヘシ、我藩ノ医常ニ其地ニ在テ病ヲ治ス、以為ヘラク、
愚俗下劑ノ猛ヲ畏ル、ノミ、豈害アラシヤト、試ニ硝黄
ヲ投ス、投スル毎ニ病ヲ深クシ生ヲ賊フ、未曾テ其益ヲ
見ス、我藩土其地ニ在番スル者、期スルニ三年ヲ以テス、
客中病アリテ藩医下劑ヲ投スルトキハ、其害亦土人ニ齊
シ、土人醸ス所ノ火酒アリ、泡盛ト云、其氣味最猛烈ナ
ル者ニ至テハ殆ト「アルコール」洋製火酒ノ最猛ナル者ニ類ス、在番
ノ藩士及ヒ商賈土人ト酌テ猜枚樽戰スルニ方テヤ、盛ル
ニ大碗ヲ以テスルモ、猶席ニ堪フ、任已ニ充テ府城ニ還
ル、飲ムニ小盞蜆殼ノ如キヲ以テスルモ、腰脚痿弱シテ
起ツコト能ハサルニ至ル、其土ノ人來テ我城ニ在ル者モ

亦如是ト云フ、故ニ余琉人ノ病ヲ治スルニ、証ニ随テ下劑ヲ投スレトモ、未嘗テ害ヲ見ズ、但其来テ未タ久シカラサル者ハ、意ヲ用テ斟酌スル所アルノミ、是即チ余カ能ク此地ニ在ル所ノ子カ病ヲ治シテ、而子カ国ノ医、此地ニ来テ、此土ノ人ノ病ヲ治スルコト、意ノ如クナルコト能ハサル所以也ト、某敬服セリ、

第八章

今年孟春、澱水撃賊ノ後、英吉利医某者、我京師ニ入り、銃創ヲ療ス、我藩ノ士モ亦多ク之ニ就テ療セシメタリ、当时余京師ニ在ラサルヲ以テ親ク其施術ヲ見スト雖、同療者ニ問テ其説ノ詳ヲ得タリ、凡手足ノ創深ク、或ハ骨ヲ傷ナヒシ者ハ、大抵皆肘臂脛腿ヨリ截チ去ル、其法先ツ麻睡薬「コロ、ホル」ト名クヲ用ヒ、其昏睡人事ヲ知ラサルヲ候ヒ、創処ノ上刃数寸ノ地ヲ緊縛シテ、血液運行ノ道路ヲ塞キ、刀ヲ執リ肉ヲ剝テ箭銜状ヲ為シ、尋テ骨ヲ鋸シ去リ、細糸ヲ以テ脈管ヲ扎シ、両刃箭銜状ノ肉ヲ一処ニ合セ、銀線ヲ以テ縫接シ、外繃帯ヲ施スト、是其術ノ概

略也、医曰、若シ截去ラスシテ因仍日ヲ延カハ、着ク所ノ毒其筋骨ヲ伝テ漸ク上リ、腐蝕止マシテ死セシコト疑ヒヲ容レスト、中ニ一傷者アリ、医診シテ曰、截タグンハ万々生理ナシト、傷者肯ゼスシテ曰、死ハ素ヨリ我カ分トスル所也、我レ支離ト作テ世ニ在ルコトヲ願ハスト、藩医之ヲ治シテ全愈セリ、又一傷者ヲ視テ曰、截タグンハ死ス、之ヲ截タハ我レ其生ヲ保セント、遂ニ之ヲ截ツ、数日ニシテ死セリ、又一人截ツコトヲ欲セス、曰、彼レ我創ノ重キヲ見ハ、其截ンコト必セリ、見セサルニ如カスト、医ヲ避ケテ診ヲ受ケス、藩医之ヲ治ス、後朽骨数片創口ヨリ出テ、全愈シヌ、是亦風土ニ随テ治法異ナラサルコトヲ得サルノ明徴也、

本章及ヒ次章、前第六章、後第十二章等ノ事実ヲ参考シ、以テ彼ノ腥膻肉食ノ徒、之ヲ我カ穀食ノ民ニ比スレハ、其創瘍アルニ方テ必腐蝕崩潰シ易キヲ知ルヘシ、若シ洋医ノ術ヲ取テ以テ之ヲ我邦ノ疾疢ニ施ス者、此風土差異ノ大別ヲ識ラハ、諸ノ創瘍ヲ治スルニ

於テ、思ヒ半ハニ過シ、

再按、彼レ未タ 我風土ノ宜キヲ得サルヲ以テ、頻ニ
殺伐ノ治ヲ為シ、我干城ノ武夫ヲシテ支離ト作ラシメ、
再ヒ用ル所アルコトヲ得サラシム、誰カ之ガ為ニ涙ヲ
洒カサラン、見ルヘシ、彼レ尚 我土ニ留リテ歲月ヲ
経、許多ノ創傷ヲ療シナハ、自然ニ覚悟スル所アリテ、
必前非ヲ悔ヒ、決シテ殺伐ノ治ヲ為スコトナキニ至ラ
ンコトヲ、書ヲ学ベハ紙ヲ費ヤシ、医ヲ学ベハ人ヲ費
ヤスト蘇東坡カ云ヒシハ、正ニ此等ノ事ヲ指スニ似タ
リ、

第九章

徳川氏ノ臣栗山勇三郎ト云者、蝦夷ノ「フルヒラ」地名ニ
在番タリシトキ、疥癬ヲ患ヒ、愈テ後、胸肋隠々トシテ
痛ミ、久クシテ止マス、因テ箱館ノ医ヲシテ治セシムレ
トモ愈エス、偶鄂羅斯国ノ医某者其地ニ寓シテ頗ル声誉
アリ、同僚某者其医ヲ薦ム、勇三郎洋医ニ託スルコトヲ
喜ズト雖、薦ノ懇切ニシテ且前医ノ効ナキヲ以テ、諾シ

テ鄂医ヲ招カシム、鄂医診シテ曰、乳下第一肋二肋ノ間、
壅腫ヲナセリ、早ク療セスシテ膿ヲ醸サハ、鍼ヲ用ルニ
非ンハ愈エス、今幸ニシテ腫未タ深カラス、緩和解毒ノ
劑ヲ服シテ消散セシメハ、決シテ膿膿ニ至ラストテ、薬
ヲ与ヘテ去リヌ、数日ノ後、又来リ診シテ曰、膿ニ已成
レリ、請フ鍼ヲ用ント、勇三郎憤リ辞シテ曰、子曩ニハ
消散セント云ヒ、今又鍼ヲ用ント云フ、前後何ソ言ノ齟
齬スルヤト、医愧テ且謝シ、且請テ止マス、勇三郎終ニ
許ス、膿ヲ得ルコト一合余、薬末ヲ鳥羽莖ニ容レテ之ヲ
創口ニ近ツクルニ、創口其薬ヲ吸入シ、膿水随テ噴出ス、
勇三郎其奇術ニ眩シテ始テ大ニ信服シ皇国人ノ異邦學術ニ於
長短ヲ取舍スル者ハ、措テ此ニ論セス、無知無識ノ徒、彼レノ技芸ニ惑
溺シ、救フヘカラサルニ至テモ、尚自覚ヲサル者ノ如キハ、其初是等瑣
床小術ニ眩スルヨリシテ、陥ル、治ヲ受ルコト年所、創口猶未
者也、思ハスンハアルヘカラス、治ヲ受ルコト年所、創口猶未
タ収マラス、偶其父江戸ニ在テ篤疾ニ罹リ、捷歩ヲ飛ハシ
テ急ヲ報ス、因テ別ヲ医ニ告ク、医愀然トシテ嘆シテ曰、
君カ病已ニ過半ヲ除ケリ、是ヨリ半年ヲ待タハ全ク愈ユ
ヘシ、今若去テ他医ニ委ネハ吾カ周歲ノ功ヲ虚クスルノ

ミナラス、君カ寿亦保チ難シ、願クハ半歳ヲ緩クセヨト、
 勇三郎曰、吾意モ亦然リ、然リト雖父ノ病已レカ身ヲ顧
 ミルヘカラサルヲ如何セント、医由テ教劑ヲ作テ之ニ与
 ヘ、且謂テ曰、君カ疾恐クハ貴邦ノ人其治法ヲ知ル者ナ
 カラン、乃翁ノ病ノ如キモ亦蓋然リ、君帰ラハ書ヲ吾ニ
 寄セテ、速ニ乃翁ノ病状ヲ示セ、吾レ為ニ之ヲ愈サント、
 相共ニ涙ヲ拭テ別ル、時方ニ隆冬、塗中風雪ヲ触冒シ、
 更ニ病ヲ得テ創口モ亦前ニ倍蓰ス、江戸ニ入テ師岡貞春
 ニ依テ治セシム、貞春診シテ十全大補湯ヲ与フルコト三
 旬、氣血漸クニ旺シ、諸症日ニ退キ、膿汁竭キ、良肉生
 シ、五旬ヲ出ズシテ全ヘテ常ニ復セリ、是ノ年鄂国ノ
 「ミニストル」官某者其妻ト彼ノ医ノ妻トヲ携テ、江戸
 ニ来ル、勇三郎之ヲ訪フ、鄂医ノ妻之ヲ見テ驚キ且嘆シ
 テ曰、良人君ヲ以テ已ニ死セリトス、思ハサリキ今日復
 タ相見ルコトヲ得ントハト、尔後勇三郎「ミニストル」
 ヲ護送シテ再ヒ蝦地ニ到ル、鄂医之ヲ見テ嗟歎シテ曰、
 吾レ医理ニ於テ其精蘊ヲ極メリ、謂ヘラク、万邦一貫ス

ヘント、君カ疾ノ如キ吾邦ニ在テハ数月ヲ出ズシテ吾能
 愈ヤスコトヲ得、今一年ヲ踰ヘテ吾術功ナク、江戸ノ医
 一匙ニシテ能之ヲ愈ス者ハ、蓋各土宜キヲ異ニシ、医療
 モ亦風土ニ由テ其術ヲ変セサルヘカラサル者カ、願クハ
 江戸ノ医ニ請テ其方法ヲ伝ヘタマハランコトヲト、勇三
 郎乃チ書ヲ貞春ニ寄セテ、藥方及ヒ方ヲ処スル所以ノ概
 略ヲ記セシメ、以テ鄂医ニ与フト云、是万延紀元庚申春
 三月ノ事也、

按ニ、十全大補ノ緩劑、能ク全功ヲ五旬ノ間ニ收メタ
 ルニ由テ考ルニ、鄂医己レカ肉食ノ土人ト同視シテ、
 切ニ解癩驅毒ノ劑ヲ与ヘタルヲ以テ、形体枯槁、血液
 匱乏シ、肌肉潤沢ヲ喪ナヒ、良肉ヲ生スルノ力ヲ脱去
 シ、創口収マラサリシ者ニシテ、下第十二章ニ挙ル所
 ノ矢勒尔杜カ、訳官頼川氏ノ眼疾ニ於ルト一轍ナル者
 也、若シ医ヲ辞シテ藥ヲ服セス、良能ニ委ネ、側ラ穀
 肉菓菜ヲ以テ形軀ヲ養ハ、十全大補湯ヲ須タスシテ
 愈シコト疑フヘカラス、是猶彼ノ癩瘡結毒ノ沈痼潰爛、

身体羸瘦シテ百藥効ナキ者ノ油膩肉物ヲ喰ハシムルト
キハ必愈ルカ如シ、太補ノ鉛刀、豈宿痼疾ヲ咄嗟間
ニ刈除スルコトヲ得ンヤ、班固カ病アリテ藥リセサル
ハ中医ヲ得ト云ヒシハ、彼ノ鄂医頂門ノ大砭鍼也、
再按ニ、医ハ自然良能ノ医僕也ト洋人ノ云ヒシハ、一
言ニシテ医ノ能事畢レリト云フヘシ、今彼ノ鄂医毒ノ
浅深ト体ノ強弱トヲ量ラスシテ、反テ良能ノ化育ヲ阻
礙シ、血氣ヲ戕賊スルハ何事ソヤ、蓋其過失彼 我同
視スルニ由ルノミ、

第十章

福岡侯業善、嘗テ崎巖ニ入りシトキ、鳴蘭陀国ノ医矢勃
尔杜ヲ召テ、各国医法ノ得失ヲ問ハレシコトアリ、矢勃
尔杜対テ曰、亜細亞洲ノ疾ハ、亜細亞洲ノ医術ニ非ンハ
繆ヤスコト能ハス、欧邏巴洲ノ病ハ欧邏巴洲ノ方藥ニ非
ンハ亦不可也、各其風土ニ随テ互ニ得失アリ、彼此相通
スヘカラスト、彼亦我カ素問異法方宜ノ教ヲ悟レル者ニ
似タリ、然リト雖、彼此相通スヘカラスト云ヒシハ、其

学猶浅ク、其術未タ精シカラスシテ、未タ大ニ開悟スル
所アラサルカ故ニ、我カ土人ノ病ヲ療スルニ方テ、往
々自願慮追悔スル所アルコトヲ免カレサルヲ以テ、是ノ
言ヲ出シ、也、試ニ見ヨ、彼ノ天ノ為ス所、寒熱温涼ヨ
リ、以テ雲夢・雨露・霜雪ノ多寡、草木ノ疎密、山嶽ノ
高卑、土産ノ庶物ニ至ルマテ、風土ヲ量テ其宜キニ適セ
シメサル所ナキヲ、若夫仲尼ノ人倫ニ於ル、仲景ノ疾病
ニ於ル、彼ノ天ト一体ナルヲ識得セハ、宇宙間何レノ地
ニカ相通スヘカラサラン、一タヒ驪珠ヲ仲景ノ書ニ握リ
テ、其術ヲ拡充セハ、其医道ニ於ル、九夷八蛮尽ク其正
朔ヲ受ルニ至ルヘシ、

第十一章

鳴蘭陀国ノ甲必丹某者、江戸ヨリ崎巖ニ還ルノ途上、跌
蹶一脚ヲ拗挫シテ痛疼甚タ艱ミ、京師ニ入テ医ヲ撰ム、
矢勃尔杜偶々 京師ニ在リ、技ヲ竭シ方ヲ罄シテ寸効ヲ
得ス、遂ニ治ヲ難波流ノ整骨科山口満二ト云者ニ乞フ、
満二診シ放言シテ曰、此等ノ微患吾一指ヲ下サハ其愈

シコト三日ヲ出ズト、療スルコト三日、病ヒ果シテ愈エ
タリ、

按ニ、難波整骨ノ一流之ヲ実験ニ得タリ、未タ曾テ人
身ヲ解剖シテ、以テ其筋理骨格ノ實際ヲ究メタルヲ聞
カス、而其術反テ洋医ノ上ニ出ル者ハ、蓋口言フヘカ
ラス、筆伝フヘカラサルノ妙処ヲ心領意解シ、深ク彼
ノ輪扁劉輪ノ意ヲ得タルヲ以テ也、心領意解ノ四字、
乃是レ治療ノ真訣、医道ノ極処、

第十二章

崎巽ノ訳官(君平)穎川某者、眼疾ニ嬰リ、瞳子縮小シテ明ヲ喪
ヒ、治ヲ矢勃尔杜ニ託ス、矢勃尔杜豕頭ヲ求メテ屋梁ニ
懸ケ、沈思スルコト一二日、遂ニ利刀ヲ執テ眼ヲ截ツ、
習慣又三日、手裏已ニ熟ス、因テ始テ患者ヲ延キ、其角
膜ヲ截チ、鑷子ヲ以テ葡萄膜ヲ挑ケ、随テ之ヲ剪開ス、
鑑視頓ニ明亮、然レトモ神水未タ満タサルヲ以テ、物ヲ
視ルコト閃々、電光ニ接スルカ如ク、其眩暈ニ堪エス、
保護七日、火酒ヲ以テ薬ニ和シ、之ヲ眼中ニ点シ内ヲ瀕

粉ノ剂ヲ服セシム、月余ニシテ刀痕翳ヲ生シ、漸クニシ
テ稠厚、遂ニ復タ明ヲ蔽ヒ、且体軀羸憊シテ殆ト勞瘵ニ
類ス、家人懼レテ矢勃尔杜ヲ辞シ、本庄俊徳ニ乞テ治セ
シム、俊徳診シテ曰、子カ病之ヲ先天ノ遺毒ニ得タリ、
一朝一夕ノ故ニ非ス、而医其効驗ノ速カナランコトヲ欲
シテ、猛烈ノ薬ヲ与ヘ、暴断ノ治ヲ施スヲ以テ病根未タ
抜ケサルニ、血液已ニ耗シ、身体羸羸セリ、是レ眼視再
ヒ明ヲ失フ所以也、夫レ体ハ本也、眼ハ標也、何ソ其標
ヲ置テ其本ヲ治セサル、体軀已ニ健ナラハ眼視モ亦復ス
ヘシト、薬ヲ与ルコト歳余ニシテ身体健康、尋テ眼ヲ療
スルコト半歳余、眼視亦豁然トシテ常ニ復セリ以上四章ノ
事實ハ粟園
カ醫医紀事ニ載スル所ヲ、
倭訳シテ略記スル者也

按ニ、矢勃尔杜カ医方ニ於ル、素ヨリ諸科遺コス所ナ
シト雖、中ニ就テ当時殊ニ世人ニ称誉セラレ、且其自
負フ所モ亦治眼ノ一科ニ在リ、而此ノ誤治アル者ハ、
唯其風土ノ宜キヲ得サルノミナラス、彼レ初メ技ヲ試
ルニ、死豕眼ヲ以テシテ、輒チ之ヲ活人ノ眼ニ移シ用

フ、故ニ後再ヒ翳膜明ヲ蔽フノ害アル所ニ思ヒ到ラス、且其意眼ヲ治スルニ専ラニシテ他ヲ顧ミス、唯燥劑是レ事トシテ、遂ニ瘵疾ノ如キニ至ラシム、諸科ヲ兼ル者スラ猶是ノ如シ、況ヤ一科ニ顧門ナル者ヲヤ、世人常ニ眼疾ノ治療ハ大ニ身ヲ損害スト曰テ、眼目ニ疾患アリト雖、敢テ医治ニ就カサル者甚多シ、是レ医タル者ノ宜ク心ヲ用ヒスンハアルヘカラル所也、

第十三章

大抵南北相距ルノ地ハ、風土ノ差異甚ク、東西相距ルノ地ハ、稍微也ト知ルヘシ、然レトモ僅々数里ノ内ニ於テモ亦山上山下、平野澗谷、城市海岸、樹陰水辺、及ヒ山嶽ノ左右前後等ノ地勢ニ由テ大ニ異ル所アリ、衣服・飲食・職業モ亦随テ同シカラス、大率、城市及ヒ海岸ノ民ハ、常ニ佚居シテ厚被蓐ヲ重ネ、厚梁ヲ食ヒ、醇飲ヲ飲ム者多キニ由リ、筋骨健実ナラス、皮膚腠理緻密ナラス、腹裏ニ濁穢ヲ貯ルヲ以テ外邪ニ侵サレ易ク、或ハ蝮蝎ヲ生シテ其害ヲ被フリ、或ハ含毒ノ海氣ニ感触シテ種々ノ

疫疾ヲ患ヒ、或ハ百般ノ瘡瘍ヲ発シ、或ハ滯下脚氣等ヲ病ムコト多シ、山野ノ民ハ常ニ淡泊ヲ啖ヒ力役ヲ事トシ、雨露霜雪ヲ冒シ、冬夜ト雖被蓐ヲ用ヒサルヲ以テ、筋骨皮膚堅実、肚裏亦蓄毒ナク、外邪ニ侵サル、コト少ク、内傷ノ憂ナシ、間々唯瘴癘ノ氣之ニ毒シ、或ハ湿蒸氣等ニ感シテ種々ノ病ニ臥スコトアリ、山野ノ病之ヲ城市ニ比スルトキハ、吐下ノ藥ヲ用フヘキ証甚少シ、是故ニ野人ハ毎ニ多力ニシテ長寿、市人ハ毎ニ少力ニシテ短命也、力ノ多少、寿ノ長短ハ唯食味ノ厚薄ニ因ルノミニ非ス、日本人ハ肉ヲ食ハサルヲ以テ、膂力少ナシト、洋人ノ云ヘルハ、一偏ノ論也、是レ亦以テ 皇土ト西洋トノ異同ヲ徵スヘシ、

或曰、洋人ト雖、力役ヲ事トスル者ハ筋骨勁健ニシテ、膂力多カルヘシ、何ソ食ノミヲ以テ論セン、子カ説恐クハ通セサル所アランカト、余答テ曰、西洋ノ人ハ城市ト山野トヲ論セス、獸肉脂膏ヲ食ハサル者ナキヲ以テ、概視シテ肉食セサル者ハ皆力ナシトセリ、故ニ此

言アリ、今洋人ヲシテ 我カ山野ノ菜羹ヲ食トスル者
ノ多力ヲ親視セシメハ、手ヲ額ニシテ前言ノ非ヲ悔ン
コト疑フヘカラス、余何ゾ妄論セント、

第十四章

皇國、漢土、欧州各其土ノ四方及ヒ地勢ニ由テ、異ナル
所アルコト前章ニ論スル所ノ如シト雖、概シテ之ヲ言ハ
ンニ、 皇國ハ汗吐下・和救忌ミ憚ル所ナク、意ニ随テ
之ヲ行フテ可也、但從來漢土後世ノ医方ヲ墨守シテ、温
補ヲ偏執シ、緩劑ニ羈遲スルノ弊ハ、力メテ之ヲ救フヘ
シ、漢土ハ和救ヲ主トシ、汗吐下ニ於テハ蓋行フヘキニ
似テ、行フヘカラサル所アラン、歐羅巴ハ蓋確乎トシテ
一定セルコト、彼ノ仲景ノ法ノ如キ者未タ之アラサルヲ
以テ、時々豪傑ノ士ト称スル者出テ、前代ノ説ヲ排斥シ、
改革スルコト多キニヨリ、前日ノ事迹ヲ觀テ以テ今日ノ
方宜ヲ定論センコトハ難シト雖、愚意ヲ以テ窃ニ之ヲ量
ルニ、汗吐下ヲ主トシ和救ハ之ニ次クヘシ、以上唯方宜
ノ大略ヲ云フノミ、彼ノ発熱惡寒・体痛無汗・項背強ノ

証、内熱熾盛・煩躁譫妄・大便燥結ノ証、胸中痞硬・氣
上衝咽喉・不得息ノ証ノ如キニ至テ、発汗・駿下・快吐
ノ方ヲ施スハ、万国一般ナルヘシ、

第十五章

畿内ノ人疾アリテ下劑ヲ用ルニ、之ヲ我藩ニ比スルニ、
其量殆ト倍加スルニ非ンハ効ヲ奏シ難シ、下劑的當ノ証
ヲ診諦シテ、之ヲ用ルニ於テハ未曾テ些ノ後害アリシヲ
見ス、是レ即チ前第七章ニ説キシ所ノ本藩琉球ノ差異ト
同義ナル者也、

第十六章

余医ヲ学フノ初ヨリ一ノ大ナル疑團ヲ懷ケリ、漢土唐宋
以降ノ医ノ臟腑經絡、五行配當等ノ妄誕ハ言ニ足ラスト
雖、其間英俊ノ声誉アル者モ亦多カラストセス、然レト
モ其書ヲ編シ其方ヲ処スルニ於テハ、一ニ養榮益氣ノ説
ニ迷惑シテ吐下ノ劑ヲ忌ミ、温補ノ濁流ニ陷溺シテ清涼
ノ藥ヲ畏レ、邪ハ正ニ敵セスノ一語ヲ以テ金科玉条トシ、
大毒驅ニ在リト雖敢テ驅逐スルコトヲ為サス、薊婦參耆

ノ劑ヲ以テ氣血ヲ温補センコトヲ思欲ス、滔々タル天下
皆一轍也、其英俊ト称スル者実ニ英俊ヲ以テ品藻スヘキ
ノ才ニ非スト雖、亦尋常凡庸ノ人ニハ非ス、而其技ノ迂
闊是ノ如キ者ハ、必ス然ル所以ノ故アラント、近來風土
ノ差異ニ注意スルニ就テ、其從來ノ大疑團ヲ釈ケリ、前
第七章及ヒ上章ニ論スル所ノ琉球島ハ、我藩ト漢土トノ

中間ニ在リ、我藩ハ亦 京畿ト琉球トノ中間ニ挟マレリ、
今三処治法ノ殊異ニ由テ以テ漢土ノ治法ヲ推ストキハ、
所謂温補ト云フ者ニ偏ニシテ、吐下清涼ヲ畏ル、ハ反テ
其風土ノ自然ニシテ、其方宜ヲ得タル者ナルヤ、論ヲ待
タスシテ瞭然タリ、此レ乃仲景ノ教エノ尤汗吐下ニ密ニ
シテ、且其法ノ蔽ナル所以也、余此ニ至テ昉メテ漢土医
ノ漢土医タル所以ヲ知テ、而益々仲景ノ医聖タル所以ニ
敬服セリ、夫 我邦ノ如キ西洋学未タ世ニ行ナハレサル
以前ハ、医タル者唯漢土ノ方法ヲ執テ以テ疾病ニ臨ム、
而其残欠不備ノ傷寒論ハ高閣ニ束ネ、唐宋以降全備ノ書
ヲ得テ、之ヲ墨守シ、風土ニ由テ攻補ノ異ナル所アルコ

トヲ知ラス、之ヲ執テ以テ直チニ 我邦ノ病ヲ療ス、故
ニ往々正鵠ヲ得サルコトヲ致ス、余ヲ以テ之ヲ觀レハ、
章甫ヲ越ニ嚮クノ宋人、九韶大牢ヲ以テ海鳥ヲ饗スルノ
魯侯ト齊シ、 我邦古來未タ曾テ一人モ此ノ大緊要ノ所
ヲ發明セシ者アルヲ聞カサルヲ以テ、吾レ黙シテ言ハサ
ルコトヲ得ス、

本文漢土方宜ノ説ノ如キハ、唯其大体ヲ云フノミ、其
細目ニ至テハ、古今ノ名家、無慮數十輩、攻補ノ間ニ
於テ皆各偏執ナキコト能ハス、若シ一ヒ仲景傷寒ノ書タ
周ノ時、疾医ノ編スル所ニシテ、決シテ秦漢以後ノ著撰ニ非ス、余
獨ニ医經說ヲ作テ之ヲ弁セリ、而今此篇ニ於テ仲景ト称スル者ハ、
姑ク世人耳目ノ慣繩墨ヲ執テ之ヲ正ストキハ、其曲直
判然トシテ弓ト弦トノ如シ、余別ニ著論アリ、但本篇
ニ相關カラサルヲ以テ敢テ此ニ贅セス、

第十七章

我邦ノ疾ヒ之ヲ端座シテ下体ヲ重圧シ、血脈・神經・筋
骨ヲシテ順流舒暢スルコトヲ得シメサルニ由テ得ル者ア
リ、是レ婦人産後ニ於テ尤多シトス、宝曆・明和ノ間、

賀川玄悦ト云フ者出テ理産ノ術ヲ草創シ、随テ其正座ノ害ヲ弁斥セルヲ以テ、近世ニ至テハ唯海隅僻陬ノミ、僅カニ其弊存スト雖、他ノ諸病ニ於ルカ若キハ未嘗テ其然ル所以ヲ知ル者ナシ、是レ我邦ノ医ヲ為ス者、病ニ臨ミ方ヲ処スルノ際ニ於テ、意ヲ用ヒスンハアルヘカラサル所也、

第十八章

万里ニ通シテ些ノ弊ナク、千載ニ亘リテ法ヲ取ルヘキ者ハ、漢ノ張機仲景ノ書也、猶孔子ノ言ノ天下万世法トルヘク非トスヘカラサルカコトシ、其脈証ヲ示スヤ、秩然トシテ条理紊レス、其方ヲ処スルヤ、汗吐下・和救、一モ其宜キニ適ハサルコトナシ、苟能其方法ノ意ヲ味ヒ得テ藥ヲ用ルトキハ、病トシテ愈エスト云フコトナシ、真ニ医ノ經典也、但其文簡古、其義深奥、且散落日久ク、魏晉ニ至テ陰陽神仙医流王叔和ト云フ者、己レカ意ヲ以テ編次セシヨリ、玉石混淆、已ニ其面目ヲ換ヘタリ、是故ニ才識アリテ篤ク之ヲ信スル者ニ非ンハ其微辭奥旨ヲ

得ルコト能ハス、若シ仲景ノ面目ヲ得スシテ少シク其字句ヲ解シ、活用ノ才ナクシテ之ヲ墨守スルトキハ、反テ害ヲ為スコトアリ、余嘗テ子弟ニ示テ曰、学仲尼而墨守仲尼之書者、仲尼之罪人也、学仲景而墨守仲景之書者、仲景之罪人也、汝等讀書宜具活見ト、夫レ仲景發汗スル所ノ証、洋医モ亦發汗セサルコトヲ得ス、仲景下ス所ノ証、洋医モ亦下サ、ルコトヲ得ス、吐ト和ト救ト亦然リ、但用ル所ノ藥物及技術同シカラサルノミ、恨ラクハ殘欠ノ書、施療ノ方備ハラサルコトヲ、宜ク洋方ヲ採テ以テ之ヲ補フヘシ、若シ能仲景ノ真意ヲ得テ以テ柱礎ト為シ、洋方以テ之ニ加ヘハ豈何レノ地ニ於テカ風土ノ宜キヲ得サラン、其傷寒・雜病二論ノ如キハ、余別ニ註疏アリ、本義ト名ク、校定シテ以テ梓ニセント欲ス、之ヲ讀マハ庶幾クハ漢洋並用ヒ相助けテ悖ルコトナカラシカ、

第十九章

仲景ノ微辭奥旨ヲ悟了シ、之ニ因テ以テ風土ノ宜キヲ得ルニ至ランコトハ、出類ノ才ニ非ンハ能ハス、故ニ別ニ

捷徑法アリ、三都會ノ中ニ病院若クハ施藥院ヲ建テ、英吉利・仏蘭西・噶蘭陀等ノ中ニ於テ、尤才學アリテ治療ヲ善クシ、忠順ニシテ人ニ誇ルコトナキ者一人ヲ延テ、之ヲ院ニ置キ、治療且教導ノ事ヲ掌ルコト大約十年所ナラシメ、又院中別ニ漢医局ヲ設ケ、漢方医流ノ前款ニ云フ所ノ如キ人オヲ撰テ、局ニ長タラシメ、亦側ラ生徒ヲ教育シ、漢洋駢立シテ治ヲ施サハ、漢ハ洋ノ技術ヲ採テ

我ノ欠ヲ補ヒ、洋ハ風土ノ宜ニ熟シ、又我邦ノ藥品ヲ使用シテ其性能ヲ實地ニ試ミ、以テ十年ノ日月ヲ経バ、治法一定シテ我邦モ亦無比ノ至大至美医方備ハリ、従来西洋医流ノ蔑視シテ顧ミサル所ノ藥品モ、亦的確ノ說此ニ立テ、一日モ欠クヘカラサルノ良物トナラン、彼ノ草木・鳥獸ヨリ金石・鱗介・昆虫ニ至ルマテ、凡本土ノ産スル所本土ノ疾ニ益ナクンハアラス、今ノ西洋医方ヲ奉スル者棄テ、而試ミス、反テ之ヲ遠キニ求ムルハ何ソヤ、按ニ、我邦従來行ナハル、所ノ医流三アリ、漢一、洋一、漢洋折衷一別ニ皇國医道アリト雖遠晦シテ今、世ニ行ナハレズ、故ニ此ニ列セス、其折衷

家ト称スル者ハ、大率、初メ漢ヲ學テ未タ其要ヲ得ス、謂ヘラク、漢ハ備ハラサル所アリ、洋ヲ以テ之ヲ補ナハント、乃チ洋ニ入り其新奇ヲ喜ンテ、相用ル者ニシテ、其學フ所二道共ニ深カラス、故ニ真ニ能ク折衷スル者ニアラス、由テ法ヲ設ルコト本文ニ云フ所ノ如クニシテ、方ニ昉メテ真ノ折衷ヲ得ヘシ、又漢ヲ厭テ洋ニ純ナル者モ此ノ手段ニ由テ医ヲ為サハ、風土ノ宜ヲ得テ大過失アルコトナク、漢方医モ亦洋ノ長技ヲ採テ其不足ヲ補ナハ、三ツナカラ全備シテ闕ル所ナキニ至ラム、是レ海内ノ医ヲシテ治療ノ方向ヲ得シムルノ捷徑法也、但延ク所ノ洋医ハ一人ニシテ十年ヲ串到セシムルニ非ンハ不可也、何トナラハ彼我風土ノ差異ヲ諦認スルコト能ハサルヲ以テ也、

第二十章

麻睡ノ劑ヲ用テ患者ヲシテ昏醉セシメ、其手脚ヲ截チ去ル等ノ術ノ如キハ、享和・文化ノ間、華岡青洲ト云フ者出テ、之ヲ草創セシヨリ、其技天下ニ伝播シ、今日ニ

至テハ遐陬僻陲ト雖行ナハレサル所ナキハ、世人ノ普ク知レル所也、唯天下治平ナルヲ以テ、之ヲ銃堊砲創ニ試ミルコト未タ多カラサルノミ、西洋截断ノ術何ソ奇トスルニ足ラン、今ノ洋医ニ眩シテ其術ニ感服スル者ハ、近キヲ疎ミ遠キヲ親シムノ陋習ニシテ、我邦ノ方技ヲ信用セサル者ノミ、

第二十一章

古疾医ノ病ヲ療スルヤ、其病ノ因テ生スル所以ト、其薬ノ其病ヲ治スル所以ノ理トハ、強テ之ヲ究メス、譬ヘハ朮・茯苓・猪苓・沢泻ハ能水氣ヲ驅テ之ヲ小便ニ泄ラス、其朮・苓・猪・沢ノ水ヲ驅ル所以ノ理ハ、措テ講究セス、然レトモ之ヲ其病ニ用テ能治スル者ハ、之ヲ經驗ニ得タルヲ以テ也、已ニ之ヲ經驗ニ得、又朝夕之ヲ使用シテ其活法ヲ心意ニ領会スルニ於テハ、豈其死物ノ理ヲ究メ、其然ル所以ヲ論スルコトヲ待シヤ、是唯医流ノミナラス、諸ノ技芸ヲ学フモ亦然リ、余嘗テ聞シコトアリ、啗蘭医某者、嘗テ、我カ江戸ニ到リシトキ、大神楽ノ弄丸技ヲ

觀テ、驚歎シテ曰、彼ノ鞆子裏面、必奇機ヲ設ケタル者ナラント、傍人笑テ曰、鞆裏何ノ機カアラン、唯技ヲ学フコトノ久クシテ、手裏熟シタル者ノミト、蘭医疑ヒ尙未タ積ケス、遂ニ其鞆子ヲ購ヒ、刀ヲ執テ之ヲ剖キ、其裏面一機関ナキヲ見テ、始メテ其技ニ服セシコトアリト、

第二十二章

西洋ノ人常ニ日新ニ誇ル、其医術ニ於ルヤ、先哲ヲ擯斥シ、己レカ術ヲ以テ是トスルコト、彼レノ常習也、夫レ昨日ノ是トスル所、今日其非ヲ覺リ今日ノ是トスル所、明日又其非ヲ悟ル、是レ即西洋日新ノ道也、是ニ由テ之ヲ觀レハ、彼ノ先哲ヲ擯斥スルハ、可ナルニ似タリト雖、其自是トスルニ至テハ大ニ不可ナル者也、何トナラハ己レカ今年是トスル所モ、明年ニ至ラハ必非ナラン、昔人ノ為セシ所今人之ヲ視ルニ果シテ其非ナラハ、今人ノ為ス所、来人以テ非トシ、来人ノ為ス所其後ノ人亦以テ非トセンコト疑フヘカラス、昨是今非ノ論、千万年ヲ經ルトモ、豈休ムコトアランヤ、彼ノ日新ニ誇ルノ徒先哲ノ

非ヲ斥シテ、反テ己レカ非ヲ願リミス、自是トシテ疾病

ニ臨ミ、人命ヲ倣紙ニスルコト誰カ惻怛ニ堪ンヤ、

冊子原寸 縦・六・九種 横・一八・七種 五二枚

一七九三ノ二

(表紙付箋)

「鹿兒島県士族

柳田友広」

行囊燼余第一集 某藩某氏之拜参議前三日齋行所呈也但當時未署此題名

天下国家ヲ治ムルニ要道アリ、仁ト云フ、是ヲ綱トス、

而倫理之カ目タリ、其綱拳ルトキハ則目之ニ從フ、綱拳

リ目從フトキハ、上下所ヲ得テ、而国又安、苟其綱拳ラ

ス、其目從ハサルトキハ、天地否塞シテ而国亡滅ス、是

万世不刊ノ理也、畜万世ノミナラス、仮令乾坤一タヒ蕩

シテ而復成ルトモ、吾其変易スル所ナキヲ知ル、曰、何

ソヤ、曰、仁ハ即造物者愛育ノ道ニシテ、生々化々皆此

ニ出サルコトヲ得サレハ也、人或ハ曰ハン、今マ日新開

化ノ運ニ当リテ上古ノ說話ヲ為ス、陳腐モ亦甚シ、此頑

固ノ説豈之ヲ今日ニ用フヘケンヤト、僕謂ラク、是蛮夷

ニ惑溺シテ人ノ人タル所以ノ理ヲ知ラサル者也、唯其理

ヲ知ラサルノミナラス、蛮夷ノ事モ亦深ク弁セサル者ノ

ミ、蛮夷モ亦人也、何ソ能仁不仁ニシテ身ヲ修メ家ヲ齊ヘ、

其国ヲ平治スルコトヲ得ンヤ、夫仁ナルトキハ榮エ、不

仁ナルトキハ辱シメラルトハ、前哲ノ確言ニシテ、古今

ノ通理也、其言ノ違ハサルコト万世一日ノ如ク、其事ノ

迹 倭漢古今文献ノ以テ徴ト為スヘキ者、汗牛充棟乘除

シテ之ヲ算スルモ、未曾テ毫厘ノ爽ヒアルヲ見ス、是ニ

由テ之ヲ觀レハ、彼ノ日新開化ヲ唱ヘ、是道ヲ陳腐トシ

テ廃棄セント欲スル者ハ、不仁者ノ覆轍ヲ蹈テ自知ラサ

ル者也、亦危カラスヤ、若仁人上ニ在テ 政ニ從ハ、

其下当ニ怨言ナカルヘシ、今ヤ怨惡ノ言讐々嗷々巷ニ充

チ、街ニ滿テ、曾テ 朝ニ謳歌スル者ナキハ何ソヤ、巷

説街談ハ猶風ト影トノ繫捕スヘカラサルカコトシト雖、

亦以テ下民悲喜ノ情ヲ察スルニ足ル、詩ノ編次スル所国

風ヲ以首トスルモ、蓋国ヲ治ムル者ハ必先下情ヲ得ルヲ以テ主トスルノ意ナルヘシ、僕輩下ニ在テ下情ニ注意スルコト已ニ三年、少シク得ル所アルニ似タリ、由テ所聞ノ街説ヲ録シテ、敢テ高覽ヲ煩ハス、幸ニ片言ノ取ルヘキ所アラハ、願クハ扱ミ玉ハンコトヲ、

○巷説ニ曰、廟堂ノ上ニ在テ政ニ従フ者ノ惡癖ハ、第一ニ好惡、第二ニ我慢、第三ニ固執、第四ニ輕騷、第五ニ怯懦、第六ニ驕奢、此六ノ者其一モ身ニ在ルトキハ其毒天下ニ流レテ遂ニ其身ヲ喪ヒ、其国ヲ滅ホスニ至ル、夫レ善人不進悪人不退善言不取惡事不禁忠良獄ニ就キ、姦宄闕ニ入り奇器淫工日ニ殖シ、金銀玉帛月ニ減シ、正氣愈耗シ、邪焰愈熾ナルハ、其弊皆好惡ニ出ル者也、出入上ヲ挟ミ、己カ不逮ヲ知レトモ退クコトヲ為サス、自其拙ヲ掩ヒ其過ヲ文リ、皆窳澶漫曾テ識ル所ナケレトモ、下問ヲ恥チ識者ニ就テ学フコトヲ為サ、ルノミナラス、善言ヲ聞テモ尚拒棄スルハ其弊皆我慢ト固執トニ出ル者也、未タ情実ヲ審カニセスシテ遽カニ刑獄ヲ折シ、

猥ニ人言ヲ信シ、其情ヲ察セスシテ人ヲ黜陟シ、古今ノ興廢隆替ノ迹ヲ照考セス、繩墨ヲ踐マス、規矩ニ依ラス、唯眼前ノ利害ヲ祝遠キヲ測ラスシテ法ヲ制シ、令ヲ布キ朝ニ発シテ夕ニ改ムルニ至ル者ハ、其弊皆輕騷ニ出ル者也、内忠梗ヲ撓屈シ、外蠻夷ニ低頭シ、交待度ヲ制スルコト能ハス、我ノ言ハンコトヲ欲スル所ハ理アリト雖、

言フコト能ハス、カメテ之ヲ言ヘトモ遂ルコト能ハス、彼ノ言フ所ハ非理ト雖聽カサルコト能ハス、彼ノ曲ハ論スルコト能ハス、我ノ直ハ伸ルコト能ハス、佻々タル其才躬自聖ニ居リ賢ニ駕ス、故ニ阿諛諂佞ノ者常ニ其門ニ出入シ、古聖賢ニ過ルヲ以テ己ヲ簸揚スルヲ信シ、自古今ノ一人ト思ヒ未嘗吐哺握髮ノ勞ヲ為サス、官暇ノ日ニ当テハ酒ヲ酌ミ茶ヲ鬪ハシメ、絃ヲ弄ヒ、碁ヲ囲ミ、歌妓ヲ携ヘ遊舫ヲ泛ヘ、酒樓ニ登リ、倡家ニ入り、遊戲ヲ以長日ヲ送ル、苟憂國愛君ノ衷情アル者、今ノ世ニ方テ豈此遊ヲ為ニ違アラランヤ、而今如是ナル者ハ、其弊皆怯懦ト驕奢トニ出ル者ニシテ、此數者乃是唐季・宋

晩・明末ノ弊也、鑑ミサルヘケンヤト、

○街説ニ聞ク、曰、當時官祿先生當時私カニ在官ノ人ヲ斥テ官祿先生ト稱ス、蓋其人ニ非スシテ其爵祿ヲ受ルヲ等ノ口実トスル所ノ語アリ、曰、開誇ルノ意ヲ寓スル者也

ケタ、曰、開ケヌ、曰、活眼又大活眼、曰、公平、曰、固陋、曰、頑愚、曰、陳腐、曰、因循、曰、新發明、曰、文明開化、曰、日新開成、曰、議論家、曰、書生論、曰、孔孟ハ迂闊、曰、某人ハ臯陶・稷契ニ賢レリ、曰、巍然獨立、曰、幾年ヲ経ハ 我國富テ金銀蔵ムヘキノ地ナキニ至ル、曰、幾年ノ後ハ 我國ノ富強世界万国ニ冠タラシコト期シテ待ツヘシト、此等ノ語極メテ多シト雖、皆空言ニシテ更ニ其驗アルコトナク、日月ニ衰微ニ赴クノミト、其説ノ詳ナルヲ問ヘハ、曰ク、開ケタトハ大声ニシテ詩歌ヲ道路ニ吟シ、俚謡ヲ歌ヒ、白昼ニ行路ノ婦女ニ戯レ、少年ニシテ善ク酒ヲ飲ミ、尊長ノ前ニ盤礴シ、故ナクシテ人ヲ嘲罵シ、袒裼シテ道塗ニ徘徊スル等ヲ云ヒ、開ケヌトハ之ニ反シテ謹厚沈黙ナル者ヲ云フ也、活眼大活眼トハ、欧米ノ風土習俗ヲ弁セス、彼 我ノ国体

ヲ問ハス、倫理ニ拘ハラス、彼モ亦美トセサルノ醜事ヲ取来リテ唱ル者ニシテ、乃民ヲ治ムルニハ宜ク苛政ヲ以テスヘシ、 我民ハ三百年昇平ノ沢ニ浴シ、遊惰ニ流レタルカ故ニ、飽マテ辛酸ヲ嘗メシムルニ非ンハ用ヲ為サスト云ヒ、今ノ世ニ方テ仁義ヲ講シ孝悌ヲ誦スル者ハ、迂闊ニシテ用ルニ足ラサルノミナラス、政務ニ於テ反テ障礙アリト云ヒ、倭魂ハ時務ニ妨アリ、宜ク廃スヘシト云ヒ此事ヲ以テ上疏セシ者アリト聞リ、春花秋葉ハ人目ヲ悦ハシメ、人ヲシテ多少ノ日晷ヲ費ヤシ、金銀ヲ費ヤサシム、當時豈歛娛ノ時ナランヤ、洛中及ヒ郊外ノ紅樹花木悉ク伐除スヘシ、但飛雪遇ムルコト能ハス、照月蔽フコト能ハサルヲ恨ミトスト云ヒ頃日畿内ノ一府知事モ亦是論アリ者ヤアリケン、未タ果サスト聞リ、方今殖貨ノ術ヲ行ハ、須ラク勉メテ多ク貨財ヲ散スヘシ、其数ヲ問フヘカラス、然ラスンハ聚マル所モ亦多キコト能ハサル也、千里比隣万国ニ往還スルノ時ニ方テ、彼ノ入ヲ量テ出ヲ為ス等ノ陳腐規則ニ拘々タル者、豈与ニ殖貨ノ策ヲ語ルニ足ンヤト云フノ類是也、

固陋頑愚頑固トハ、經典史子ニ由テ国体ヲ知り、人道ヲ
 学ヒ盛衰興廢ノ迹ヲ參酌シ、聖言ノ万世ニ亘テ毫末モ差
 ハサルヲ見テ、以テ天道ノ罔ユヘカラサルヲ悟リ、奮ノ其
 身ニ速ヒ其子孫ニ及ハンコトヲ惧レ、億兆ヲ陷阱ノ中ニ
 投溺セシメテ、終ニ援救スヘカラサルニ至ランコトヲ慮
 リテ、肯テ流時ニ投セス、權貴ニアラス、固ク其道ヲ守
 リテ變セサル者ヲ云ヒ、陳腐トハ乃其等ノ人ノ言行ヲ斥
 テ云ヒ、因循トハ其時行ニ合ハサルカ故ニ為ル所アルコ
 トナク、鬱屈シテ用ヲ為サ、ルヲ云ヒ、新發明トハ奇技
 怪事世俗ノ耳目ニ慣レサル者ヲ首唱スルヲ云フ、是危異
 輕浮行ハルヘカラサルノ事ニ非ンハ、必古人ノ糟粕用ル
 ニ足ラサルカ故ニ、湮晦シテ今世ニ顯ハレサルノ事ノミ、
 文明開化・日新開成ノ二語ハ、欧米ノ学日ニ著息シ、其
 技芸月ニ蔓延スルヲ云ヒ、議論家トハ弊事ヲ矯メ国家ヲ
 維持センコトヲ欲シ、公道ヲ執テ以テ敢テ時事ヲ論スル
 者ヲ云フ、書生論トハ其正論ヲ避ケンカ為ニ其口ヲ箝シ
 之ヲ抑ユルノ語也、正論ヲ以テ官祿先生ヲ詰ルトキハ、

先生素ヨリ正人君子ニ非ル故ニ、理屈シ辭究シテ答ルコ
 ト能ハス、其ハ書生論也、取ルニ足ラスト云テ其議論ヲ
 消滅シ、其鋒ヲ避クルノ具也、論者若シ其書生論ト老成
 論トノ別ハ如何ト問ヒ、又書生論ノ取ルニ足ラサル所以
 ヲ問ヒ、次ヲ追テ進ミ、以其究極スル所ニ至ラハ、先生
 左右ヲ顧テ佗ヲ言フニ非ンハ、必公事多忙長談ヲ得ス、
 佗日重ネテ来ルヘント云ンコト疑フヘカラス、其孔孟迂
 闊ト云者ハ、己倫理ノ外ニ在ルカ故ニ、先之ヲ貶廢スル
 ニ非ンハ、其言行上ニ就テ阻碍アルニ由テ也、其卓陶云
 ヲト云フ者ハ、乃文明開化・日新開成上ヨリ来レル者ニ
 シテ、上古ハ万事開ケス、今ノ開ケタル世ヨリ之ヲ視レ
 ハ、上古ノ聖賢ハ今世ノ幼童ニモ及ハスト思ヘルヨリ出
 ル言ナルヘシ、其巍然獨立以下三ノ語ハ、怵迫ノ徒幸ニ
 今ノ世ニ遭遇シ、忤々然トシテ唯利之逐ヒ首トシテ俸祿
 ヲ企望シ、私カニ謂ヘラク、苟官祿ヲ獲ンコトヲ欲セハ、
 孟浪荒唐大言ヲ極ムルニ非ンハ用ヒラレス、故ニ一事ヲ
 言テ予メ其成功ヲ十五年ト期シ、然後其事ニ服カハ、十

年ハ必官禄ヲ受ルコトヲ得テ、以テ平生好ム所ノ榮華ヲ爲シ、且幾万金ヲ蓄フヘシ、然後退テ子孫ノ計ヲ爲シ、依テ世ヲ安逸ニ終ラント、是其志ス所初ヨリ唯前十年ノ禄ニ在テ、後五年ノ成功如何ニ於テハ、素ヨリ関カラサル者也、其它口実トスル所言路洞開ト云アリ、是名ハ洞開ニシテ其実ハ否也、聞ク、状表劄子皆緘ヲ剪ラスシテ、政府ニ堆積シテ丘阜ヲ成シ、敢テ之ヲ願ル者ナシト、是壅蔽ノ甚シキ者ニ非スヤ、月給諸先生已ニ是ノ如シ、興廢盛衰吾其期スル所ヲ知ラスト、

○公平トハ、物ヲ分ツニ過不及ノ差ナク、或ハ人ヲ待ツ(親カ)ニ新疎ノ偏ナキ等ノコトニ就テ称スル所ノ言ノミ、若之ヲ万事ニ推及サハ大ニ仁義ニ戻ルコト多シ、攘羊ノ弁服膺セスンハアルヘカラス、譬ヘハ甲ト乙ト怒テ相鬪フ、其情実ヲ審カニスルニ、甲直ニシテ乙曲、傍ニ人アリ、其甲ヲ扶ルハ是公平ニシテ、乙ヲ助ルハ乃不公平ナルコト、固ヨリ論ヲ待タス、然ラハ則直ハ扶クヘクシテ、曲ハ助クヘカラサル者歟、丙カ父、丁カ父ト鬪フ、其情実

ヲ審カニスルニ、丙父直ニシテ丁父曲、丁若其父ノ曲ヲ惡ミ、丙父ヲ助ケテ己カ父ヲ驅逐セハ如何、若公平ヲ以テ之ヲ論セハ、是也トセン、是反テ仁義ノ大賊也、小兒女子モ亦誰カ其非ヲ惡マサラン、推テ以天下ノ事ニ移スヘシ、譬ヘハ我邦曲アリテ外夷来リ侵サンニ、彼ノ公平ノ言ニ依リ夷ヲ助ケテ邦ニ寇セハ、是天地不容ノ大罪ナルコト亦論ヲ待テ、而後ニ明カナラス、仲尼曰、父為子隱子為父隱、直在其中矣ト、嗚呼今世ノ所謂公平ノ世道ニ害アルコト甚キカナ、前条公平ノ弁ヲ鬪ク、今之ヲ補フ、

○巷説ニ聞ク、維新以來ノ政令朝ニ発シテ夕ニ更メ、或ハ遽カニ御取消シ等ノ事屢有之者ハ何ソヤ、古來名臣賢相創業守成ノ際ニ当リ、国君ヲ輔弼シテ政ニ從フ者ノ為ル所ヲ見ルニ、今日ノ輕躁ノ如キハ未曾テ之アラサル也、其弊ノ由ル所ヲ考ルニ、廟堂ニ卓識アリテ古今ノ事ニ明カナルノ賢臣ナク、其目唯咫尺ノ間ヲ視ルニ足テ、而數百里外ヲ視ルノ明ナク、其心唯今日ノ事ヲ弁スルニ

足テ、而数月教歳ヲ察スルノ智ナキカ故ナルヘシ、是故ニ今ノ官祿先生等ノ説ヲ聞クニ、凡政ヲ布キ令ヲ發スルハ、先ツ布キ先ツ發シテ、其行ハル、ト否トヲ候ヒ、若行ハレサル者アラハ、數之ヲ變易シ、遂ニ行ハル、ニ至テ始メテ定マルニ非ンハ、預メ定メテ然後之ヲ布發スルモ、妨碍出来リテ行ハレサルコト多シ、故ニ屢試ルヲ可トスト、是公然トシテ自言フ所ニシテ、自其言ノ愚ヲ知ラサル者也、夫士農工商ノ其業ニ於ルヤ、必童穉ヨリ之ヲ学ヒ長スルニ及テ始メテ其事ニ就ク、倭漢歐米皆然リ、唯此卿相ヤ未曾テ初ヨリ國ヲ治ムルノ道ヲ学ハスンテ、敢テ 太政ヲ執ル、是猶蝦蟆ヲ梁上ニ上セテ鼠ヲ捕ヘシムルカコトシ、其不能如是ニシテ、而反テ古聖賢ヲ笑フ、何ソ自量ラサルノ甚キヤ、蓋政ヲ行フノ要ハ、民ヲシテ信セシムルニ在リ、若行テ而民信セスンハ、何ソ之ヲ政ト云ン、今ヤ民ノ一二事業ヲ意匠シ、之ヲ起シテ以テ國家ニ利センコトヲ欲スル者アルモ、今日ノ所允明日ノ所禁トナランコトヲ慮リテ、其伎倆ヲ逞スルコトヲ

得ス、是唯民ノミナラス百官有司ノ各其所掌ノ事務ニ於ルモ、其意思備夫ノ日々、人ノ為ニ徭役シテ来日ヲ期スルコトヲ得サル者ト同ク、唯眼前ノ事ヲ理スルノミニシテ、更ニ来世ノ為ニ勲ヲ立シコトヲ思フ者ナク、朝廷ニ利アランコトヲ思フコト、私家ニ於ルカ如クナル者モ亦有ルコトナシ、況ヤ身ヲ殺シテ 國ニ報フ者ヲヤ、是皆 政令ノ輕騷ヨリ出ルノ弊也ト、

○街説ニ曰、 皇國萬古聯綿タル

神系歸巍タル

天位ハ、假令 國焦土トナリ、民遺類ナキニ至ルトモ、變易セシムヘカラス、下民ハ撫育セサルヘカラス、此二者ヲ維持保護スルハ、乃士臣ノ任ニシテ仁義ノ在ル所也、豈死ヲ以テ此ニ就カサルコトヲ得ンヤ、若ニ者無ンハ 國ヲ売テ醜夷ニ臣僕タルモ可ナラン、而今ハ有之士臣タル者豈仁義ニ從事セサルヘケンヤト、

○街談ニ曰、仁義ハ本也、技芸ハ末也、大學ハ本ヲ教ヘ
兩校東南ハ末ヲ習フ所以也、大學已ニ鎖シテヨリ殆一歳ニ

及ヘトモ、尙未開カス、唯兩校ノミ存スル者ハ、乃本ヲ棄テ、末ヲ習フ者也、何ソ 國家ニ益アラシ、宜ク速ニ大學ヲ開キ、其本ヲ立テ、以海内ノ銳氣ヲ培養スヘシト、又曰、今ノ卿相ハ皆吠声耳食ノ人ニジテ、徒ニ見聞ニ隨テ欧米浮靡ノ術ニ眩シ、倭漢ノ学ハ尤忌憚スル所ナルカ故ニ、大學ヲ廢シ僅々一二ノ御用掛ヲ置キ、以テ廢スルニ非スト云ノ意ヲ偽示シテ有志者ノ口ヲ鉗シ、其内心ハ遽カニ開クコトヲ欲セス、他日之ヲ開クニ方テハ 倭漢ヲ舍テ偏ニ欧米ヲ取ントノ臆算ナレトモ、之ヲ急ニセハ天下ノ志士ヲ鼓動シ、禍害ノ生スル所アランコトヲ慮テ次且スル者タルヤ、疑フヘカラスト、

○慶応戊辰西東ノ役 我藩兵ノ勝ヲ咄嗟間ニ得ヌルハ、蓋

天威ハ言ヲ待タス、固ヨリ將帥ノ智計ニ出ト雖、抑亦兵士敢死ノ勇余リアルニ依ル者也、兵士若勇ナクンハ、仮令將帥ノ智アリテ、且器械ノ備ハレルモ、豈能大捷ノ如是速カナルコトヲ得ンヤ、此ニ由テ之ヲ觀レハ、戰陣ノ

コトハ必士氣ヲ主トスヘシ、夫 皇國ハ本来銳氣有余ノ國ニシテ、未曾テ一タヒモ外侮ヲ受サルハ世ノ知ル所、然ト雖昇平ノ久キ人皆奢侈ニ移リ、遊惰ニ流レ、其心唯安ヲ偷ムニ在テ、

天恩ノ何物タルヲ知レル者ナキカ故ニ、縦ヒ今日事アルモ、身ヲ殺シテ 國ニ報ハン者ハ、海内唯我藩アルノミ、天下ノ勢亦危カラスヤ、是故ニ方今ノ急務ハ、海内ノ人ヲシテ 神州ノ 神州タル所以、天子ノ

天子タル所以ヲ知ラシメ、以テ銳氣ヲ培養シ、廉恥ヲ守テ以生ヲ舍、義ニ就クノ節ヲ執ラシムルニ在リ、其功一緡錢ヲ海外ニ投スルコトヲ須タスシテ成ルヘシ、隨テ鑓艦銃砲ヲ製シ、兵ヲ練テ、以不虞ニ備ヘハ、以テ内外寇賊ヲ制スルニ足ルヘシ、但其製艦鑄砲ノ事ハ、財利ノ策已ニ立テ、然後ニ非ンハ未遽カニ言ヒ易カラス、

○人ヲ教ルハ今日ノ急務ニシテ、大學ノ一日モ無ルヘカラサルハ、前ニ已ニ之ヲ明カニセリ、而之カ制ヲ為スニ

手段アリ、夫 皇國ノ学ハ其依ル所ノ典籍皆史乘ノミニシテ、教ヘアルコトナシ、偶一二ノ教ノ字アルモ、未曾テ其法ヲ設ケタルヲ見ス、律令格式等ノ書ノ中世ニ成リシ者或ハ存スト雖、皆漢土ニ模倣スル者也漢土ノ学ハ常倫ヨリ以治國平天下ニ至ル迄、詳悉遺サスト雖、之ヲ 我邦ニ用ルニ當テハ、 國体ニ合ハサル所多シ、西洋ノ学ハ天文地理及ヒ万国ノ形勢細大悉サ、ル所ナシ、然レトモ其人倫ノ教ニ至テハ、輕浮ニシテ漢土ノ厚重ナルニ及ハサルコト、遠キコト甚シ、今ノ学者各己カ学フ所ノ長処ヲ執テ、佗ノ短処ヲ排毀シ、互ニ相軋ル者ハ長中ニ短アリ、短中ニモ亦長処アルヲ知ラス、其短ヲ併セテ之ヲ用ヒ、其長ヲ併セテ之ヲ舍ント欲スル故也、譬ヘハ狹隘ナル 皇学者ノ中庸・論語ニ於ル、武王・周公ハ其達孝ナルカ、又崔子・齊君ヲ弑セリ、陳文字馬十乘アリ云々等、僅々二三ノ微瑕アルヲ以テ、我國体ニ合ハスト云テ全篇ノ金玉ヲ併セテ之ヲ廢ント欲スルカ如シ、之ヲ人ヲ用ルニ譬フ、若一人ニ備ハラントヲ欲シ、又疵瑕ナキノ人ヲ撰用センコトヲ欲セハ、天下豈人アラン

ヤ、 我典籍乃然リ、 神典・國典豈教ノ取テ以テ施スヘキ者アランヤ、 仮令牽合付会シテ之カ説ヲ為スモ己ニ其本旨ニ戾ル、焉ソ能漢籍ノ確ナルニ如シ、且海外万国ノ事情ヲ明カニセンコトヲ欲セハ、西洋ニ依ルニ非ンハ得ヘカラス、若之ヲ悉ク 國典ニ備ハレリト云ハ、是誣ル也、是故ニ今学制ヲ立ンニハ、先 國典ニ依テ以テ 國体ヲ知り、漢籍ヲ取り、 國体ニ法リテ其疵瑕ヲ削リ、以テ教ヲ施シ、西書ニ依テ海外ノ事ヲ知ルノ法ヲ以テスヘシ、是乃学制ノ大意也、如是スルトキハ則人ヲ用ルノニ其短ヲ舍テ其長ヲ取ルノ義ニシテ、三ノ者皆各其用ヲ為ス也、今 倭ト漢トヲ廢テ、用ヒ玉ハサルノ久キコト年所ニ及ヒ、惟歐是用ヒ玉フハ、必己ムコトヲ得サルノ故アラン、然リト雖、亦癖スル所アルニ似タリ、巷議ノ生セサランコトヲ欲スルモ、豈得ヘケンヤ、
○巷説ニ聞ク、下モ善ナルトキハ政令行ハレ、惡ナルトキハ行ナハレス、上ミ善ナルトキハ下必善、上惡ナルトキハ下必惡、善惡俗ヲナスハ唯之ヲ馭スル人ニ在ルノミ、

或曰、至治ハ無賞無罰、其次ハ有賞無罰、其次ハ賞罰并行、若夫有罰無賞ニ至テハ、民散シ国滅フト、是故ニ古ノ善ク天下ヲ治ムル者ハ、必徳ヲ以テシ、其次ハ政ヲ以テス、其政ヲ以テスル者ハ、已ムコトヲ得サルニ出ツ、而之ヲ為スニ方アリ、先之ヲ善ニ導テ然後尚不善ヲ為ス者アラハ、則之ヲ刑ス、刑亦已ムコトヲ得サルニ出ル者也、賞ハ善ヲ勸メテ之ヲ誘導スルノ方、罰ハ惡ヲ懲シテ将来ヲ警ムルノ術、二ノ者両輪ノ如シト雖、其主トスル所ハ賞ノミ、蓋シ世ニ罰スヘキ者多ケレハ、必賞スヘキ者アラン、然ルニ唯幽囚笞杖徒流絞斬ノ者日月ニ多ヲ加ヘテ困ニ充チ、囹ニ滿ルヲ聞ク、賜賞ノ者ノ多キハ未タ之ヲ聞カス、若シ世ニ賞スヘキ者アルコトナシト云ハ、是即風俗ノ頹壞ニシテ、執政諸公ノ大辱ニ非スヤ、今其主タル所ノ賞ヲ措キ、且教ヲ設テ以テ誘導スルコトヲ為サス、惟刑是用ヒハ天下億兆ノ民ヲ刑シ、尽スニ非ンハ豈能刑ヲ措クノ期アランヤ、賞罰ノ用慎ムヘキカナト、

○巷説ニ曰、坤輿ノ中農国アリ、工国アリ、商国アリ、

猶一郷一村ノ内ニ農工商アルカ如シ、夫我邦ハ素ヨリ農国ニシテ、欧米ハ多クハ工商ノ国也、其三ノ者ノ分ル、所以ヲ原スルニ、其天度寒暄ノ宜キヲ得、地勢燥湿ノ偏ナク、土壤肥飭ナルノ国ハ、毎ニ農国ニシテ、否サルノ国ハ皆工商ノ国也、是乃自然ノ理ニシテ、故ラニ之カ分ヲ定ムル者ニ非ス、故ニ彼レノ工商ニ巧ニシテ我ノ此ニ拙ナルモ亦天ノ賦スル所、豈羨ムニ足ンヤ、郷村ノ内亦然リ、工ノ製スル所ノ械器ヲ見テ農其巧ヲ羨ミ、耕稼ヲ措テ而製造ニ従事セハ、誰カ宜ヲ得ルトセン、今ノ政ニ従フ者土地ヲ拓キ農桑ヲ勸ムルニ疎ニシテ、反テ貿易ヲ弘メ通商ヲ盛ニセンコトヲ勸ムル者ハ何ソヤト、

○街談ニ曰、租税ハ民政ノ本也、古來聖帝賢王ノ国ヲ治ムル、必先其法制ヲ定メテ、然後凡百ノ事ニ及フ、其制ヲ為スヤ、宜ク時勢ヲ權テ以テ斟酌スヘシ、今ノ徵税ノ制ハ蓋歐米ヲ模倣シ玉フ者ニシテ、必良法ナラン、然ト雖之ヲ用テ反テ害アル者ハ、時勢風土ニ適否アルカ故ノミ、豊城子越ノ劍、其銳利百煉ノ精鉄ヲ断ツヘシ、若其

利ヲ持テ以テ良民ノ手脚ヲ断タハ可ナランヤ、夫微税ノ制ハ旧幕府ノ時スラ猶民其煩ヲ厭ヘリ、今ハ煩ノ又煩ナル者ニシテ、其細碎ニ至テハ、市童ノ運スル所ノ小車ニ及ヘリ、由テ市人ハ曰フ、明日ハ其税必備夫ノ天秤棒、芸妓ノ三絃、倡婦ノ木枕ニ及ハント、是ニ於テ東都ノ民ハ、殊ニ旧幕府ノ忝キヲ顧ミ慕フテ、其中心曾テ天朝ヲ感戴スル者アルヲ見ズ、頃日何レノ橋ニヤアリケシ、一首ノ歌ヲ粘シタリト聞リ、歌ニ

天朝ハ喘息モチニ成リニケリ、稍トモスレハ税々トイフ、トアリシト、以テ其下情ヲ察スヘシ、又曰、廟堂ノ君子 政ニ從フニ其緊要ナル民情ハ之ヲ度外ニ置テ、全ク意ト為サス、専ラ吾好ム所ニ癖シテ、己レノ慾ヲ遂シコトヲ欲スルノミト、一人曰、全ク然ルニハ非ルヘシ、然レトモ亦其意ナキニハ非ス、何トナラハ、下ニ在テ上言スル者 倭漢ノコトヲ以テ進ムトキハ必用ヒラレスシテ、欧米ノコトヲ以テスルトキハ皆用ヒラル、ヲ以也ト、猶其説下ニ詳也、

○財利策ノ要ハ入ヲ量テ出ヲ為ニアリ、巷説ニ曰、當時大蔵省一歳ノ出入ヲ會計スルニ中豊以上ノ歳入ニシテスラ足ラサルコト、凡一百萬金ニ及ヒ、其他海外ノ負債鐵道ノ大費アリト、又曰、猶之ヨリ大ナル者アリ、楮幣ノ數其幾千萬ナルヲ知ラス、是亦皆 官ノ債也、若シ之ニ加ルニ水旱風蝗ノ荒歉ヲ以テセハ、果シテ之ヲ如何トカスルト、又曰、去ル己巳・庚午二年ヲ平均シテ、輸出輸入ヲ算計スルニ、其出其入ヨリ多キコト一年金一千万余両ニ及ヘリト、又曰、財利ノ策未タ立タズシテ、先造艦鑄兵ヲ言フ者ハ、蓋標本ヲ錯マル者也ト、其実果シテ然ヤ否ヤヲ審ニセス、

○欧米ノ商術ニ於ルヤ、常ニ波濤ヲ踐テ四方ニ互市シ、万国到ラサル所ナシ、故ニ其長スルコト之ヲ 我ニ比較セハ、必數等ノ上ニ在テ且儲蓄モ亦 我ニ下ル者ハ少ナルヘシ、今市街ノ商賈ヲ觀ルニ、其本錢多キ者ハ毎ニ利ヲ得ルコト多シ、況其術ニ長ゼル者ヲヤ、其本錢少ナキ者ハ毎ニ利ヲ見ルコト少ナシ、況其術ニ短ナル者ヲヤ、

彼ヲ知ラス、又己レヲ知ラサル者、百戰豈一勝ヲ得ヘケンヤ、此論勇ナキニ似タリト雖、強テ之ヲ為ス者ハ暴ノミ勇ニハ非ル也、是故ニ貿易無度ハ国ノ害也、豈之カ制ヲ為サ、ルヘケンヤ、而制ヲ為スニ術アリ、外夷ノ僭僞ナルモ、其貿易ニ於ル、決シテ強売ヲ為スニ至ラジ、窶ニ国ノ匱乏スル所以ノ本ヲ原ネ、随テ其弊ヲ考ルニ、其最大ナル者ハ貨財ヲ海外ニ棄ルニ在リ、譬ヘハ一升ノ燈膏内国ノ時価銀八十錢、之ヲ海外ニ求ルトキハ五十錢ニ過キス、商賈其廉ナルヲ以テ之ヲ買フ、是五十錢ヲ海外ニ棄ル也、其八十錢ノ如キハ其價貴キニ似タリト雖、其銀皆国内ニ止マル、是廉ノ最廉ナル者ニ非ヤ、夫方今通商ノ要ハ、買フ所ヲ少ナクシテ売ル所ヲ多クスルニ在リ、其買フ所ヲ少クスルノ術ハ、軍用ノ諸品及ヒ書籍等ノ外凡百ノ器什・飢物・毛織類ハ一切買ハス、用ヒサルニ在リ、其売ル所ヲ多クスルノ策ハ、土地ヲ拓キ農桑ヲ勤メ綿羊ヲ牧シ、鉞山ヲ開キ、奢侈ヲ遏メ、節儉ヲ用ル等ニ在リ、猶其詳説ハ下ニ載ス、

○街説ニ曰、質素節儉ヲ用ルニ方アリ、政刑ハ惡ヲ去リ難ク、徳礼ハ善ニ化シ易ク、上ノ好ム所ハ下必之ヲ好ム、上位ニ在ル者ハ当ニ己レニ克テ、其好ム所ヲ慎ムヘシ、廟堂ノ君子若能己レニ克テ飲食ヲ非クシ、衣服ヲ惡クシ屋舎ヲ卑クセハ、下民何ソ敢テ奢侈ヲ極ムルコトヲ為シヤ、方今 国産ノ海外ニ鬻ク者其最大ナルハ繭糸也、今海内ノ民ヲ通視スルニ、其身ニ纏フ所繭綿相半ス、廟堂ノ君子若能己レニ克ツコトヲ為サハ、天下所産ノ繭糸尽ク海外ニ鬻クコトヲ得、以テ許多ノ輸入ヲ増加スヘシ、是一君子ノ克己、一ノ衣服ノ上ニシテスラ数百万金ニ当ル者也、況之ヲ万事ニ及ホスヲヤ、
○巷説ニ曰、古来儉素ヲ以興リ、驕奢ヲ以亡ヒタルハ常ニ聞ク所ニシテ、其驕奢ヲ以テ榮エ、儉素ヲ以辱メラレタルハ未曾テ聞カサル所也、欧米諸国ト雖蓋然リ、頃日李・法兩國ノ事以徵スヘシ、故ニ厚梁美味ヲ食ヒ、綾羅錦繡ヲ纏ヒ、金殿玉樓ヲ營スルコトハ、富リト雖賢者ハ為サズ、況貧時ニ於テヤ、窶ニ近来ノ施為スル所ヲ見ル

ニ、大ニ此ニ反スルニ似タリ、是所謂深謀遠慮ニ出ル者ニ非ンハ、必大活眼ノ所為ナラン、愚輩ノ未解シ得サル所也ト、

○巷説ニ曰、聞ク、近来某藩士卒ノ佩刀ヲ撤棄シ、門閥ヲ廢シ、四民ヲ混合シテ一ニセンコトヲ奏請シ、官許ヲ得テ國中ニ令シ、其貯蓄アル者ハ昨日ノ農工商賈モ今日ハ乘輿騎從國公ヲ擬シ、金閣玉堂ハ高ヲ厭ハス、珍膳美羞ハ多ヲ厭ハサラシム、曰、如是スルトキハ其榮華ヲ羨テ、情夫モ必興起シ、匹夫匹婦モ各自其業ヲ勉勵シ、遂ニ戸富家足ニ至ラン、然後始テ欧米諸國ト並立ツコトヲ得ヘシ、皇國ノ人未海外ノ事情ニ通セス、頑固ニシテ開ケサルカ故ニ、我先ツ断然トシテ之カ嚆矢タルニ非ンハ云々トノ藩論也ト、或曰、是天下ノ正氣ヲ撓折シ、奢侈ヲ國中ニ懲懲スルノ邪説ノミ、擯撥ノ術豈聞クニ堪ンヤ、此ニ由テ以テ國ヲ富シ兵ヲ強クセンコトヲ欲スルハ、其危キコト巨石ヲ抱テ溺ヲ援キ、硝薬ヲ負テ火ヲ救フヨリ甚シカラシ、其甚ト云フ所以ノ者ハ、乃其成績ノ万一

ヲモ期スヘカラサルノミナラス、随テ滅國ノ大患ヲ醸成スヘケレハ也ト、

○朝廷服制ノコトヲ宣フコト、僕カ聞ク所モ戊辰ノ春ニ在テ已ニ四年ニ及ヘトモ、未タ定制アラズ、因テ頃日街談ニ聞ク、欧癖諸官旧服ヲ革テ洋制ニ從ハンコトヲ欲スレトモ、物議ヲ慮テ敢遽ニ改易セス、故ラニ歳月ヲ延キ漸ヲ以革ントノ策ナルヘシ、若否ンハ何ノ憚ル所カアラシ、若憚ル所ナキノ制ヲ為サントナラハ、何ゾ羈遲シテ三年ノ久キニ至ント、尔後旧冬果シテ変時及ヒ旅行ノ服ヲ定メ玉フ、其制ニ正略アリ、上衣下裳ヨリ以テ帽ニ至マテ皆絨罽ヲ用フ、曰、其略制ハ庶人モ之ヲ用ルコトヲ許スト、是ニ於テ街談ニ又曰、是レ礼服及ヒ常服皆洋制ニ變スルノ漸ナルコト疑フヘカラスト、僕謂ラク、前説ト相符合スルモ亦奇ト云ヘシト、由テ窃ニ謂ラク、我邦上古ノ服モ亦之ニ類スル者アリト聞シコトアレハ、其形状ハ姑ク舍キ、其絨罽ニ限ルハ大ニ 國ニ害アリ、何トナラハ、一具ノ服其最下等ナルモ蓋十金ニ下ラジ、其

上等ハ乃四五千金、今十五金ニシテ之ヲ海内華族ヨリ士庶ニ至、人員大略三千五百万トシ、其婦女老幼ヲ除キ一千一百六十六万余人トシテ乗算スルトキハ、一億大小二万法アリトス、今大法ニ從フ、下此ニ効法アリトス、是皆貨財ヲ海中ニ投スルニ非ンハ、何レノ処ヨリカ之レ来ラン、而 官ノ期スル所ハ蓋此ニ止ラス、必從來ノ服ヲ一掃シ、天下ノ人ヲシテ老トナク釋トナク、男トナク女トナク、尽ク絨纈ヲ用ヒシムルニ在リ、果シテ然ラハ、五億二千五百万金ヲ投スルニ非ンハ得ヘカラス、其費亦大ナラスヤ、是故ニ僕ヲ以之ヲ議セハ、先ツ羊ヲ牧シ紡績ノ技ヲ学ヒ、之ヲ海外ニ求ルコトヲ須ズ 我ノ製スル所 我ノ用ル所ニ給スルニ至テ、然後此制ヲ為スモ亦晚シトセス、凡国ノ政度ハ事大小トナク、必衆心ノ離婦ヲ勸ヘ、国家ノ利害ヲ權テ、而后ニ定ムヘシ、今衆心不帰 国家ニ大害アルノ制ヲ定ムルハ何ゾヤト、

○兵部省ノ論也トテ窃ニ巷説ニ聞シコトアリ、曰、我邦二百隻ノ軍艦ヲ貯ルニ非ンハ、以辺海ヲ衛ルコト能ハ

ス、故ニ之ヲ貯ルヲ急務トス、然ト雖今一斉ニ之ヲ求メシコトヲ欲スルモ、 国力給ラサルヲ如何セン、依テ先ツ毎年求ル所五隻ト定メハ、四十年ニシテ具ハルコトヲ得ヘシ云々ト、又聞ク、今総テノ兵事ニ用ル所ノ金穀ノ定額ハ、海内諸藩ノ現石二十分の一ニシテ、即現米七十万石、之ヲ一石ノ価凡六金ニシテ四百二十万金也、今ノ分配スル所本省ニ八十二万金、海軍ニ一百九十二万金、陸軍ニ一百四十四万金、兵学寮ニ一十二万金、当時見存ノ軍艦十二隻ノ諸費六十万金、合計四百九十万金トス、之ヲ以定額金ニ減算スルトキハ、已ニ七万金ノ不足ヲ見ルト、然ルニ今年五隻ノ軍艦ヲ求テ二百隻ニ至ルヲ期シ、以四十年ニ及ハ、其費幾許ソヤ、而其金ハ何レノ地ニカ出ル、且軍艦大抵二十年ヲ以定壽トス、之ヲ過ルトキハ老敗シテ用ニ堪ヘズ、依テ第二十二年ヨリ以後ハ毎年十隻ヲ求ルニ非ンハ、二百ノ數ニ滿ルコト能ハス、然ラハ四十年ノ間惣計三百隻ヲ求テ始テ二百ノ數具ハラシ、而其一百ハ空ク廢物ト為ル也、今試ニ其費ヲ下ニ表

セシ、但軍艦五隻及ヒ之ニ備ル所ノ砲礮諸器ヲ合シテ、
其価七十万金、艦中一歳ノ諸費二十五万金トシテ算ス、

年初 壬申 価七十万金 費二十五万金

癸酉 同七十万 同五十万

甲戌 同同 同七十五万

中略

第廿年 辛卯 同同 同五百万

壬辰 同一百四十万 同五百廿五万

癸巳 同同 同五百五十万

中略

第三十 辛丑 同同 同七百五十万

二百 二千八百万金 合費一億一千六百廿五万金

価通計一億四千四百二十五万金

中略

第九年 庚戌 同同 同九百七十五万金

二百九十 雙価合計 四千零六十万金 合費一億九千五百万金

費価通計式億三千五百六十万金

第四十年 辛亥 同同 同一千万金

三百 雙価 四千二百万金 合費二億零五百万金

費価通計二億四千七百万

我邦今数十ノ軍艦アリトモ、欧米窃ニ指サシ笑テ之ヲ視
シノミ、彼焉ソ 我ヲ懼レン、若然ラハ辺海ヲ衛リ、外
侮ヲ防シコトハ、二百隻ヲ貯ルニ非ンハ、実ニ難カルヘ
シ、果シテ難カラハ其三十九年ノ間ニ費ス所ノ二億三千
五百六十万金ハ、全ク無用ノ剩費ニ属スルハ論ヲ待タス
シテ明白也、是故ニ先ツ前款ニ論スル所ノ教化ト財理策
トヲ務メ、士氣振ヒ 国富テ二百隻ヲ求メ、随テ自在ニ
之ヲ運用スヘキカラヲ得ルニ至テ、然後一斉ニ之ヲ求ル
ヲ佳トス、如是スルトキハ二百艦ノ価金二千八百万、其
歳費一千万、合計三千八百万ニシテ全備ヲ得ン、此法ニ
依テ之ヲ行ハ、十余年ニシテ此ニ至ルコトヲ得ヘシ、
何ソ四十年ノ久ヲ期スルコトヲ為シ、且金銀ヲ以之ヲ海
外ニ求ルハ、策ノ最下ナル者也、故ニ其製造ノ法ヲ学

ヒ 国内ニ於テ之ヲ製スヘシ、是長久ノ策也、頃日又聞ク、佃島ト鉄砲洲トノ間ノ河口ヲ填塞シ、河流ヲシテ偏ニ島東ニ注カシメ、島以南品川ニ至ルノ沿海ヲ濬ヘ、以テ軍艦ヲ繋クノ港ト為シ、且商船ヲ輻輳セシメテ内外貿易ニ便ナラシメントテ、測量家ヲシテ其功ノ成否ヲ逆ヘ測ラシムルニ、必成ルヲ以答ヘシ故ニ、其議將ニ濬海ニ決セントスト、因テ謂ヘラク、今ノ鉄砲洲ヨリ芝高輪ニ至ルノ地ハ、昔日海中ニシテ、即チ今日濬ヘント欲スル所ノ辺海ト異ナルコトナシ、然ルニ陸地ノ泥沙ヲ溝河ヨリ下タシテ海ニ輸スコト、転瞬ノ間モ休息スルコトナク、其辺海日月ニ浅キヲ加ヘ、漸ク変シテ市街トナリ、以テ今日ニ至レリ、故ニ昔年ノ海岸ハ今日ノ岸ヲ距ルコト已ニ数百歩ノ後ヘニ在リ、又即今退潮ノ時ニ於テ、其海岸ヨリ東方ヲ望ムニ、築キテ以テ市街ト作スヘキノ地、海岸ヲ距ルコト啻ニ数百歩ノミナラス、而ルヲ反テ濬ヘテ以テ深淵ト為サント欲スルハ遂クヘカラス、是自然ノ勢ニ悖レバ也、仮令万一之ヲ遂ルモ不朽ノ策ニハ非ス、且

之ニ由テ許多ノ民力ヲ奪ヒ、金銀ヲ費ヤス、豈 国家ニ利アラシヤ、蓋亦荒唐家ノ建議ナランノミト、

○巷説ニ曰、頃日駿河台近傍処々ニ柵門ヲ設ケ玉ヒシヨリ、街談・巷議騒然タリ、曰、是必從政某氏等ノ為ニ守備ヲ為ス者ニシテ、皇城ノ為ニスルニ非ス、若果シテ 皇城ノ為ナラハ、何ソ必シモ城北ニノミ設クルコトヲ為シ、其之ヲ設ケンコトヲ欲セハ、必之ガ辞バヲ作り、士庶ヲシテ非議スル所ナカラシムルニ非ンハ不可也トテ、畏コクモ

至尊ニ請テ 詔書ヲ下ニ示サレタル者ナルヘシ、去ル二月下旬、官省府県ニ下シテ拝閲セシメ玉ヒシ者是也、是乃暗ニ柵門ヲ設ルノ根基トセラレシ也、夫維新ノ初ニ方テ函根・新居等緊要ノ地及ヒ其他ノ関門毀撤一掃セラレシハ、其気爽ニ壯ト云ヘシ、而今反テ之ヲ 輦下ニ付益ス、是レ怯懦暗刺ヲ怖ル、ニ非スシテ、何ソ其人若榮利ノ念ナク、赤心 国ニ忠シ、患苦庶民ト共ニスルノ誠アラハ、天下ニ告ルニ必来テ吾ヲ殺セト云ヲ以テシ、自橋

上ニ露臥シ、利刀ヲ拔テ之ヲ頸ニ加ヘ、相俟ツコト年所ナルモ、誰カ敢テ来テ之ヲ刺サン、無用ノ柵門速カニ撤シテ可也ト、

○一道ヲ開キ一事ヲ成サント欲セハ、必先其人ヲ挙テ之ヲ任スヘシ、若之ヲ其人ニ非ル者ニ任セハ、害アリテ利ナカラン、朝廷大学校ヲ開キ玉ヒシヨリ、天下ノ医政一ニ此ニ委任シ玉ヘリ、而其政權ヲ執ル者皆狹隘固陋偏頗ノ小人ニシテ、西欧ノ学ヲ奉スレトモ之ヲ 我ニ採用テ利害ノ分アルコトヲ知ラサルノ徒也、故ニ其事ヲ行フヤ、己カ好ム所ハ不善ト雖、強テ之ヲ為シ、己カ好マサル所ハ善ト雖力ヲ極メテ之ヲ抵牾シ、医ノ正道ヲシテ世ニ行ハレサラシメ、天下ノ民ヲシテ万世ニ亘テ横天ノ患多カラシメントス、豈其人ヲ得タリト云コトヲ得ンヤ、 廟堂ノ諸賢素ヨリ医ニ非ス、焉ソ能医道ノ得失ヲ知シ、己ニ自知ラス、又之ヲ大方ニ問ハス、又其彼 我ノ優劣ヲ实地ニ考試セスシテ、或ハ之ヲ臆度ニ決シ、之ヲ想像ニ断シ、或ハ一偏ノ説話ヲ聞テ、遽ニ之ヲ信シ、

却テ其他ヲ審カニスルコトヲ為シ玉ハサルハ何ソヤ、今彼 我長短ノ大略ヲ論セハ、銃創及ヒ一切ノ外治ハ彼ノ長スル所ニシテ、傷寒及ヒ諸ノ内治ハ我ノ長スル所ナルコト弁ヲ待タス、夫一治一乱ハ氣運ノ然ラシムル所ニシテ、古来免カル、コトヲ得サル所也、今乱世ヲ以之ヲ言ハンニ、闔國ノ人員中ニ於テ、兵士八十ノ一ニシテ、兵士ナラサル者八十ノ九ナルヘシ、而古来軍中疫癘及ヒ水土ニ服セサルノ諸病内治ニ属スル者極メテ多キハ、史乘ノ記載スル所昭々タリ、故ニ兵士ト雖、銃創ノ如キハ佗病ト太抵相半センノミ、且其治乱ノ如キモ、古往今来ニ通算スルニ、治世ハ長乱世ハ短、縦令治乱相半スト為スモ、前數ニ由テ之ヲ算計スルニ、銃創治療ノ関カル所ハ、一千中二十五ニシテ、其九百七十五ハ其関カラサル所也、然ルニ今僅々二十五ノ為ニセンコトヲ欲シテ、偏ニ彼ノ方技ヲ取り、反テ其九百七十五ノ為ニスルノ治術ハ舍テ、顧ミサルハ、抑何ノ理ソ、若從來ノ医方用ヲ為サストセハ、必新古二ノ者ヲ實際ニ試ミ、果シテ其用ヲ為スト

為サ、ルトヲ明斷公裁シテ、然ル後之カ取舍ヲナスヘシ、
僕此事ヲ以屢彼輩ニ説督スレトモ、彼肯テ従ハサル者ハ、
小人輩素ヨリ効驗ヲ実地上ニ試験セハ、我ニ及ハサルコ
トヲ知レル故ノミ、其卑心惡ムヘキ者ニ非スヤ、又旧来
都会ノ時医一家ノ施療スル所ノ病人ノ數、大抵二百或ハ
二百五十、其最多キ者ハ三百人ニ及フモ亦間有之、而シ
テ其師弟僅カ五七人ニシテ其事ヲ理ス、今ノ大病院ノ如
キハ内外病人百余、若クハ二百内外ニシテ、三百ニ及フ
コトナシ、是天下ノ大病院僅カニ一家ノ時医ニ比較スル
コトヲ得ル者也、加之其病客十ノ八九ハ瘡毒及ヒ諸外治
ニ屬スル者ノミナルカ故ニ、猶一ノ外療医ノ宅ノゴトシ、
然ルニ一歳ノ定額金三万六千余、此外ニ官員ノ俸禄現米
六千五百三十余石、之ヲ教育ト治療トニ中分シテ、其一
半ヲ算スルモ、金一万八千兩、米三千二百六十余石ニ及
ヘリ、之ヲ彼ノ師弟五七人ニシテ事ヲ理スル者ニ比セハ、
果シテ如何ソヤ、其他大博士佐藤某者ニ越列幾堯尔ノ隱

名ヲ命シ手々相接統シテ氣脈貫通スルヨリ出タル名ニシテ、己ノ愛憎
心ヲ擅逞シ其親シカラサル所ハ曾テ顧視セサルノミナラス、
或ハ之ヲ嫌忌シ頻リニ己カ門人知己ヲ牽引、或ハ東校大病院ヲ佐
藤ノ私塾也ト云ヒ其官員多クハ佐藤ノ門ニ出、
タル者ナレハ也、下倣此、或ハ佐藤ハ私
塾ニ於テ爵位官職ヲ授クルナド云フ説アリト聞ケリ、若
一二ノ縉紳家ヲシテ顔面ト姓名トヲ変シ、東校ニ寄寓ス
ルコト二三句ニシテ、親ク其景況ヲ窺ハシメハ、必慘然
トシテ此道ノ振フヘカラサランコトヲ歎キ玉ハン、且藥
材ノ如キモ 皇漢医ノ用ル所ハ国産ノミニシテ尚余アリ
漢産藥品ノ用舎ハ別、
ニ説アリ、此ニ略ス、又以テ海外ニ醫テ多少ノ利ヲ得ヘシ、
欧医ノ用ル所ハ悉ク之ヲ海外ニ買ハサルコトヲ得ス、今
闔 國ノ病人欧藥ヲ服スル者ハ、僅カニ二三ニシテ、皇
漢医藥ハ七八ナルヘシ、其二三ニシテスラ横浜・神戸・
長崎ノ三港佐ノ二港ハ僕未ダ
之ヲ詳カニセズニ於テ買フ所ノ藥価モ、猶一
歳五六十万金ニ下ラスト聞ケリ、果シテ天下ノ医ヲシテ
変シテ欧トナラシメ、天下ノ病人ヲシテ悉ク欧藥ヲ服セ
シムルニ至ラハ、其価歳々數百万金ニ至ランコト諦カ也、

其化器械ノ費亦多カラストセス、夫天下ノ物民命ヨリ重キハナシ、若西欧医方ニ非ンハ、民ノ疾病必救フコト能ハスンハ、国財ヲ蕩尽シテモ其薬材ヲ買フヘシ、今ハ乃然ラサル也、且若一旦海表ニ事アリテ、藥品到ラスンハ、是ノ民ノ疾病ヲ如何セン、座視傍觀其斃ヲ待ンカ、由テ窃ニ願フ、朝廷此道ヲシテ公正ニ帰セシメ玉ハンコトヲ、但彼輩必曰ハン、局ヲ設テ薬ヲ製煉スルニ至ラハ、決シテ之ヲ他ニ買フコトヲ須タスト、此説大ニ不可ナル所アリ、繁ナルカ故ニ此ニ言ハス、

○嘗テ二人ノ談話ヲ傍聽セリ、乙甲ニ謂テ曰、子常ニ西欧ノ学西欧ノ事ヲ惡ムハ何ソ、甲曰、余惡ムコトナシ、乙曰、拳世歐ヲ模擬ス、今子独西欧ノ衣ヲ服セス、帽ヲ被ラス、食ヲ食ハス、飲ヲ飲マス、器什ヲ用ヒス、且常ニ我ヲ危クセン者ハ、必欧ナラント言テ咨嗟ス、是惡ムニ非スシテ何ソ、甲徐カニ謂テ曰、子余ヲ以惡ムトスル者ハ深ク思ハサルノミ、吾豈歐ヲ惡マンヤ、唯欧ノ歐

タル所以ヲ知ラスシテ、徒ラニ之ヲ模擬スル者ヲ悼ムノミ、吾此ニ倣ハサル者ハ忍ヒサルカ故ノミ、惡ムニハ非ル也、苟 国ニ益アラハ吾之カ魁タラン、何ノ倣ハサルコトカ之アラント、乙曰、子カ漢土聖賢ト云者ノ道ヲ信スルハ何故ソ、甲曰、其行フ所善ニシテ、其言フ所万世ニ亘テ一毫モ違ハサルカ故ノミ、行フテ而善、言テ而違ハス、誰カ之ヲ信セサラン、但聖賢ノ言行ト雖 我国体ニ合ハサル所ハ舍テ取ラサルノミ、夫孔子ノ学ハ人情ニ切ニシテ、政事ニ明カ也、故ニ欧夷スラ猶或ハ之ヲ取テ政科ニ収ム、彼其道ヲ重ンスルヤ知ルヘシ、是レ天下国家ヲ平治センコトヲ欲スル者ハ、必是ノ道ニ由ラサルコトヲ得サルカ故也、吾豈信セサルコトヲ得ンヤト、乙曰、余子ヲ疑フコト久シ、而今其疑団釈然タリ、吾亦力メテ之ヲ学ハント、遂ニ国家ヲ盛興スルノ策及ヒ兵備等ノ談ニ及フ、僕窃ニ之ヲ聞テ、其卓識ニ服セリ、今其長キヲ厭テ此ニ記セス、

右二十一条皆是巷説・街談、忌諱ニ触ル、ノ言ニシテ、
宜ク嫌疑ヲ避クヘキ所也、然リト雖、其避クヘキト否
トハ、唯人ニ由ルノミ、今閣下ノ賢其明雋々、其智炯
々、其量河海ノ如ク、其功山岳ノ如シ、是ヲ以テ中国
及ヒ荒服ノ外閣下ノ賢名ヲ聞テ欽仰セサル者ナク、百
官有司ノ天下国家ヲ憂ル者ハ、閣下ノ賢ニ依テ以テ永
ク治安ナランコトヲ願ヒ、田夫市商ノ父母妻子ヲ養フ
者ハ閣下ノ徳ニ頼テ、以テ長ク康寧ナランコトヲ冀フ、
閣下已ニ如此ノ徳アリテ、又如此ノ名望アリ、今
藩公ヲ弼ケ、闕下ニ来リテ、將ニ時事ヲ論セントス、
天下方ニ其風采ヲ想ヒ望ム、唯曰ク、后来ラハ其蘇セ
ント、僕下情ニ於テ少シク聞ク所アリ、已ニ聞テ而言
ハサルハ忠ニ非ス、伝ニ曰、禹ハ昌言ヲ拜スト、又曰、
周公ハ哺ヲ吐キ髪ヲ握ルト、是閣下ノ追慕スル所也、
今之ヲ閣下ニ以聞スル、何ノ避ル所カアラン、夫七百
年来ノ大弊ヲ矯メ、首トシテ

王政復古ヲ唱へ、乱賊ヲ咄嗟ノ間ニ制シ、天下ノ億兆
ヲシテ始テ

天日ノ威光ヲ仰望マシムルノ偉勲、専ラ我藩ニ在ルハ
世ノ普ク知ル所ニシテ、蔽フヘカラサル者也、今ヤ藩
兵ヲ率テ闕下ニ来リ玉ヒシハ、蓋皇后ヲ護衛シ、
勅詔ノ辱キヲ拜謝シ、政弊ヲ矯正シ、民庶ヲ撫安
シ、国威ヲ光耀シテ、以テ我藩ヲシテ靡不有初鮮
克有終ノ譏リ無ラシメンコトヲ欲シテ也、僕賤且癡昧
ト雖、身ヲ王事ニ効シテ藩公ノ鴻恩ニ報フヲ以テ
義トス、豈言ヲ尽サ、ルコトヲ得ンヤ、伏シテ願クハ、
仔細ニ世道人心ニ注意シ、弊ヲ矯メ、俗ヲ化シテ、以
テ既ニ初アルノ終リヲ克クシ、未タ到ラサルノ災ヲ滅
シ玉ハンコトヲ、誠惶頓首、拜上、

明治四年辛未六月

僕先年政ノ由テ起ル所以ノ源ヲ考へ、我 国体ニ由テ

其次序ヲ定メ、一図譜ヲ製テ窃ニ治道本末図ト名ケ、
將ニ奏進セントシテ果サス、今是ノ書ヲ上ルニ方テ、
偶之ヲ故紙中ニ得タリ、由テ再ヒ校訂シテ書後ニ付シ
以テ高覽ヲ煩ハスト云、

治道本末図題言

生成天地之神、是謂產靈、天地已成、而人物生焉、人物
已生、而有倫理焉、倫理者人之道也、有道、而后君臣之
分定焉、分斯定而不動、百王一系、与天地日月悠久者、
即 我之國体也、因國体、權氣運、以立治内馭外之本根、
是謂國是、國是斯立、而行諸天下、是謂政、政者祭也、
上祭祖先、致孝敬、而使下歸忠誠、是即政之要也、已得
政要、則万機從出焉、故神祇官也者、所以統万機也、夫
聖王之於民也、必先教之、而后御之、其於政也、必先学
之、而后行之、故設文部、欲使民無犯、須先布法令、故
設式部、民有敢犯、則宜刑以懲之、故設刑部、欲富國強
兵、宜拓土地、勸農桑、賑貧窶、故設民部、儲穀糧、蓄

貨幣、不可無倉廩、故設大藏、外内有寇賊、當以兵制之、
故設兵部、宮中不可無護衛、春宮不可不輔導、内事
不可不料理、故設宮内、蛮夷交際極多事、不能總理之於
政府、故別設外務、宮殿庁庫、可經營、可補葺、故設工
部、朝野之正邪、不可不警迹以糺判、故設彈正、凡省
台、宜更設学寮司使、分職以理事也、而海内之広、恐万
機不能普達于辺陬、故設鎮守、以統理藩臬矣、凡学寮司
使及藩臬者、當以省台及鎮守之心為心、省台及鎮守者、
當以官之心為心、官者、當以政要為本、政要者、當以國
是為本、國是之本、在國体、國体之本、在道、道者、乃
出於天地愛育之理、產靈生成之德焉、其目乃倫理、其帰
乃仁矣、唯仁者能為体產靈之心、能保天下之民、是以、
能与民偕永承景福、未有不仁而能全其身、能保其家、能
有其天下者也矣、乃書以発治道本末図之旨趣云、

明治二年己巳十月十四日草

治道本末図

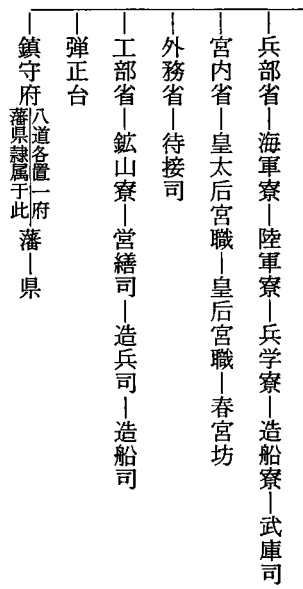
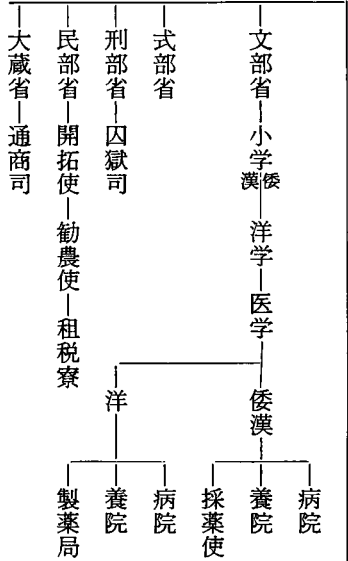
● 産靈
 天地万物之本源也、其至于所以生物之理、蓋雖聖人不可得而推究焉、若夫歐夷之究理学、乃唯推測其未流而已、豈能得窺其玄妙幽微之感哉、彼唯究其未流之細理、因以欲医神奇靈妙人身之疾病、不爽者鮮矣



国是 政要

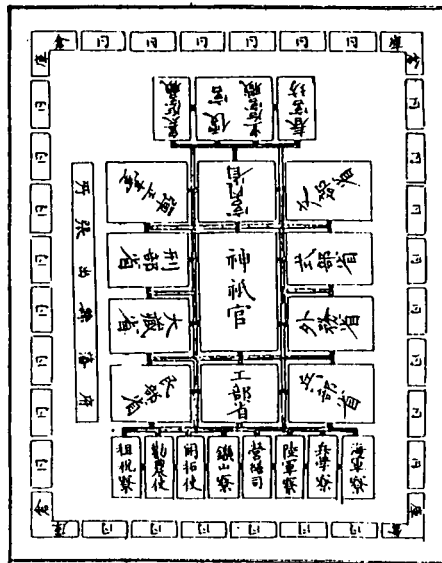
神祇官 即是為政処所 謂祭政一致

雅楽寮



窃ニ諸官省ノ形勢ヲ觀ルニ、各自威權ヲ争ヒ、名利ヲ競テ互ニ相視ルコト猶敵国ノ如ク、彼ニ奮テ而此ニ利セントスルノ状、齊ク是 国家ノ為ニスルノ所ナルコトヲ知ラサル者ノ如シ、是器量ノ小識見ノ陋ニ出ルノ弊也ト雖、抑亦彼此距離シ相親近セサルニ由ル、是故ニ一字ノ大厦ヲ營シテ、之ヲ 神祇官トシ、省台其周圍ニ環立シ、職寮司使又其後ニ付置スルコト下ノ図ノ如クセハ、畜ニ前款ノ弊ヲ救フノミナラス、庶務咄嗟間ニ弁シ、且因テ以多少ノ人員ヲ省クコトヲ得ヘシ、但其圖中ニ載セサル所

廳衙位置略圖



ノ学司ハ此ニ列スルモ、其宜キ所ニ非ス、宜ク別ニ便宜ノ地ヲトスヘシ、
— 廊

行囊燼余 第二集

行囊燼余 第二集

慶応丁卯ノ杪冬、余篤疾ニ罹リ、已ニ死シテ復タ蘇リ

ヌ、明年春初 京阪ノ間ニ事アルヲ病辱上ニ聞キ、上都ノ懐切也ト雖、四体ノ意ニ随ハサルヲ以果サス、春季ニ至テ瘡ユルコト強半、首夏残痾ヲ帯テ遂ニ郷ヲ辞シ三都ノ間ニ彷徨スルモ、素ヨリ体弱才非、為ル所アルコト能ハス、但其歳月ヲ費スノ多キヲ以テ聞ク所ノ街談・巷説モ亦多カラストセス、中ニ就テ、其時事ニ渉ルノ談ハ、或ハ筆シテ囊ニ収ム、辛未ノ夏ニ至テ、囊ノ胸腹將ニ裂ントス、因テ繕写シテ笈ニ藏ム、時ニ某藩某氏ノ將ニ参議ヲ拜セントスルニ会セリ、由テ呈シテ以テ民情ヲ察スルノ資ニ充ツ、尔後今日ニ至テ、又ニ春秋ヲ経ヌ、而囊復タ殆裂ク、故ニ旧ニ仍テ写藏シ、以テ上呈スヘキノ賢者ヲ待ト云、

凡ソ物皆君主アリ、身ノ腦、家ノ父、国ノ君、天ノ日、其尤著キ者也、今身ニ便ナラサルヲ以其腦ヲ更メ、家ニ便ナラサルヲ以其父ヲ易ヘテ可ナランヤ、但已ムコトヲ得スシテ、子孫其父祖ニ代ハルコトハ或ハ有之、他人ヲ以己レカ父ニ易ルコトハ欧米ト雖蓋為ズ、特リ其国君ニ

於、敢テ之ヲ為ス者ハ何ソヤ、是他ナシ、民ニ廢立ノ權
力アリテ、君ニ制馭ノ威徳ナキカ故ニ、民己カ便ニ随フ
者ノミ坤輿ノ大、其国千百ト雖悉ク然ラスト云コトナシ、
唯我 皇国開闢ヨリ今日ニ至マテ、君民上下ノ分定リテ
紊レス、讓立制馭一ニ天理ニ随フ、是真ノ国君也、他ノ
千邦万国ノ君ト称スル者ハ、皆其国ニ禄仕シ、君主ノ名
ヲ仮ルノ官員ノミ、其身真君ニ非、其執行フ所亦君ノ事
ニ非、当ニ之ヲ官員ニ齒列スヘシ、豈国帝王ヲ以之ヲ
呼フヘケンヤ、夫身家ト天ト己ニ君主アリ、地特リ主ナ
カルヘカラス、前説ニ由テ之ヲ定メンニ、真主アルノ国
ヲ以地ノ君主ト為ヘシ、 皇国ハ真ニ坤輿ノ君主ナルカ
ナ、此レ是ノ主邦將ニ変シテ、共和政治ノ醜俗ト作ラン
トス、噫世ニ之ヲ救フノ賢者ナキカ、
○日新真事誌ニ、孝子都城県ノ漁夫兵袈婆夫妻ノ事ヲ載
セ、至孝ヲ以テ之ヲ称ス、余読ムコト数過、其孝尋常ニ
非ス、 朝廷之ヲ賞シテ金二円五十錢ヲ賜フ、其妻ハ則
一円二十五錢、余以為ラク、卑^(砂カ)身ヲ以テ 天寶ヲ辱

ス、孝ノ徳タル、亦偉ナル哉ト、且感シ且泣ク、既ニシ
テ他ノ一葉ヲ覽ル、亦 天寶ヲ拜セシ者アリ、養蚕ノ民
也、蓋蚕繭美惡アリ、中ニ就テ尤美ナル者ヲ扱ミ、分テ
三等トナス、其第一等ノ者三人、即某国某郡某姓名、其
賞各金一万匹、第二等ノ者三人、某国郡姓名、各金七千
匹、第三等ノ者三人、各五千匹、読テ此ニ至テ痛哭長大息
シテ曰、人ノ道タル、惟孝ヲ大也トス、是故ニ我 邦 古
先王ヨリ 宗廟ヲ敬祀スルヲ以テ政トス、夫賞ハ善ヲ勸
ムル所以也、其賞賚ノ多寡ヲ以テ之ヲ視ルニ、其孝ヲ賞
スルハ已ムコトヲ得サル者ノ如ク、然リ、是果シテ何ノ
意ソ、蚕ハ勉メ養ハサルヘカラス、孝ハ為サ、ルモ亦可
也ト云フ者カ、將タ孝養五十年ノ艱苦ハ養蚕浹旬ノ勞ニ
如カズト為ルカ、不孝ニシテ君ニ忠アル者ハ、古ヨリ未
曾テ之アラサル也、天下皆不忠不孝ナラハ、繭アリト雖
誰ト共ニカ社稷ヲ保チ、
宗廟ヲ守リ玉ハン、是輔弼臣ノ三思セスンハアルヘカラ
サル所カ、

○尊卑ヲ養ヒ、又之ヲ役スルハ自然ノ理也、故ニ君臣ヲ養ヒ、又之ヲ役ス、父ノ子ニ於ル、夫ノ妻ニ於ル、人ノ牛馬ニ於ル、皆然ラスト云コトナシ、窃ニ異ム、欧米男女夫妻ノ尊卑ノ分ナキノミナラス、女反テ尊ニ居リ、男反テ卑ニ居ルコトヲ、我邦ノ如キモ亦来此醜俗ニ倣ハンコトヲ欲スル者多シ、其説ニ曰、倭漢ノ俗タルヤ、女男ヲ尊フコト君主ノ如ク、男ノ女ヲ卑ンテ之ヲ使役スルコト、畜ニ奴隸ノミナラス、又将ニ牛馬猫狗ノ如クナラントス、是ヲ以テ女ハ生涯一夫ヲ守ルニ終ラシメ、男ハ一妻ノ外数妾ヲ蓄ヘ、且快ヲ倡妓ニ取ル、妻若佗ノ男子ニ通スルトキハ、姦ヲ以テ之ヲ律シ、又日ヲ閨門ノ内ニ終ルヲ以其分トシ、猥ニ出テ外人ニ接スルコトヲ戒ム、而男ハ酒樓倡家其之ク所ヲ縦ニス、又前妻已ニ死シ、或ハ之ヲ逐テ後更ニ他婦ヲ娶ルコト数回、若ク八十数回ニ至ルモ、世以テ常トシテ異ム者アルコトナシ、而女ハ再醮ヲ為サ、ルヲ法トス、夫男女同ク是人也、天何ソ男子ニノミ自由ノ權ヲ与ルノ甚クシテ、女子ヲ束縛スルノ酷

ナルヤ、苟欧米ノ文明ヲ慕ヒテ、日新ノ目的ヲ其域ニ立ル者、何ソ速ニ此陋習ヲ一洗シテ、其美俗ニ移ルノ所置ヲ為サ、ルヤト、余曰、嗟是何ノ言ソヤ、夫レ男女ヲ養ヒ、女男ニ養ハル、ハ倭漢欧米ノ同キ所也、今ヤ勞動刻苦シテ以子婦ヲ養フ、男子何ノ天怒ニ触レテカ其逸スル所ノ制ヲ受ン、女子何ノ天怒アリテカ愛養ノ恩ニ報フコトヲ為サス、逸居シテ其勞スル所ノ男子ヲ制セン、毎ニ聞ク、欧米ノ俗ハ男子煙ヲ婦前ニ喫セス、飲食臥寐、行走乘駕皆妻ヲ先ニシ、夫之ニ從フト、是悖理枉道ノ俗ニシテ、彼ノ蛮夷タル所以、乃是也、説者之ヲ美トセハ宜ク居ヲ欧米ノ地ニ移シ、之ヲ己ノ家ニ行フヘシ、今之ヲ新聞紙ニ載セテ天下ニ公布シ、以テ政府ヲ懲瀆シ、以テ愚民ヲ陷溺ス、悪ムヘキノ甚キ者ニ非スヤ、

○近来政令ノ先ニスル所ハ、欧米諸国ノ外貌ヲ摸擬シ、従前素樸ノ俗ヲ目スルニ野蠻ヲ以テシ、其姿態ヲ去テ彼ノ靡麗光華ノ状ニ就カシムルニ在リ、是故ニ首トシテ橋梁ノ架造ヲ變シ、屋舎ノ結構ヲ更ヘ、衣服輿車ヨリ以テ

凡百器什ノ微ニ至ルマテ彼ニ取テ、此ニ用ルヲ以テ務トス、故ニ学ヲ所モ亦其本体ヲ舍テ、唯枝葉ヲ之レ事トス、是レ古人ノ所謂崇飾其末忽棄其本皮之不存毛將安付ト云者也、今ヤ 朝廷富国ノ目途未タ立タス、貨財日ニ耗シ国債月ニ加ハリ、民心散セント欲テ、騷擾相踵キ、国威罄ルニ垂トシテ侮蔑將ニ至ントス、如是ニシテ其国ノ亡ヒサルコトハ、古ヨリ未タ之アラサル也、夫貨財已ニ殫キ、蒼生已ニ困スルニ至テ、民衣食ヲ得スンハ豈袒肩裸体野蛮ノ態ヲ為サ、ラシメンコトヲ欲スルモ、豈得ヘケンヤ、況毛織ノ服石造ノ室ヲヤ、是ニ由テ之ヲ觀レハ、今ノ文明ノ外貌ニ進マシメンコトヲ務ムル者ハ、即野蛮ノ姿態ニ陥ンコトヲ務ムル者也、

○洋教ノ国患ヲ為スヤ大也、若 我民ヲシテ之ヲ奉セシメハ、唯風俗ヲ乱スノミナラス、 国財ヲ海表ニ投スルノ害アリ、亦焉レヨリ甚キ者アリ、若一旦海表ニ事アラハ、奉教ノ者ハ乃皆敵兵也、豈懼テ而警メサルヘケンヤ、之ヲ防クノ法ハ、須ク令ヲ出シテ敵ニ之ヲ奉スルコトヲ

禁シ、神典ニ基キ、聖經ニ因テ国教ヲ設ケ、大小ノ神社ヲ各府各県ニ置キ、其構造ヲ壯麗ニシテ之ヲ施教場ト為シ、神職之ガ教師ト為リ、其衣冠ハ古制ニ由テ、以テ塵俗ト異ルノ制ヲ定メ、皆清肅嚴整ニシテ庶民ヲシテ帰向尊信セシムルヲ以テ旨トシ、庶民ノ之ニ浸潤シテ死ヲ見ルコト帰スルカ如クナルコト、今ノ親鸞宗ニ於ルカ如クナランコトヲ要スヘシ、蓋聖經ハ我 神祇ノ心ト暗ニ相符スル者也、故ニ論語ノ始メテ我 中国ニ入ルヤ 応神天皇首トシテ之ヲ学ヒ玉ヒテヨリ、一千五百有余歲列聖相繼テ之ヲ学ヒ、是ニ由テ以テ天下ヲ治メ玉フコト今日ニ至レリ、故ニ取テ以テ 国教ニ充ルモ、誰カ之ヲ非ト云ン、宜ク蓄害ノ未タ至ラサルニ及テ速ニ此ニ從事スヘシ、豈一日モ之ヲ緩ニスヘケンヤ、夫 政令ノ繁碎ナルモ、其瓊末ノ事ニ至テハ尚恕スヘシト雖、宗教ノ如キハ国ノ大事存亡ノ係ル所、一日禁セサルトキハ万世ノ患害、後世 政府之ヲ除ント欲スルモ、已ニ億兆ノ心腸ニ浸淫スルヲ以、如何トモスヘカラス、二三ノ卿相迷ヲ

今日ニ取ラハ、万世ノ 神系絶ニ異日ニ就シ、是レ此ノ 奉教ノコトハ大事ノ恕スヘカラサル者ニ非スヤ、卿相ノ 持論ハ我其如何ヲ知ラスト雖、我ハ夷種ノ臣僕タルコト 能ハス、故ニ敢言憚ラサル者也、然リト雖、今世懸瀑転 石ノ勢、卑賤微力ノ能ク支ル所ニ非ス、願クハ英邁ニシ テ且爵位權威アラン人ノ早キニ及テ、之ヲ救ヒ玉ハンコ トヲ、

○有名ノ一儒士嘗テ余ニ語テ曰、聖者ハ必シモ漢土ノ人 ノミニアラス、仏蘭西ノ那勃列翁^(ナボレオン)、魯西亞ノ歴山王^(レハサヤウ)、阿 米利加ノ華聖頓^(ワセントン)、亦皆聖也ト、余又一日一国学翁ニ問テ 曰、今ノ世ニ方テ 皇国ノ事ヲ講センニハ、邈タル彼 ノ 天七地五ノコトハ存シテ、而甚タ弁セスシテ可ナラ シカ、如何ト、翁曰、不可也、若シ之ヲ説カスンハ学ニ 根底ナシ、故ニ前哲ノ是ノ学ヲ攻ムル者モ、皆 神代ノ コトヲ講明スルヲ以、己レノ任トスト、余窃ニ二人ノ言 ノ完璧ニ非ルヲ疑フ、請フ、之ヲ弁セン、夫レ聖トハ何 ノ称ソ、世ヲ治ムルコト堯舜ノ如ク、教ヲ垂ル、コト孔

子ノ如ク、一動一止、片言隻行万世之レニ法リテ、纖毫 ノ弊ナキ者是之ヲ聖ト云シノミ、彼ノ三人ハ何等ノ者ソ、 其為ル所異同ナキニ非ス雖、之ヲ要スルニ其億万ノ無辜 ヲ殺シ、天下ニ横行シテ不仁ヲ為スハ一也、唯華氏少ク 恕スヘキノミ、三氏何ソ聖タルニ在シ、果シテ之ヲ聖ト センカ、秦始皇・漢高及光武・唐ノ太宗・宋元明清ノ初世、 我カ清盛・□□・尊氏・信長・秀吉・家庸^(康)ノ諸人皆聖ヲ 以テ目センカ果シテ然ラハ夫ノ善ト云ヒ賢ト曰ヒ、良ト 曰ヒ、哲ト曰ヒ、以テ英雄豪傑ニ至ルマテ、儒士ハ皆之 ヲ聖ト称セン、何ソ其品藻ノ濫ナルヤ、又国学翁ノ言ハ 我素ヨリ其然ルヲ知ル、然レトモ人或ハ空談寓言トシテ 信セサルハ、古来乃然リ、今世ハ殊ニ臆度ヲ去テ、唯実 測ノミ之レ取ル、是ヲ以テ人益々信セス、人信セスンハ 之ヲ強ルモ益ナシ、今刺々哨々トシテ無益ノ弁ヲ為スト モ、何ソ 国家ニ補ヒアラン、然リト雖、事皆本源ナカ ルヘカラス、

神武天皇已ニ 皇考妣ノ在マニアリ、 考妣モ亦 皇考

妣アルヘキ也、逐テ而溯リ遂ニ兩産靈ニ至リ、更ニ涸テ 常立御中主ニ至ル、是 神典ノ伝ル所ニシテ、畏コクモ我曹ノ奉読スル所、臣子タル者信セスシテ可ナランヤ、然レトモ之ヲ以テ国外ニ誇ルハ其宜キ所ニ非ス、夫 我邦ノ事務古来唯 邦内ニ止レリ、佗ハ三韓ノ服従スルコトアルノミ、今ハ乃然ラスシテ、已ニ全坤輿ノ公交アリ、而其諸国モ亦各自天地剖判ノ説アリテ、皆 我カ伝ル所ト同シカラス、其不同説ヲ取テ以テ相角スルモ、豈勝敗ノ分判然タルニ至ルコトヲ得ンヤ、故ニ 神代ノコトハ存シテ而甚タ論セス、専ラ

神武天皇以還ノコトヲ講究シテ可ナランカ、是レ疑ヲ二先生ニ存スル所以也、

○欧米諸土ヲ指テ文明開化ノ国ト称ス、余其政教風俗ヲ聞クニ、其実ハ四字ヲ以テ目スヘキ者ニ非スト雖、姑ク世人耳目ノ慣ル、所ニ由テ之ヲ呼ソ、夫文明国ノ官ニ在ル者ハ、貴トナク賤トナク、文盲無学ノ者アルコトナシ、我邦ハ乃此ニ異リ、顯官高位ニ居テ學術アル者ハ

未曾テ之ヲ見ス、此ニ篤疾ニ嬰レル者アラシニ、老練ノ医ニ依ラスシテ葉舖ノ童奴ニ托ス、童奴素ヨリ医ヲ学ハス、由テ手ニ随テ藥ヲ劑シ、以テ暗投妄施ス、之ヲ服シテ斃レサル者ハ鮮シ、今夫一行ノ洋書ヲモ解スルコト能ハスシテ、其政事ヲ模倣ス、暗投妄施ノ害其ノ免レサル所ニ在リ、斃レサランコトヲ欲スルモ得ヘケンヤ、況 倭漢ノ治道ニモ亦未タ通セサルヲヤ、嘗テ英吉利人某者 我顯官某者ヲ調弄セシヲ伝聞セリ、英人問テ曰、子ハ圖ヲ画スルノ筆法ヲ知レルカ、答テ曰、未也、曰、算術ヲ学ヒタリヤ、曰、未也、曰、子カ国歴世 天皇ノ尊号及ヒ其年号ヲ記スルヤ、本国ノ長短、広袤、周圉ノ里数、又其乾田幾方里、水田幾方里、男幾万口、女幾万口、皆知レルヤ否、曰、皆未知也ト、顯官去リ又英人喟然トシテ人ニ語テ曰、嗚呼、人ヤ生レテ四五十歳、一モ学フ所ナシ、何事ヲ為テカ此ノ春秋ヲ送リシ、其識ル所ナキコト如是キハ、三歳ノ児ト何ソ異ラン、彼ノ人ニシテ彼ノ位ニ居ル、日本ノ人ナキコト知ルヘシ、又以テ 国政ノ

拳ラス、日ニ貧困ニ赴クヲ知ルニ足ルト、今ノ官ニ在ル者ハ世ノ擾乱ニ方リ、雨矢霰彈ノ中ニ於テ、唯砲礮ヲ執テ以テ折衝セシムヘキノ人ニ非ンハ、巧言市媚祿ヲ干メ利ヲ釣ルノ徒ニシテ、其四五十年ノ学ヲ所モ亦此ニ従事スルノミ、是故ニ干祿釣利ノ詐術ニ於テハ、往々人意ノ表ニ出ル者多シ、而其修身齊家、治国安民ノ事ニ至テハ、未曾テ耳目ニ触レサルヲ以テ其識レル所ナキハ固ヨリ也、其愚已ニ如是シ、而喬々タル木顛ニ居ル日本、無人ノ嘲侮ヲ受ル、亦宜ナラスヤ、朝廷若シ勇断猛決シテ此輩ヲ一掃シ、広ク賢良実学ノ士ヲ求メ玉ハ、天下豈其人ニ乏シカラシヤ、今夫猫狗ハ以テ鼠ヲ捕ヘシムヘシ、以テ鹿ヲ獵ラシムヘシ、焉ソ能ク変々化々雲ヲ起シ、雨ヲ致シ、天々矯々模捉スヘカラサルコト、夫ノ神龍ノ如クナラシムルコトヲ得ンヤ、朝廷早ニ及テ之カ所措ヲ為シ玉ハスンハ、舊害ノ到ランコト日ナカラン、

○漢字可廢ノ説近年盛ニ世ニ行ハル、之ヲ紙上ニ見、之ヲ談話ニ聞ク者、畜ニ数十回ノミナラス、是皆無識阿世

ノ徒ノ説ニシテ、絶テ其可否ヲ知ラサル者也、果シテ之ヲ廢セハ、必彼ノ国字ト称スル所ノ仮字、若クハ片仮名ヲ用ン、夫漢学ノ我邦ニ入リシヨリ以降一千五百年、漢語ノ行ハル、ヲ以テ 国言ノ自然ニ湮晦セシ者十ノ七八、其「スメラミコト」ヲ 天子ト訳シ、「アメツチ」ヲ天地、「ヒシリ」ヲ聖人、「コソ」ヲ去年、「ウツクシム」ヲ寵愛、「モロヒト」ヲ諸人、「マレヒト」ヲ客ト云ノ類、漢語ヲ以テ反テ 我邦ノ語ヲ訳セスンハ通シ難キニ至レリ、此平常ノ語スラ尚如是シ、況ヤ 奈良ノ朝以前ノ語ニ至テハ、専門ノ学者有テ之ヲ註シ之ヲ疏スルニ非ンハ、解スヘカラサルヲヤ、古事記・万葉集等ヲ見テ、以テ其難キヲ知ルヘシ、且味噌・醬油・薬罐・鉄瓶・土瓶・茶碗等ノ上古ニ無クシテ今世ニ有ル者ハ、未ダ始めヨリ別ニ国称アラス、是等ハ皆新タニ名ヲ与ヘンカ、若シ旧称ニ仍ラハ漢字ノ弁シ易キニ如カス、加旃人家日用ノ手簡、帳簿ノ類、譬ヘハ向暑ノ砌ニ候ヘ共、愈御壮健ノ十二字、若シ国字ヲ以テセハ、紙筆ヲアツサニナリナ

ントスルノヲリカラニハサムラヘトモ、イヨイヨオンサ
カンニオンスコヤカニ、四十一字ノ長キニ費ヤスヘシ、
又帳簿ヲ以之ヲ言シニ、已ニ漢字ヲ廢スレハ字音ナシ、
若シ第一大区小二区本石町四町目越前屋善左衛門ノ二十
字中ニ於テ、目字ヲ除クノ外ハ皆音読也、又明治六年六
月廿三日金一万三千五百十三兩貸ノ二十字ハ、イカゞ書
クヘキ、議者必曰ン、カムヤマトイハワレビコホホデミ
ノスメラミコトノ、アマガシタシロシメシハジメツト
シヨリ、フタチトセマリ、イホ、ミソ、ミトセニ、アタ
ルトシノ、ミナツキ、ハツカマリ、ミカトイフヒ、コガネ、
ヨロヅ、ミチ、イホ、トラマリ、ミマル、カシニキ、ト
記スヘク、又ハ、アキラケク、オサマレルテフトシノナ
ノムトセニアタルトシノ云々、其金ノ數ハ欧米等ノ法ニ
依テ、万千百十等ノ數目字ヲ用ヒス、唯コガネ、マル、
一三五^{一三}ヒミイヒミナンド記スヘシト、其冗長ニシテ且遽カニ解
シ易カラサルヲ如何セン、未タ漢字ノ簡易ニハ若カサル
也、又国字ハ之ヲ讀ムニ日晷ノ費ユルコト漢字ニ倍蓰ス、

余先年国字ノミヲ以テ漢籍一葉ヲ訳セシカハ、四葉余ニ
ナリス、因テ人ヲシテ之ヲ流読セシメ、余其原文ヲ取テ
之ヲ讀ミ、以テ其遲速ヲ試ミシニ、余已ニ畢レトモ彼未
タ二葉ヲ終ラス、而其文ハ未タ半ニ至ラサル也、不便ト
云フヘシ、但漢字ハ字數多ク筆画繁ナル故ニ、記憶ト作
字トニ便ナラサルノミ、然ト雖其日用ノ字ハ幾ハクモナ
シ、又其作字ニ行草ノ体アリ、譬ヘハ候ノ字ヲ「𠄎」ノ
三画、或ハ「、」一画ニ作ルカ如キ、之ヲ仮字ニ写サハ
さむらふノ四字ニシテ十三画、又片仮名ニ写サハ八画、
若シ之ヲ洋字ニ写サハ又之ニ倍スヘシ、今若シ一紙ノ手
簡ヲ甲ハ從來ノ文、乙ハ片仮名ヲ以テ作ランニ、甲已ニ
全クシテ乙ハ未タ三分ノ一ニ至ラサルヘシ、余試ミニ議
者ト齊ク作テ、其遲速ヲ角センコトヲ願フ、議者敢テセ
ンヤ、否、此ニ由テ之ヲ考ルニ、全一坤一輿皆其国字ヲ
廢テ、漢字ヲ用ルヲ可トス、今其功用ノ最大ナル者ヲ挙
テ之ヲ論サン、夫ノ仰テ蒼々茫茫タル者、我が邦之レヲ
「アメ」ト云ヒ、英ニ之ヲ「ヒーウン」ト云ヒ、蘭ニ

「ヘーメル」ト云ヒ、独逸ニ「ヒンメル」ト云フノ類、

其語ト字ト共ニ異ナルカ故ニ、甲ノ国字、乙国其何物ナルヲ知ルコト能ハス、若シ万国皆漢字ヲ用ヒハ、一ノ天ノ字ニシテ万国皆其茫々蒼々日月ヲ県ケ、雨雪ヲ降スノ所タルヲ知ル、其功用亦大ナラスヤ、議者或ハ曰ン、電機ノ通信ニ便ナラスト、余曰、是実ニ然リ、電信若シ舎ツヘカラスンハ、我国ノ如キ簡捷ノ語或ハ羅匈、若クハ英吉利ノ如キ、博ク五洲ニ通スル語一ヲ採リ、通線諸国相議シテ之ヲ電信ノ語ト定メ、其語ニ通スル者ヲ以テ電信ノ吏ニ具ヘテ可也、漢學者流或ハ漢字電信ニ用フヘシト曰フ者アリ、其レ或ハ然ラン、是故ニ英吉利ノ学医合信モ亦已ニ其説アリ、然レトモ上説ノ便ナルニハ如カサランカ、如何、

○語格ノコトヲ論スルハ、瑣々タル細事ニ拘ハルニ似タリト雖、然ラス、欧米等ノ諸国ニ於テハ、学科ノ一ニシテ、幼学ノ初歩ハ必此道ヨリ進ム、其他国ノ語ヲ学フ者モ亦先ツ本国ノ語格ニ熟シテ、然後此ニ従事スルヲ以テ、

己ノ国語ヲ知ラサル者ナシト云、我邦ハ否ラス、語格

ヲ知レル者ハ所謂国学者流ノミニシテ、他ハ積字鴻儒ト雖能ク之ヲ知レルコトナシ、故ニ漢文ノ如キハ秋然章ヲ成スト雖、其倭文ニ於ルカ如キハ、侏離咀噀格ニ合フ者アルコトナシ、況ヤ文盲ノ人洋学ノ徒ヲヤ、是故ニ制誥諭令ヨリ以テ奏表・書劄・日誌・新聞・日用簡牘ノ末ニ至ルマテ、語ヲ成ス者甚稀也、夫妻表以下ノ者ハ之ヲ見ン者古来唯国人ノミニシテ、共ニ語ヲ成サ、ルノ人ナルカ故ニ、互ニ相解スルヲ以テ妨ナキニ似タリト雖、今世ニ至テハ一紙ノ書、一行ノ文モ諸ノ新聞誌アリテ海外ニ散播シ、海外ノ之ヲ読ム者ハ反テ我邦ノ語ヲ知レル者多キカ故ニ、必我ヲ笑フヘシ、殊ニ誥令等ノ如キハ、
 国ノ政府ニ於テ作ル所也、政府ニシテ語ヲ成サ、ルノ書ヲ作り、之ヲ天下ニ布クハ、未開野蛮ノ甚キ者ニ非スヤ、況ヤ同盟条約書等モ亦皆語ヲ成サ、ルヲヤ、又尤笑フヘキ者ハ翻訳書也、翻訳トハ他語ヲ我カ語ニ写シテ我人民ヲシテ読ムコトヲ得シムル所以也、已ニ我語ニ写

シテ語ヲ成ス者ナシ、故ニ国人ノ訳スル所ノ書ハ、皆重テ之ヲ訳スルニ非ンハ其意ヲ曉ルコトヲ得ヘカラサル者多ク、又語格語路行文ノ法、彼 我同シカラサルコトヲ知ラサルノ訳家ノ、彼書ヲ取テ直訳セシ者ノ如キニ至テハ、通篇全ク其意ヲ了スルコトヲ得ヘカラサル者アリ、笑フヘク哀ムヘシ、但 我邦中世以降別ニ一種ノ通語アリ、漢籍ヨミト云フ、「云々ナセソ」ヲ「云々スルコトナカレ」ト云ヒ、「シカハアレト」ヲ「シカリトイヘトモ」ト云フノ類是也、今ノ制誥狀・表劄子・評論・日誌・新聞・翻訳等多ク之ヲ用フ、又一種アリ、御座候・奉存候ノ如キ是也、今簡牘皆此レヲ用フ、此ノ二種 我邦固有ノ語ニ非スト雖、亦各々格アリテ其中ニ存ス、今世此ノ二種ノ語ノミ日々慣用スト雖、其格ニ違ヒ語ヲ成サ、ルヤ、「ナラハ」「ナレハ」「ナルハ」「ナルトキハ」ヲ混用シ、「候ハ、」「候ヘハ」ノ別ヲ知ラサルノ類ノ如キ、亦多カラストセス、以上数ノ者皆内國ノ不便ノミナラス、笑ヒヲ大方ニ取ル所以也、語学豈細事トシテ舍テ講セサ

ルヘケンヤ、

○工商ノ業ハ欧米ニ勝ツコト能ハサルノ弁、富國ノ策ハ農桑ヲ勸メ國産ヲ殖スルニ在ルノ說等ハ、前篇ニ已ニ粗挙ケス、然ルニ 葦下ノ從前武門ノ邸宅タリシ地、近日商賈ノ開市ヲ許シテヨリ、舖ヲ建テ肆ヲ張りテ今遂ニ郭内ニ及ヘリ、夫安逸飽暖ハ人ノ好ム所也、今商賈此ニ居ル、勞動飢寒ハ人ノ惡ム所也、今農此ニ居ル、今ヤ市地ヲ拓テ以テ徒手蠹食^(蝨)ノ民ヲ待ツ、蠹食ノ民日ニ聚リ、力耕ノ民日ニ減スルコト賢者ヲ待テ後ニ知ラサル也、如是ニシテ富國強兵ヲ欲スルハ、猶轅ヲ北ニシテ郢ニ如クシテ欲スルカ如シ、嗚呼勞ヲ去テ逸ニ就カシムルコトハ易ク、逸ヲ去テ勞ニ就カシムルコトハ難シ、誰カ算盤ヲ捨テ、喜ンテ耒耜ヲ執ラン、亦畜ヲ生スルノ種子ニシテ害ヲ買フノ本錢ナランノミ、

○余常ニ疑ヲ 政府ノ財利策ニ存セリ、曰、出ル所ノ財、毎ニ入ル所ヨリ多シト雖、官大費ヲ厭ハスシテ諸ノ工業ヲ起ス者ハ、國家ノ衰虛ヲ以テ意ト為サル者カ、蓋

否ラジ、富国ノ方 官已ニ高遠ノ目途立テリト雖、在下ノ微軀未タ之ヲ聞カサル者ナラント、頃日大蔵省長官ノ上書ヲ閱ルニ曰、全国歳入ノ総額四千万円、予メ本年ノ経費ヲ推算スルニ、一変故ナキモ尚五千万円ノ不足ヲ見ル、維新以来国用ノ急ナルヲ以テ、毎歳負フ所ノ用途將ニ一千万円ニ超ントス、其他官省旧藩ノ紙幣及ヒ中外ノ負債ヲ挙ルニ、殆ト一億二千万円ノ巨額ニ近カラントス、故ニ之ヲ通算セハ 政府現今ノ負債実ニ一億四千万円ニシテ、償却ノ道未タ立タサル者トス云々ト、是ニ於テ始テ知ル、富国ノ目的ノミナラス、負債償却ノ道スラ尚未立タサルコトヲ、噫佗日ノ盛衰予メ推算スヘキカナト、尔後聞ケリ、長官ノ言フ所、国債及ヒ出入ノ実数ト齟齬スト、蓋何ソ大徑庭アラン、又其目度ノ立タサルハ一ノミ、尔後又一官人ノ説ヲ聞ケリ、曰、本年周歳ノ出入ヲ予算スルニ、歳入ノ歳出ヨリ多キコト、金二百十四万余両、此レニ加ルコトハアランモ、断テ減スルコトナシト、或人曰、其レ然ラン、豈其レ然ランヤ、蓋彼ノ上書ニ由テ、

中外疑团ヲ懷ケル故ニ、之ヲ蔽ハントノコトノミ、他日其証必顯然タラン、今之ヲ弁センモ空論ニ属センノミト、○頃日前大蔵某々官ノ建言書ヲ見ルニ、其論稍経済ノ旨ヲ得タル者ニ似タリ、然而是ニ由テ 政府ト二人ト両ノ者ニ就テ、余一ノ大疑ヲ生セリ、何者其建言ノ主意全ク罪ヲ 政府ニ帰託セリ、而 政府之ヲ甘受シテ、毫モ論スル所アルヲ聞カス、唯曰、時務ヲ論スル所ハ大ニ然リ、但歳出入及ヒ国債ノ数其実ト齟齬ス、故ニ本書ヲ返付スト、夫二人ノ大蔵ニ長トシテ財利ノ重任ヲ負ヘルコト久シカラサルニ非ス、其識見初メヨリ建言ノ如クナラハ、印ヲ解シコト当ニ数歳ノ前ニ在ルヘシ、何ソ其禄ヲ受ルノ久クシテ、今日ニ至テ防メテ之ヲ言フノ理アラン、或曰、是ヨリ先已ニ辞表ヲ上リシコトアリト、余曰、是其本心ニ出ル者ニ非ス、若シ本心ニ出ル者ナラハ、何ソ職ニ在ルノ久キコト彼カ如キニ至ラン、之ヲ要スルニ、二人ノ如キハ手ヲ親ラ国ノ産ヲ敗リ、然後其罪ヲ 政府ニ帰シテ、其身ヲ脱スル者ト云フヘシ、臣節アル者豈敢テ

センヤ、是レ二人ヲ疑フ所以也、是ノ時ニ当テヤ、政府当ニ二人ヲ攻テ曰フヘシ、國ノ財利一ニ汝ニ委スルコト久シ、汝其策ヲ得スシテ大ニ財産ヲ敗リ、国債ヲ増加シ、政府ヲシテ為ル所アルコト能ハサラシム、汝ノ罪大ト曰フヘシ、豈其職ニ称フト云コトヲ得ンヤ、而ルニ今反テ罪ヲ政府ニ帰スルハ何事ソ、汝一毫モ國ヲ利スルコトナクシテ、数年其俸禄ヲ蠹靡セリ、是レ尸位也、素餐也、宜ク数年ノ飯肉ヲ吐テ、然後去ルヘシト、又当ニ責ムヘシ、汝カ上ル所ノ書已ニ中外ニ伝播セリ、故ヲ以テ中外疑ヲ政府ノ財利ニ容レサルコトヲ得ス、是乃中外人心ノ聚散ニ係ル者ニシテ、國家ノ害タルヤ亦浅小ニ非ス、汝宜ク更ニ書ヲ作テ、以テ前書ノ非ヲ政府ニ謝シ、亦以テ中外ノ疑團ヲ釈クヘシト、今政府ノ為ル所此ニ出ズシテ、反テ政府ノ人ヲ以テ之ヲ改算シ、表ヲ為リテ以テ大方ニ示シ玉フ、縦令前算ノ非ニシテ後表ノ是ナルモ、恐ラクハ中外ノ人反テ前ヲ是トシ、後ヲ非トシ、且牽彊ノ算計表ト看做シテ信用セサランコ

トヲ、是敢テ私カニ政府ヲ疑フ所以也、古人曰、一事苟則其余皆苟矣ト、已ニ事前ニ苟シテ、而人ヲ後ニ規センコト豈得ヘケンヤ、君子ハ苟スル所ナカラノミ、○一億四千万ノ国債少ト云ヘカラス、然レトモ償却ノ道ヲ立ルモ亦難カラス、今試ミニ其概算ヲ下ニ挙ン、海軍ヲ廢シテ金一百八十万円、陸軍五分ノ四ヲ減シテ六百四十万円、開拓使ヲ廢シテ一百一十八万円、工部ヲ廢シテ二百九十万円、司法・大藏各四分ノ三ヲ減シテ一百一十五万円、政府・外務・文部・教部・東京府ノ歳費平均各五十万トナシ、其三分ノ二ヲ減シテ一百七十万円、外遊生徒ヲ減シテ大凡二十万円、以上通計一千五百三十三万円、是今日令ヲ下シテ明日ヨリ蓄積スルコトヲ得ヘキ者也、其佗洋織ヲ服シ、洋酒ヲ呑ミ、洋菓ヲ使ヒ、洋器ヲ用ルコトヲ禁セハ、亦歳出大約一千五百万ヲ省クヘク、大ニ産物ヲ殖シ、鉞山ヲ開キ道ニ依テ事ヲ作サハ、亦数百万ノ歳入ヲ増スヘシ、若シ然ラハ、前ニ合シテ已ニ総計四千万ノ巨額ニ及ハン、其三千万円ヲ以テ内外ノ国債

ヲ償ハ、五年ニシテ全カラン、而其年已ニ五千万円ノ
 蓄アリ、第六年ヨリ積テ第十年ニ至テ已ニ二億五千万円
 ノ余財アリ、其二千八百万ヲ以テ兵士ノ宿志ニ充テ、
 二百隻ノ鐵艦ヲ買ヒ、一千万ヲ其毎歳ノ雜費ニ供シ、陸
 軍モ亦此ニ準シテ弘張ヲ謀ルヘシ、此時ニ方テヤ、物産
 礦山ノ利已ニ前年ニ倍徒ス、諸道拡張ノ業ヲ興シテ之ヲ
 永世ニ垂レ、以テ欧米ニ凌駕シ、万国ヲシテ 神統ノ瑞
 曜ヲ仰望マシメ、由テ以テ坤輿ノ首位ニ居ランコト、誰
 カ之ヲ疑ハン、世人皆曰、今ノ世ニ方テ万国ノ間ニ獨立
 センコトハ得ヘカラスト、余曰、是難カラスト、但洋物
 服用ヲ禁スルノ令ハ、早キニ及テ発セスンハ、恐クハ之
 ヲ以テ生活スルノ商賈日ニ蕃殖スル故ニ、他日此令ヲ下
 スニ方テ、産業ヲ失フ者益々多カラシコトヲ、
 ○卿相吏史ノ設置ノ繁ニシテ、且其人員ノ冗多ナルコト
 今時ノ如キハ古来未曾テ聞カサル所也、宜ク節略シテ簡
 約ニ從フヘシ、今其大略ヲ言ハンニ、三大臣各一人、參
 議五人、議官ハ置カス、諸省長官各一人、陸軍大將一人

之ヲ勅任トシ、府県寮司局院長官・次官各一人、諸省次
 官各二人、政府次官五人之ヲ奏任トシ、其余ヲ判任ト
 シ、等外トシ、判任等外亦即今ノ人員三分ノ二ヲ省テ、
 其一ヲ存スルモ尚余リアルヘシ、其官等及ヒ月俸ノ制ハ
 別ニ表載ス、今明治二年己巳九月ノ職員録ヲ見ルニ、三
 任人員總計七百三十名、庚午七月ニハ二千零四十余人、
 是殆ト前年ニ二倍セリ、昨壬申六月ハ乃五千六百七十名、
 是レ昔ハ一ニシテ今ハ八也、何ソ其殖加ノ甚キヤ、夫レ
 即今ノ 政度ニシテスラ官員ヲ減省スルコト前款ノ如ク
 ニシテ足レリトス、況ヤ繁蕪猥雜ノ事務ヲ去テ、簡潔ニ
 從フニ於テヲヤ、

○慶応丁卯以還霸府大權ヲ積キ、
 至尊政ヲ親ラシ玉ヒ、衆庶赫々タル威稜ヲ仰望ムコトヲ
 得ル者ハ、皆我カ 公ノ神凶丕續ニ依ルニ非ルコトナシ、
 是以テ百官有司ヨリ草莽ノ士ニ至ル迄、懾伏シテ而欣慕
 セサル者ナシ、然リト雖百官有司ノ中ニ於テ、私カニ忌
 憚ノ心ヲ挾ム者蓋少ナカラス、曰、何ソヤ、曰、今ノ為

ル所 公ノ為ント欲スル所ト猶氷炭董猶ノ相容レサルカ
コトクナレハ也、而 輦下ノ民ハ大ニ此レニ異ナル者ア
リ、抑 輦下ノ地タルヤ、嚮ニ徳川氏ノ覇府ヲ此ニトシ
テヨリ、風物日月ニ開ケ、漸ク奢侈ニ移リ、愚民其私恩
ヲ戴キ、飽煖鼓腹其欲ヲ百世ニ期シ、復タ

天皇ノ在スコトアルヲ知ラス、而一朝転シテ惟新ノ世ト
為レリ、輦下ノ民謂ラク 薩侯我カ公義ニ迫リ、大権ヲ
強奪シテ且之ヲ攻撃シ、

天子ト云者来テ其城郭ヲ取り、尋テ我大君ヲ遠徙セシム
ルニ至レリ、今ヨリノ後我ヲシテ復タ昔日ノ欲ヲ夢見ス
ルコトヲ得サラシムル者ハ、是皆 薩公ノ所為也、曩ニ
会藩其他公義ニ忠アルノ軍ヲシテ京軍ヲ塵穢スルコトヲ
得シメハ、我何ソ此極ニ至ルコトアラント、其会ヲ愛慕
スルコト芝蘭ノ若ク、 我藩ヲ忌惡スルコト蛇蝎ノ若シ、
近年ノ世情ハ、乃正ニ此レト相反セリ、前年股肱羽翼云
々ノ勅アリシ頃ヨリ、庶民日々西天ヲ望ミ、款々然トシ
テ相告テ曰、 薩老公来ルコト何ソ遲キ、 公来ラハ我

蘇セント、今春ヨリ 入京ニ至ルノ間殊ニ甚シトス、
曰、 公来テ 政ニ從ヒ玉ハ、又必昔日ノ治ニ復セン
ト、是蓋征賦租税ノ煩、毀肆撤店ノ苦、物価踊騰ノ艱、蛮
夷跋扈ノ患ヲ免レンコトヲ欲シテ也、是孟軻ノ所謂飢渴
ノ者ハ飲食ヲナシ易シノ時也、 公固ヨリ維新ノ首唱者
ニシテ、其征討ノ元勳亦誰カ 公ニ比セン、而方今ノ世、
士氣ノ撓マサルコト海内我 郷國ニ比肩スヘキ者ナシ、
是ノ時ニ方テ含藏スル所ノ正政ヲ布キ玉ハ、民心ノ
天朝ニ帰センコト、猶百川万流ノ混々トシテ海ニ朝スル
カトクナラン、豈拊舞ニ堪ンヤ、然ルニ世ノ忼慨ノ志
余リアリテ、人ヲ知ルノ識足ラサル者、憂テ曰、 公 勅
ヲ受テ 輦下ニ到リ玉ヒシヨリ已ニ数旬、一ヒハ世路ノ
變替ヲ視テ慨歎シ、一ヒハ 召致ノ懇切ナルニ似スシテ、
諮詢スル所スラ且疎ナルニ遭ヒ、憂國ノ哀情慰スル所ナ
ク悲憤シテ遽ニ西帰シ玉ハンコトヲ恐ルト、又少シク識
アリテ、 公ノ一斑ヲ窺フニ足ル者ハ曰、 公何ソ棄テ
、而去ルニ忍ヒ玉ハン、 公ノ今日ノ進退去就ハ、即チ

万世

皇統ノ因テ以テ断続スル所也、公ニシテ而去リ玉ハ、是即チ世道ノ結局ニシテ、自今後尽忠報国ノ志アル者アランモ、徳量爵位功績名望兼備ハレルハ、天下其人ナキカ故ニ、施為センニ由ナカルヘシ、公何ソ棄テ、而去ルニ忍ヒ玉ハンヤト、

答問 十五則

副答問書上參議某氏書

五月六日、某謹再拜、奉書參議閣下、某憂医道之不振有年矣、戊辰夏四月、得

国公之内命、之京師、自謂、方今 大政歸于

朝廷、朝廷務洗滌旧弊、力復于

先王之治道、我医道興復、亦唯此時為然、時方有事於東

北、

朝廷多事、

鸞輿亦東焉、由謂、事非謀於 輦下、乃不可、逐

輦上下者三、作書以聞、遂拜 皇漢医道御用掛

命、方此時也、心醉于欧者滿塗、素志未得達、今也、將

煩閣下之一顧、然而世方曰閣下欧癖、二三同志者又疑焉、

某才質疎愚、漫納人言、不敢以聞于閣下、躊躇日久矣、

近者、窃謀之於識閣下者、曰、閣下豈癖于欧者哉、閣下

非医、其於医道、未審於彼 我短長之弁而已矣、若得審

之、何私為之愛憎也、子盍呈書以言之、某至于此、意始

廓如、則為答問十五章、以呈焉、某言若不善、願辱閣下

之叱責、以反正、若其有少当理、則憐某愚直、興復此道、

以濟良民困於庸手焉、某非敢強欲立己所学之道、又不敢

惡欧方而為之阻攔、自謂天下之公言也、是故、別設一局、

彼 我不相関、各自研究其學術、則足矣、若別局不可設、

願下

命於東校、用 皇漢之藥、講 皇漢之書、以遵奉合併之

聖旨、若猶拒

命而不順、黜彼二三小人、更陟公正之人、閣下若疑彼非

小人、願召彼二三人與某、於

朝廷若廷尉若閣下之邸、使為對論、某若言屈理窮、則自悔己非、而莫復乞閣下、噫、今之執正守道、而鬱屈者、不唯百千也、願閣下瞭察焉、某雖未數到閣下門、而被寵遇、素有同國仕同主之因在焉、苟以某疎愚、而莫併棄此道幸甚、某固不文、不能竭所欲言、願拜趨于門庭、敬受明論、某恐懼再拜、

醫事答問

十五則 明治庚午夏乞謁于參議某氏、到于其門五回、未得一見也、由作此書以呈焉、實本年五月四日矣

○或問曰、歐夷之巧技工也、皆得之於窮理之學、故無大無細、見者莫不敬服、如醫術亦然、子何不去漢而就歐也、答曰、天之生物也、必先為育之養之備矣、蓋歐羅巴諸國者、天候地質俱不宜於農桑之地也、故天賦之以伶俐之性技工之才、使其製造凡百之器械繫之於他邦以遂其生、由是觀之、技工之精、舟楫之利、皆因彼之天賦者、而非他邦之所可企及者也、若或欲學彼技工放彼窮理以兄於彼者惑矣、今之長於東校者、常云、設法以教生徒十年、則我医方冠於世界万国、吾保之矣、而見其所為、取從來之

医方擲之於地、延來欧醫師事之、欲使 我國之医方化為純欧、是猶僕侑（侑德）学匍匐於驥而欲駛於驥、豈可得哉、夫医道者、各国自有適其風土之方法、而各治其土之病、与前所謂天賦之論同矣、豈取侗邦之方技、而偏遵奉之、敝蹤視從來医方、而棄焉可哉、

○問曰、子說果是乎、漢方亦非 我國固有之方法也、似当棄而不顧專從事於 二神所創之道、如何、

答曰、否、夫 我之与彼、土壤相接、唯隔一帶水耳、其風土・人種・衣服・飲食・家屋、与 我不甚異、其医方亦正同且備、故其行於 我者、及一千四百五十有余年、我二神之医方雖殘闕不備、猶有神遺大同二方書存、就以照考焉、則足以見其同軌而不異轍矣、然其風土・衣食、亦未必無小異、是故其医方、自入於 我以還、世豪傑輩出、不敢率由其旧說、排其妄斥其非、務徵之於實驗、然後立之確論焉、其論与古來支那人所說懸殊、而遂變作 我國之医道矣、於是照考之於 二神之遺方、猶合符節也、故今之稱漢方者、即 皇國之医方、而非古之所謂漢方也

以下當以倭方稱矣、而猶稱漢方姑從世人之所呼耳、宜識其曰、漢者渾倭漢之稱
道、而將軌道適從、嗚呼風土之可謹順、不可犯疆也、著明矣哉、

○問曰、果如子所言乎、似歐方不可學矣、今朝廷設東校及大病院、措從來之医道、惟歐方是用者、必有以焉、子有說乎、

答曰、姑舍是、吾不欲言也、其人詰不輟、曰、吾奚為無弁哉、夫朝廷之設病院也、其初為兵士、戊辰秋東北之役、設院於橫濱、治兵士傷於銃砲者、其治咸委之於欧医某者、冬移其院於今地、前田某・石神某輔佐欧医、監督院事、一味之倭藥、一剂之漢方、未曾試焉、而唯奉欧方者、得入院、十二月朝廷昉命医学所名、後更置書生寮、前田・石神罷官、岩佐某・相良某任少丞、且朝廷委任東校改医学所名医学、校更改名東校、以天下之医政、二人尋進權大丞、佐藤某任大博士、医之政權、在三子者之掌握焉、而皆唯知有欧、不知有倭漢也、是故一行之倭書、一句之漢籍、未曾講焉、其所奏謂、与所常言、唯欧云欧云而已、公卿

百司固非医焉、能得識彼我医道之得失乎、使彼三子者無偏頗之陋心、夷考其得失、体

上之仁慈、慮国之剩費、憂民之疾苦、赤心以忠告

朝廷、朝廷豈廢從來之医道、而專用欧方哉、

○問曰、果如子所論、則欧方不足學、宜棄而不問乎、如何、

答曰、医治有内外之分、彼我有長短之別、今就本邦之疾病、而論焉、外治者彼有所優於我、而内治則我賢於彼、遠甚矣、是世所周知、吾非自誇也、但其於兵陣之際也、我邦古來莫有銃戰、天正以降僅有焉、亦既經三百年、故於銃痍砲創無親療之者、且雖有其治法、未曾試之於夷地、則未可謂得其術也、夫欧米諸夷之俗、常在還於他邦、通音乞質、設難而釀怨、開兵端以要償幣、侵掠土地以為己之活計、其兵器唯銃砲是用、故其治法得捷徑、宜采用也、但至其退而入之於病室、而後治之、亦有所間然、以我方斟酌焉、可也、以一旦有功於戰陣、欲廢從來医道、而偏用之於太平無事之日者、惑也矣、

○問曰、子謂內治則 我賢於彼、遠甚矣、僕嘗聞歐方家之言、曰、漢医疎漏、不說病理、不識藥能、不審內景、是以莫法度之可執矣、其論孰為是、孰為非、請為僕弁焉、勿以私也、

答曰、我医道者、以活法施活人、活人之疾、變幻无窮、豈可以死理死法推求哉、夫歐西窮理之學、精則精矣、但就其土人、以窮其理、以立其治法焉、是故施之於其土、則可也、而其当治活人之疾也、蓋不能若執錐鑿刀鋸、以製細大器翫之無過矣、況移行之於我土乎、安知非彼宋人之章甫、余嚮者方宜瑣言、載歐医及奉其教者、所施治療之事矣、以具弁其得失、子宜就而詳焉、漢方果如歐方家所謂乎、当無寸効矣、而今依法施治、無病不奏効者何也、世人常云、皮膚之疾、委歐方亦可也、傷寒及內部之諸病非託漢方不可也、是故今病人之乞治於病院者、外疾十九而內病十一而已、可以見公論所在也、故其名則大病院、而其実如外治局然矣、是豈 天朝廣濟之本旨哉、今依公正之論、更設 倭漢医局、下 詔於天下、而使知 倭漢

歐媿立之美、則生徒与病人、接踵而集、可期而待、至此時兩局各記病人之多寡、及其所救全、与否者每一月若二月、會計以乘除、則彼我得失之弁、判然如黑白、且兩局相競、研磨其道、則有互所憤發、而方技之日盛、不可疑矣、彼三子者亦非不識此也、蓋其心曰、漢局若立焉乎、必盛大矣、既盛大焉乎、我道必衰矣、不若不立之无虞也、余既就三子者、若口弁之再四、彼辭窮、而心不容之、欲使吾教輩強化於歐方、何其陋也、請舉一事、以実彼亡狀、侍從某者家臣、有武内某者、有志於学医、為給仕於東校、質魯而年既壯矣、初誦歐書、久之不能解、自以為不可得也、翻然改志、取傷寒論誦之、有少博士石井某者見焉、怒叱奪之、少博士坪井某者論之曰、誦漢籍於此校不可也、汝有志於此乎、宜就外人学、雖然其事若發露、必有不利於汝身、不若辭校而学也、因來請余輩曰、僕欲辭校而学漢医方、如一日無俸祿不能自遂何、願公等贈一書於鄉里、以使僕得遂志焉、衆聞之而莫不慨然者、可以想見東校之情態也、子常好誦經說史、屬文賦詩、必能知道之正邪、

余所言果非、而彼三子者所行果是乎、則宜規余而不可有所少假、

○問曰、一滴之水液、能使人死生者、歐藥也、而其服法亦極簡、非草根・木皮能可比較也、子奚不用、

答曰、子唯知小、而不知大矣、今子所言、及利之小者也、今天下之有病而服歐藥者、不過十二三、且猶於三港一歲所購歐藥之值金、大凡不可五六十万金矣、若使天下之醫悉化歐、而天下之病人悉服其藥、不唯國內所產之藥品不為用、而徒朽枯、非每歲投擲五六百万金於海外、不能給矣、且若會一旦有事絕交信、歐舶不到於我岸、一滴水藥不可復得、則遇艱証劇疾、亦皆傍觀座視、待其困斃耳、是乃害之大者也、余雖不解蟹行文、自少小就翻書、覽舍密藥能生活健康病理內景等窮理說、又屢觀刑屍開剖、得其梗概、賞其確實也、既而觀時師之療病、其效驗却不及漢方醫、莫足敬服者、是所以余不用歐藥也、

○問曰、舍密製藥之術、學而為之、不出數年當無所不給、何憂歐藥之到也、子言似妄、如何、

答曰、此事也、可言而不可行者也、假令有能行、求其器械於海外、構巨屋安之、置工置吏、及薪炭之費不少、且其所製藥品之能力、亦必不及彼矣、蓋如歐西、亦各地之藥品不能互無美惡優劣矣、往日英吉利醫某者、在病院所使用之藥品、各國所製煉者、咸擯之、而特用英製者、可以徵焉、余何敢妄言也、

○問曰、各國製藥之有優劣也、實如子言、今採我土所產之品物、依法製焉、而施之我土之疾、假令其製之粗惡、如其効功、蓋懸出於各國精美者之上、子志嚮所說風土天賦論乎、

答曰、百藥之於氣味能力也、各土雖有美惡優劣之異、依法製之煉之、則既奮其天年之質、而殺之、又何問風土之適否也、不若我摘之採之、而直用之簡易、且不損天賦質之為勝也、

○問曰、維新以還、朝廷海與歐西學術、其歲月猶未幾、倭漢學之在國學、不絕如綫也、夫國學者以大學為首焉、今其教官自博士以至助教、僅々七八員而

已、不似兩校東校南校之有歐師教輩、且教官之繁也、由是

觀之、万事皆彼可取、而 我不足取也、不待論矣、子何不改、

答曰、國体者本也、万世不可變矣、國政者末也、不可不隨世而變矣、夫 皇國者、古來不与歐通信、二百年前、許入港於喞蘭、唯一二船之貿易而已、故其學止諷官也、至通信來往如今日、則非學以知彼之情狀、不能以親交、是以古今 政度之異、而 國學所脩之不同也、夫事貴於得宜、今 我欲知彼之情、取彼之長、而 我之情、先知於彼、彼之短、先入於 我焉、從汚 我國体、撓 我正氣、紊 我風俗、出入算之、其利至小、而害則至大矣、如我医道亦然、彼統戰者、古無而今有、故歐方雖可用、其術既學諸實地、而悉得之、不復求師於歐西、而耗 我財、亦足矣、況疾病者非隨世而變、如夫國政者、假令變遷万狀、左右神聖之方法、以心之、則不愈者未之有乎、若夫三學之盛衰、則 朝廷必有遠圖在焉、余不能審也、

○問曰、歐米之學、日新月明矣、今觀 倭漢医之所為、

未曾有所發明、愚頑孰甚焉、子盍思索、

答曰、昨是今非、日新月更之學、吾不能信也、曰何也、曰、 我医道者、在昔有 神聖垂不易之方法、故温古以得其奧旨、以施於疾病、莫不有驗焉、何復求於他、而競新奇之為也、若夫歐米則無古神聖立不易之法者、是故余見之於詛書聞之、於歐家、退而考之於古今、其所沿革極多矣、今舉其一端、昔時切称阿片偉功、頻用之、後覺其非是、束之高閣、吐棄薦行、尋更其說、蟻鍼刺絡盛行、尋悟其非、至近世、專唱滋養、海称温補焉、夫滋養温補者、支那宋元医所切唱、而從前欧医之所未曾言也、由之推之、今日之所是、來日必非矣、今年之所是、來年必非矣、今人之所是、來人以為非矣、轉々相承、以至于千万歲、斷無有得歸一之論、不易之法矣、子亦孜孜於學非、而自不覺者而已矣、

○問曰、抑正氣紊風俗、於上教論中、稍得其意焉、唯汚 國体之說、僕所未解、願聞其詳、

答曰、 皇國之 太政、蓋其本在祭祀、故政字訓末都里

古登、夫大学者所以教国士也、自公卿以至於下士、治国脩身之道、不得不学於此、乃謂之為政源、亦当矣、豈一日遺政本而可哉、自大学建既二年矣、而未聞建学神祠祀之、唯聞当開校之時、供豚肉祀神、又以設宴、余未聞

我国古来有此礼也、先言已撒仲尼及四哲之偶像矣、故是日所祀者、乃八意惠兼神、奇部神等之、因神耳。又日

者、聞東校有一医生、自語曰、曩歲家母罹病、百万無驗

終即世於是、僕与家父共執刀剖其屍、以觀病之所在、衆

医聞之、賞其篤志、余聞之、惻然俯地者斯須、乃慨然起

曰、吁嗟 皇国之人、既至于如是不仁乎、夫レ子之於母

夫之於妻、視其患苦、当切於在己身、且其在病蓐也、当

罄技尽力自療、既療而不及、假令其命乎、為子者為夫者

当痛悼無可遣、而遺骸未冷、執刀剖之、是可忍也、孰不

可忍也、如此二事、余非親見之、然人既為此語、必有此

情矣、是唯拳一端而已、其汚 国体也、可推知、

○問曰、聞子嘗屢說東校二三長官、彼退而曰子拗彊不屈、

有諸、願為僕詳語子所說、与彼所答、

答曰、我說我正、彼答彼私耳、至其事之詳、非一朝夕之

所能悉也、請語其概、以积子之疑、初余輩十有五人、奉皇

道者三人、攻漢、作書、就大学奏言医事、無幾拔擢十人、医道者十有二人

國二人、命皇漢医道御用掛、使刪定 皇国漢土之医籍、

立設校以教生徒、建院以療民病之法則、余輩勉勉從事、

稿成而進、尔後更 命曰、医者大学之一科、不宜有皇漢

洋等之称呼也、是時有余論執事官之妄作、少丞橋田、移入十人於某、小松某為俗所謂進退伺等之事

東校、且命曰、与東校諸官議言其可否焉、余輩駭然相言

曰、是似与曩所受之 命相反、則入東校、議之於少丞、

丞曰、庶務鞅掌、兄等宜与教官議、議大博士某者、博士

曰、僕之受命也、所掌專在教導与治療、其若議事所不敢

関也、議他一丞曰、当校者天下之医校也、今舍從來之医

道、而唯欧是事焉、是故辺陲有志者、因戊辰冬所布之

詔旨、欲得考試、而入于兩京、聞医校之純於欧方、失望

而還者、不為不多、是豈 聖朝之本旨哉、又豈天下之医

校、可如是哉、宣布告於天下、使知 皇漢欧媿立之義如

何、丞曰、実如兄之說也、其請 朝、布告於天下亦容易

而已、余又曰、既有合併之 命、公等亦常言集而大成焉、

合併云集成云、其所取以為本、將孰由也、猶歐是由乎、曰、否、苟有 皇國医道、則當是為本、漢洋以輔翼焉、余曰、子而有此言、何憂医道之不振也、曰、兄等宜書所自欲行、所以為合併之方、以示焉、吾曹討論然後奏進、余乃書以呈、且謂曰、此書唯其梗概而已、若有所不可、願反復問難、至于議論精詣無所遺、而奏進以待朝裁、丞曰、諾、至于今既三閱月、而事未舉行、其心術可知也、余亦有二三益友在焉、余所言果非乎、必忠告而善導、余自聞其非、則悔而改、晨不待午矣、何拗彊不掘之有也、又誰敢屈於無道、子莫彼三子視余也、

○問曰、歐西医方之入於 我也、歲未幾、而奉之者亦未多也、其道亦未明也、故不可不立校而脩也、漢方則行於 我、殆一千五百年矣、而其道已明如子嚮所說、故不立校而教、亦可也、今 朝廷立校、專於歐而不及於漢者、乃此意乎、子以為何也、

答曰、是誠不通論也、夫生而為男子者、誰無青雲志焉、近歲補任得爵祿者、自典医博士、以至于得業生、咸奉歐

者而已、未曾聞一漢医之被舉也、聞至其甚者、則漢方医自冒歐方之名、以釣官祿者往々有之、由此觀之、雖無廢 倭漢而專用歐之 語、似其意乃然矣、後之因此道、而遂青雲志者、蓋眩彼新奇之徒而已矣、欲 倭漢医道之不衰滅、豈可得哉、夫有大害者偏興、而有大利者將滅、生於此 國、而食其粟、知其 國恩者、誰不為之長大息乎、

○問曰、如子旧藩医校、客冬既悉黜從來之漢方医輩、而專用歐方、使英國医某者師、且常備兵士之在此地者、一千數百、皆禁 倭漢藥、是豈徒然哉、亦足以視彼 我長短矣、子奚不鑑也、

答曰、然、其廢也、實如子言、而未數月、尋復旧焉、其復也、正在本年二月、至三月、医生之不召而來集者、已余二百、其盛可知也、若夫隊医之禁令、去年方兵士免藩時、強為之制、既而服歐藥、不見寸効、故罹病者、自購漢藥於市、召医令劑之、如是者數矣、二三閱月、遂至禁令數而劑漢藥於院內以施、去月兵士新旧交代、又有此令、

未一月聞兵士中既往々有購漢藥於市者、其禁之不可全也、可知矣、夫病人有好漢藥者、有好歐藥者、是人之情也、當其有病、欲唯歐藥之用、是戾人情也、戾人情之令、君子不為也、其人色驚而言他、

○問曰、方今之世欲勉遂其志、必有觸忌諱、子何不少顧而自重也、

答曰、子知夫輕重者乎、道之与微軀、猶九鼎与一羽也、吾豈忍座視我道之將滅、而自重哉、况

聖明在上、仁億兆、良相賢卿、為之輔弼、開言路、明視聽、下之所言、善必取之、不善必肆之乎、是所以余愛君憂民、而不自顧也、

論文 二首

拙詩 一首

儒教必可為万国之公法論

天地之為德也、有生而無殺矣、秋冬之所收藏、則所以資

春夏之發生也、夫聖人之治世教人也、与天地合其德、与日月同其明、与四時合其序、開口則曰仁曰義而已、利則不取也、孔子曰、無求生以害仁、有殺身以為仁、又曰、欲己立而立人、欲己達而達人、又曰、放於利而行多怨、

孟子曰、何必曰利、亦有仁義而已矣、苟先利而後義者、天地之所惡而聖人之罪人也、治天下者、不由於是道、將何由、嗚呼是道也、專行於我與漢、未及他邦、亦可恨哉、蓋海外諸邦之所奉、曰猶太、曰耶穌、曰回々、分門立派、互相攻擊、其說雖有異同、其至付会妄誕、亦与浮屠氏何有輕重也、而別有万国公法者、外仁義、由利以為制、取以治一家、非其所宜、况公行諸万国乎、今見其狼噬驚擾之不息、可以知其非也、夫安逸者人之所好、勞危者人之所惡也、今不由仁義而制公法焉、我攫之於前、而後者亦欲噬我於前、而又其後者、亦將吞後者於前、循環無端、噫何日得能逸而相安也、是欲安逸而常居勞危者也、是不知天地之間別有真教在故耳、真教者何也、曰天地之公道也、列聖之所行也、孔子集而大成焉、其法粲然已具

於六經、今也彼始知有此教、而未之深學焉、故不行而已、若夫後世當噬攬不息、人厭其苦之甚、有有力者、能知公法之不由仁義、而教化之不後利之非、則必曰、苟欲教化億兆、公行於万国、熄此噬攬、舍孔子之道、將何適從也、發憤研精、孳々從事於此數十年、則亦可以能風靡万邦、吾恨不再生於數百歲之後、而目見其盛舉也、 皇國之民宜固守是道、伝之於子孫、維持 我國俟其時機、輔我天皇、以舉此事、是余之所竊期於後世、而望於今日也、易云、天地之大德曰生、聖人之大宝曰位、何以守位、曰仁、何以聚人、曰財、理財正辭、禁民為非、曰義、生々之徳、仁義之道、亘於古今、通於万国矣、豈其可終廢哉、
文久三年癸亥八月十四日、二三友人來訪草堂、置酒觀月、遂徹曉、談或及時事、明日為此論、以示陋見云、

倭漢洋医道優劣論

道てふ道の多なる中に、我 医 道はしも天地の 未 判し古に、生座りし、産靈神の奇 靈に始りて、大己貴命少彦名命にそ定まれりける、其は即天地自然

の道にして、人世となりても入野宮宣化の御世までハ、神 隨に行はれ來にけるを、磯城島宮天皇の御世に、漢士の医方参渡來しより、遠きを貴ミ新きを珍る人情なれば、此道も自然其様に移りもて行つム、稍後に至りてハ、神 隨の道は荒蕪て、たとらむとする人も甚稀らにそ有ける、然るに畏くも平城天皇深く此道の衰頽を歎かせたまひ、典薬頭等に命て、上世の薬方を撰集めて、大同類聚方と云書を作り置せたまひき、雖然世人皆漢土様にのミ心引れて、最晩世に至りては、其用 試さるのミならず、此有ことを知れる人さへそ無なりにたる、近世ハ万 古に立歸るへき時來向るにや、大倭心太しき識者等追次て世に出て、上世の典籍に注目し碎 心て、皇國の千代の古道踐開しより、神 隨の医道に分入りて、勤 勞る人等陸統出來て、各自書を著し、術を磨き、実事に対へて其薬方を用 試つム、頻に奇 効を奏しムかは、再 此道も世に見るゝ事とハなりぬ、凡て医 道ハ地方に因て適 否の差別あ

りて、一概には難言き事なれど、此ノ国の神等の定置
 たまひし方以て、此ノ国人の疾病を治す事にしあれば、
 奇効あらむこそ何疑はむ、此レそ最勝れて優き方
 には有ける、されど今世に至りては、是レのミにては事
 不備心地すれば、外国のをも採て輔翼むこそ善事ならめ、
 所謂外国医方とは、漢土のと西洋のとなり、其中にも
 漢土は我皇國と最接近くて、彼地方も大く差異ざるに、
 其ノ薬方はしも千五百年の古より行ハれて、唯に此
 のミ用來ぬれば、人身にも熱く適ふめり、其のミならず
 百有餘年前に賢哲輩多、出て、古を稽へて今の誤
 を正し、彼ノ五行経絡ナンといふ妄説等を悉く除
 き、確実明瞭にして活人に試て違はざる者を撰ひ、之
 レを現病に用て其ノ効驗著明き者に取則て、此ノ道を
 定めしより、彼ノ國中世以降の付会学とは甚く異なり
 て、自ら我皇國の道に遠からぬ者とは成りにたり、且
 其ノ薬劑の参伍も、我が神隨の方と毫末も違ふことな
 ければ、此の医方を輔翼る最魁なる者にハありけり、

故此を我方に並て優き方とや云まし、如此て彼ノ西
 洋の方へも、中世頃に伎理斯多迄てふ不良教の参渡來
 し時より、南蛮國の方とて鎮西の辺に行はれ、近世又
 紅毛の方参來て、解体窮理といふ説を立て、世俗の耳を
 驚かし、奇異き器械を以て衆人の眼を驚かし、かは幾年
 もあらざるに其道の我カ國中に蔓延たり、又近來英吉
 利・仏蘭西なるといふ國々の医者等参渡來て、各其ノ
 術を伝へ広めしかば、今ハ其ノ術以て疾病を治療する医
 者等の世に多かるのミならず、其中には典医に為れしき
 へあなり、斯在は遠祖より伝來れる方を以テ、長くも
 大御業献り來りし典医等も各彼方にてのミ靡きて、其
 ノ家法さへ改易ることハはなりぬ、されど其ハ遠國
 の方にしあれば、其國々にこそ良からめ、目瞳は如天色、
 鬚髮は如狐色、牛猪の肉のミ食ひ、羊、豕の毛のミ
 服る蛮夷の薬方を以て、豈黒瞳烏鬚髮にして、瑞穂
 を食て清淨に世を經る生靈の疾を得治む、唯皮膚なる
 種々の傷損瘡瘍のミは、甚く風土の差異にも拘はらさ

れハ、時々は治得るもあり、又戰場にての銃創等を療するは、固り彼ノ技術の長たる所なれば、此等をや採用むも宜からめと、かにかく上の二方には遙に劣りて、卑き技なりけり、彼ノ蛮夷等ハ万 事皆窮理てふこそを主と為なれば、靈 奇き神隨の道は、振返りても見ずて死人の屍を屠り、前眼に見ゆる形体上の理を以て、活て運動く人身の疾を治むとする故に、ふつに効験の無も道理なりかし、凡て諸の災殃は、夜見國の汚穢より生出来る由、古典籍等に見えたり、彼ノ屠術を窺見れば、全然夜見國の状況も如此やと想やられて、更に頭國の事とハ思はれず、最もあさましき事になむ、如是醜事ハ、甚き國の穢にて、鬼神の太く忌ませるゆゝしき罪ごとなれば、恐 慎ミて在こそ善からめ、さて此ノ三方の優劣は、昨冬畏くも悪を舍善を取むの評議を定めて奏上奉れよとの大命 蒙しより、日夜に不取置種々思ひ煩ひて、摧果にし心胆より、出来にたる私言なれと、看官其論の拙ナク行文のてつゝな

るを難めずて、余か赤心の一端をも憐みてよ、
明治三年庚午十二月三日

記横山正太郎死諫之事兼奠其墓

希世之宝出海隅、非璞非璧又非瑜、径寸赤心照六合、靈光赫々嬌金烏、姓是横山名安武、状貌奇偉且魁梧、靖思沈默存胆略、寤寐憂 國形骸懼、一朝發憤求師友、千里負笈問宿儒、願以我 君致喜曆、願以我民居唐虞、心曰 國家有近患、心曰 廟堂無遠囟、北宋賢良論新法、西漢文學議均輸、遵聖言斯得治道、馳私智必愆機枢、古今情唯如一轍、天下治豈有二塗、俯觀瀛州寂蕭索、仰望彼蒼茫模糊、洛陽朝野屬崩土、長安禁苑委荒蕪、欲探世論覈時事、或訪志士或薨芻、衷情不忒遂決死、毀譽榮辱何足拘、待詔門植杖頭策、自謂 官厅不可汗、退到隣門夜將曉、披襟拔刀自割屠、勿謂所為出客氣、易簪結纓真丈夫、書奏信到日將午、欣然拜 闕絕吸呼、身座三田綠樹下、神護 九重紫雲衢、誓々辞章百世範、醇々忠誠千

載謨、句々痛快皆白玉、字々剗切威明珠、何讓龍逢比干
輩、愧殺秦檜王倫徒、和氣敢言不咫尺、平手死諫爭鎚鉄、
鼎呂猶輕濟時義、羽毛却重獻君軀、利己害人皆有、委
美從俗君独無、高節漂乎抽地軸、逸氣飄然入天区、後飛
廉兮使奔属、前望舒兮令先驅、上騎箕尾翔雲漢、下跨胥
骸游江湖、知君豪遊応如是、宝璐為佩降天都、玉京金闕
異人世、不知沴氣犯肌膚、人世百年若朝菌、区々何為問
荣枯、唯思濟民無他志、在天之靈宜輔吾、天下疾苦困庸
手、靈之格兮民必蘇、

冊子原寸 縦二六・六種 横一八・八種 一一一枚

一七五 小松帶刀ヨリ大久保一藏へ

京都ニテ

(封紙ウツ書)

一「大久保一藏様 小松帶刀

上置

フ

」

御清康可被成御座奉珍重候、然は昨日より御周旋之段誠

ニ御苦勞奉存候、扱御談申上度事件御座候故、御帰宿之
上罷出候間、乍御面働御帰宿相成候上は、一寸ト御しら
せ可被下候、此旨早々申上置候、以上、

十月六日

文書原寸 縦一六種 横三九・四種

一七五 青森山田市の允ヨリ木戸野村へ

箱館攻撃ニ付軍艦差廻依頼ノ件

(封紙ウツ書)

一「木戸

野村兩兄

劍下

市之允

(付箋) 『山田頭義』

(朱) 『戊辰』

」

寒冷時候愈以

各位御精勵御尽力と拝察仕候、諸兵も過ル八日まで尽ク
／＼青森港迄着陣候處、函館野漬候後ニ而万事紛擾、言
語ニ絶候次第ニ御座候、賊等其後ハ大ニ勢ヲ得、函館ヲ
根拠とし追々諸方ニ手ヲ出シ候模様相見へ申候、既ニ七
日ニ当港ニ回天・幡龍兩賊艦来リ、奥羽諸藩へ送ル書面

ヲ差出シ出帆致候、併此書面ハ真の愚ナル事ニ而、奥羽諸藩より討伐之兵隊ヲ出させぬ位の見込と被察候、全体此方之形勢ヲ探る為罷越候なるへく、当時松前とハ日々戦争致候由、松前過ル五日落城、其後「アツサブ」と申所ヲ根拠とし、必死憤戦罷在候由、実ニ寥寥一孤城ニ而、無救無援、為

天家斃而已ヲ知候藩なり、小銃も纔ニ三百挺ニ足らぬ位、兵糧も来年迄ハ無覚束、彈藥其他ハ押而知るへき次第也、然るニ柿^(ツル)一带水ヲ隔るのミニテ、更ニ救援之術も無御座候、外国船ヲ頼ミ少々人数等も可差送手段ヲ尽し候得共、異人等此期ニ乘し莫大之金高ニ無之而ハ一向雇入之儀も不相叶、当地會計局も先日函城一野之節、多分金子も遣ひ果し、当藩・秋田藩ナトハ戦費ニ窮困いたし、何ニも手段ニ絶へ、坐ながら松前之危急傍觀仕、只前日御引揚之匆卒^(急)ヲ罵る而已ニ御座候、生来此の如き苦悶只今日計と悲歎罷在候、とても松前今月中ヲ相待候事ハ決而相成間敷と愚考罷在候間、片時も差急軍艦御差向被下度、為

天下懇願仕候、奥羽諸賊も今度一挙ニ而、再ひ思ひヲ起し候風説も有之、現在函館江南部船なんとハ自由ニ通行ヲ免し候事も有之、賊中ニ仙台・会津杯の徒入交居候由御座候、何分諸事御平定御神速ハ御尤ニ候得共、右等後害之生せぬ御配意所希のミニ御座候、何レ箱館進入之節ハ今少兵隊も入用ニ可有之と存候間、少々なり共南部辺迄ニても御繰出し相成間敷ヤ、御高配奉願候、先ハ任便寸緒呈上仕候、幾応も早急軍艦御差廻被下度、至願此事ニ候、其内時下御自愛為邦家奉願候、草々謹言、

十一月十八夜

尚々、敵兵多くハ本込七連銃アルムストロン大砲等ヲ相用、所謂伝習隊ナル者之由ニ御座候、

文書原寸 縦一七・九櫃 横一五三櫃

一七六 相良遠江守ヨリ島津久光公へ

寒中見舞

(包紙ウツ書)
一 大隅守様 相良遠江守

玉机下奉呈

」

再伸、寒威折角御自愛專一奉禱上候、次ニ野子無異

消日罷在候条、乍憚御降心奉願候、不備、

小簡謹而奉拜呈候、酷寒之節御座候処、先以高閣御揃益
御勇健被為渡奉賀寿候、陳は平常は心外之御無音打過奉
恐縮候、偏ニ御仁免奉願候、先は寒中御容体奉伺度、奉
捧寸毫候、

恐惶謹言、
相良遠江守

十一月廿八日

頼基



大隅守様
玉案下拜呈

文書原寸 縦一九・五種 包紙原寸 縦二七・五種
横五二・八種 横四〇・四種

一七五 島義勇ヨリ三条実美へ?

車駕京都還幸ニ付

(封紙ウケ書)

〔欠損〕 島義勇
様

左右執事

ノ

「

〔欠損〕 啓上奉申上候、倍倍御恭精

御還幸之御供奉〔欠損〕、更御勤勞被成乍暫数年之御忠赤に而、

千古之

御中興不禁感佩奉招祝候、来春は御再幸遂には

御遷都も被成候様、尚又御輔相奉万祈候、御詰中御懇命

を蒙り難有奉存候、扱此上杯八組乍輕少御餞之印に呈進、

御一笑可被下候、御旅中尚々御自愛御保護奉祈候、勿惶

挥手、

十二月七日

文書原寸 縦一九・三種 横一二・六種

一七六 朝廷へノ建白

昨辰十二月初メ正親町三条様・徳大寺様江差出候手

拍

一御政事之大体全ク不相立、御施行之件々順序ヲ被為失

候事而已と奉存候間、御衆評之上体用本末御措置之次第預め御決定、一紙ニ御書認め、方向被定置度奉存候、

二百余年兵馬之權を握り、各藩其拳勅を仰キ、喜憂を成候程之幕府、昨年十月不得已之勢ニ迫り政權返上、遂ニ今日之形勢ニ立到候儀、其原由は多々可有之候得共、畢竟癸丑^(嘉永六年)之年米艦入港以来、措置之方法ヲ誤リ、内上ヲ凌キ下ヲ侮リ、外外国交際之道ヲ失シ、因仍苟且今日之安ヲ偷ミ、要路之面々太平之旧具ニ陥リ、驕奢放逸、紀綱陵替いたし候より之事ニ可有之、左候ハ、暴ヲ以暴ニ易ヘ、柔ヲ以柔ニ易ヘ候様之事ニ而ハ、瓦解之外有之間敷、当政之御方々深ク御省察、其弊害一々驅除、制度紀律確立、本末之分判然相定リ、宇内之公義ニ基、外国交際之道も被相建度儀と奉存候、一忠厚仁恕、政治之大体有之申候、左ニ候得は施行之上ニ御座候由、自古来世は法ヲ以致維持候外無御座候、上令して下行さるより憂ハなしと申戒も候間、人心ニ

從ひ常情堪候処ヲ以寛々法則ヲ立、相立候法則ハ上下共履行、些も御仮借無之様有之度奉存候、
文書原寸 縦一五・六種 横一二九種

二七九 大山綱良ヨリ伊地知壮之丞へ

一(封紙ウラ書)

伊地知壮之丞様 大山

待伺

尚々、木場氏よりも只今申来候付、同断返答いたし置候也、

きのふは能キ御取会御座候、扱二日ハ押掛之賦候、小松方江も申遣置候間、四字比より小子旅宿之様御出掛被下度、尤小屋敷先生書齊ニも御列越、是非く其意奉希候、以上、

極月廿四日

追而、今日も兄出立ニ付未明より沈酔、御推計被下

度候、

文書原寸 縦一六・七種 横三九・四種

一〇〇 岩倉具視ヨリ小松帶刀伊地知壯之丞へ

朝廷ノ薩藩信頼

〔封紙ウツ巻〕
一 小松玄蕃頭殿

対岳

伊地知壯之丞殿
報

ノ

〔墨引〕
「」

華墨披見、如命益御機嫌能御道中凡而御平穩御還輦、御同然為天下大慶此事ニ存候、各位ニも御安全令賀候、併小松氏所勞如何、来状之旨ニ而は未在坂之事と存候、何卒帰国ニ不及相濟候ハ、重畳と存候、洋名医も近々着坂之旨、小子も診察頼候心得、何卒在坂保養懇願候、扱大久保氏正月三四日迄滞在之旨承候、御式中四日御政始ニ付、必三日中帰京可相成候様頼度、夫迄之所ハ含居候、
〔実美〕〔副島〕
三条・副島ニも元日二日之中帰京と存候、為御国許御用

向ニ付、
〔島津忠義〕
修理大夫殿御帰国、尤不可止御事とハ万々推察

候得共、精々穩便御改政有之度候、素リ何事タルヤ承知も不仕、ケ様六サト申入候次第、恐怖不少候得とも、当今薩長 朝廷之乾軸は申迄なく、自今弥以而天下ニ先立御奉公無之候而へ、皇国之事も万去り可申、何卒御父子之中御一人ハ、必 輦下ニ御奉職有之度存候、頃日御帰国ニ付而も、既ニ種々風説不容易義迄も申唱候、尤例之空論ニ而論ヲ不待事ニ候得とも、只今之中、億万一聊之事ニ而も御国許如何抔有之候へハ、賊之隙ヲ窺事ハ無疑事と存候、呉々懸念ニ付御請、便宜一筆申述候、不悪御承引可給候、仍早々如此候也、

十二廿九

尚々、伊地知氏江段々御報可申入筋も候得とも、段々無抛次第ニ而意外之無音、分而御理申入候、早春ハ是非面上可申述候也、

文書原寸 縦一八・八種 横一六六・五種

一八一 井上備前守ヨリ霧島神社祭儀復古ノ上書

(包紙ウラ書)
「上」

井上備前守

フ

ル

乍恐奉申上候、何事ニ不寄存慮之儀御座候ハ、可奉
申上旨、難有被仰渡置候付、
私式

誠ニ以恐入次第奉存候得共、愚存之趣左ニ奉申上候、

霧島山之儀は、

天孫降臨之地にして、日本紀神代卷ニも、高皇産靈尊タカミムスヒノミコト以ニ
真牀追衾マドコロフスマ覆ニ於皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊ニギハヤヒヒコトニシムヤマトリヤサスミ
孫乃ミマシナ離ニ天磐座アマノイハシマ一旦排ハチ二分天八重雲フタヘノヤエクモ稜威之道別サカサケノミチワケ道別ミチワケ
而天アマノ降於日向襲之ヒコノササキ之高千穂峰タカチホノダケ矣ニと顯然に記し置れ、続日
本後紀ニも霧島峰ノ神社と被載置、延喜式ニも式社之内
ニ被定置、

皇国最初之靈地にして天下之人民普くこれを存し、悉く
尊信仕候事ニ御座候、然るに人皇三拾代

欽明天皇之御宇仏像渡来、追々仏法流行仕候以来、僧侶

之徒天下ニ縦横し、虚談妄説を以世を惑し、民を誣ひ、

人心を充塞し、靈地靈山ニは悉く寺院仏閣を建立する習

俗となり、霧島山之如き天下ニ並ひなき日本最初之靈跡

ニさへ寺院を建立して、霧島山六宮権現と称し、所々江

仏体を安置して六観音なと申ふらし、

天孫降臨之神跡を穢し、天下之批判やむことなく、遺憾

之至御座候処、今般

皇代之遺風ニ被為覆候、

御明決 御聖断を以廃寺之儀被

仰出、霧島山之寺院をも被廢候由ニ而、既ニ御役々被差

越候段伝承り、誠ニ以難有次第奉感服候、抑

伊勢太神宮は

天皇之御宗廟ニ而、

御崇敬他に異なるを以、古代之風儀無退転候故、古今之

神学者又は神職たる者皆規模準則を神宮ニ取、論弁仕候

儀ニ御座候、その

伊勢神宮は

人皇九代

開化天皇之御代迄は

天皇御同殿ニ座し／＼けるに、十代

崇神天皇之御宇に神の御勢ひを畏れ給ひて、初て大和の
笠縫邑に斎祭り、

十一代

垂仁天皇之御世今の宮所ニ神宮 御造立 御鎮座被 遊
候儀ニ而、

瓊々杵尊より遙以後之御事に御座候、出雲大社ニおひて
ハ、神代大巳貴命伝来之遺法無闕如被相行候筋ニ相見得、
神祇道軌範とも相成可申儀ニ御座候、高千穂峰ニ而は霧
島神社と御崇め、神典ニも被載置候儀ニ御座候得は、猶
更神代之旧式伝習之輩も有之、

皇国之龜鑑とも相成候様無之候而不叶詎ニ御座候処、中
古以来仏者之為ニ被押并神代伝来之詮も無之、奉祀之者
当分ニ至り而は袈裟をかけ数珠をつまぐり、寺僧の下官

とも可申形勢、神仏混雜仕、見及び聞及び候者誰か是を
歎息痛痕セざらん哉、尤有志の輩は猶以他邦之人に対し
慙愧赧々、実ニ難忍次第ニ御座候、伏願は、此節廢寺之
機に応し、

伊勢神宮又は出雲大社・尾張勢田ノ宮等、日本に為差立
古代より之大社祭儀之規則を探索研究仕、末世之流弊を
捨純一精粹之儀を取、正大之祭式を立、神代之遺法ニ被
覆度御儀と奉存候、併右様御取起相成儀ニも御座候ハ、
兎角主宰之者無御座候而は其詮有御座間敷奉存候間、主
宰仕候職任之者を御撰ひ、天下に卓然たる法則を立、古
国之古国たる道を開き、名分正しく神仏之差別明白に相
分り申候ハ、御領國中上下之人気興起候儀は、おのつ
からの事ニ而、就中神職之者共憤発仕、神学を励み、漸
磨成就し、神祇之本源に遡り候勢ひニ成立、自然と
御国風盛んに相成、天下之人心一新仕、正大之風に帰向
順服し、
御国威神威と共に光輝を増し、

御國家鎮護、永久之御擁護可被為 在御座儀無疑儀と奉

存候間、乍恐弥以別当寺を初、余多之寺院を御除き、天

下ニ押出したる靈跡之御祭祀、上古之遺法を以奉祀仕候

様被遊御座度念願奉存候、尤是迄

御代々様 御信仰深く被為 在御座、往古より 御誓願

又は 御寄進等之儀彼是 御由緒も被為 在御儀ニ御座

候得共、全く別当寺又は住持等ニ相拘候儀ニ而は有御座

間敷、専ら霧島神社 御崇敬之

御一筋ニ掛り候御儀ニ可有御座、譬ひ往古寺院開基、仏

像建立等之由緒も可有御座候得共、

人皇三拾余代以後之儀ニ而、

天孫降臨之御時代とは天地懸隔之訳ニ御座候、此等之趣

不奉願恐存慮之程奉申上候、誠惶謹言、

十二月

井上備前守

文書原寸 縦 一六・六種

包紙原寸

縦 一八・七種

横 三四五・三種

横 四〇・六種

一〇三 外交ニ関スル勅語

(端書)
一筆者不明

前修史局の調査に依れば鳥津久光公トアリ」

朕嚮ニ外国交際ノ道ヲ正シ獨立自主ノ基ヲ定ムルヲ下問

ス、衆庶各丹誠ヲ陳ス、何ノ喜カ之ニ如シ、故ニ今彼ニ

接シ其事ヲ挙ントス、一時幸ニ志ヲ得ルト雖、旧来ノ風

習ヲ一洗シテ天下ノ方向ヲ一定セスンハ何ヲ以カ万古不

抜ノ基ヲ保タンヤ、必ヤ上下相隠シ相疑フノ意ヲ除却シ、

国内一ニ歸シ永ク信義ヲ固結シ盟誓ヲ渝ルコトナク、俯

仰天地ニ愧サルノ心ヲ以テ接スヘシ、然ルニ彼若シ其道

ヲ失ハ、直ニ之ヲ糺シ而彼尚服セス兵ヲ以我ニ迫ラハ、

我只戰ヲ以之ヲ待タン耳、何ソ予メ強弱ヲ論スルニ違ア

ランヤ、故ニ今方向ヲ別楮ニ誌シ、遍ク天下ニ告ク、爾

百辟衆庶速ニ意見ヲ陳セヨ、

文書原寸 縦 一七・五種 横 九二・五種

一八三 明治戊辰役死傷者数扣

伏見鳥羽関東奥羽北越戦争死傷

一戦死合四百八拾五人

内

二百六拾七人

士分

九十一人

諸郷士分

一人

浪士

拾五人

付士

二十人

兵具隊

十九人

私領兵

七十二人

従卒夫卒

内二十人他国者

一手負合六百九拾五人

内

三百九十七人

士分

百三十一人

諸郷士分

二十八人

付士

十四人

兵具隊

一人

社家

七十五人

私領兵

四十九人

従卒夫卒

二口惣合千百八十人

文書原寸 縦一七糎 横三八・二糎

一八四 徳川家回復ニ付探索書

慶喜ノ帰順ト其後ノ謹慎等

徳川回復云々探索書

戊辰ノ時ニ勝安房慶喜ニ一策ヲ献シテ曰ク、薩・長・土
三藩大義名分ヲ以テ、各藩ヲ予シメ繋キ置、御家ヲ滅サ
ントスルヤ、爰ニ数年、此時ニ臨ンテ違背スルヤ、悉ク
名義ヲ以テ正ス、故ニ御家ノ親藩且普代恩顧ノ輩ト雖ト
モ、已ニ恩ヲ捨テ

王命ヲ奉スルハ、実ニ止ムヲ得サルナリ、此勢ヒニ抗ス
ルヤ、則チ御家ハ土崩瓦解立処ニ滅ヒン、而シテ篤ト熟
考スルニ、当時日本ハ未開ノ国、漸ク漢学ヲ学ンテ名分
ヲ重ンスル事ヲ知ルノミ、今ヨリ数年ヲ経レハ、各国文

明ノ風ヲ学ヒ、遂ニ名分ノミヲ重ンスルハ、第二第三ニ置ニ至ラン、尤當時名分ヲ重ンスルハ全国ノ是トスル所、サレハ逆モ之ニ搥抗スルノ者ハアルマシ、然ト雖トモ、追々開明ニ進ムニ至ルヲヤ、海内ノ是トスル所アラン、此各国一般ノ是トスル所ヲ以テ一策ヲ設クルヤ、数年ノ後ナラハ則今ノ名分ヲ是トスルヨリ強カラシム云々ト、爰ニ於テ慶喜大ニ悟ル所アリ、始メテ帰順ニ決シタリト云フ、

慶喜ノ大坂ヲ退テ東京西ノ丸ニ入ルヤ、仏人某直ニ馳来リ、本日ハ國家主人ノ事件ヲ言上スルニ付、御側ヲ人小姓可被成旨ヲ申出タリ、仍テ其通り人人屏風扨イタシタリノ后ニ、時ニ仏人某ノ申ニハ、此度ノ事件ハ実ニ御配慮御察シ申マス、然ルニ兎モ角モ薩・長・土ノ人々ハ、箱根ニ掛ラントス、足下ノ旗下ヲ見ルニ、若シ箱根ヲ越サル、ヤ之ヲ防クノ兵力モナシ、一般ノ兵ヲ統御スルノ人傑ニ乏シ、而テ強テ抗スルヤ、危キコト目ノ当リナリ、仍テ我国ノ横浜ニアル一大隊ト英ノ兵隊ヲ合シテ、足下

ノ為メニ箱根峠ニ三藩ノ兵ヲ麤殺セント、爰ニ於テ慶喜大ニ驚キ、決シテ此義御断申ス、如何トナレハ、彼ハ薩・長・土ノ兵トイヘトモ

王命ヲ奉シ来レリ、而シテ我輩ハ王臣ナリ、王臣ヲ以テ王命ヲ奉シタル王軍ニ敵スル、我国之ヲ名ツケテ国賊トイフ、故ニ適々御親切ノ事ナカラ、是而已ハ断テ御断リ申ストノ事ナリシテ、仏人重テ申スニハ、此間能不相分候得共、一度仏国ニ脱セトノ事ナリ、是モ断リタル所、仏人愕然トシテ居ルニ慶喜ノ申サル、ニハ、今日ノ事ハ此慶喜ガ身ニ取テハ無限御親切報スルニ言葉モナシ、而シテ我命ハ則且タニ迫レリ、仍テ他日再会報恩ヲ期シガタシ、何ニテモ今日中ニ御求アラハ、御酬報イタサント、時ニ仏人左右ヲ見マワシ、慶喜ノ頭ノ上ニ掛リ居シ額額カ書カヲ所望セリ、故ニ其額ヲ慶喜自身ニ卸シ渡サレテ仏人帰リ去レリ、其后上野寛永寺へ謹慎中ニ、英仏人六度程参リ、面会ヲ乞ヒタルニ、慶喜ノ答ニハ、我国法ニ於テ謹慎スルヤ、親戚ト云トモ事故ナケレハ面スル能ハス、況ヤ外国ノ御方ニ於テ

ヲヤ、若シ強テ御目ニ掛ル時ハ、則国法ヲ破ル而已ナラス、随ツテ此慶喜モ破滅スルナリ、度々御出ノ所、実ニ御親切極ルトイヘトモ、此度ハ上ハ国法ヲ立、下ハ此慶喜ガ為メニ御帰館可被下云々、至極丁寧ニ答ヘラレタル所、彼英仏人ノ申スニハ、人ノ切迫スルヤ、財宝杯ニ非ス、人命且夕ニ迫ルヨリ切迫甚シキハナシ、然ルニ此人ヤ命ハ日中ノモノナレトモ、如此義言ヲ吐キテ品行ヲ欠ガス、実ニ海内無双ノ義士ト云ヘシ云々ト、然ルニ此慶喜ヲ倒テ政事ヲ取タル大臣・参議等ノ今ノ始末評論新聞五拾八号ノ如キ、未タ其形ニ顯レサルニ、外国ノ隸屬トナルトモ我身ヲ禦カントスル等ハ、前文ノ如キ国臣タルヲ危キニ臨ンテ失ハザル慶喜ニ対シテ何ノ面目アラン、亦何ヲ以テ

天朝ニ対シ奉ルヤ云々、此旧幕人ノ申フラス所ノ、當時府下ニ流传スル説ナリ、御一新以来、勝安房勅使ヲ奉シテ静岡ニ至リ、慶喜ニ朝旨ヲ述テ、帰路七八丁ニ至ル比、慶喜ヨリ使ヲ走シテ、今一言申後レタリ、仍テ御引

返シテ願トアレバ、勝ノ答ニハ、此勝ニ於テハ、往時徳川家ノ家来トイヘトモ、今ハ則勅使也、若シ御用アラバ、勅使ノ旅宿ニ来駕アレト、仍之慶喜恭シク服ヲ改メ、勝ノ旅館ニ至リタル云々、勅使付屬ノ面々ヲ始メ遠近之ヲ感称シタルヨシ、然レトモ是ハ房州ノ例ノ奇策ニ出タル事ノ由、

静岡人ノ申所ニテハ、戊辰以来慶喜ノ謹慎セラレ、ヤ、

今ニ至リ因州・岡山等ノ兄弟ノ所ニ文通モ無之向ヨリハ度々参リ

テモ返事不致纔ニ一歳二度程水戸御実母ノ元ニ文通アリ、其

文末ニ兄弟ノ所ニモ御序ヲ以テ宜敷云々有之而已ト、是

公然ト表言スル所ナレトモ、其内実ヲ探索スルニ、(徳川齊昭)嫡新中納言殿死去ノ折、遺言ヲ以テ家ヲ嫡ニ続カセス

シテ、烈公ノ御愛子与八郎丸ニ続カシメ、此人ヲ陸軍ニ

従事セシメテ、当今小尉ヲ勤ム此御実母ハ則有栖川宮様ノ姫君ナリ、故ニ烈公余程愛セラレ、

是ニハ余程云是ニハ余程云、亦新中納言殿ノ嫡某ハ本年十九歳ノヨシナ

レトモ、家ハ続カシメスシテ、先達テ陸軍士官学校生徒徒ナリタリ、是等惣テ逐一慶喜ノ預リ聞カザルハナシ、亦

兄弟中ニモ内々会谈アル由、亦烈公ノ社ヲ立ル時ニハ、
鳥居等ヲ献セラレタルヨシニテ、方今水人ノ人望ハ勿論、
愚婦愚夫ニ至ル迄慕ハザルハナシト云、尤新中納言ノ嫡
某入校ノ折ハ、資金モ幾千円贈リ相成候由、惣テ静岡人
ノ表面ニ談話スル所ニ反覆セリ、実ニ怪ムヘシ、慶喜ノ
兄弟本藩主タル人々、当時随分手ヲ延シ居ルコト、第一
岡山九郎丸、因州・鳥原・会津夫ニ徳川親藩ニテ、越
前・尾州・越後長岡、其外元徳川氏ニ属シタルハ皆元知
事ヨリ其旗下ノ者数十人、或ハ数人、平生東京ハ勿論、
西国・四国・中国等ヘ形勢事情偵知ノタメ差出ストノ事
ナリ、

勝房州モ辞官スルヤ、翌日当地ヲ去リ、静岡ニ引タル由、
其后慶喜ニ縷々談シタル事モアルヨシナリ、山岡ハ過日(鉄舟)
辞表出シ、未タ採用ノ有無ハ分ラス、本県ノ士族等ハ梅(孫)
沢人見輩ニテ、人心ヲ繫キ居ルヨシ、東京上野戦亡ノ者
ノ子弟ハ、富田某ニテ繫キ居ル由、上野・下総・常陸・
安房辺ノ長脇差ト唱フルモノ、並脱人賻徒ノ類ハ、信田

雅楽之介時々巡回シテ円メ居ル由、関八州撃劔組ハ山岡
ノ食客和田和一郎ニテ時々巡回繫キ居ル由、静岡近辺、
甲州辺ヨリ八王寺ニ至ル迄ノ賻徒、清水湊ノ次郎長ニテ
撃キ居ルヨシ、此次郎長ト申モノハ、御一新已来徳川氏
ノ恩ニ感シ、悪業ヲヤメテ当時富士ノ裾ニ開拓ヲナシ居
リ、関八州ノ余徒之ヲ恐レザルモノナシ、亦従ハザルハ
ナシ、四方ニ手下数百ヲ持シ者アリ、ナレ川ノ亦五郎、
水戸ノガラ熊、菅谷ノ亦左エ門、佐倉ノ佐吉並シンボ、
小金ノ小次郎其他数名、皆数百ノ手下アリ、次郎長ノ属
下トナレリ、此次郎長ハ静岡人余程高貴ノ所ニテ繫キ居
ルヨシ、此種類ハ、当時ノ浮々薄々タル諸生ヨリモ現地
ニ用レハ用ヲナス者也、静岡県下金谷ヶ原土着士族開拓
頭取中条金之助ノ属下四百人余、是ハ惣テ元彰義隊ノ者
共ニテ、開拓ヲ始メシヨリ已ニ六年、毎朝六時頃貝ヲ吹
立、壮年ノ者ヲ金之助ノ稽古場ニ集メ、元五ツ頃迄武芸
ヲ属習シ、朝飯ヲ仕舞、直ニ歙ヲ肩ニシテ農事ニ付ク、
暮ニ方ルト亦学校ニ入り、夜半ニ至ルマテ読書講習ス、

此節後備軍ノ徵集スル令ノ下ルヤ、右ノ徒一人モ服セス、夫ニ付区戸長等ヨリ属々説諭シ、病氣故障ニテモ可申立旨達シタルニ、決シテ病氣ニテハ無之、唯御達ニ服セザルノミト申立タル由、或ハ県庁ニ出ルニ、ワラヂヲハキナガラ玄関へ上ル、之ヲ咎ムレハ是モクツナリ、革トワラトノ違ヒアルノミ扨ト申ス者モアル由、是迄ハ扶金幾千ツ、年々渡来由ナレトモ、当年ヨリ不相渡由此ハ徳川ヨ、渡ノ部歟是迄度々沸騰セントスル事アリシ由ナレトモ、漸ク松岡・山岡等ニテ押へ居タリシニ、此頃ハ余程勢強ク相成候由、浜松県下味方ケ原土着開拓ノ頭取間宮鉄次郎、右ノ属下四百五十余人、是ハ中条ニ比スレハ余程名望他迄(聞)聞シヨシ、此両党並信田・富田ノ徒ヲ合シテ、静岡中ノ繫ト云フヨシ、

東京本郷元加州邸ノ先ニカラダチ寺ト申所アリ、此住持固ヨリ慶喜ノ徒ニテ、今ニ生徒百余人ヲ一室ニ入レテ、余程勉強ヲナサシム、其次第ハ大凡百十余帖モアル広間ニ中間ヲ板敷ニシテ仏像ヲ中ニ立テ、脇廻リ惣テタ、ミ一

帖ツ、ヲ敷廻シ、惣テ机ヲ外へ向ケ其下へ寢具ヲ入ル、所ヲ作り、朝六時頃一同起テ、中間板ノ間ヲ廻リ運動シテ各机ニツキ、和漢ノ歴史ヲ読ム、十二時ニ至ルト亦読経シテ、中間板ノ間ヲ廻リ食ニツク、其飯ハ朝麦ノ粥、昼米ノ粥、夕麦ノ粥ナリ、一撃柝ノ声ヲ聞テ椀ヲトル、漸ク三盃ヲ尽ス頃亦撃柝スルト食ヲ終ル、其間極早食ノ者ナラザレハ三盃ヲ尽ス能ハスト云フ、亦昼ヨリ夜半ニ至ル迄和漢史ノミヲ読マシメ、休暇外出ストイヘトモ、出先キテ飲食スル事ヲ禁シ、亦此賄ヲ為スモノハ、生徒ノ内ニテ随分讀書ノ出来タルモノヲ撰ミ、使役ニモ使フ、未熟ノ者ハ決シテ外事ヲ致サセス、実ニ静岡人ノ精神ヲ練ル、皆此類ナリ、此内ニモ多クハ戊辰戦亡ノ子弟アル由ナリ、

静岡人ノ世ニ信用セラル、実ニ感スヘシ、先ツ先頃ロ山科某罪科ヲ犯シ捕縛ニツク時モ、或ル屯所へ薩土人ヲ除クノ外巡查何名可差出トノ掛合有之候由、然ルニ静岡人ニ於テハ、榊原健吉三拾円ノ月俸ニテ門第八人ト共ニ

条公ニ雇ワレ、山岡ノ門弟ニテ十七八名者岩倉公へ御用
ヒ相成居ル、其疑ハル、ト信用セラル、如此ノ相違ア
リ、豈ニ欺セサル可ケンヤ、要路ノ人ハ西郷先生、長ノ
前原氏等へ注目シ、草莽間ニテハ動モスレハ木戸(隆徳)・大久(季忠)・大久(利通)
保ノ両参議ニ着目ス、決シテ静岡人ノ隠ニ奔走スル等夢
ニモ知ラス、甚シキニ至テハ、佐幕徒ニテ結髪帶刀、慨
然激説ヲ唱フコトモアリ、諸県ノ猛士多ハ之ニ欺カルト
実ニ大歎息ノ至リナリ、

慶喜ノ部下ニハ洋学者アリ、漢学者アリ、固陋ノ者アリ、
激徒アリ、武人アリ、賄徒アリ、商人アリ、官員モアリ、
加フルニ人情旧ヲ慕フハ愚人ノ常ナレトモ、近頃ニ至リ
テハ、実ニ幕政ヲ慕フ者多ク、亦之ヲ煽スルモアルカ、
昨年以來東照宮ノ社ヲ新立シ、亦上野戦亡ノ塚ヲ新設シ、
広小路ニ桜樹ヲ植テ之ヲ九段ノ招魂社ニ比シ、門参スル
モノ日々群ヲナシ、其宝錢等ノ集ル、当時上野ヲ以東京
第一トナス、而シテ本年ハ士族家祿ノ変政アラントシ、
又地租改正ニ農民ノ苦情ヲ起ス、一ツトシテ旧ヲ思ハザ

ルハナシ、我近古ノ伊勢新九郎、北条ノ家名ヲ統ノ類ニ
等シキモノアラン欤ト想セラルレドモ、此節ハ形ニ顯レ
スシテ、勝ノ所謂海内ノ是トスル所ヲ以テ早雲ニ出ルカ
ト想セラレタリ、此是トスル所ノ一物ヲ起ス時ハ、教法
家モ新聞屋モ民権党モ洋学者モ官員モ諸生モ皆期セスシ
テ味方トナルヤ必然ナリ、我

皇統ノ為メニハ実ニ恐レザルヘケンヤ、
冊子原寸 縦二四・四釐 横一六・六釐 十枚

一八五 大久保一藏ヨリ小松帶刀へ

大隈ノ件并越後兵隊差繰ノ件

(重信)

わたり候事ニ御座候や、大隈八太郎より東京江無人ニ付
被差出度と之相談承申候付、所存ニハ何も差支有之まし
く存候へ共、一応懸合いたし候上可及返詞段申入置候、
権判事等被仰付開市之方なれハ、御用弁も可仕候、其節
御吟味之廉も不相伺候付、一往御尋申上候間、何分御返
翰可被成下候、

○北越より東京府へ出張七小隊之儀、内田(政恩)より申越候趣有之、大村(益次郎)も帰国休息為致候様申入候趣も有之候付、

明日より黒田(清隆)早々出府、彼地模様次第進退相決候筋相談置申候、何れ彼兵へ引取、外ニ人数御差出相成候方可然奉存候、初より之三小隊御暇有之、近々上京之由ニ御座候、吉井江も右御咄被成置可被下候、用向而已早々拝首、

正月八日五字

大久保一藏

(小松帯刀)
玄蕃頭様

文書原寸 縦一六・三種 横五〇・五種

一〇六 島津伊勢ヨリ桂右衛門へ

西郷伊地知正治等ト会谈ノ件

(封紙ウツ書)
一右衛門様 伊勢
机下用向

ノ

┌

此兩日些御不快之由、今日ニ至り春雨鬱々敷御座候処、いかゞ之御気分ニ御座候哉、いぢゞ正治ニも唯今罷歸候

由届申出候付、大意申込置、おのつから明日茂会議可有之との趣懇達置候、刑部(新納久衛)殿方江へ私より引合可申哉、亦

貴兄より御通シ被下候哉、何分致承知度、今日も西郷より早目評決いたし度趣茂承候付、かたゞ御掛合申上候、此旨艸々得御意候、頓首、

正月九日

文書原寸 縦一六・五種 横七八・二種

一〇七 小松帯刀ヨリ大久保一藏へ

ホートキエン雇入ノ件

(端裏書)
「小松」

ホートキエン滞阪日限之義被仰越承知仕候、全体同人義は、旧幕之時分江戸病院惣裁頼相成居候而、中途ニ而昨春之混雜相生シ、夫より曳返し帰国いたし候処、昨三四日頃御雇之義御申越ニ相成候哉ニ承居候間、大坂江大病院被召立候ハ、彼方江御雇相成候事と相考居申候、横濱江着之上過日掛合、当府江申来候段過日承申候間、後(象)

藤知事江申越候様(二友厚)五代江申入置候都合ニ御座候、前文之

事故、先当地ニ混と滞在之賦ニ御座候、

輔相公(岩倉其徳)ニも御都合相調候得は御下阪御療養相成候へ、

十分と奉存候、全体暖地ニも御座候故、旁可然奉存候、

此段早々御報迄如斯御座候、以上、

正月十一日

小松

大久保様

再白、横浜掛合ホートキエン之事は、後藤方御聞被

下候而、何とも早く御差配無之而は、外国人之事ニ

而取扱方も甚込入候間、其辺も可然御尽力可被下候、

以上、

文書原寸 縦一七・二寸 横九四・三寸

〔六〕薩長土肥四藩主ヨリ版籍奉還ノ上表

(端裏書)

毛利宰相中将

島津少将

長薩土肥建言書

肥山内少将

肥前少将

臣某等頓首々々謹テ案スルニ、

朝廷一日モ失フ可ラザル者ハ大体ナリ、一日モ仮ス可ラザル者ハ大權ナリ、

天祖肇メテ国ヲ開キ基ヲ建玉ヒシヨリ、

皇統一系、万世無窮、普天卒土、其有ニ非ザルハナク、

其臣ニアラザルハナシ、是大体トス、且与ヘ且奪ヒ、爵

禄以テ下ヲ維持シ、尺土モ私ニ有スルコト能ハス、一民

モ私ニ攘ムコトアタハス、是大權トス、在昔

朝廷海内ヲ統馭スル、一ニコレニヨリ

聖躬之ヲ親ス、故ニ名実並立テ天下無事ナリ、中葉以

降 綱維一タヒ弛ミ、權ヲ弄シ、柄ヲ争フモノ、踵ヲ

朝廷ニ接シ、其民ヲ私シ、其土ヲ窃モノ天下ニ半シ、遂

ニ搏噬攘奪ノ勢成リ、

朝廷守ル所ノ体ナク、乗ル所ノ權ナクシテ、是ヲ制御ス

ルコト能ハス、姦雄迭ニ乗シ、弱ノ肉ハ強ノ食トナリ、

其大ナル者ハ十数州ヲ并セ、其小ナル者猶土ヲ養フ数千、

終ニ所謂幕府ナル者ノ如キハ、土地人民擅リニ其私スル

所ニ頒チ、以テ其勢權ヲ扶植ス、是ニ於テ乎、

朝廷徒ニ虚器ヲ擁シ、其視息ヲ窺テ喜戚ヲナスニ至ル、
横流ノ極滔天回ラザルモノ茲ニ六百有余年、然レトモ其
間往々

天子ノ名爵ヲ假テ、其土地人民ヲ私スルノ跡ヲ蔽フ、是
君臣ノ大義、上下ノ名分、万古不拔ノモノ固ヨリコレ有
ルニ由ルナリ、方今

大政新ニ復シ、万機之ヲ親ラス、実ニ千歳ノ一機、其名
アツテ其实ナカル可カラス、其实ヲ挙ルハ、大義ヲ明ニ
シ、名分ヲ正スヨリ先ナルハナシ、嚮ニ徳川氏ノ起ル、
古家旧族天下ニ半シ、ヨツテ家ヲ興スモノ亦多シ、而シ
テ其土地人民是ヲ

朝廷ニ受ルト否トヲ問ハス、因襲ノ久シキ、以テ今日ニ
至ル、世或ハ謂ラク、是祖先鋒鏑ノ徑始スル所ト、吁何
ゾ兵ヲ擁シテ官庫ニ入り、其貨ヲ奪ヒ、是死ヲ犯シテ獲
ル所ノモノト云フニ異ランヤ、庫ニ入ルモノハ人其賊タ
ルヲ知ル、土地人民ヲ攘奪スルニ至ツテハ、天下是ヲ怪
マス、甚哉、名義ノ紊壞スルコト、今也不新ノ治ヲ求ム、

宜シク大体ノ在ル所、大権ノ繫ル所、些モ假スヘカラス、
抑臣等居ル所ハ、即チ

天子ノ土、臣等牧スル所ハ即チ

天子ノ民ナリ、安ソソ私有スベケンヤ、今謹テ其版籍ヲ
収メテコレヲ上ル、願クハ

朝廷其宜ニ処シ、其与フベキハコレヲ与ヘ、其奪フベキ
ハコレヲ奪ヒ、凡列藩ノ封土更ニ宜シク

詔令ヲ下シ、コレヲ改メ定ムベシ、而シテ制度典型軍旅
ノ政ヨリ、戎服・器械ノ制ニ至ルマデ、悉ク

朝廷ヨリ出テ、天下ノ事大小トナク皆一ニ帰セシム可シ、
然后ニ名実相得、始テ海外各国ト並立ヘシ、是

朝廷今日ノ急務、而又臣子ノ責ナリ、故ニ臣某不肖謏劣
ヲ願ミス、敢テ鄙衷ヲ獻ス、

天日ノ明幸ニ照臨ヲ垂賜ヘ、臣某等誠恐誠惶頓首再拜、
以表、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第一四四号
文書ノ一部ト同文ナリ)

一〇九 薩長土肥ニ倣ヒ諸藩主版籍奉還願

薩長肥土四藩版籍

朝廷へ奉返上度旨及出願候趣、昨今伝承仕候、右ハ全慶徳兼而ノ素志ニ有之候処、不凶四藩及先発候儀、本懐之至奉存候、仍テハ慶徳ニ於テモ同様二州版籍奉返上度奉存候、此段可然御執奏可被下候、以上、

正月

因州(池田)
慶徳

臣忠寛頓首頓首謹言、臣宗藩島津忠義等上表シ侯伯之封土皆幕府之私与攘奪之余而、非

朝權賜与之正名分之乱大体之虧、是ヨリ太甚ハナンシ、方今

大政一新急務此ニ存ス、故ニ自先上其版籍乞

朝廷、宜正大体玉ハンコトヲ、議論公平事理切当、亦無遺憾臣窃ニ聞其説、深伏其義、因謹テ上版籍、亦如忠義

等所表、臣区々不勝懇冀之至、伏乞
聖照、臣誠恐誠惶再拜白、

正月廿七日

(忠寛)
島津淡路守

今般大政

朝廷ニ帰シ、四海一家之

御宏謨被為建候ニ付テ、府県御取建新政御布行、隨而列藩モ同様御趣意ヲ奉戴シ、万民

皇化ニ霑ヒ候様被為遊度

聖旨ニ御座候処、窃ニ従来之形勢ヲ相考候ニ、藩治ニ於テハ其因襲之久キ殆ト數百年、之カ主タル者其民ヲ以テ私有トシ、王民タルヲ知ラス、之カ民タル者唯藩主アルコトヲ知テ

王家アルコトヲ知ラス、自夫シテ般々ノ弊害不遑枚挙、之ニヨリテ府藩県一体ナルヘキノ御布告追々有之候得共、其実ニ到リテハ容易ニ一新スヘキコトニ非ス、付テハ是迄ノ版籍総テ

朝廷ニ御収メ被遊、其土地人民悉ク

朝廷ノ御管轄ニ相成、天下郡県ノ御制度古ニ復シ候ハ、

普天ノ下率土之浜、遍ク

王化ニ浴スルヲ得テ、下民ノ情実モ亦随テ

九天ニ相徹シ、此ニ至テ始メテ四海一家ノ御実効相顯レ

可申哉ト、兼々愚考仕居候得共、但其施設ノ小節目ニ至

テハ未タ件々定見モ相立兼候故、今日迄建言指扣居候事

ニ御座候、然ル処伝聞仕候得は、今度四藩ヨリ建言有之、

大体大権総テ御掌握ニ相成ラス候半テハ、復古ノ実モ難

被行ニ付、其版藉ヲ納メテ之ヲ上リ、其与奪悉ク

朝議一途ニ帰セシムヘキノ主意、実ニ至当ノ儀ニテ、鄙

見ト暗合仕、於臣も版藉ヲ納メ度奉存候、右建白之趣速

ニ御採用被為在度、併其節目ニ至リ候テハ錯置充当ナラ

サレハ、却テ許多之弊害ヲ生シ可申候得ハ、^(指)広ク公議ヲ

被為尺度奉存候、尚心付候儀ハ追々可奉建言候、以上、

正月

^(松平) 越前

茂昭

謹而奉申上候、此度

王政御一新、万機

御親裁之御趣旨被 仰出之、鷗鼻改音、草木風靡、誠ニ

以テ千歳之一日尚奉仰海内甘服之化候、就テハ弊藩是迄

所領罷在候封土之儀、此俣私有仕候而ハ、於名分深奉恐

入候、依之土地人民共奉差上度、宜御裁決奉願上候、以

上、

正月廿八日

戸田采女正 ^(氏共)

今般海内平定之上は、万機

天裁出候儀ハ申迄モ無之候処、既昨今長・薩・肥前・土

版藉差上、与奪

朝裁を仰可申段建言仕候趣、至極同意之筋ニ御座候、諸

侯之富ハ素ヨリ

天子之有ニシテ、私スル所ニ非スト申儀ハ、先哲之語ニ

モ有之儀ニテ、兼テ其心得ニ罷在申候処、右四藩建言最

得其実候儀ニ付、臣韶邦改テ言上不仕候間、早々御採用

被為在、私藩之儀モ何卒御一轍之

天裁ヲ俯テ奉懇願候、此段宜御執 奏奉願候、誠恐誠惶
頓首敬白、

正月

細川中將^(細那)

臣定安戀愚庸劣礼法ヲ知ラス、敢テ猥リニ上言シ天下ノ
大政ヲ論ス、罪万死ニ当ス、伏案スルニ、今般

王政復古天下一統万機一ニ

聖裁ニ帰ス、実ニ七百年以来ノ盛業万世治化之基ヲ開ト

云ヘシ、日ヲ追テ明令ヲ下シ、兆民

聖化ニ浴スルノ時至レリ、然而臣定安罪戾ヲ顧ミス、敢

テ鄙意上言ス、凡天下ノ事時會アリ、此ニ当リ行フ時ハ

速ニ功ヲ成シ易シ、故ニ尤此ニ注意ス可ナリ、今也

王政一新此時ニ当リ、先ツ根本ヲ堅実ニセサル可ラス、

根本ハ大権ナリ、堅実ニスルハ権ヲ

朝廷ニ収ムルヲ謂フ、其権ヲ収ムルハ万機悉ク

聖裁ニ出テ、皇教治化遍ク兆民ニ流カレ、率土之浜ニ至

ルマテ

天子ハ天下ノ父母タルヲ知テ、悉ク奉戴スルニ在リ、中
古以来武人地ヲ略シ、遂ニ世襲トナリ、漸ク封建ノ勢ヲ
成シ、終ニ互ニ力争シ、大ハ小ヲ兼ネ、強ハ弱ヲ并セ、
各自ニ臣人ヲ養ヒ、割拠ノ形ヲ顯ハシ、甚シキニ至リテ
ハ 王命ニ抗スルニ至ル故ニ、僻土ノ民上ニ億兆之人主
有ル事ヲ知ラス、慨スルニ堪ユ可ン哉、而テ今万機一新
ノ際、億兆直チニ深仁洪沢ニ浴シ、悉ク

天子ヲ奉戴セハ根本ハ自ラ堅実ナル可シ、根本堅実ナレ
ハ枝葉随テ繁茂ス、況ンヤ今外夷交接ノ時ニ当リ、我

神州ハ 帝国ニシテ

皇統万世宇内ニ冠絶シ、大権一ニ帰シ、徳威四海ニ輝カ
ス可キヲヤ、今臣定安不肖辱ク藩屏ノ末ニ在リ、斯ル盛
業時會ニ当リ、鄙意豈黙々トシテ已ム可ン哉、故ニ鉄鉞
ノ誅ヲ憚ラス、敢テ上言ス、若シ臣ノ受任スル所ノ版藉
ヲ

朝廷ニ収メ、更ニ宜ニ從テ之ヲ勉シ玉ハ、何ノ大幸カ

之ニ如シ哉、仰願クハ

聖明之ヲ裁セヨ、臣定安誠惶誠恐頓首々々昧死上言、

正月

松平出羽守
(定安)

文書原寸 縦一七・五糧 横四七五・五糧

メンコトヲ謀レ、宜ク此意ヲ奉体セヨ、

右上包ニ

明治二年二月二日於

御前渡賜

宸翰

侍臣右少弁前光
(柳原)

一八〇 久光公へノ宸翰

二通

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第一五二ノ

一八一〇ノ一

(端裏書)
「己巳二月宸翰ノ写」

天下ノ大義ヲ明ニシ、

朝廷ノ体裁ヲ正シ、争乱ヲ撥シテ之ヲ正ニ反スハ、此レ

汝先臣贈中納言ノ遺志ヲ承ケ、国論ヲ定メ、長藩ト与ニ

積年尽忠ノ所致ニ之レヨル、自今而后社稷長計モ亦正ニ

汝両藩股肱トシテ勉ムベキニアリ、凡国体ヲ正シ、強暴

ニ備ヘ、公義ヲ立テ、民安ヲ虞リ、独立不羈ノ基ヲ成ス

等ノ事件、殊ニ汝等ニ問テ、以テ施サントス、其速ニ上

京、朕一人ヲ助ケテ、以テ永ク衆庶ト与ニ天祿ヲ保タシ

一八一〇ノ二

上包

三条輔相書東

実美謹テ島津中将座下ニ白ス、

今日一日

主上臣実美ニ宣シテ曰玉フ、

朝家七百年来ノ頽廢、一旦緒ニ就ク、此

天神天祖在天ノ靈ニ頼ルト雖、偏ニ汝先臣贈中納言ノ遺

志ヲ紹キ、長藩ト積年誠忠ノ貫ク所ニアリ、

朕深ク之ヲ嘉ス、然ルニ国基未タ定ラス、外患難測、此
レ深ク

先朝ノ憂念スル所、況ヤ万機草創ノ際、汝等宜ク薩長ト
相協ヒ、匡救輔翼以テ長策ヲ決定シ、

朕ヲシテ罪ヲ

先皇ニ得セシムル勿レ、

朕自書ヲ以テ長門宰相中将・島津中将等ニ下ス、敢テ兩

臣ニ私スルニ非ス、永ク天下ニ休戚ヲ俱ニセンコトヲ欲
スルナリ、汝等厚ク

朕カ意ヲ致セ、臣等浅劣ト雖モ、忝クモ

天意ヲ奉体シ、足下兩藩ト同心協力、永ク前途ノ規模ヲ
定メ、

聖旨ノ所在ヲ達シコトヲ是望ム、依テ兩侯速ニ上京、益
国家ノ為ニ忠益ヲ尽サレンコトヲ欲ス、則

皇国ノ大慶、臣等ノ幸甚ナリ、

明治二年二月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第一五二ノ

三号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・九釐 横三三・七・五釐

一八一 伊達伊予守より島津久光公へ

戊辰役之戦功ニ就而

皇上倍御機嫌能、乍憚奉恭悅候、随而御全家益御清穆奉
遙賀候、将奥羽北越粗鎮静、朝威とハ乍申、尊藩粉骨
之御忠勤偉功故にて、不斜 叡感、満 朝感頼仕候、尔
後之御処置極而御大切ニ付、何分早々輿病御上京之上被
為竭忠略度、輔相一同渴望此事情、将亦此度(藩刀)小松モ為加
療漸時帰国申候処、於外国官切支丹徒一条応接、又支
那・朝鮮使節被遣候大事件等有之、右依頼之仁帰国、官
中大当惑ニ付、早々四月上旬迄ニ東上候様御致声希入候、
委曲ハ大久保より可申上、今日下阪、明日乗艦、取込大
乱略走悪筆候条被免御判読希候、恐々敬白、仲春初二

島津中将公閣下

侍史

宗城

二伸、時下御保体専念々々、乍末

当公御始へ宜敷願入候、一別尔後ハ絶鴻書、慙悚之
至仰海量候、僕碌々瓦全、乍憚御擲念可被下候也、
文書原寸 縦一八櫃 横三・六櫃 二枚

二八三 長岡左京亮殿ヨリ島津大隅守殿へ

賜暇帰国ヲ告ゲ隣藩親睦ノ誼ヲ求ム

(包紙ウツ書)

「島津大隅守様 長岡左京亮

侍史

緘

「

一翰奉拝呈候、春暖相催候処、益御堅剛奉大賀候、昨季
は御足痛之旨奉伝承、深く奉案勞候処、追々御順快之旨
先以奉恐悦候、陳は小生儀昨季度以来東京在勤罷在候処、
奥羽も平定ニ相成り、東京へ

御親臨も被為在候旁、

皇政御一新之御運ひニ相成り奉恐悦候、方今之際於一藩
も屹度一新仕り不申候而は難相成、百日之間帰邑相願ヒ
着邑以来彼是多忙ニ而御訊問も届兼、恐縮至極御海容可

被下候、実々御隣国之義、深く御親睦奉希候、小生も今

少シ暇出来候ハ、御城下ニも拝趨御安否等奉伺深く御

親睦仕り候心得ニ御座候間、左様御含可被下候、今般拙

(細川謙久)

兄右京大夫上京ニ而、今日熊本発程仕り候間、御吹聴申

(島津忠義)

上候、昨季在京中は追々修理大夫様ニも御懇情被成下奉

感佩候、楼上之御集会之事思ヒ出し申候、将又国産之品

至而粗末之至リニ御座候得とも、差出し申候条御笑納被

下候ハ、大幸之至リニ御座候、万緒申上度候得とも、

委曲後音ニ譲り奉申上候心得ニ御座候、先は御安否伺旁

如此御座候、恐惶謹白、

二月五日

長岡左京亮 (護美)

島津大隅守様

侍史

尚々、御自愛奉專折候、小生儀今般東海道通行仕候

処、軍行中ニは候得とも富岳之景頗ル適意ニ候間、

口号一首御笑覧可被下候、

浮雲ハ麓にしつむゆふ暮の

そらにつもれるふしの白雪

阿々

文書原寸 縦一九・六種

包紙原寸

縦三〇・二種

横 一三二種

横四六・四種

一八三 岩倉大納言ヨリ島津中将へ

久光公ノ上京ヲ促ス

(包紙ウラ書)

岩倉

島津中将殿 大納言

閣下

緘

┌

春寒之候、先以

聖上益御機嫌能被為涉奉恐悦候、老台弥御清榮、御久疇

漸々御復常之由、為朝野幸甚此事候、小生東京滞府中風

と病患ニ罹り、所詮分理平生ニ不立辰困苦罷在候、乍併

元より未タ膏肓ニ入候儀ニハ無之、日々勤仕不及なから

此際益篤力候底意、此段御降慮是祈、抑東北平定万御都

合好ク、一旦還幸被為在候、就而は今日之盛事、貴藩并

長州等積年誠忠之所徹、天下之公論敢而弁するを不待也、

今度

宸断ヲ以

勅使被差立候儀、深キ

叡慮も被為在候御事、臣等ニ於而も奉感泣候、御闔藩之

面目不過之、御満足之程令遠察候、右ニ付大久保市藏被

差添帰国被 仰付候間、都而口頭ニ相託シ申候条御承知

可給候、実々前途守成之基礎速ニ不被為立候而ハ、内憂

外患不可測、夜白杞憂罷在候次第、今日は何卒御病疇被

扶、早々御上京之事、偏ニ奉渴望候、巨細紙上ニ尽スヲ

得ず、万大久保ヨリ御伝聞希望候、右為御音信草略拜呈

如此ニ候也、

二月七日

具祝

島津中将殿

二伸、賢息御滞京中ハ格別御懇情ニ預り忝存候、乍

憚能々御伝声可給候、将亦毎々御国産佳品御患投忝

候、此品粗薄ながら聊鄙意を表し候迄進呈候、御笑
留可給候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第一五二ノ
六号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一八・二種 包紙原寸 縦一八・一種
横二三八・五種 横二九・一種

一八四 勅書

朕忝大統ヲ繼、夙夜憂勤、惟恐皇統未張、万姓未安、前
途之業実不容易、朕深苦慮、汝久光朕カ肱股羽翼ナリ、
宜朕カ不逮ヲ助ケ、左右群臣ト同心戮力、皇業ヲ賛成シ、
朕ヲシテ復古ノ成績ヲ遂シメヨ、今大納言具視ニ勅テ、
朕カ意ヲ告、其レ欽テ之ヲ聽ケ、
文書原寸 縦一八・三種 横三〇・三種

一八五 久光公上京召命御請書
(包紙ウツ書)
「御請書」

今般不凶モ
勅使御下向、

宸翰頂戴被

仰付、且御直垂一領・羽二重十匹拝領仕、不肖之臣別而

恐入難有仕合奉存候ニ付、不日輿疾

闕下ニ拝趨仕、奉謝無量之

天恩度奉存候、此段御請奉申上候、敬白、

二月十六日

久光

文書原寸 縦 一九種 包紙原寸 縦 三〇種
横七一・二種 横三七・八種

一八六 伊地知正治ノ陸海軍備意見

(端裏朱書)
「己巳二月 いちゝ正治」

王政御復古以来、万緒靡典、一時振興更ニ可申上事件無
御座候得共、乍恐天運巡環、

皇国今日之形勢ニ立至候儀、上ハ

列聖在天之靈と、次ニは近年志士精心之致ス処と奉存候

得は、方今

朝廷上之御国是、上

列聖之御鴻業御継述、下志士之志願御採用被成度儀と奉
存候、然は昨年中大乱僅ニ平キ、御草創之間人情洶々た
るの砌ニ御座候得共、速ニ海陸軍之御手当相備り、万国
公法之条理に基キ、礼儀揖讓を以而各国へ御親睦之道相
立候内、一旦害公法不思儀之變茂到来候ハ、大ニ

皇威を宇内ニ輝候様無御座而は、戊午以来有志死節之靈
魂御発典之第一儀相欠候儀と奉存候、抑海陸軍之御手当
西洋流御採用ハ時機可然之御良法と奉存候得共、尚申上
度子細ハ、彼西洋各国ニ而茂其国之形勢ニ從而手を下ス
処相異候故、自然各国諸事長短御座候付、於

皇国膺徴之典茂御国勢御見合セ、相当之処ニ而不被成御
立候而は実用立申間敷、扱ハ古より志士仁人死生之遲速
を見る事甚輕キ儀ニ御座候得共、死者之志ス処生者ニ而
不継述ハ万世之下、乍恐奉

朝無正人と可申欵、仍而戊午以来節ニ死候輩ノミ青史之

美談不相成様、永年

廟上取捨之御評決奉懇願候、

巳二月

恐惶敬白、

文書原寸 縦一六・二種 横一〇三種

一六七 久光公毛利中将ト連署上表

廟堂人材登庸ノ件

(編纂書) 己巳三月長州連名建白書一時ニ参 内三条公江差出ス

臣等建言之筋格別言上可仕儀茂無御座候得共、乍恐衆議
公論を被為尽、大公至誠を以御採扱被為成、御政令益一
途ニ出、近小多端ニ涉らず、着落拾収之目的相立候処ニ
而御論決被為在、人心之方向相定候儀、第一御基礎之措
梯ニ可有御座、自然一箇之新奇を主張し、各功業を專と
し、其成否を不問様ニ相成候而は、所謂可論而不可行之
訳ニ相成、随而御政令難被相行、尤其源由する所其人を
被為得と否とニ可有之ニ付、御人撰厚ク御廟議を被為遂
候上、緩急順序を不被為失、諸事御施行被為成候御儀、

最御急務と勘考仕候、願くハ臣等を御寵遇之朝意、天下
列藩ニ推及し、一視同仁之
叡慮貫徹仕候様、伏而奉懇願候、以上、

三月

毛利宰相中将

島津中将

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第一八八号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一九・三種 横一四七・一種

〇二六 久光公従三位参議兼左近衛権中将宣下 二通

二六九 山階宮晃親王ヨリ島津中将殿へ

車駕東幸、晃親王御出仕ノ件

(包紙ウツ書)

「島津中将殿」 晃

机下

封

(封紙ウツ書)

「島津中将殿」 晃

玉机下

時令随分く御自愛希入候、乍筆末過日ハ推参候処、
速ニ得拜顔、千万くニ御座候、俞々同道希入存候
也、

益御安全哉令拜承存候、寔ニ今日は無滞 御出聲、互ニ
奉恐賀候、扱ハ昨日 帥宮(繼仁親王)入来ニ而、此度親王中ニ而一
人大臣中ニ而一人、東京出仕可有之御沙汰候、右ニ付大

臣ハ桜木公ト申定候へ共堅御断、大炊御門ニ相成候、親
王ハ中書王(那繁親王)式部卿宮御老年ニ而不被為

仰出、帥宮ハ所勞氣而断、国那宮も同様而断、是非く

晃参向候様との事、尤国那宮も内々相招三人相談の上遂
ニ晃御請申事ニ相成り、則昨夕帥宮晃同道而参

内始末弁事江申入、晃参

内遂御請申上候、随而不日東行致し候、誠ニく不存寄
東京及富士峯一見出来候段深々畏入存候、全ク御蔭と海
岳一札申入候、尚此上万々宜々希入と存候、不取敢御風
聴申入度如此候也、

恐々謹言、

三月七日

文書原寸 縦三二・六種

包紙原寸

縦二八・四種

横四五・八種

横四〇・三種

二八〇 車駕京都御発轡御東幸御日程

御休泊割

御発轡

七日

御昼

大津

七日

御泊

草津

八日

御昼

石部

御泊

水口

九日

御昼

土山

御泊

関

十日

御昼

津

御泊

松坂

十一日

御昼御泊

外宮文殿

外宮

御拜

御昼

外宮文殿

内宮

御拜

十二日

御泊

内宮文殿

御昼

松坂

十三日

御泊

津

御昼

神戸

十四日

御泊

四日市

十五日

御昼御泊

桑名

御昼

佐屋

明治二年 (1869)

御泊	廿二日	御昼	御泊	廿一日	御昼	御泊	廿日	御昼	御泊	十九日	御昼	御泊	十八日	御昼	御泊	十七日	御昼	御泊	十六日
尻	府	藤	金	県 <small>(新川)</small>	袋	浜	新	吉	赤	岡	池 <small>(知立)</small>	熱							
	中	枝	谷	川	井	松	居	田	坂	崎	鯉	田							

文書原守	東京	廿八日	御泊	廿七日	御昼	御泊	廿六日	御昼	御泊	廿五日	御昼	御泊	廿四日	御昼	御泊	廿三日	御昼		
縦一七・七種																			
横三八・六種			品川		神奈川	藤沢	大磯	小田原	箱根	三島	沼津	吉原	蒲原						

〇二二 久光公へノ御沙汰書

二通

二二四 細川右京大夫ヨリ島津大隅守殿へ

賜暇帰国ヲ報シ今後ノ懇親ヲ求ム

(包紙ウツ書)
「島津大隅守様 細川右京大夫

侍史

」

二二三 陸奥陽之助ヨリ小松帯刀へ

(封紙ウツ書)

「小松帯刀様

陸奥陽之助

侍史

」

」

益御安泰珍重奉存候、陳は中井より御噂之趣申来申候、

彼置時計之義、則ち商人西田文平を以て為持上候、猶外

ニ袂時計巻ッ入尊覽度旨願出候間、御閑ニ被為在候ハ、

一寸御逢被仰付度奉願候、夜中横臥執筆、御海恕恐々祈

候、余事、勿々頓首、

第四月初五

文書原寸 縦一八・四種 横五二・六種

〇二三 岩倉具視卿書翰

忠義公東上ノ件

封

」

一翰啓上仕候、不順之氣候ニ御座候へ共、益御平安奉恐

賀候、京地ニ而は奉得拝顔候へ共、寛々御談も出来兼残

念ニ奉存候、近日は御病氣何程ニ被為在候哉、御自愛之

程奉祈候、此節は小生儀も昨年来腫氣差起、其上水土ニ

合兼申候か、申分勝ニ有之候間、百日之御暇奉願、当月

十二日京地ヲ発足、同十八日国許江着仕候、此節は庸之

助も御許江差出申候間、委細之儀は含置申候事ニ御座候、

此品は誠ニ龜抹ニ御座候へ共、檢迄ニ奉入尊覽候、御一

笑被下候ハ、忝々奉存候、先は右之段奉申上度、荒々如

此御座候、恐々頓首、

四月廿六日

(細川護久)
右京大夫

大隅守様
侍史

尚々、時下御自愛專一ニ奉祈候、小生儀も参与被
仰付、実ニ当時勢何分動上候見込も無御座候へ共、
何も岩下(方丈)無伏藏談合等もいたし、別而懇意ニ被致、
小生儀大キニ仕合之事ニ御座候、此上時勢等茂段々
六ヶ敷御座候間、何も御懇親之儀と奉願候、右迄早
々、以上、

文書原寸 縦 一六・六種 包紙原寸 縦 二六・九種
横 一九九・一種 横 二九・一種

一八三 岩倉卿ト英公使パークストノ応接

贖金問題

岩倉卿英国公使と応接聞書

英国公使パークス議定岩倉卿に拜謁仕度兼而申入候付、
四月廿七日御從者耆人も不被召連、応接所江御越御面会
之処、過日

輔相公始九名江申立候同様之趣申立候、始終黙して不被

為聞、申終而後もふは、其方敬其他被申事は尽たる哉と念を入
られ候得は、よしと答、爰に於て御憤然として被申候は、
是迄そなたを英国公使にして文明之人とおもひしに、扱
見下ケ果たるもの也、今説候処之ものは、委く無情之論
にして、贖金雁金之事と申今日之借財は皆幕府之したる処な
り、然るに今夫之事を以迫るは、我を助るにはなく、我
に難題を申掛といふもの也、既ニ昨年之冬以来件々之事
朝廷上之大機密之事件に、即今ニ至り漸斯之世態次第に運ひ
至る迄大小無残被申述、此節次第に運ひ
しハ、大なる功といふへし、我も一昨年迄は外国人は禽
獸に等しき者にて攘へく親むへからすとおもひ居たりし
に、執政以来段々各国之情実を知り、今日に至り漸々に
して交際すへきを弁得たり、政府から上に立たる我さへ
如此なるを、況や草莽之者ニ至りてハ、粗暴火激之業に
及ふハ左も有へき事なり、今各国之文明なる其始は、い
かなるものなりしに承たし、恐くハ上古開闢之始より
文明なることなるへし、只管迫るは情をしらざるもの
なり、かく迄迫る上は、断然戦に決するの外別に施すの

術なし、併貴国にはそなたことき無情之人計ニ而もなく、文明の人も有とおもへハ、唯今より使節をはせ斯之情実(告也)を苦て後に戦へし、天下蒼生はか為に苦むこと実に不忍といへとも、不得止より出ればなりと被申候得は、公使言、公のいへる処一々公論なく、本ノマ、是迄諸君之説説歟る処皆飾にして、現在しれたる隠され真実応接の成たることなし、さるか故に公之東京に到るを待たるなり、斯迄真実之論を聞たる上は、既ニ東国に呼に遣したる兵隊も速ニ差留、横浜在留之兵隊をも東国に帰し、貴国之内政整迄は横浜在留之者英人之事か各国之事か不明郭外江出ことを当分禁すへし云々、冊子原寸 縦二八・八種 横二一・一種 三枚

一八六 長岡左京亮ヨリ鳥津大隅守殿へ

隣藩親睦ノ誼ヲ求ム

(包紙ヲ書)

一鳥津大隅守様 長岡左京亮

用事

封

一

一輪拜呈仕候、梅雨之候益御堅剛奉大賀候、過日は御上京之旨致伝承候処、旧来之御脚気ニ而、速ニ御帰国之旨吳々御自重奉專祈候、今般(島津忠義)

鳳輦御東行ニ付而は、修理大夫様ニも必御東行可被為在、

愈以

朝廷之御紀綱相立候様懇禱仕候、拙兄右京大夫も過日上

京仕候処、病氣ニ付為療養帰邑仕候間、小生不日発程之

心得ニ御座候、右京大夫も全快之上は、早々出京之心得

ニ御座候、近来久々御安否も不奉伺候間、拙价米田虎之

助差出シ申候条、以後愈以御親睦希望仕候、過日伊集院

直右衛門熊本江参り候砌り、小生廻在中ニ而面会不仕、

残念之至ニ御座候得とも、御国政御一新之次第等は逐一

承知仕り、深ク奉欽慕候、於当藩も屹度一新之心得ニ而

過日来彼是尽力罷在候得とも、越中守東京江罷在候間、(細川親邦)

訊問仕候旁ニ而諸事厚配罷在候、過日版籍奉還仕候上は

万事奉仰

天裁候心得ニ御座候、実ニ

朝廷之御紀綱愈以相立、

皇国之元氣振張仕候義、懇禱之至ニ御座候間、御賢考之

趣等有之候ハ、無御腹藏被仰聞可被下、委曲虎之助江

申含置候間、左様思召可被下候、先は時候御見舞旁呈寸

楮候、猶後音可申上候、恐惶謹白、

四月廿八日

長岡左京亮(護美)

島津大隅守様

玉案下

尚々、御自重奉專祈候、諸事後音可申上候、

早々不備、

文書原寸 縦二〇・二種

包紙原寸 縦三一・六種

横二〇三種

横三三・五種

〇二七 奥平操一ヨリ小松帶刀へ

二六 岩倉具視正親町三条実愛兩卿より島津大隅

守へ

久光公の上京を促す

(包紙ウツ書)

島津大隅守殿

具視

実愛

緘

「

拝啓、久来御伏枕、一層御煩鬱可被為涉候由、不堪想像

候処、近況漸々坦路ニ被為向候様承之、少慰鄙懷陳

輦下之動静時々貴邸より飛報可有之、大略御亮察之御事

と存候、

王政復古、兵馬急卒之折柄、御基礎相立兼、漸く

朝廷上諸局改制頗る端緒丈ハ被相行候得とも、畢竟拙弟

輩不肖之身頭職を御し、自然有名無実ニ涉り、天下ニ対

し赧顔之至ニ候、自ら期す、生来愚直、一事一行、其名

望ニ副ふ能ハす、只一死報するの心事ニ而、天下之良牧

賢士をして各其才力を伸へ、

王家ニ羽翼たらしめむと一途ニ存込候、就中貴藩・長州

等は、真ニ

朝廷之柱石 皇国之干城たるは、満天下知る所、殊ニ

尊官壬戌夏初而御上洛、勤王之端緒を被開候儀

先帝歡感厚く

御倚頼異于他之御儀、於当今素より鄭重御依頼被遊候上、

近年段々御尽力、猶亦昨冬来実ニ股肱之思召ニ被為有候

御事ニ而、今般以

勅誥早々御上京可有之旨被

仰出、全く至誠感神之理、兼而御療養中御登程御六ヶ敷

儀は、貫徹仕居候得とも、格別之

御深慮被為在候儀、先達三条・具視兩名ニ而申入候処、

御執筆御困ニ付以御使被示下候旨拜承候へ共、何分拙弟

等ニ於ても当今之政体討論反覆承御教示度渴望屈指仕居

候条、一入御勉力急速御首途奉待候、小松子始西郷・大

久保等之尽力、実ニ不容易満悦之至ニ御座候、右鞅掌中

聊呈心端耳、書余海岳期拜時候也、恐懼頓首、

五月八日

実愛

具視

島津大隅守殿

再白、追々向暑候、尚折角御厭専念仕候也、

文書原寸 縦 一七・五種

包紙原寸 縦 二六・六種

横 一九五・七種

横 三九・九種

一〇六 中川修理大夫より島津大隅守殿へ

時候御見舞

(包紙ウツ書)

一島中將様

御直披用事

中川修理大夫

フ

(封筒)

一 大隅守様

修理大夫

(封筒ウツ)

一 御直披用事

(封紙ウツ書)

一 御直披内用

「御直披内用」

一書拜呈仕候、霖雨之時節鬱々敷御座候、先以益御勇健

被為渡奉雀躍候、将今般は被為召候趣ニ承知仕候、不遠

御上京と奉存上候、私義も不存寄、先般は日向取締戸田

同役蒙 仰難有仕合奉存候、此度立帰之御暇願之通被仰

出難有仕合、依之昨日京地出立、同夕着坂、来月廿日後

ニは早々上京仕候、於京地拜顔可仕相樂申候、扱形勢茂

増々切迫と相成奉恐入候、第一會計之業六ヶ敷趣ニ而、

人心沸騰、只今之姿ニ而は必不遠内破可申哉と奉存候、

君公ニも早々御上京之上、御藩安田鉄藏(殿藏)へ得と御尋御周

旋有之度、実々方今之姿ニ而は必變動差起可申と瓦碌之、

私共ニ於テも深く心配仕候、当春御藩士被差向候後は、

御無音打過奉恐入候、御伺旁如斯御座候、恐々謹言、

五月十二日

尚々、不順季折也、御加愛專一奉祈候、已上、

文書原寸 縦一八・一横 包紙原寸 縦二七・三横 横四一・四横

横六九・七横 封筒原寸 縦一八・四横 横 五・一横

一八言 五島飛驒守ヨリ島津久光公へ

上京ヲ報ス

(包紙ウツ書)
一島津大隅守様 五島飛驒守

フ

┌

一筆啓上仕候、御手前様愈御堅達可被為成御座珍重御儀

奉存候、然は私儀四月中旬迄東京江参着候様

御沙汰之処、先般監察使下向付期限御猶予之儀相願置、

今日在所出船仕候、此段為可申上捧愚札候、恐惶謹言、

五月廿三日 五島飛驒守

盛徳

島 大隅守様

参人々御中

文書原寸 縦一七・八横 包紙原寸 縦二七・一横

横四八・九横

横四〇・一横

一八三 中川修理大夫ヨリ島津久光公へ

時候見舞

(包紙ウツ書)
一島中将様 中川修理大夫

御直披

フ

(封筒)
一島中将様 中川修理大夫

御直披

(封筒ウツ)
一島中将様

┌

┌

┌



(封紙ワッ書)
一御直覽

甚暑之候、先以愈御勇健珍重奉賀候、此程大坂より呈書
仕置候、定而相達候義と奉存候、

尊公様ニは何月何日頃御出立被為在候哉、御模よふ奉伺
度、私義立帰御暇ニ而、去ル廿八日在着仕候、来月廿一
二三日之内出立之見込ニ御座候、於京地拜顔可仕相案申
候、何分ニも御懇情奉希候、御出立之御頃合同度、内使
者直書ヲ以申上候、此品乍庵末弊里産御笑草進呈仕候、
御笑被成下候ハ、難有奉謝候、私出立後京撰之様子聊相
心得不申候、御聞込も被為在候ハ、御教示奉願候、先は
御伺申上度如斯御座候、

恐々謹言、

五月三十日

尚以、時下折角御加愛專一奉折候、乍例乱筆御推覽
可被下候、已上、

文書原寸 縦一五・九種 包紙原寸 縦二七・六種 横四一・六種

横七九・五種 封筒原寸 縦一九・八種 横 五二種

一八三 久光公達書

藩政改革ニ付

今般非常之時勢ニ付、旧格ニ不拘改革申渡候処、掛役は
勿論、一統厚汲受、速ニ相運、為国家深悦入候、猶比末
心を用ひ候様可申達候事、

五月

文書原寸 縦一八・九種 横四七・四種

一八三 布治帰一郎旧稿三篇

擬荒政一策

上三松平民部卿書

審勢策

(表紙)
一 旧稿三篇

布治帰一郎上

一八三三ノ一

擬荒政一策

昔各国路未開也、西洋中特荷蘭來我長崎、其甲比丹者以時聘于東京、嘆曰、五大州中無我舟船所不至、而其極戶口繫殖者、莫若此江戶矣、夫豐臣氏成霸業也、深懲足利氏之末塗、抗者屠其城、降者易其地、封建將帥、而質其妻子、以為子孫万世不拔之業也、德川氏代之、而仍其法制、不啻便一時之安也、亦杜亂源而長保之也、於是乎、諸侯三百臣屬八万等、而家于東京、比其屋對其門、遂成遊惰之風俗、布帛不取于民而求于商、薪芻不采于野而挾于市、商人座占大利而廬居無征、農民不堪聚斂而竈根有稅、是以棄本逐末者日進、而野外田園荒蕪矣、是其所所以極繁殖也、當德川氏之末業、使諸侯挈家就藩、及至大政一新也、其臣屬八万有從就封者、有婦農商者、有沒賊群者、蓋歸順而家于東京者不充十一、而市井戶口不甚減、加之以物價騰涌、則猶百兒仰舖乳于一母、欲使之無飢餓亦不可得也、雖然、市人男女懷不耕食不織衣之便、望儻倖而不知自省、寧為都下之盜、弥不欲為野外之民也、是

以仁恩建病院設救坊賑恤之、亦不憚于其心而怨不胆、甚哉、旧染汚浴至于斯也、古人有言曰、嬰兒非有知也、待父母而成之之道如何、在限以期年、賦商有素封者救其凍餓、教之誨之、使之漸就其本也、易曰、王用三驅失前禽、邑人不誠吉、何曰商有素封者、身居百里外占良田、置肆于都下広其利者之謂也、其如斯、則倉廩不耗于上、而德沢自洽于下矣、嗚呼亦周官荒政之遺意与明治二年五月記

一八三三ノ二

上松平慶志民部卿書

待詔臣良同誠惶誠恐昧死、而上書于民部卿松平公閣下、窃聞廷議之条件、皆莫不急務、而其最不可緩者、則在厚民倍止爭詔、於是乎、能施行三事、則民俗歸厚、而爭詔之路自絕矣、何謂三事、曰、抑兼并、曰、班田等、曰、正經界、何謂抑兼并、曰、同是民也、或飽食煖衣、生不知稼穡之艱難、或終身勤動、而糟糠不能飽、其故何也、有一夫兼并百夫者、則百夫何所得其田乎哉、抑之有道、

凡兼并之徒、其常情在欲盡貨產買身貴也、能從之不逆、

使彼致其所有、以其多寡或止身或子孫或數世、編入之于

土籍、而給代耕之祿、則彼必得意而莫怨心矣、何謂班田

等、曰、田有肥磽、凡六載而一變、是以上世有六載班田

等之制、後世失其法、雖百載不改、終至名實相反、而租

稅不得其當、是民政之最大罅漏、而不可不改也、改之々

道、在能弁地額、不必在収粟也、能改之、則其等上升者

必多于下降者矣、何謂正經界、曰、田有町段畝步之定制、

豐臣氏改之而不甚精、且德川氏舍實地處分于簿書上、而

經界遂有不可見者、是爭詔所由興也、正之、宜記旧實、

而不可仍之也、必以道路堤坊溝洫不易變者定其疆場、無

之則新加築鑿、其中充幾区分田、有論其広狹者、則就疆

場得之亦甚易矣、是懲儻倖勸力田之術、兼井所懼、而細

民所喜也、此三事王政所最先、而得其人則施之不為難、

苟此三事行于世、則四海莫不受田之民、租稅得其當、民

倍歸厚而爭詔自止矣、冀閣下不以迂闊察之、速奏于朝而

施行之、瀆冒威尊惶恐無止、頓首頓首死罪死罪明治二年六月記

一八三三ノ三

審勢策

古今有定勢、為政者審之則得、不審之則失、是以唐虞伝

賢夏伝子、非唐虞公而夏私也、亦審其勢也、更始之際、

改廢門閥撰用賢材、雖土庶人如其奉職、則不難在華族上、

公明可謂至也、其如斯、而王政不振何也、是無他、万機

模擬洋政、而不顧定勢也、請試論之、今之在官者其祿止

奉職、一朝失職則身計從滅、是以專務自肥、而其心不在

國家、好建高遠之議、甘興巨大之費、不憂邦益貧、不念

民益窮、終至說共和政事、是自然之定勢不可不審也、或

曰、子所論在官者止農商、華土族固有其祿、則何与之同

視乎、曰、不然、華土族不論功有無因襲旧祿、固非公道

也、朝廷忌其生事而姑為之所耳、故人々憶其不可久、而

予為身計、亦何与農商殊乎哉、且朝廷未立銓衡之職、故

其取人或過易或過難、其得官有以緣故者、有以諛從者、

若以其材能者則幾希矣、吾故曰、取人不可不慎也、既取

之則宜有常祿、其制、奉任以上世之、判任身之、等外不

与焉、其有嫌于復門闕与、設之法以救其弊、勅任之子孫

不材則降于判任、判任不材則降于庶人、既降于庶人、則

不可不授田也、於是乎、能抑兼并而明分田、庶人升于士

則致其嘗所受之田、而更受止身之祿、其所致之田以授士

降于庶人者、升之者田其材而不難躡等、降之者必以等殺

而不使至速貧焉、能施此政、則人々奨励奉上、而自肥之

風自止、王政大振可期知也、是自然之定勢、而不特使在

官尽忠也、世論華土族之素餐者亦多、而若其処置則似無

良策焉、能行此政、則処置華土族之良策亦在其中矣明治五年

月記、

冊子原寸 縦二四・三釐 横一六・七釐 八枚

一六 教部省布告重要記事

一冊

己巳五月廿一日御下問

已刻行政官及ヒ六官学校待詔局府県五等以上官員、直垂

着用大広間參候、順次列座、聖上御帳台ニ出御、勅語ア

リ、輔相勅意ヲ伝宣ス、議長乃チ御下問書読上、畢テ入

御、御下問書人別ニコレヲ賜フ、其件三条、

一 皇道興隆ノ件

一 知藩事被任ノ件

一 蝦夷地開拓ノ件

御下問書

我皇国天神天祖極ヲ立、基ヲ開キ給ヒシヨリ、列聖相承、

天工ニ代リ天職ヲ治メ、祭政維一、上下同心、治教上ニ

明ニシテ、風俗下ニ美シク、皇道昭々万国ニ卓越ス、然

ルニ中世以降人心偷薄、外教コレニ乗シ、皇道ノ陵夷終

ニ近時ノ甚キニ至ル、天運循環今日維新ノ時ニ及ヘリ、

然トモ紀綱未タ恢張セス、治教未タ浹洽ナラス、是皇道

ノ昭々ナラサルニ由トコロト、深ク御苦慮被為遊、今度

祭政一致、天祖以來固有之皇道復興被為在、億兆ノ蒼生

報本反始ノ義ヲ重シ、敢テ外誘ニ蠱惑セラレス、方嚮一

定、治教浹洽候様被為遊度思食候、其施為之方各意見無

忌憚可申出候事、

版籍返上之儀、追々衆議被聞食候処、全ク政令一途ニ出ルノ外無之、依而府藩県三治ノ制ヲ以テ、海内統一可被遊御旨趣ニ付、改而知藩事ニ被任候思食ニ候間、所存無忌憚可申出事、

庚午正月四日御沙汰

神祇官神殿鎮座

東座 天神地祇

中央 八神

西座 御代々神靈

右之通ニ候条相達候事、

蝦夷地之儀ハ皇國ノ北門直ニ山丹滿州ニ接シ、經界粗定トイヘトモ、北部ニ至テハ中外雜居致候処、是迄官吏之土人ヲ使役スル、甚苛酷ヲ極メ、外国人ハ頗ル愛恤ヲ施シ候ヨリ、土人往々我邦人ヲ怨離シ、彼ヲ尊信スルニ至ル、一旦民苦ヲ救フヲ名トシ土人ヲ煽動スル者有之時ハ、

辛未九月十四日御沙汰

今般別紙詔書之通被仰出候ニ付テハ、追テ神殿御造立迄現今神祇省中御鎮座之皇靈、当分賢所へ被為遷候事、

詔書

其禍忽チ箱館・松前ニ延及スルハ必然ニテ、禍ヲ未然ニ防クハ方今ノ要務ニ候間、箱館平定之上ハ、速ニ開拓教導等之方法ヲ施設シ、人民繁殖ノ域トナサシメラルヘキ儀ニ付、利害得失各意見無忌憚可申出候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第三〇〇ノ

一号文書ト同文ナリ)

朕恭ク惟ルニ、神器ハ天祖威靈ノ憑ル所、歴世聖皇ノ奉シテ以テ天職ヲ治メ玉フ所ノ者ナリ、今ヤ朕不逮ヲ以テ復古ノ運ニ際シ、忝ク鴻緒ヲ承ク、新ニ神殿ヲ造、神器ト列聖皇靈トヲコ、ニ奉安シ、仰テ以テ万機ノ政ヲ視ント欲ス、尔群卿百僚其レ斯旨ヲ体セヨ、

神祇省

今般詔書并ニ御沙汰之通被仰出候条、皇靈御遷座之儀、早々取計可致事、

神祇官中諸陵寮被廢候事、

但御陵事務神祇官ニ於テ取扱被仰付候事、

辛未九月十四日御布告

辛未八月八日御達

自今九月十七日宮中ニ於テ、皇大神宮御拜式被為定、主

神祇官

上・中宮御遙拜并百官拜礼被仰出候事、

其官神祇省ト被改候事、

同日賢所御親祭、中宮御拜并百官拜礼被仰出候事、

右ニ付官名朱書之通相改候事、

但当年之儀ハ諸省奏任官以上參拜可致事、

伯 卿

戊申十一月廿九日御布告三百七十七号

副 輔

是迄宮中八神殿ニ於テ、天神地祇及八神兩座ニ御祭被為

祐 丞

在候処、自今天神地祇八神御合併、八神殿ノ称ヲ廢シ、

同日御布告

更ニ神殿ト可称旨被仰出候事、

神祇官神祇省ト被改候事、

辛未八月四日

辛未九月五日御布告

神祇官中大少祐權官并大史以下被廢候事、

今般用度司被廢候ニ付而ハ、諸社御祭典之節神宮ヲ除之

辛未八月四日

外、神供并諸調進物は迄用度司取扱ヒ之事務、都テ神祇省へ御委任地方官ニ於テ取扱候様被仰付候条、此旨可相

心得事、

但取扱振等ハ神祇省ヘ可打合事、

辛未九月廿九日御沙汰

神祇省

其省中御巫ヲ被置候事

同省

今般其省中御巫ヲ被置候ニ付テハ、元刀自ヲ以テ任候条

宮内省ヘ打合可取計事、

宮内省

今般神祇省中御巫ヲ被置候ニ付テハ、其省中元刀自ヲ以

テ任候条、同省ヨリ打合ニ可及、此旨相達候事、

辛未十月十七日御布告

神祇省中御巫権巫左ノ通被改候事、

内掌典

権内掌典

壬申三月十四日御布告八十二号

神祇省ヲ廢シ、教部省ヲ被置候事、

同日御沙汰

神祇省

其省被廢候事、

但祀典關係ノ儀ハ式部寮ヘ、宣教關係ノ儀ハ教部省ヘ

引渡シ可申、尤諸官員当分引渡事務可取扱事、

式部寮

祭事祀典自今其寮ニ於テ可執行事、

壬申三月十八日御布告八十七号

元神祇省御鎮座天神地祇八神兩座宮中ヘ御遷座被仰出候

事、

但當分賢所御拜所ヘ御鎮座之事、

壬申三月廿四日御布告九十五号

来月二日天神地祇八神宮中ヘ御遷座被仰出候事、

但当日第十二字迄服者参朝可憚事、

己巳二月三日御布告

牧民之要領ハ政教並行ニ有之処、今般京都府告諭大意ト云書ヲ著シ、神州之国体国是、王政之御趣意、宇内ノ形勢等ヲ庶民ニ相諭シ候、其言簡易ニシテ俚俗ニ通シ易シ、戸毎ニ藏シ、人毎ニ誦セハ、上下ノ趣意不相戾、政教並行ノ基タルヘシ、依之右書各府藩県ヘ相渡候条、徧其部内ヘ告諭可致旨被仰出候事、

但書藉重版之儀ハ兼テ御制禁ニ候処、此書徧衆民ヘ布告候事肝要ニ候間、府藩県各自ニ翻刻之儀不苦候事、

己巳十月九日御布告

宣教使神祇官ヘ被接候事、

庚午正月三日

神祇官ヘ行幸之処御違例ニ付御延引、

宣布大教詔

朕恭惟、天神・天祖、立極垂統、列皇相承、繼之述之、祭政一致、億兆同心、治教明于上、風俗美于下、而中世以降、时有汚隆、道有顯晦矣、今也天運循環、百度維新、宜明治教以宣揚惟神之道也、因新命宣教使、布教天下、汝群臣衆庶、其体斯旨、

鎮祭詔

朕恭惟、大祖創業、崇敬神明、愛撫蒼生、祭政一致、所由来遠矣、朕以寡弱、夙承聖緒、日夜忱惕、懼天職之或虧、乃祇鎮祭天神・地祇・八神暨列皇神靈于神祇官、以申孝敬、庶幾、使億兆有所矜式、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第五二一ノ一号文書ノ一部ト同文ナリ)

庚午正月三日御沙汰

神祇官

御神祭并宣教開講ニ付酒肴下賜候事、

庚午三月廿七日御沙汰

府藩県

先般宣教使被為設候ニ付テハ、追々御施行可被為在候間、
府藩県ニ於テ可然人材一兩人撰挙致シ、出処・姓名等詳
ニ相記シ、早々神祇官へ可申出事、

(本文書へ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第六卷第六〇八号
文書ノ一部ト同文ナリ)

庚午四月五日御沙汰

宣教使中正・権・大・中・少宣教使、自今正・権・大・
中・少博士ト被改候事、

庚午四月五日御沙汰

宣教使

大宣教使ハ 大博士

権大宣教使ハ 権大博士

中宣教使ハ 中博士

権中宣教使ハ 権中博士

少宣教使ハ 少博士

権少宣教使ハ 権少博士

右之通自今改称被仰出候事、

庚午十一月十四日御布告

大教ヲ宣布スルハ、固ヨリ知事・参事職掌中之事ニ候得
共、官員外之者へ宣教掛リ申付、其事ヲ専務為致候ハ、
其人材ニ応シ参事或ハ属準席可申付事、

但奏任官以上相当準席之者ハ可伺出事、

(本文書へ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第六卷第九一二ノ
一号文書ト同文ナリ)

庚午十一月十四日御布告

諸藩宣教使来未正月ヨリ月割之通出京可致事、

但前月中ニ着京可致事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第九一二ノ
二号文書ノ一部ト同文ナリ)

辛未七月四日御沙汰

宣教使

大教之旨要別紙之通被仰出候条、篤ク御趣意ヲ奉体シ宣
布可致事、

別紙

大教ノ旨要ハ神明ヲ敬シ人倫ヲ明ニシ、億兆ヲシテ其心
ヲ正クシ、其職ヲ効シ、以テ朝廷ニ奉事セシムルニアリ、
教ノ以テ之ヲ導クコトナケレハ、其心ヲ正クスルコト能
ハス、政ノ以テ之ヲ治ムルコトナケレハ、其職ヲ効スコ
ト能ハス、是教ト政ト相須テ行ハル、所以ナリ、今ヤ更
始ノ時ニ方リ、神武天皇鴻業ヲ創造シ玉ヒ、崇神天皇四
方ヲ經營シ玉フ御偉績ニ基カセラレ、時ニ因リテ宜ヲ制
シ、大ニ変革更張被遊候処、大教ノ未タ浹治ナラサルヨ
リ民心一ツナラス、其方向ヲ惑フ、是宣教ノ急務ナル所

以ナリ、夫人ハ万物ノ靈神明最モ惠顧シ玉フ所ノ者ナリ、
天孫皇太神ノ勅ヲ奉シ、斯土ニ君臨シ、之ヲ撫字シ玉ヒ
シヨリ、列皇相承、亦皆太神ノ心ヲ以テ心ト為シ玉ハサ
ルハナシ、然而シテ太政ノ變更スル所アル者ハ世ニ古今
アリ、時ニ汚隆アルヲ以テノコトニテ、元ヨリ斯民ヲシ
テ其心ヲ正クシ、其職ヲ効シ以テ昏迷ヲ解キ、終始仰テ
依ル所ヲ知ラシメント期シ玉フハ、前聖後聖其揆一也、
故ニ大教ヲ宣布スル者誠ニ能ク斯旨ヲ体認シ、人情ヲ省
テ之ヲ調撰シ、風俗ヲ察シテ之ヲ提撕シ、之ヲシテ感発
奮興シ、神賦ノ智識ヲ開キ、人倫ノ大道ヲ明ニシ、神明
ヲ敬シ、其惠顧ノ洪恩ニ負カス、聖朝愛撫ノ盛旨ヲ戴キ
以テ維新ノ隆治ニ帰向セシムヘク候、是政教一致ノ御趣
意ニ候事、

諸藩へ御達書

大教御趣意之儀ハ兼テ被仰出モ有之候処、猶又今般別紙
之通御沙汰相成候条、各地方官篤ク奉体シ、阻勉従事可
致事、

但諸藩宣教掛之者一同帰藩被仰付候、猶向後出京期限等ハ追テ可被仰出事、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第七卷第一二九号 文書ト同文ナリ〕

冊子原寸 縦三・二種 横一六・五種 二九枚

一八三 無名氏ノ「擬荒政」外二篇

〔本文書ハ一八三三号文書ト同文ニ付省略ス〕

冊子原寸 縦二四・九種 横一七・一種 六枚

一八六 久光公従二位権大納言宣下

一八七 久光忠義二公官位昇進賞典禄十万石下賜

三通

一八八 小松帯刀（観瀾）ヨリ大久保利通へ 二通

京都ニテ病氣療養ノ件

一八三八ノ一

〔端裏書〕
「観瀾」

別紙相認居候処ニ、中井上京段々御地之御様子共承り申候、コスタリカ便承候処、先生ニも再参議御奉命之段拝誦、誠ニ奉恐悦候、呉々も御尽力奉願候、中井着ニ而政府之御様子等は格別之事も承り不申候得共、例之奇談珍説一笑仕候、御推計可被下候、望月ニは税所（傳）も上京之段申参居、折角相待居候都合ニ御座候、中井へ御伝言被下御礼申上候、書余後便可申上候、頓首拜、

八月九日

観瀾

文書原寸 縦一七・一種 横五九・七種

一八三八ノ二

〔封紙ウラ書〕
「甲東先生 観瀾」

ノ

」

拜啓、先以御壮栄奉南山候、さて去ル六日仕出細々之卷

封差上申候間、相達候上は御依頼之義共可然奉頼候、其
 后僕も無異罷在申候間、御安慮可被下候、当地異条も更
 ニ無之、到而閑静ニ候、僕も此節は病侍保養之為、鴨川
 之堤ニ転居仕候而閑居療養相加候含ニ御座候、未歩行等
 別而不自由、漸々兩日跡加茂辺迄岸良等同伴遊歩仕候位
 ニ御座候、此内より召列居候東京之住人、今日出発歸東
 仕候間、御安否御尋迄申上候、全体此人は御屋敷江御先
 代様より相勤居、小細工別而之上手ニ御座候間、自然指
 物杯被成候節は被命候ハ、別品出来可仕候、人柄も正
 道之者ニ御座候間、随分御自由ニ被召遣候而宜敷候、此
 段も御含迄申上置候、宇治茶乍聊任便宜進呈仕候、先は
 此段可得貴意、時下随分御自愛奉万禱候、頓首九拜、

八月十日

文書原寸 縦一七・二種 横一〇四・四種

〇二八元 忠義公賞典禄半額返還ノ許可

三通

〔二八〕 中川從四位ヨリ島津大隅守殿へ

九州諸藩合体ノ議

〔包紙ウツ書〕

一島大隅守様 中川從四位

御直披

ノ

〔封筒〕

一 大隅守様

從四位

御直披

〔封筒ウラ〕

一ノ

〔封紙ウツ書〕

一 御直披

一 翰謹呈仕候、秋冷之節先以弥御勇健被為渡奉筆寿候、
 将当春御上京之砌ハ久々ニ而参謁、寛々御高論拝承仕度
 相含罷在候处、其頃私義謹慎中、被 免候節ハ疾ニ御掃
 藩不得拝顔、残念之至ニ奉存候、扱御一新御規則も漸々
 被為立、既ニ於東京旧制御改革、列藩知事ニ被 命、四
 海一家之御制度重疊奉恐悦候、乍憚
 公ニは積年之御誠忠不容易御尽力ニ而、先般ハ拔群之御
 賞典をも被為蒙、重疊奉遊賀候、実ニいづれも奉感荷候

事ニ御座候、然ニ謹而当今之形勢を奉考量候ニ、何分ニ

も未衆庶ニ貫徹仕兼、窃ニ奉案勞候、只今之姿ニ而は此

末之成行目的も付不申、人心疑惑奉恐入候事ニ御座候、

前にも認候通り、是迄出群御尽力御忠誠被為、尺候御事ニ

候へハ、今爰ニ而猶一際御尽力被為在度奉存候、將追々

御藩土中へ御依頼申候処、厚申談給、於私も大慶仕候、

四海一家とハ乍申、別而九州御一体之義、万事偏ニ奉依

頼候間、御合此意御教示奉願候、此度民中動揺ニ付、至

急ニ御暇給、過日帰藩仕候ニ付不取敢呈書仕候、着後動

揺も最早追々鎮定ニ相成候条、不遠出府仕候、先ハ御安

否奉同度旁如此御座候、恐々謹言、

九月八日

二白、時下御加養專一奉存候、随而匱菓一折甚輕些

之至ニ候得共、時季御見舞しるし迄ニ進呈仕候、御

笑捨可被成下候、以上、

文書原寸 縦 一六種 包紙原寸 縦二七・六種 横四一・七種

横一五一・七種 封筒原寸 縦一七・六種 横 五二種

〇二八二 西郷ヨリ大久保へ

岩倉勅使下向

一八三 詔書

詔書写

朕惟、皇道復古、朝憲維新、一資汝有衆之力、朕嘉獎之、

乃頒賜、以酬有功、汝有衆、勛哉、

明治二年己巳九月廿六日

大広間出

御納言徳大寺卿御読上ケ、右府公始一同列座拜聞、

文書原寸 縦一九・一種 横二六・一種

一八三 忠義公ヨリ蝦夷地開拓辞任ノ建言

臣忠義謹建言

皇道古ニ復シ、維新ノ時ニ至リ、日々治教上ニ明ニ、風

俗下ニ美シク、蝦夷ノ遠キ国ヲ開キ、繁殖シ、愛恤ヲ加

フ、今其地ヲ北海道ト改称シ、分割シテ国郡ノ名号ヲ定

メ、各藩ニ令シテ其地ヲ開拓セシム、鹿兒島ノ如キ、十勝・日高二国ノ内ニ於テ、某々ノ五郡ヲ管轄セシム、実ニ千古希觀ノ盛典、億兆綏撫ノ浩業、皇沢夷民ニ被及スト云ベシ、何レノ藩カ拮据經營ノ力ヲ用ヒ、勉勵シテ其成功ヲ謀ラサラン、雖然鹿兒島藩ニ於テハ、皇國ノ極南ニ在テ、北地ヲ距ルコト殆千里、況乎琉球國及ヒ四島諸島ノ如キ藩ヲ距ルコト、其遠キは五百里、近キは数十里、如斯遠離ノ諸島士民ノ利害ヲ弁解シ、急苦ヲ救ヒ難シ、是ヲ憂傷スル日久シ、更ニ他藩ノ比類スヘキニ非ス、然今蝦夷ノ遼遠ナル北南隔絶、四時寒暖ヲ異スルノ地併テ是ヲ管轄セハ、開拓治民ノ成功我藩決シテ成テ得ヘキニ非ス、夫如是ハ自ラ王民ヲ傷ヒ疾シムルノ罪ヲ招クハ、實ニ恐懼ノ至ニ勝ス、伏テ願クハ、聖心特ニ臣カ住重道遠シテ難任ノ苦情御洞察ヲ垂玉ヒ、今蝦夷管轄開拓ノ命ヲ允許シ給ハン事ヲ是望是冀、臣忠義謹録奏聞謹奏、

己巳九月

鹿兒島藩知事

弁官
御中

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第六卷第四三八号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一四釐 横五九・六釐

〔八四〕 齋藤貞蔵ヨリ集議院ヘノ建言

聖主御薫陶ノ件

〔表紙〕

聖主御薫陶

建言稿本

写

微臣齊藤簡味死誠恐惶謹而上言ス、先般集議院江
聖主御親臨被遊海陸二軍ノ方法ヲ

宸問被為有候ハ、古今ニ徹シ、天下ニ達シ、無此上御
盛事奉感佩候処、然ニ集議何程カ肺肝ヲ呈露シ、至忠
至誠ノ謙言ニテ二軍ノ振立各国ニ超越、全勝ノ籌策、
森々然タル御儀ト奉拜察候処、窃ニ要官某ヨリ伝聞仕

候ニ、其中第一等共可申ハ、森藩園田保者ノ建議ト一覽仕候処、二軍ノ元ハ

聖主御春秋被為富候間云々、孟子太公與子ノ名言ヲ引キ、御身ヲ以テ国ニ殉フハ是他ナシ、イト安キ御事ソカシト、聖賢修己ヨリ以上普天率土中心悦而誠ニ服シ、億兆上ヲ親ム、父母ノ如シト、其外堂々体ノ文意、愉快ハ一寸愉快ニ候得共、乍チ如此ニ到ラセラレ候ハ、御学問ノ御極致聖賢ノ能事終ル共可申モノニテ、大学中庸ノ至道モ此ニ外ナラサル儀ノ処、

御歴世ノ主上右修己治人ノ大道御実学遊サレシハ、乍憚至極近代

後光明帝御一方位カト奉存候、乍恐目出度御宝齡被為加候ハ、蓋世ノ

御明君ニ可被成ヲ可忌ノ儀ニテ、御早崩被遊、千載ノ遺憾ト奉恐歎候、其外甚御鮮キ御儀ニテ、別シテ当今

主上ニハ御一新前後撥乱御交錯中、御儲君御敲訓ノ御教法モ挙ケサセカタキ御折柄、俄ニ

先帝崩御被遊、兵馬御倥偬中御即位、再度ノ御東幸被遊、未タ御錦褥御暖リ不遊、御国家治安ノ道可被為聞御

暇無之御中ニ候得バ、中々以テイト安キ御事所ニ無之、御至難共何共申上方無之、御永年ノ御業事ニ被為有候ヲ、其難ヲ君ニ責ルノ詞ニハ可有之処、如此咄嗟早速ニ修身平天下聖賢極致ノ事業御成就可被遊筋無之コトニテ、所謂方寸ノ木岑樓ヨリ高クスル譬ノ通り、切角美言共可申儀残情ニハ候得共、御手ノ御下シ所無之、卑キヨリ高キニ近キヨリ遠キニ及フ下学上達ノ順序ナク、只高上ヲ而已ハ空論ニモ近ク、御用ヒ遊シ兼候節

ハ可惜儀ト奉存候、乍去二軍ノ御宸闈ニ兎モ角モ、

主上ヲ御賢明ニ奉成候儀ハ、実ニ天下第一等ノ要務ニテ、上一人サヘ御賢明ナレハ二軍ハ差置、万機悉振奉仕候

間、賢徳朝ニ満可申、平天下モ言フニ足り不申、各国迄畏服可仕ハ簡愚年来ノ持論ト同意ニ付、大ニ其説ヲ

敷延仕、其人ニ代リ候心得ニテ、不願恐御手近ク御手下サルヘキ御日用御茶御飯ノ如ク、御実着中ノ御実

学極捷徑ノ所左ニ奉申上候、

一人君ノ御成業ハ、前議ノ通り修己治人ノ道ハ勿論ニテ、
修己トハ大学格物致知誠意正心修身迄ノコト、治人ハ
齊家治国平天下ノコトニテ、夫サヘ御出来被遊候得ハ、
日本中ハヲロカ万国迄モ悉ク心服申上候ハ必然ニ候得
共、先修己迄ニハ中々不容易儀ニテ、平天下ハ御出来
上リノ御標的ト被遊置候テ、其ノ修身ノ小口ヘ御手
下サルヘキ卑ク近キ所ト、先一番物ニ譬ヘハ、御手
習ニモ一投一芸ニテモ手本ノ師トスル者ナクテハ、
御独り御工夫ニテハ一点一画ヨリ一字ニモトメ、槍
一トコキ、劍一振り、炮一発仕ニモ御手付ケサセラル
ヘキ御方角モ立セラレ難キト同様ニテ、別シテ平天下
迄ノ大御事業御手本・師ナクシテ御出来ノ謂レシテ
無之候間、先第一ニ師傅輔ノ官ト申ニ無之候共、一人
タリ共天下ノ賢徳御拳ケ、三公ノ位ヲ以可被任筈ノ処、
兎角門地門閥ニ無之候テハ、
御前体ノ御輔ケ等被遊兼候御旧弊不得止御儀ニ付、責而

公卿方ノ内ニテ知者才子ハ以ノ外ニ付相除キ、別ニ徳
望第一ニ御撰ミ、六尺ノ孤ヲ託スヘク、百里ノ命ヲ寄
スヘク大節ニ臨ミ、奪フヘカサルニ近キ人物ヲ御撰ミ
大師ノ官ニ御任シ、其次ニ迎モ前条ノ具リ不及候共、
篤実ノ人ト存候得共、篤実ノ人ハ兎角面従柔弱ノ人多
キ者ニ付、決シテ不宜、責テ骨腰剛直厚忠ノ人ヲ御登
庸ニテ少師ニ被任、君側ノ向是非ニ剛忠木訥ノ人而已
ニ被遊、何卒從意誦諛ノ人才子等無之様御黜陟有之、
其剛直ノ人足リ不申候ハ、知藩事并嫡庶迄ノ人才御
登雇被相加、別シテ其君側窓中ヨリ極剛忠ノ人四人御
撰ミ、左右史官ニ御擢任相成度、此三公ハ勿論、君側
ノ御人撰極大切ニテ、君辺ニ佞人奸人讒諂誦諛ノ人相
交リ居候様ニテハ、何事ヲ申上何様ニ宜キ思召アラセ
ラレテモ、懷ニ毒蛇ヲ抱シ如ク不側ノ大害ヲ成候間、
甚以大事ニテ、且甚御六ツケンキコトニ候、右夫々御
専用ノ上ハ、専ラ大小師方ノ重責ヲ荷担シ、殊ニ日々
ノ御学業經書ト申内ニモ、四書而已ニ被遊、詩文・歴

史・御和歌迄モ御当分御休ミニテ、格物致知誠意ト申御実学ニ夫トナク今日御日用御飯・御茶ノ如ク御安ラカニ御手輕ク被遊候コトニテ、先一寸一ツ何カ御詞ヲ御発シ遊候節、如此申シテモヨカロフカ、又アシカロフカ、後ニ虚言偽リニハナルマヒカト、御自身ノ御心ニ御相談遊シ、御心カ御無理モナク御ウソニモナルマヒト思召候ハ、御発言可被遊候、其節直ニ左ノ史官御言録ニ記筆仕候、若御ムリトカ又ハ虚言偽リモイカ、ト御決シ遊シ兼候ハ、直ニ御止遊シ不被仰候間、史官モ記録不仕候、又何ソ一ケ条ノ事ヲ可被遊思召候ハ、是又御心江御相談被遊、御心ニテ無理モアルマヒ、下々江不仁ニモナルマヒト思召候ハ、速ニ御施行可被遊候、直ニ右ノ史官御行状録ニ記筆仕候、是又道理ニ違フカ、御不仁ノ筋ト思召候ハ、速ニ御止メ可被遊候、右ノ史官モ記録不仕候、先ハ事々物々如此ニ御自身ヨリ御心ト御相談被遊、御心ノ御納得ノ事而已計リ御発言モ御行ヒモ被遊候得ハ、大低御間違無之

モノニ御座候、夫ヲ御心ノ御不得心ヲ是位ノ小事ハ宜シカロト、御心ヲ御推付ケ遊シ、仰モ遊シ行ヒモ遊スヲ自ラ欺クト申テ、以ノ外ノコトニテ、即チ悪事ト申ニ成候間、御自心ノ御得ナキコト決シテ不遊コトト、此義計リハ御断然ト敵ニ御決心可被遊候、夫カ為ニ左右ノ史官決シテ無偽無虚飾、真直ニ御言行共記録仕候カ真忠強直ニ付、此左右史官ノ御人撰大小師ニ引続キ候重任ニ御座候、若又宜カ不宜カ御疑ノ折ハ、大小御側向ニ御謀ノ上大少師ニモ御詢リ、御言行共被遊候得ハ、一点ノ御失体ト申モ御失徳ト申モ決シテ不被為有、其日々ノ御言行ヲ日々大少師參朝毎ニ左史ハ直ニ御言録ヲ出シ、右史ハ御行状録ヲ出シ候ヲ一々拜見仕リ、一日ノ御言行御宜ク候ハ、倍御拡充申上、御鼓舞仕、若御道理ニ違ヒ、又ハ御仁心ニ戻リ候御儀ハ、大少師篤ト至誠ヲ以テ渾々御訓導申上、以来再度不遊候様申上候得ハ、始ノ内御究屈ニ可思召候得共、御六ヶシク無之、一寸々々ト御心ヨリ御心江御相談ノ折ニ、宜キ

ハ遊シ不宜ハ即チ御止メト申ヤフ御自心ヨリ御自心ヲ
 推付ケ、御欺キ不遊ノ御一着サへ思召ラ被為付、只止
 ルト施スノ二ツ、悉ク虚言ト不仁ナキヤフハ左ノミ御
 六ケシキコトニ無之候間、夫ヲ一日ノ御学問ト被遊、
 一日立チ、二日立チ三日四日ト段々ニ日重リ候内ニハ、
 一ケ月ニ相成、二ケ月ニ相成、三ケ月モ相立候ハ、余
 程御究屈、少ク御ラクニ被為成、五六ケ月相立候ハ、
 大低ハ御心御優々ト被為成、左右史官ノ御記録ニモ先
 無御配慮ニ到ラセ候得ハ、自ラ御言行御一致ト申方ニ
 御近付遊候ハ、稍々天ニモ御恥不遊、人ニハ猶更御
 咄シ難被遊御言行無之様被為到、右之通ニテ一ケ年被
 為立、二ケ年又三ケ年ト被為勉候ハ、大凡御成功ニ
 近ク御心御丈夫ニ御言行ノ間ニ御骨折レ不遊、自ラ青
 天白日ノ如ク御身心豁然ト被為成、天下ノ万機何一ツ
 御分リ不遊儀無之、イツトナク御明亮被為成、四書中
 ニ御座候衆理悉ク御心中ニ御貫通可被遊候、是三ケ年
 間御勉強ノ御効驗ニ候処、夫ト申ハ始ノ内日々ノ御言

行一々御自心ニ善悪可否ヲ御相談遊シ候ハ、取モ不直
 格物致知誠意ニテ、孟子ノ知言中庸ノ明善ニテ、凡人
 ヲリ聖賢ニ至ルノ大御学問ノ極捷徑ニテ、殊ノ外御手
 輕ク御安ラカニ御茶御飯ノ如ク御就キ安キヤフ申上候
 儀ニ御座候処、右ノ御驗シカ御心丈夫ニ御ユタカニ到
 ラセラレ候ハ、取モ不直浩然ノ氣ノ養ハレ候処ニテ、
 何ニテモ参レ分ラヌコトナク、行ヒカタキコトナキト
 申ニ到ラセ候ハ、曾子ノ千万人ト雖モ我往シノ場ニテ、
 夫ヨリ聖賢ノ城ト申スモ、左而已至難ト不思召様ニ相
 成モノニ御座候、是ニ到リ候得ハ、御心中人ニ言レヌ、
 何共面白ク御楽シキ所カ出来仕モノニ御座候、夫ヲ始
 ノ内虚言ニナリソウナコト決シテ御詞ニ出スヤフト不
 仁ノコト御立腹ノコト、少ク御忍ヒ遊ストノ二ツカ御
 安キヤフニテ、至テ御六ケシク候、尤疑事疑難ハ初ヨ
 リ大少師へ御謀リ御処分遊シ候間、却而遊シ宜ク候得
 共、小事小怒ニハ御困リ被遊モノニ候間、夫ヲ一寸々
 々ト早く不宜ハ御止メ遊スカ、即御言行共誠意克己ノ

御実学ナル所ノ真御学問ニテ、此所下学ノ上達遊レシ
大効驗ニ御座候、数多ノ経書モ此外ハ無之コトニテ、
其一寸々々ト御止メ遊スノ御楽クニ思召候場ニ被為到
候得ハ、至リテ御楽シミナルカ、夫迄カ安キヤフテ甚
大事ニテ、明君仁君モ暗君不君モ是計リニ御座候、其
御楽シミノ境ニ被為到候得ハ、目下民牧ノ能事モ普天
率土ノ心服モ省刑薄税モ、文ヲ敷キ武ヲ輝スモ、尚賢
禁奢其他前議ノ粗々タル御事業皆言フニ足り不申、唯
舉之而措之而已ト、掌ヲ反スカ如ク悉皆思召通りニ参
リ候コトニテ、中興ノ

聖主ト申上、期セスシテ竹帛青史ニ御銘シ被遊候御儀ニ
テ、夫ト申スハ、乍再三前文ノ大少師・大小御側向并
左右史官ニヨリ候儀ニテ、夫迄ノ御人ヲ得サセラレ候
ハ安キ様ニテ殊ノ外甚御六ケシク候間、ヤ々共仕候ト
譏諛面従ノ人加里安キモノニテ、切角ノ日々御言行御
一致ニ御実学御勉励遊シ候ヲ不入ヲ御苦辛奉掛、恐入
ナトノ追々御凡庸ニ御引戻シ申上、長キ御勤苦ヲ水

泡画餅ト奉成候、国家ヲ傾覆スル奸官和漢古今ノ通患
ナル大難事ニ御座候間、此大難ヲ御推弘ヒ御進ミ遊ス
カ古聖賢ニモ御恥ナキノ初ニテ、即チ其君ヲ堯舜ニシ
奉ルノ方法ニテ、乍恐人君ヲ模範ノ中江入レ奉リ、イ
ツトナク安々ト知ラズ々々善賢ニ移ラセ玉フ聖教ニ基
キ、所謂薰陶共陶成共申テ、瀬土物ヲ焼クニ先良土ヲ
扱ヒ極密ニ仕、初メ轆轤ニテ塑造シ、能ク干シ外家ニ
入レテ温火ヨリ段々猛火迄ニ及シ、丸キ物ユカマヌ様
彩文ノ流カレヌヤフニ、初造ヨリ火加減迄ニ多方心力
ヲ尽シ、上品無瑕ニ仕上ルヲ大小師并左右史官ノ大任
重責ニ御座候、如此ナレハ即チ、聖賢ノ模範中ニ置キ
奉リ、乍再言

人主ヲ御教道申上候最第一ノ御方法ニテ、此ヨリ以上賢
ヲ揚ケ、不肖ヲ退ケ、凡テ万政悉ク安々ト掌ヲ指スカ
如クト奉存候、近ク徳川家康スラ嫡孫竹千代ヲ教育ス
ルコトヲ駿府ヨリ申越セシ文ニ、稚木ニ副木ト申コト
ヲ懇々言付コシ、名臣ヲ扱ヒ其傳ニ付ケ、遂ニ三代將

軍ト云フ名君ニ仕立出シタルの例昭々ト御座候、御學問ト申シテ御講堂ニ經書仁義ノ道ヲ進講申上ルヨリモ、四書五經數千萬言ノ内、大秘傳ト申ハ思ヒヤリニテ、夫ヲ得サセラル、ニハ、第一ニ此御自身カラ御自心ヲ御欺キ不遊、御自心御得心ノ事而已被遊候ヲ御手始メ、自ラ御天稟ノ御仁心ヨリ我カ身ヲ爪^ツリ人ノ痛ミヲ知ト申、其思ヤリト申儀、人君ノ第一肝要ト大小師方醇々ト丁寧反覆御訓導可申上、是計リカ聖賢ノ大道忠恕ノ道ニ御座候テ、論語一部貫徹仕候モ此忠恕ト申思ヒヤリ一ツニ候、大学ニ絜矩之道、中庸ニ至誠ト申、孟子ニ惻隱ノ心ト申モ皆此思ヤリ而已ニ御座候、此思召ヤリト申御仁心ヲ一家一國ヨリ天下ニ及シ推セハ、御民牧ノ御重任御十分ニ被為立、億兆心服申上候、其所即チ平天下御座候、君ハ元民ノ為ニ被為立物ニテ、安富尊榮ヲ天ヨリ御授ケ遊シ候モ、其億兆ノ民ヲ安穩ニ御牧養ノ御祿給ト、乍憚思召、二六時中民ヲ御愛養ト申コト御遺忘遊サヌヲ仁君ト申上、安富ヲ私シ牧民ヲ忘

ル、ヲ不君共暴君共申候間、乍繰言前文ノ日々御自身ヨリ御言行録ヲ御点檢遊シ、一言一行御間然無之御優如タルノ御樂シキナリニ、三年ノ上又三年モ積リ々々御成功遊シ候ハ、、浹合ト申テ水ノヒタリ合フ如ク御純一ニ被為成、堀^(坂)祓^(坂)キ井戸ノ突^(坂)キ祓^(坂)シ如クニドク々々ト水吹出シ、止リモ滯リモナク沛然トシテ骨折ナク昼夜トナク、悠悠海ニ到ルカ如ク被為成候ハ、御独ノ御樂シミ前年ノ御樂シミトハ又一層ノ御味ヒニテ、此上ハ不被為有御儀ト奉存候、是レ以上六七年日々之御言行幾何万ノ中ニ世界アラユル御言行ニ触レサセラレ候間、彼ノ致知知言集義明善ノ精粗本末、悉クイツトナク御了知御氷解被遊候テ、御心中ニ天下ノ衆理スラ々々ト御裁断被遊候儀、如何様ノ御政事御人撰、如何様ノ訟獄ニテモ利刀毛ヲ吹ク如クニ候ハ、無上ノ御真樂ト申モノニテ、其御真樂ヲ御体認遊シ、南面朝ニ被為立候ハ、真ニ中興賢明ノ真天子共、真御民牧共、上天ニ被為對候テモ天下万世ニ

被為対候テモ、無御恥御儀、又此ニ御反シ天下ノ衆理
モ廟政モ訟獄民政モ一々御剖判遊シ、兼テ宰相有司ニ
而已被為聞、其制裁ヲ御仰キ遊シ候ハ、天ニモ人ニ

モ天下後世ニモ何君ト可申上候ヤ、夫ヲ例ノ御心ニ如
何ト御相談遊シ候ハ、御心カ何テモ宜シ、無搆ト御
返事可遊候乎、右ノ御真樂ト此御憂トノ二ツ、何ト御
考可被遊乎、此所ヲ輔相公ハ猶更議定・宮内卿・丞・
参議外要官ノ方々、此可否御得失篤ト御沈思ノ上、御
會議被為有、責テ家康ノ竹千代江名臣ヲ相付シ如ク、
前文ノ孤ヲ託シ、命ヲ寄、大節ニ奪ハルナキニ近キ人
ヲ大師ニ、其次剛忠ヲ少師ニ、剛訥ノ人而已君側ノ官
ニ、其中ヨリ一段御撰大節忠ヲ左右史官ニ被遊、此數
官方一致同心ニテ人心ノ服ト不服ト、天下治ルト不治
ト、外夷ニ被奪ト不被奪ト、
皇国ノ存スト滅スト、悉皆

聖主御一人ノ御徳否御賢暗ニ頼リ候ト申ス、和漢古今ノ
盛衰存亡ノ關係スル所ノ昭々日ヲ見ル如シト申儀、右

一致同心ノ方々淳々トシテ模範中ニ入レ奉ル如ク、一
向ニ御手輕ク御茶御飯ノ如ク薰陶御贊翼申上候ハ、
固ヨリ御英明ノ

聖主ニ被為入候間、堯舜ノ君ト迄不申上候共、蓋世守成
ノ

賢君ト可被成候ハ必然ト奉存候、万一此迄ノ如ク、此假
ニ格別ノ御憤発御尽力ナク、唯武家ニ御政權御任セ、
久平御無事御詠歌御管絃ノ御旧弊任セノ如クニテハ、
当今戦後ノ民害不相除、億兆ノ人心冤怨ノ上ニ、眼下
外夷ノ覬覦猖獗日々ニ甚シク、有識者皆累卵ノ危キヲ
憂患仕候時節ニ臨ミ、中々頃刻モ油断不相成秋ノ所、
肝要無二ノ

主上御陶成ノ儀ニ付、數旬ノ苦辛結誠肺肝ヲ碎キ、忠腸^(忠)
ヲ淋瀝シ、乍恐反覆丁寧詞ノ繁冗ヲ不厭、只忠意ノ貫
徹猶申上ケ足ラヌヲ恐レ、斯迄申上候愚忠ノ顛末悉ク
御熟奏相成候ハ、御学業ノ御深淺ハ不奉伺 御天稟
ノ御良智御良能被為有御儀ニ付、 御自身ヨリ御憤発

被遊、

宸衷ヨリ大小師君側大小ノ官、左右史官迄被為命候半ト

奉存候、君微臣簡申上候、全論左迄御国是ニ戻リ不申

候ハ、何卒御当院議員・幹事・判官ノ方々ヨリ長官

卿迄御会評之上、御以聞被成下度候、夫共万一道義ニ

背キ御国是ニ違ヒ候儀御座候ハ、聊無御寛恕惣御院

中ノ御詰問御督責奉蒙度、鉄鉞ノ大罪可奉甘受候、稽

首拝願、

明治二年己丑十月

齋藤彈正少巡察

父 齋藤貞藏藤原簡

集議院

御中

冊子原寸 縦二四・八糎 横一七・七糎 二二枚

一八望 小松帶刀ヨリ大久保利通へ

小松病氣療養御暇ノ件

(封紙ウツ書)

一大久保先生

小松

座下

ノ

ノ

嚴寒之節、先以御安康御奉職奉大賀候、さて過日出府之

折は態々御來訪被下候得共、例之繁雜中ニ而シミ、御

咄も出來兼、遺憾之至奉存候、御帰京之御様子いかゞと

奉存候処、一昨夜(中)井参り、暫時は御滞府ニも相成候様

ニ承り候、付而は是非一応出府緩々拜話仕度候処、寸事

も例之足痛近日は別段強ク相発シ、座中歩行さへ心ニ任

せ不申、今日共ハ出勤も相調申さす時宜ニ而、只今之形

行ニ而は急々快氣之程も無覚束、仏医相頼当分療養は相

加申候得共、迎も十日や三十日ニ快氣ト申は六ヶ敷、都

合出來候得は、暖地江湯治いたし候方可然ト申事も御座

候故、宇和島久世公江相願養生方御暇之処申出候事ニ而、

当節柄誠ニ残念之至御座候得共、何分いたし方無之間、

先生よりも輔相公方江宜敷御願被下度御頼申上候、当地

之義は各国公使在留ニ而、一日も本官之人差欠キ候事ニ

も参兼申候間、大限近々着ニ相成候向ニ御座候間、参与

ニ而副知官事被命候而、私御暇中ニ而も当地江在勤相成候ハ、可然、木戸氏江縷々假置申候間、宜敷御談合被下度奉頼候、明日木戸氏も帰府相成申候、中井も一応帰府之由、尚同人江細々控置候筋も御座候間、御聞取可被下候、先は此段御頼旁如此御座候、頓首拜、

十一月十一日

再白、時下御自愛專要奉祈候、鹿品三ツ不取敢進呈候、御笑留可被下候、吉井氏江も宜敷御伝言御頼申

上候、頓首謹言、

文書原寸 縦一七二二種 横一七一・九種

二六六 川上親厚ノ人命救助記

救蘇助伝

(表紙)
「救蘇助伝」

救蘇助之伝

明治己巳年、余再為益救島在番ニ在子宮之浦官舎ニ冬十一月廿一日朝、水夫喜和女者朝夕勤勞竊告曰、有近隣助者、今曉鶏鳴頃産男子、家窮貧而不能養育於生子、当不得止犯禁密絶命、然母胞衣未下、以故族人憂念、遣遽未速其事、男子殊可惜焉、余驚駭悼惜、則欲撫以為養育、直俾喜和女告諸其父母族人矣、父母悅委余之望、而母胞衣久不下、母命殆危、而不能抱揚於生子、則母子之命与未為測云、余聞之甚傷之、自齋浴而詣于益救神社、禱母子之命神助、猶令神主小田原秀房祈禱垂保護、又令医尾辻養齋加療治矣、然竟日母胞衣不下、余益憂懼痛念之余、屢遣人候ニ様子、亦無奈之矣、已焉而夜子剋頭人来告胞衣下母無恙、余歡忻而又詢生子、道末及于生子之事、余頻燈謂、若捨置一昼夜弗臆胞而与乳必天亡、人即馳歸焉、不移時又馳来告生子之無事、余於是擊安辰心、大雀躍喜悅而直齎贈於米一俵・鯉節一聯、而賀無事、父母族人皆感泣矣、翌廿二日新通与於綿衣二・单衣一、乃

拾撮^{ヒトリヲテヌ}以欲^ニ撰^ニ乳母^ヲ究^ル年養料^以二百余貫錢^ニ而外托^ニ之赤子^ノ之祖父母[・]父母等頻感激^レ悔^ヲ以焉^ヲ自^ラ為^ス養育^シ余敢輒^レ雖不肯^セ許^シ歎^ク款^再三情亦所^レ不忍^ス竟許^レ之養料^与二百余貫錢^ヲ而托^レ諸^ニ其^ニ実母^ニ矣十二月廿四日生子^為三十三日^ト運命雖^レ曰^ク天非^ニ神助^ニ豈^ニ如^ク此乎哉故^ニ此日余携^ニ母子^ヲ賽^ニ於^テ益救神廟^ニ令^テ神主秀房奏^テ神樂^ヲ敬奉^レ謝^ニ於^テ神恩^ノ深厚^矣抑緣^ニ神助^ニ為^ス活命^ニ則^チ生涯^貫可^レ忘^ル願^シ雖^レ不^レ勝^ヘ僭^テ越^テ冒^テ瀆^ス之至^ニ以^テ秀房^ヲ奉^レ告^ス于^テ神靈^ニ賜^ニ乎救^フ之^ニ字^ヲ名^ニ于^テ救蘇助^ト俱^ニ感^テ拜^テ垂^テ泣^シ而回^リ矣嗚呼亦可^レ謂^ニ一^ニ奇^ニ遇^ノ之^ニ事^ト欤因^テ聊^ニ記^ス事^實以^テ具^ス于^テ後^日之遺忘^ニ矣

川上親厚誌^ニ于^テ益救島官舎^ニ

冊子原寸 縦二七種 横一九・九種 三枚

一 齊彬公贈位ノ御沙汰書

贈權中納言從三位源朝臣齊彬

贈從一位

右大臣從一位藤原朝臣実美宣

大弁從三位藤原朝臣俊政奉行

明治二年己巳十一月廿二日

一 從三位源朝臣忠義

贈權中納言從三位源齊彬朝臣先朝多事ノ際ニ方リ、身外任ニ在^ト雖^トモ、心乃チ

王室ニ存シ、子弟ヲ督勵シ、闔藩ヲ鼓舞シ、上書獻策

忠ヲ尽シ、義ヲ表ス、終ニ厥謀ヲ貽シテ後裔ニ垂レ、

以テ今日盛業ノ基ヲ開キ候段、深ク御追感被^レ為^ス遊候、

依^テ之贈位宣^レ下候旨被^レ仰^テ出候事、

十一月 太政官

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第六卷第四八四ノ
二號文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二六・七種 横四〇・二種

一八六 鮫島尚信書翰 宛名不明

鹿兒島藩賞典返上ノ件

鹿兒島藩より賞典返上辞表之儀ニ付、昨夕伊集院直右衛門相招候処、多忙之由にて不来、再応是非知事出立迄ニ入来之様掛合候処、今以下官参朝刻限迄何等之返事も無之候ニ付、最早参 朝致候得共、知事発足後ニ相成候てハ、甚以不都合ニも有之候間、從足下可然伝達相頼度候、仍早々如此候也、

十一月廿四日

文書原寸 縦一八・三種 横七一・六種

一八九 久光公ヨリ岩倉右府へノ書翰草案

久光公上京謝辭ノ件

十月十八日之尊翰本月廿四日相達薰手拝読仕候、寒天之砌御座候処、先以弥御堅剛被成御座珍重奉存候、陳は先年春之事ニ付遠方迄貴价被差下、御懇篤之御示諭拝聴仕、病老夫実ニ愧赧汗顔之次第奉存候、殊ニ御目錄之通高品

御惠投被下、御厚情別而忝拜受仕候、当春ハ於京師拜謁

仕候処、御丁寧被仰聞奉感佩候末、又々如右承知仕重疊忝奉感佩、先度ハ老病夫ニも召命拜聴仕候得共、于今臥牀難離不得止御断奉願候次第、実ニ恐入奉存候、賢公宜御執成之程奉伏願候、先ハ御存意為可奉謝如此御座候、恐惶謹言、

十一月廿八日

久光

右府公閣下

貴答

再伸、為天下寒氣折角御保護專一奉存候、忠義ニも上京中御厚配被成下候筈と奉拝謝候、朝廷上御執成候程偏ニ奉希上候、臥牀中乱書失敬之至、御有恕奉願候、以上、

文書原寸 縦一六・八種 横四九種

一八〇 久光公令達内務局規定

口達之覚

一家令以下内務局総而休日不相成、

一侍直長・泊番以前之通、

一侍直長・侍直道具方無抛内用病氣之外暇不相成、

但病氣故障時々届可申出、

一平常戎服不相成、

但乱髪勿論之事、

一座中椅子無用、

一酒宴遊興歌ウタヒ候義一切無用、

一学文ハ実行可相嗜、高上ノ議論一切停止、

右は当時自佩之風習相行ハレ、以之外ノ事ニ候、殊ニ

内務局ハ同前之事ニ付、不得已条々相達候、若不同心

之族於有之ハ、職務免許可申出候、尤知藩事方へ引合

ニ不及候事、

明治二巳十一月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第四七七号
文書ノ一部ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・八極 横四九・二極

○(三) 久光忠義二公ニ对シ賞典禄及官位返還不許
可

○(三) 大久保一蔵ヨリ桂右衛門へ

孝明天皇御祭典

(一) 小松帯刀ヨリ大久保参議へ

大阪ニ於テ会见

(封紙ウツ書)
「大久保参議閣下 小松」

過刻は遠方之处、殊ニ御多忙中態々御来訪被下、深恐縮
仕候、病床中大失敬而已候段御海恕可被下候、久々ニ拝
顔相調、其上東京近情拝承、大悦此事ニ奉存候、旁安堵
も仕、今日は余程気色も宜敷相成、御蔭を以大幸之至、
深々奉謝候、早速御見舞申上候筈ながら、病中無抛背本

懷候段御免可被下候、今夕より御上京之筈、寒中随分御
自愛御保護奉万禱候、龜茶乍輕少夜舟御徒然之御慰にも
と差出申候、御笑受被遣候得は多幸奉存候、折角早日御
帰阪奉待候、先は御礼旁以愚札如是御座候、頓首拜呈、

師走念三

尚々、臥床中大乱書御高免可被下候、乍憚御上洛之
上は海江田江宜敷御鶴声奉願候、

文書原寸 縦一八種 横一〇〇種

一六番 藩制改革其他ノ件 筆者不明

拜見仕候、^(破損) 俄之御発舟、其時分私ニは引入罷在候
処、跡更承知、夫故御暇乞にも得参上不仕、残情之至に
存候、海路少々は御難儀も御座候由、何分御順着弥御安
康被成御座、乍御太儀欣悦御儀奉存候、爰許格別相替儀
も無之、御改革一件も吟味通追々相運ひ、私共にも精々
差急キ取扱仕事ニ御座候、何卒貴兄にも御地早目ニ御仕
廻、一日茂御差急キ御帰帆被下候様千万奉祈候、白山ニ

も御地江廻着いたし居候由、就而は御談判向も速々相弁
可申、旁以御都合無此上奉存候、市来公にも先日より腰
之痛候而御引入、何ぞ根入たる御故ニ而は無御座候得共
相応ニ相痛候由、今兩三日は御出勤如何御座候半、当分
御両公御留守にも不相替吟味事被相下、当座〳〵ハ相弁
申事御座候得共いつれ成、貴兄にも精々御差急キ御用御
仕廻、御帰郷不被下候而は甚た入り罷在候、しかし市
来公三四日之内ニは御平愈御出勤可被下坎、左候へ、
我々共にも大キニ荷軽く可罷成、実ニ御両公御揃被下候
処、且暮奉渴望候、将又関東之形勢不容易趣、弥井上説
通ニ候へは、甚た御大事之御場合申上も無之事御座候処
大坂より之町飛脚同時ニ到着、京撰辺ニおひてハ大無事
之由、先月十八日付之間合議政所江相達、井上説ととふ
も符合不仕、右ニ付而は上村休介よりも貴兄江細々被申
遣賦御座候間、御照合被下、猶又御探索詳説御聞取も御
座候節は、早便次第被仰遣被下度、御家来根拠相居り候、
徳川之事御座候付、猶余党無之共難申、然は全く請定迄

之間、如何成變動到来も難計、兎角其時機ニ応シ御吟味不被為在候而不叶御事、臣子可尽其分之御当節と奉存候間、返々も事變御聞取之件々ハ、猶又不被差置被仰越被下度奉仰候、細事は上村方より之書面ニ而御汲取被下度、今日も殊之外繁雜ニ而、前後不綴なく貴翰之御礼旁迄、勿々乱筆不敬御用捨可被下候、以上、
文書原寸 縦一五・一檜 横一一八・五檜

但締方横目等御引取諸取締向等一切地頭受持、別段變事之砌、横目より被差遣事、
文書原寸 縦一七・九檜 横六一・一檜

〔美〕 後藤象二郎ヨリ小松帶刀へ
〔包紙ウツ書〕
「小松盟台閣下 後藤
拜復」

一 藩政改革ニ付西郷隆盛?ノ建言

津田真一郎(真道)

一 治乱一途之政体ニ御(破損)變之事、

一 刑法御變革之事、

右元津山藩にて、当時徳川氏家来、即今之居住不詳、多分駿府ニ可罷在と被存候事、

西(周)周介

一 但御改革中大目付は御家老衆内より御兼帯、
一 御三役已下諸御役人書役、小役人、三部二位は御減少之事、

右生国未詳、即今徳川氏家来にて、大目付相勤、当時駿府住、

一 不急之御役場は可成御引取、又ハ合併被仰付事、

加藤弘藏(弘之)

一 御徒目付・横目・蔵方目付一往御引取、家臣横目五六

右生国ハ出石藩、即今ハ駿藩にて西氏同断、当時駿府住、

十人位被仰付事、

鈴木唯一

右元徳川麾下山口駿河家来、(直數)當時東京居留地翻訳方相勤、
東京住、

黒沢弥四郎

右相覚候假相認奉入御覽候、最も間違之程は難計、此段
は奉申上置候、
文書原寸 縦一七・七 横一八五・五 檜

右越後辺之小藩欵、本多修理家来、(敬巻)元外国方翻訳方相勤、
當時在邑欵、睨と難相分候、

神田孝平(孟悟)

右美濃辺之生にて、佐倉藩とナリ、旧幕ニ仕ヲ即今徴士
一等詔官にて

箕作貞一郎(麟祥)

右徳川氏家来、即今徴士一等詔官にて、過日当役其佩兵
庫臬御用被仰付候処、當時病氣にて大坂表ニ於て療養罷
在候、

細川潤次郎(元哲)

右土州藩にて、當時主人供を以東京ニ罷在候、尤御本紙
ニは細川準一郎と有之候得共、多分右潤次郎之事ニ可有
御座候哉と奉存、試ニ相記入御覽候、

